

秋 田 市

秋田新都市開発整備事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告書

地蔵田B遺跡

台 A 遺跡

湯ノ沢 I 遺跡

湯ノ沢 II 遺跡

1986.3 秋田市教育委員会

序

秋田新都市開発整備事業に係る御所野丘陵部の埋蔵文化財につきましては昭和57年度から対処し、すでに19ヶ所の遺跡の調査を終了し、本年度は3ヶ所の遺跡発掘調査を実施いたしました。

今回の調査におきましては旧石器時代、縄文時代、弥生時代、平安時代の各遺構、遺物が多量に検出されております。特に「地蔵田B遺跡」では旧石器時代の磨製石斧等の出土や、弥生時代の集落を櫛木が囲むという全国でも初めての遺構が確認され、弥生時代の社会を知る上で重要な遺跡であることが判明し、報道されたところであります。

調査の実施にあたっては、県、関係機関の指導をはじめ、地元関係者等多くの方々の積極的なご協力をいただき深く感謝申し上げる次第です。

本報告書が文化財保護のため、さらには研究資料として広く活用されれば幸甚に存じます。

昭和61年3月

秋田市教育委員会

教育長 高 泉 宏 作

例　　言

1. 本報告書は秋田市四ツ小屋末戸松本（地蔵田B遺跡・湯ノ沢I遺跡・湯ノ沢F遺跡）、上北手古野（台A遺跡）に所在する各遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書は調査員及び調査補佐員の協力を得て菅原俊行が編集したものである。
3. 本報告書の執筆は、地蔵田B遺跡—菅原俊行、安田忠市、台A遺跡、湯ノ沢I遺跡、湯ノ沢F遺跡—石郷岡誠一、西谷　隆が担当し、菅原が補筆した。前記以外は菅原が担当した。
4. 湯ノ沢F遺跡出土人骨の鑑定は岩手医科大学、野坂洋一郎教授、伊藤一三助教授に依頼し、その鑑定書を掲載したものである。
5. 発掘調査、整理作業の過程で下記の各氏より指導、助言を賜わった。
大塚初重（明治大学）、河原純之（文化庁）、工楽善通（奈良国立文化財研究所）、小林達雄（国学院大学）、佐原　眞（奈良国立文化財研究所）、富樫泰時（秋田県文化課）、中村五郎（福島県文化財保護審議会委員）
6. 石質の鑑定は、秋田県立博物館の渡辺龍氏、佐々木厚氏によるものである。
7. 各遺跡の平面図、土層断面図中のPは土器(片)、Sは石(礫)を示し、石器実測図の石鏃、石匙、鋸歯縁石器等の外形図にはアスファルト付着物の箇所を示した。
8. 発掘調査による出土遺物、実測図、写真、その他の記録は秋田市教育委員会が保管する。

目 次

序	
例言	
調査の概要	1
調査に至るまでの経過	1
調査期間と体制	1
調査の方法と経過	2
遺跡の位置と地形・地質	9
地蔵田B遺跡	
遺跡の概観	14
旧石器時代	14
遺構と遺物	16
坂ノ上F遺跡	247
まとめ	253
台A遺跡	
遺跡の概観	266
遺構と遺物	266
まとめ	302
湯ノ沢I遺跡	
遺跡の概観	309
遺構と遺物	310
まとめ	314
湯ノ沢F遺跡	
遺跡の概観	320
遺構と遺物	320
まとめ	343
秋田市四ツ小屋・湯ノ沢F遺跡出土人骨の鑑定書	349
湯ノ沢F遺跡試料 材同定報告	357



御所野丘陵部（西から）



地蔵田日遺跡遠景（南東から）



地蔵田日遺跡（西から）



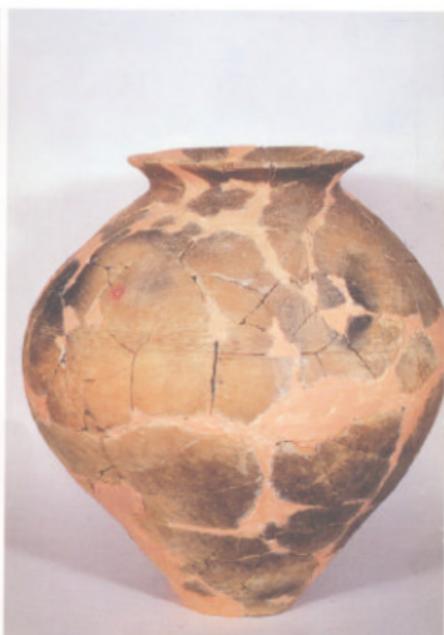
地蔵田日遺跡 弥生時代集落（北から）



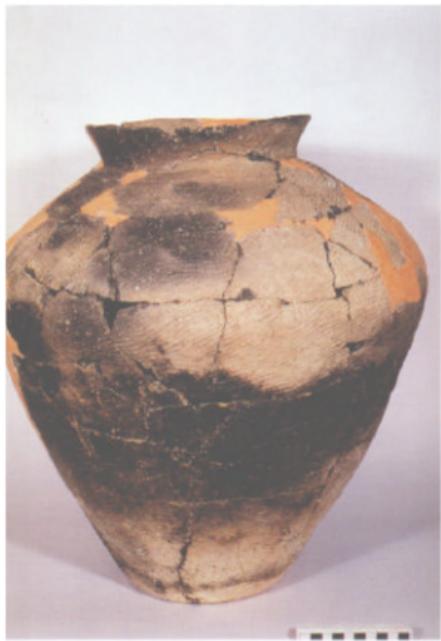
地蔵田B遺跡 4号I～II住居跡（北から）



地蔵田B遺跡 8号土器棺（壺、蓋目）



18号土器棺（壺）



地蔵田B遺跡 9号土器棺 (壺)



26号土器棺 (壺)



地蔵田B遺跡 旧石器時代 (南から)



地蔵田 B 遺跡 旧石器時代遺物出土状況



台 A 遺跡 (東から)



湯ノ沢 F遺跡（南から）



湯ノ沢 F遺跡 34号 A, B 墓

調査の概要

調査に至るまでの経過

秋田市南東部地域は、昭和56年6月の秋田空港の開港、東北横断自動車道秋田線秋田インターチェンジ開設子定等、空陸両面の交通の要衝に位置する所である。このような状況の中で南東部地域における御所野地区については特に広大な台地であることから、いち早く開発可能性等についての各調査が実施され、県市総合計画においても産業、住宅団地が一体となった総合的ニュータウン=臨空港新都市として具体的に位置づけられた。

昭和55年に御所野台地全体の分布調査を実施し、約30ヶ所の遺物散布地を確認した。昭和56年度は開発計画地内に西部工業団地造成に先立ち、下堤D遺跡（秋田市「下堤D遺跡発掘調査報告書」1982年3月秋田市教育委員会）の発掘調査を行なった。昭和57年度は今後の開発計画に対応するため55年の分布調査に基づき、3カ月間で遺跡の範囲確認調査を実施し、その結果、台地上に24ヶ所の遺跡を確認したのである。開発計画地内の3カ所の未範囲確認地区を加えると27ヶ所の遺跡（下堤A、B、C、D遺跡、坂ノ上A、B遺跡を除く）が存在（第1図　御所野丘陵部における遺跡及び周辺遺跡）している。範囲確認調査の結果に基づき関係機関と協議を重ね、引き続き年度別に計画的な発掘調査を実施することとし、昭和57年度は下堤G遺跡、野畠遺跡、湯ノ沢B遺跡、坂ノ上C、D遺跡（秋田市「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1983年3月、秋田市教育委員会）、昭和58年度は坂ノ上E遺跡、湯ノ沢A遺跡、湯ノ沢C遺跡、湯ノ沢E遺跡、湯ノ沢F遺跡、湯ノ沢G遺跡、湯ノ沢H遺跡、野形遺跡（秋田市「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1984年3月、秋田市教育委員会）、昭和59年度は下堤E遺跡、下堤F遺跡、坂ノ上F遺跡、狸崎A遺跡、湯ノ沢D遺跡、深田沢遺跡（秋田市「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」1985年3月秋田市教育委員会）の発掘調査を行なった。

昭和60年度は地蔵田B遺跡、台A遺跡、湯ノ沢I遺跡、58年度に調査した湯ノ沢F遺跡の北西部の発掘調査を実施した。

調査期間と体制

調査期間 昭和60年4月11日～12月10日

調査主体者 地域振興整備公團

調査担当者 秋田市・秋田市教育委員会

調査員 菅原俊行、石郷岡誠一、西谷隆、安田忠市（秋田市教育委員会社会教育課）

派遣調査員 桜田隆（秋田県埋蔵文化財センター）

調査補佐員 佐藤雅子、鈴木徳行

調査協力員 五十嵐芳郎（秋田考古学协会会员）、石川忠美子（明治大学大学院生）、五十嵐健志、武藤祐浩、安田拓夫、安藤正美、熊谷朗、西野櫻、後藤進栄、伊藤武、鈴木真澄、星野友実、川村直子（秋田大学生）、奈良年洋（中央大学生）

調査作業員 鈴木銀一、鈴木長治、鈴木茂治、鈴木末藏、鈴木一美、三浦竹治、三浦馨、三浦吉司、三浦吉男、三浦三治、秋本与次郎、堀井藤男、水野金光、佐々木多治郎、加賀谷新之助、加賀谷金一郎、鈴木銀三郎、安藤金四郎、堀野兼雄、堀野健一、渡部謙治、佐々木東吉、佐々木小一郎、鈴木廉一、堀嶽隆二、渡部金次郎、鈴木慶子、鈴木ツヤ、鈴木ウメノ、鈴木キヨ、鈴木鈴子、鈴木博子、三浦千枝子、三浦初枝、三浦トミエ、三浦タキ、三浦ナツ、堀井ヤス、堀井ヨリエ、佐々木フミ、佐々木久子、工藤キタエ、熊谷文子、宮田トキ子、高島綾子、榎トミ、榎良子、伊藤ヒメ子、伊藤ツギ、長谷部ヤエ子、会場京子、渡部アイ子、渡部キネ子、渡部キヨ、渡辺フミ、佐々木ヨシ、佐々木穂子、高橋ヨシ子、高橋ミエ、堀野京子、矢倉アキ、加賀谷ヒデ、杉沢ツミ、藤沢ミサ子、藤沢トケエ、鹿子沢ミサ、安藤チヨ、鈴木ヒデ、鈴木ヒデ子、鈴木カネエ持主チエ、嵯峨ヤミ、鎌田チヤ、小玉孺子

整理作業員 三浦秋子、堀井津子、堀井幸子、伊藤秀子、熊谷喜枝子、工藤エツ子、佐々木信子

事務員 伊藤茂子、奥村典子

調査の方法と経過

調査区は各遺跡ごとに任意の原点を決めて東西南北(磁北)に基準線を作り、調査区全体に大グリッド(40m×40m)を設定し、さらにその中に小グリッド(4m×4m)を設定し、単位グリッドとした。大グリッドは(1~n)、小グリッドは東西(X軸)に数字(1~10)、南北(Y軸)にアルファベット(A~J)を配し、その組み合せて遺跡番号、大グリッド番号、小グリッドの順に呼称することとした。

発掘調査は、地蔵田B遺跡(約一%)、台A遺跡(約一%)、湯ノ沢I遺跡(約一%)、湯ノ沢F遺跡(約一%)の日程で実施した。

地蔵田B遺跡は、昭和44年、秋田考古学協会で下堤遺跡の周辺遺跡踏査の際発見された遺跡で昭和51年の報告書では「地蔵台遺跡」として掲載されているが、今後は「地蔵田遺跡」として取り扱うこととした。昭和44年の踏査では台地の南斜面山道際、つまり地蔵田B遺跡の土器棺、土塙墓群のさらに南東部に位置する所から出土したもので、口縁、頸部は欠いているが壺形土器と思われる。現器高は39cm、肩部最大径は35cmである。肩部に2条単位の平行沈線文が2段、3条の平行沈線文が1段めぐり、沈線間に山形文(錫衛文)を施文し、山形文の谷部(V)を磨消している。肩部から胴部にかけては肩毛目調整後、L R 単節斜縞文を施文している。肩部文様帶には赤色顔料を塗布したほか文様帶から底部にも4単位で巾約1cmほどの赤色顔料塗布の線が垂下している。(図版52)この壺形土器も土器棺と考えられる。以上の土器や範囲確認調査の結果等から地蔵田B遺跡は縄文時代中期、弥生時代の遺構の検出を期待して調査にあたった。結果は旧石器時代、縄文時代、弥生時代の複合遺跡であることが確認され、旧石器時代は石器、剝片、石核等の出土総数は約3,400点で、石器の器種はナイフ形石器、台形様石器、磨製石斧、錫衛縞石器などであるが調査期間の都合

で調査区東側は完掘できなかつたので61年度継続調査をすることとした。縄文時代は堅穴住居跡、土塙等が検出され、住居は複式炉をもつ中期末葉(大木10式期)の時期であった。弥生時代は県内初例の集落の検出のほかに集落を囲む柵木跡が検出され注目されている。柵木跡は北西—南東方向に長軸をもつ梢円形を呈し、規模は長軸61m×短軸47mである。堅穴住居跡は1時期3~4軒の構成で各住居跡に数回の建替えがみられる。柵木跡南東に土器館墓(25基)、土塙墓(51基)群が存在する。出土遺物から縄文時代晚期直後、初期弥生時代の時期である。

台A遺跡は、範囲確認調査の段階では国道13号線沿いにその位置(23)を図示してあったが、昭和59年10月に再調査した結果、図示した所から北約200mの沢の南側台地に住居跡等を確認し、台A遺跡の位置を変更したものである。検出された遺構は堅穴住居跡、土塙等で、縄文時代中期末葉の時期である。

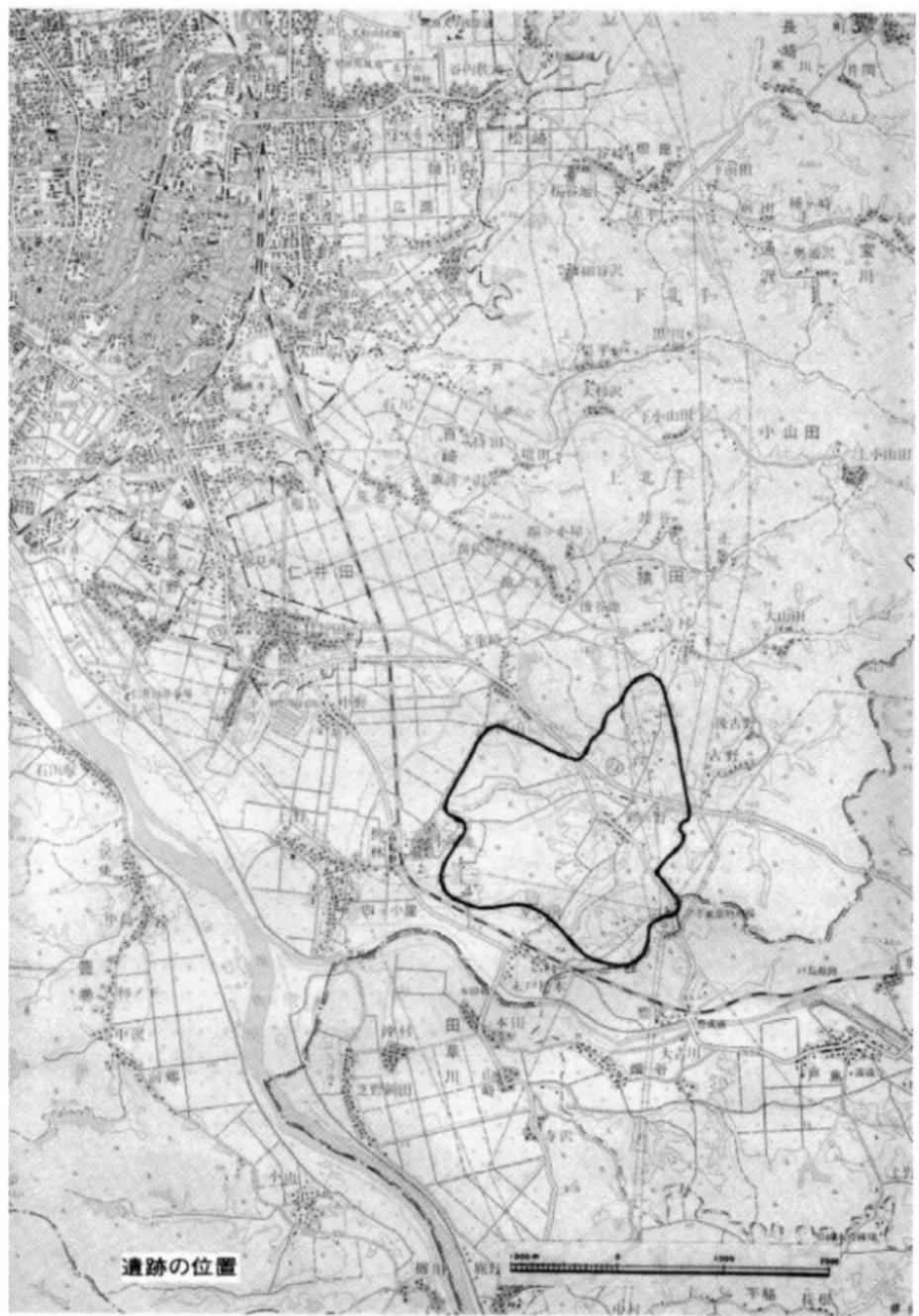
湯ノ沢I遺跡は、未範囲確認地域の一つで昭和59年度まで秋田営林署の苗圃であった。昭和60年は土地買収に伴い苗木が移植されたため調査が可能になったもので範囲確認調査と発掘調査を併せて実施し、弥生時代の土塙、平安時代の土師器壺、土鍋などを検出した。

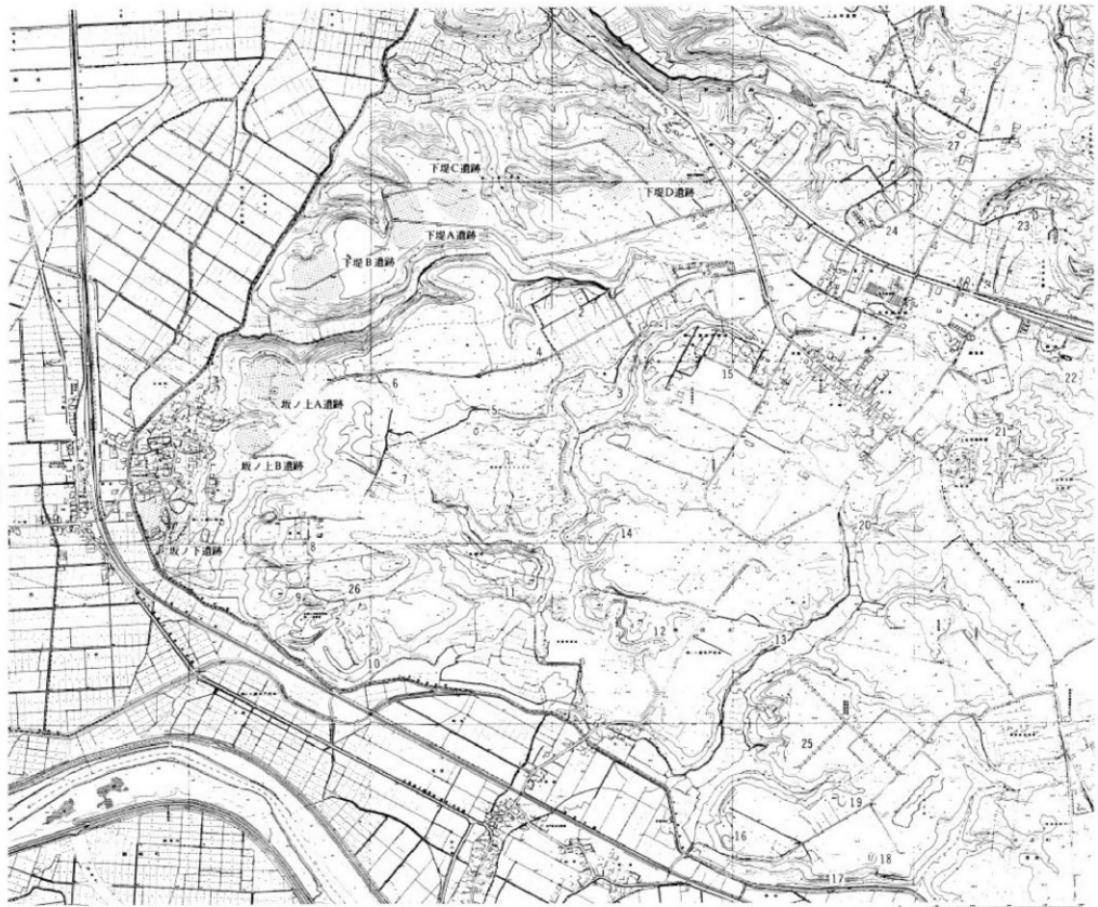
湯ノ沢F遺跡は、昭和58年に発掘調査をして平安時代の墓21基を検出した遺跡で、北西の未買取地(畑)に遺構が広がる可能性があり、畑地買取後、再調査することとし、今回調査したもので新たに19基の墓が確認され、合計40基となった。

(註1) 「小阿地、下岸・坂ノ上遺跡発掘調査報告書」1976年3月 秋田市教育委員会

昭和60年度來跡者（順不同、敬称略）

岩見誠夫、船木義勝、大野恵司、高橋忠彦、児玉隼、小林克(秋田県埋蔵文化財センター)、永井隆一、富樫泰時(秋田県文化課)、大井康(秋田県高校教育課)、藤原哲(秋田県議会議員)、成田誠治三宅徹也(青森県埋蔵文化財調査センター)、一町田工(青森県文化課)、小林達雄(国学院大学)、稲田孝司(岡山大学)、安孫子昭二(東京都文化課)、渡辺誠(名古屋大学)、赤山容造(群馬県文化財保護課)、藤田富士夫(富山市考古資料館)、秋元信夫(鹿角市社会教育課)、進藤秋輝(多賀城跡調査研究所)、福野裕介、彰子(北上市社会教育課)、庄内啓男、三崎隆儀(秋田県立博物館)、将軍野青山町老人クラブ、四ツ小屋小学校P.T.A文化部、鶴島家庭学級





第1図 御所野丘陵部発掘調査道路、範囲確認道路及び周辺道路

御所野丘陵部 遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	所 在 地	範 囲 認 調 査			発 墓 調 査 進 跡			内 容
			時 代	面 積 m ²	地 日	調査年度	調査面積 m ²		
1	下 堀 E	秋田市四ツ小屋小阿堵字下堀	縄 文	5,625	烟	59	3,340		縄文(中期)集落
2	下 堀 F	〃	〃	14,375	〃	59	2,950		縄文(前、中期)集落
3	下 堀 G	〃	旧石器、縄文(中)	5,000	山林原野	57	1,550		旧石器、縄文(前、中期)集落
4	坂 / 上 C	四ツ小屋小阿堵字坂 / 上	縄 文	6,000	〃	57	1,000		縄文(中、晚期)
5	坂 / 上 D	〃	〃	14,060	〃	57	1,500		縄文(中、晚期)
6	坂 / 上 E	〃	〃	15,000	〃	58	5,000		縄文(中期)集落、9~10C製鉄炉
7	坂 / 上 F	〃	〃	37,810	〃	59	18,800		縄文(中期)集落、弥生住居跡
8	理崎 A	四ツ小屋小阿堵字理崎	縄 文(晚)	13,750	烟、山林原野	59	1,910		縄文(前、晚期)土塁墓、弥生住居跡
9	理崎 B	〃	縄 文	11,250	原 野				
10	地蔵田 A	四ツ小屋末戸松本字地蔵田	旧石器、縄文、平安	3,000	烟				
11	地蔵田 B	〃	縄文(中後)、弥生	25,000	山林原野	60	12,000		旧石器、縄文(中期)集落、弥生集落木跡
12	湯ノ沢 A	四ツ小屋末戸松本字湯ノ沢	縄 文	21,555	〃	58	3,000		縄文(中期)弥生住居跡
13	湯ノ沢 B	〃	縄 文(前、中)	5,000	〃	57	2,340		縄文(中期)集落、平安住居跡
14	湯ノ沢 C	〃	縄文(中後)弥生	11,565	〃	58	4,100		縄文(中期)集落
15	湯ノ沢 D	〃	縄 文(中)	35,000	烟	59	3,220		縄文(中期)集落
16	湯ノ沢 E	〃	縄 文	7,500	〃	58	1,920		縄文(後期)
17	湯ノ沢 F	〃	縄文、土師、須恵	5,310	〃	58・60	4,400		弥生、土器、平安墓(40基)
18	湯ノ沢 G	〃	縄 文(後)	1,300	原 野	58	400		縄文(後期)
19	湯ノ沢 H	〃	縄 文	5,940	烟	58	720		縄文(前、中、晚期)住居跡
20	野 烟	上北手御所野字野烟	縄 文(中)	1875	山 林	57	640		縄文(中期)集落
21	野 形	上北手御所野字野形	土 師、須恵	5,940	山林原野	58	980		平安住居跡、窯跡
22	深 田 沢	上北手古野字深田沢	縄 文、平安	6,875	烟	59	3,320		平安建物跡、住居跡
23	台 A	上北手古野字台	〃	8,440	〃	60	2,000		縄文(中期)集落
24	堆 方	上北手篠田字堤 / 沢	縄 文(晚)	54,670	烟、原 野				
25	湯ノ沢 I	四ツ小屋末戸松本字湯ノ沢	〃	〃	苗 園	60	5,700		弥生
26	秋 大 犀 場	四ツ小屋小阿堵字犀嶺	〃	〃	烟、原 野				
27	台 B	上北手篠田字寺 / 沢	〃	〃	山林原野				

遺跡の位置と地形・地質

位 置

秋田市街から国道13号線を南下し、仁井田、横山を過ぎ、坂を登ると標高約40m前後の広大な台地が開ける。これは奥羽本線四ツ小屋駅方面からもよく見える平坦な台地であり、御所野台地、末戸台と呼ばれている。この台地が秋田新都市開発整備事業計画地域である。

各遺跡の位置については第1図、「御所野丘陵部発掘調査遺跡、範囲確認調査遺跡及び周辺遺跡」を参照されたい。

地形・地質

遺跡の存在する地形は、大別して和田丘陵と末戸台台地に分けられる。和田丘陵は平坦面をあまり持たない。しかし、定高性を持った標高60~150mのかなり開析を受けた老年期地形を示し、地質は第3系鮮新統に属する青色砂質シルト岩(笠岡層)と青灰色塊状泥岩(天徳寺層)、それに中新統に属する暗灰色泥岩(船川層)などからなっている。末戸台台地は標高25~50m強で、その表面は大変平坦である。この台地は和田丘陵と接して数段の段丘を識別できる。これらは内藤の区分からすると、上位から標高45~50m強の椿台段丘、標高40m強の上野台段丘Ⅰ、標高35m強の上野台段丘Ⅱ、標高25m強の宝竜崎段丘の4段階に分けられる。(第2図)

椿台段丘

岩見川右岸末戸台台地では45~50m強の標高をもつ、いわゆる椿台面をその堆積面とする椿台層が厚い礫(最大径10cm前後)、砂、粘土の互層で構成されている。ただ基底高度はわからない。岩相は最上部に1~2m褐色の粘土質火山灰層があり、次に礫、砂、粘土の互層で、砂礫の部分でしばしばクロス・ラミナ(斜交葉理)がみられ、砂土あるいはシルトは水平な細かい層理をなすことが多い。層厚をみると、礫層はうすく、砂、粘土層が厚い。その下部は第3系の泥岩(船川層)や砂質シルト(笠岡層)となっている。内藤はこの椿台面を開東の下末吉面に対比している。台A遺跡は、この椿台段丘に位置する。

上野台段丘Ⅰ

末戸台台地で椿台段丘の南側に標高40m強についている段丘が上野台段丘Ⅰと呼ばれている。表層の1~2mの粘土質火山灰層を除くと、段丘堆積物は最大径20~30cmの礫層であり、厚さは5m程度で、その下部は第3系となっている。

上野台段丘Ⅱ

末戸台台地では上野台段丘Ⅰとの比高が5m強である。段丘堆積物の岩相は、上野台段丘Ⅰとはほぼ同様で、層厚は5m前後である。内藤によれば、厚い礫層の下部は椿台層に当るとしている。地蔵田B遺跡、湯ノ沢Ⅰ遺跡は、この上野台段丘Ⅱに位置する。

段丘堆積物の特徴は、上野台Ⅰ・Ⅱ面では最大径30cm前後の亜円礫を主体とする。ほぼ一様な礫層をもち、河川堆積物で、厚さも加味すると岩見川などによる河成の侵食段丘面と考えられる。椿

台、上野台Ⅰ、Ⅱ面の各面をおおっている層厚1~2mのシルト分を含んだ粘土質火山灰層は、男鹿半島の寒風山が起源と一応考えられている。この粘土質火山灰層の表面細粒物質の風化状態をみると、椿台、上野台Ⅰ、Ⅱ面では黒色土の下の細粒物質のうち、上部50~100cmが明褐色を呈し、下部は灰色で、境は漸移する。また、土壤断面を見ると、椿台、上野台Ⅰ、Ⅱ面をおおう土壤は、いわゆる高岡2系統に属していると考えられ、比較的大きい円礫を混入していく、黒色土層を厚く堆積させている。この層中には火山ガラスを混入しており、火山灰が関係しているものと推定される。

(註1) 「秋田県岩見川流域およびその周辺の段丘について」 内藤博夫 1965年 第4紀研究第4卷第1号

(註2) 「地形、表層地質・土壤、秋田」 経済企画庁土地分類基本調査 1966年

「八郎潟の研究」 秋田県教育委員会 1965年

「火山活動と地形」 村山馨 大明堂

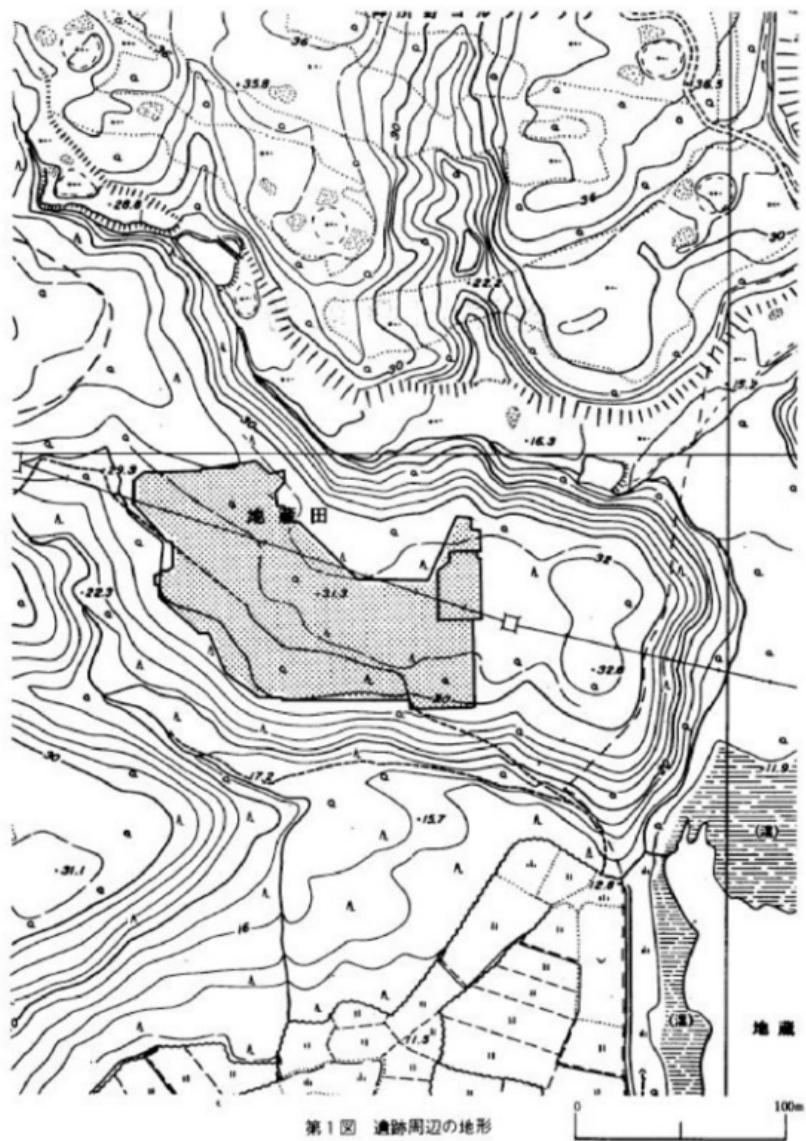
「秋田県男鹿半島一の目潟の火山拠出物について」 林 宏 地質学雑誌第61巻第717号

1955年

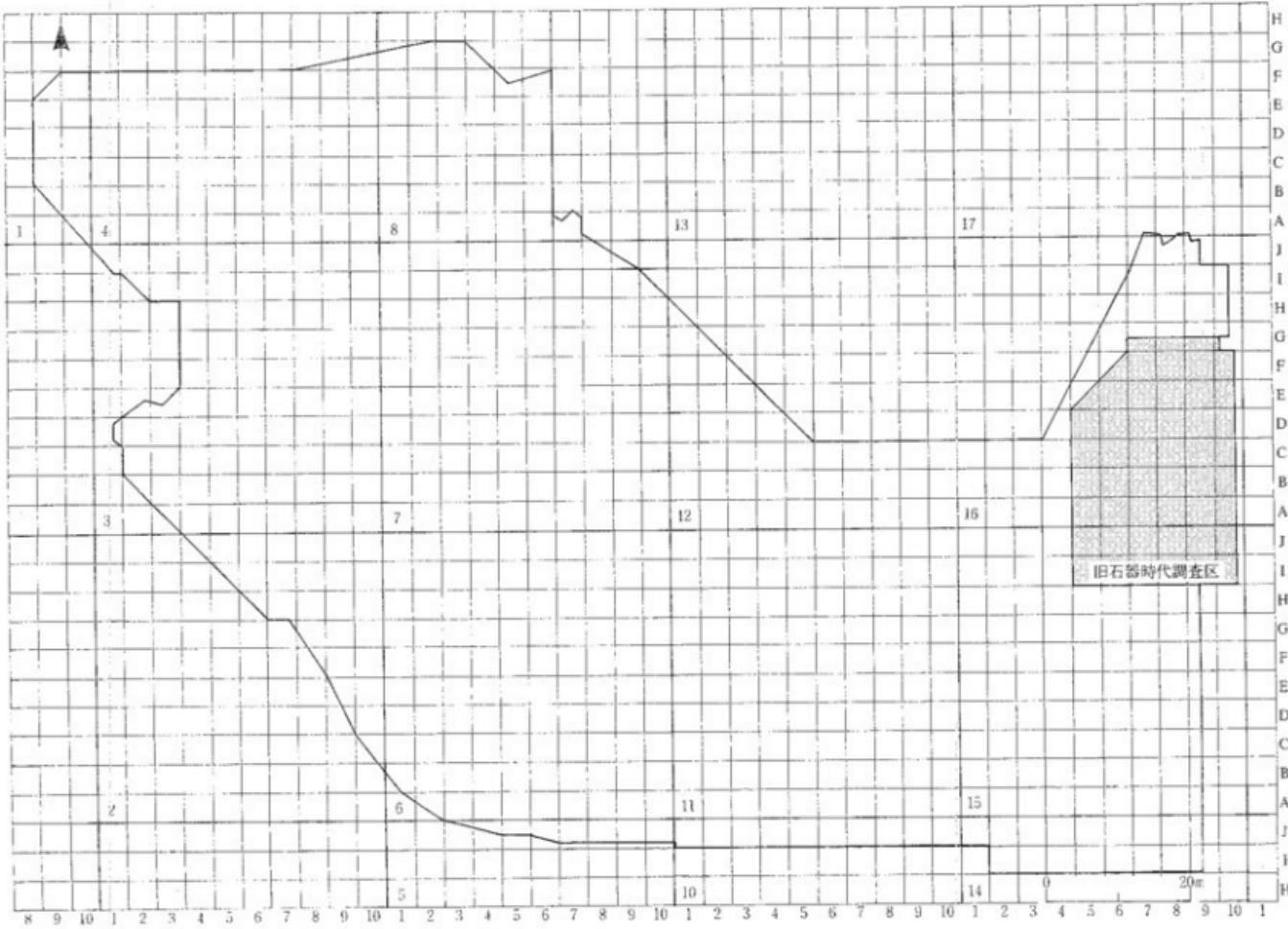


第2図 段 丘

地蔵田 B 遺跡



第1図 遺跡周辺の地形



遺跡の概観

御所野台地の南側、国鉄奥羽本線四ツ小屋駅から南東へ約1.1kmの地点で、標高約31mの東西に長い舌状台地（上野台段丘Ⅱ面）が遺跡である。

遺跡は旧石器時代、縄文時代中期末葉～後期初頭、弥生時代の複合遺跡で、遺構は縄文時代の堅穴住居跡、弥生時代の堅穴住居跡、櫛木跡、土塙跡、土器棺墓、土塙、炉、時期不明の建物跡が1棟検出された。

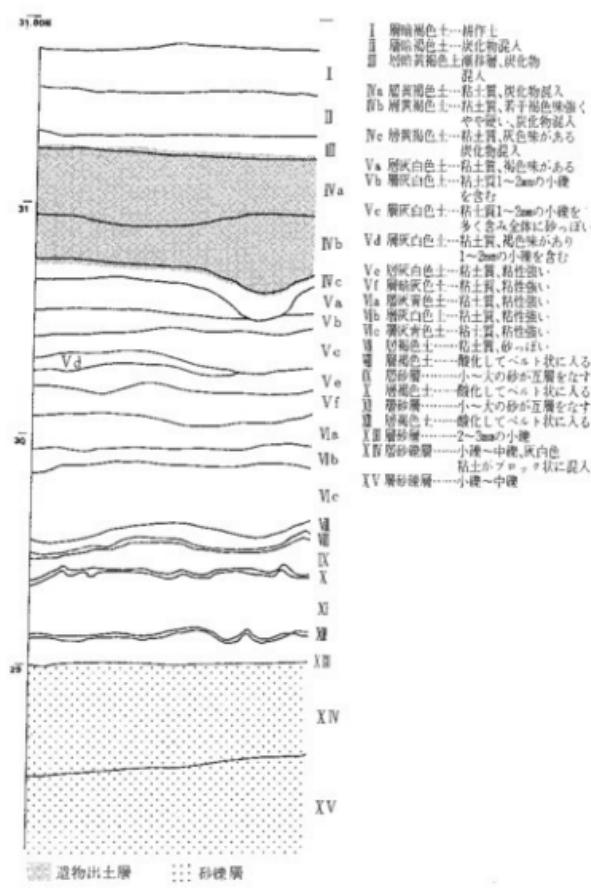
隣接する遺跡では東約300mに縄文時代中期末葉、弥生時代の「湯ノ沢A遺跡」、東約350mに縄文時代中期末葉の「湯ノ沢C遺跡」、北西約500mに縄文時代中期初頭、中期末葉、弥生時代、平安時代の「坂ノ上F遺跡」、西約600mに弥生時代の「猩崎A遺跡」等の関連遺跡が所在する。

旧石器時代

御所野丘陵部の新都市開発計画地域内で旧石器時代の遺跡が発掘調査されたのは、昭和57年度調査の「下堤G遺跡」とこの「地蔵田B遺跡」であり、計画地域内の遺跡範囲確認調査の段階では「地蔵田A遺跡」で石刃が検出され、旧石器時代の遺跡としているが発掘調査は昭和62年度の予定である。

下堤G遺跡はナイフ形石器、石刃、米ヶ森型台形石器の組成をもつ遺跡で、地蔵田B遺跡はナイフ形石器、ノッチ、打製石斧、磨製石斧等の石器が出土しており、両遺跡の様相は異なっている。

本年度は調査が12月に入り、発掘が不可能なため来年度、引き続き調査する予定であり、本報告は来年度とし、概報として取り扱っていることを御容赦願いたい。



第3図 土層図



第4図 ナイフ形石器・ノッチ・磨製石斧

層位

標高30~40mのこの台地は上野台段丘Ⅱと呼ばれ、地蔵田B遺跡はこの上野台段丘Ⅱ面の中でも低位に位置する。旧石器時代の遺物はⅢ層（暗黄褐色土、ローム漸移層）下部、Ⅳa、Ⅳb層（黄褐色土、ローム層）、Ⅳc層（黄褐色土、灰色味）上部からの出土である。（第3図）

出土遺物

石器、剝片、石核等の出土総数は、約3,400点で、石器の器種はナイフ形石器、ノッチ、磨製石斧などである。（第4図）

遺構と遺物

縄文時代

1号住居跡（第5図）

調査区北西部で検出された。

プランは長軸3.8m、短軸3.1mの隅丸長方形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは6個検出され、主柱穴は4個である。炉は土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。石組部は側面に石が組まれ、底面と側面の石が火熱を受けている。掘り込みは一段浅く壁に接する。床は平坦で堅い。

出土遺物

土器（第37図1、第44図38~43）

1は炉埋設土器、42は床面、他は覆土出土である。沈線区画の磨消費を有するものである。1は口縁部が外側する深鉢形土器で、頸部に沈線が巡る。地文はR L 単節斜縫縄文（斜位回転）で、補修孔がみられる。

石器（第49図1・2、第52図38）

1は搔器、2は削器、38は磨石である。

2号住居跡（第6図）

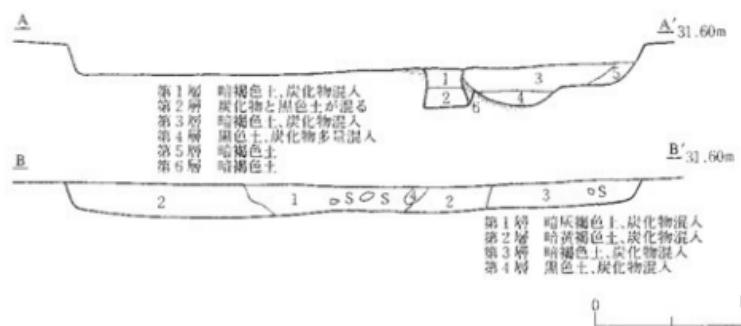
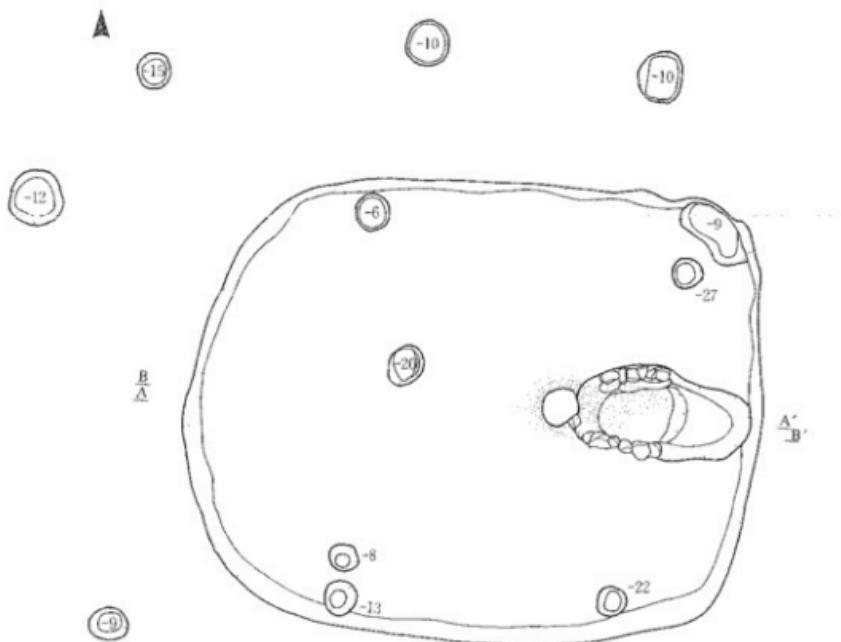
調査区北西部で検出された。

プランは長軸3.7m、短軸3.5mの楕円形を呈し、確認面からの深さは23cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは10個検出され、主柱穴は櫛際の4~5個と考えられる。炉は土器埋設部と石組部からなる。土器埋設部は深鉢形土器を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。石組部は側面に石が組まれ、底面と側面の石が火熱を受けている。また、土器埋設部の南側に深鉢形土器の下半分が埋設され、火熱を受けていた。床は平坦で堅い。

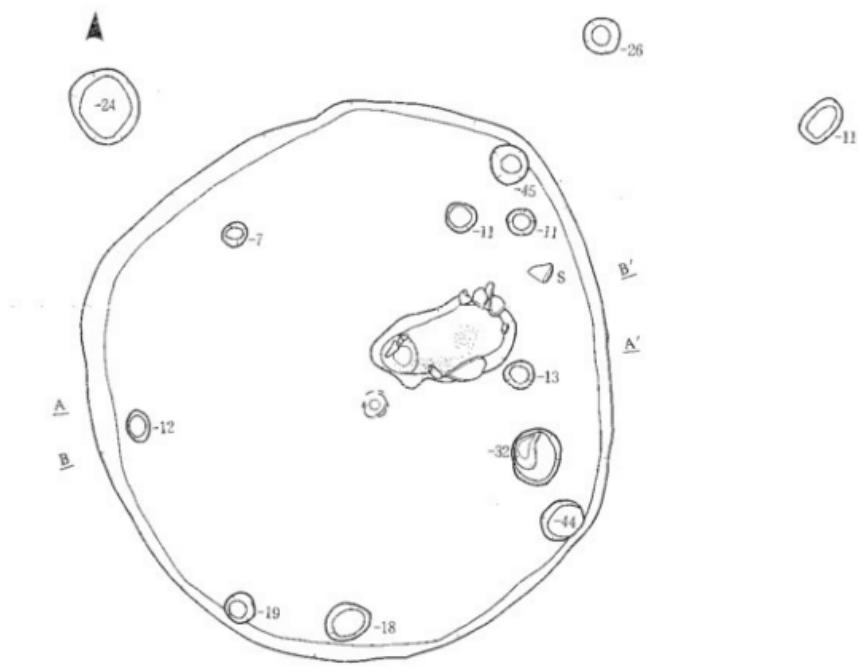
出土遺物

土器（第37図2・3、第44図44~46）

2は炉埋設土器、3は南側炉埋設土器、46は床面、他は覆土出土である。沈線区画の磨消費を有



第5図 1号住居跡



④ ⑤



第1層 黄褐色土、焼土、炭化物少量混入
第2層 喀褐色土、焼土、炭化物少量混入
第3層 喀褐色土、炭化物混入

第6図 2号住居跡

するものである。2は口縁部が直立する深鉢形土器で、「J」字状の磨消帯を有し、地文はLR単節斜繩文(縦位回転)である。3は深鉢形土器の下半分で、地文はRL単節斜繩文(縦・斜位回転)である。

石器 (第49図3・4)

3はヘラ状石器、4は削器である。

3号住居跡 (第7図)

調査区北西部で検出された。

プランは長軸3.6m、短軸3.5mの橭円形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは6個検出され、主柱穴は4個である。炉は土器埋設部と掘り込み部からなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を2重に埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。掘り込み部は底・側面が火熱を受けている。床は平坦である。

出土遺物

土器 (第37図4~6、第44図47~50)

5(内側)・6(外側)は炉埋設土器、4はピット、他は覆土出土である。半截竹管状工具内面による半隆起線で文様を作り出すもの、沈線区画の磨消帯を有するものである。5は深鉢形土器の下半分で、地文はLR単節斜繩文(縦位回転)である。6は深鉢形土器の胴部で、地文はRL単節斜繩文(縦位回転)である。4は口縁部が直立する鉢形土器で、「J」字状の磨消帯を有し、地文はRL単節斜繩文(縦位回転)である。

石器 (第49図5~7、第52図39)

5はつまみ部を欠く縦型石匙、6はヘラ状石器、7は削器、39は磨石である。

4号住居跡 (第8図)

調査区北西部で検出された。

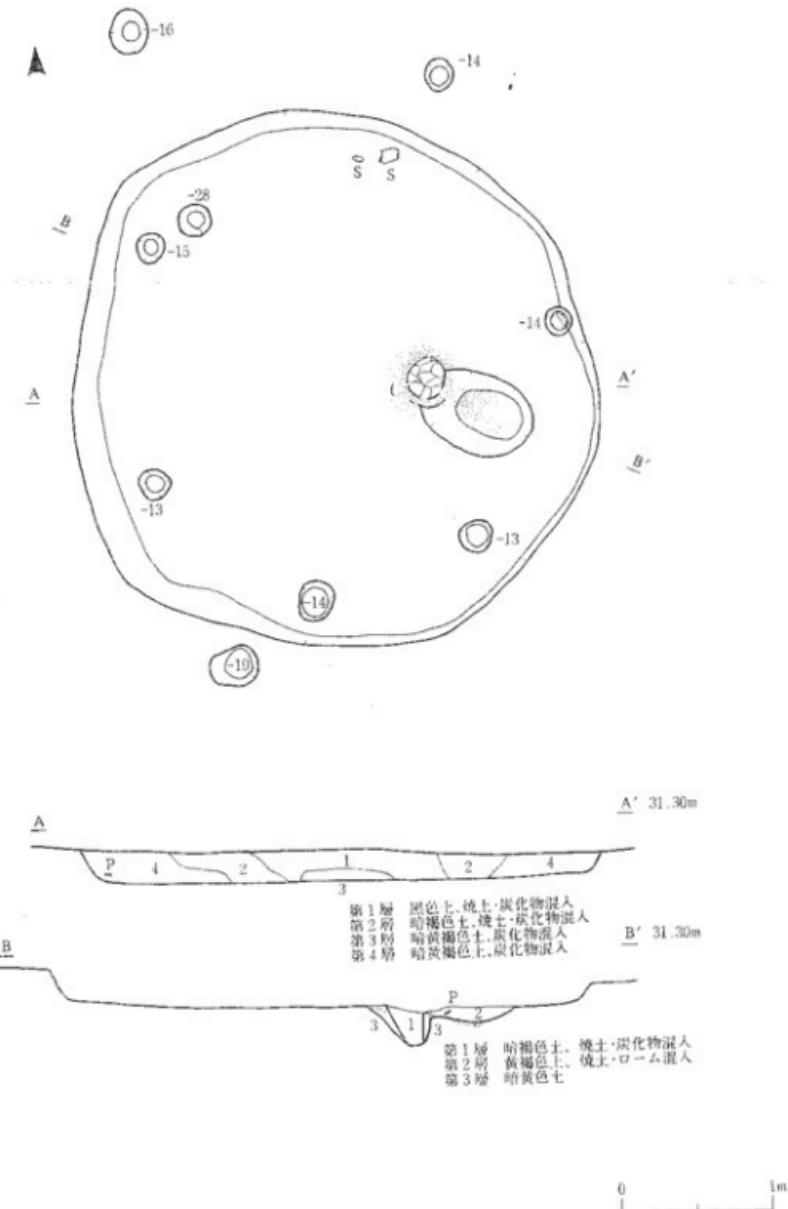
プランは長軸3.4m、短軸3.2mの橭円形を呈し、確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは4個検出されたが、主柱穴は不明である。炉は土器埋設部と石組部からなる。土器埋設部は深鉢形土器を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。石組部は長い川原石を埋設土器に被さるように据え、壁側は側面に石が組まれている。底面と側面の石が火熱を受けている事から、側面の石は抜き取りと考えられる。床は平坦で堅い。

出土遺物

土器 (第38図7・8、第44図51~59)

7は炉埋設土器、8は床面、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するものである。7は口縁部が外反する深鉢形土器で、逆「S」字状の磨消帯を有し、地文はLR単節斜繩文(縦位回転)である。8は口縁部が外反する深鉢形土器で、「J」字状の磨消帯を有し、地文はLR単節斜繩文(縦位回転)である。

土製品 (第160図72)

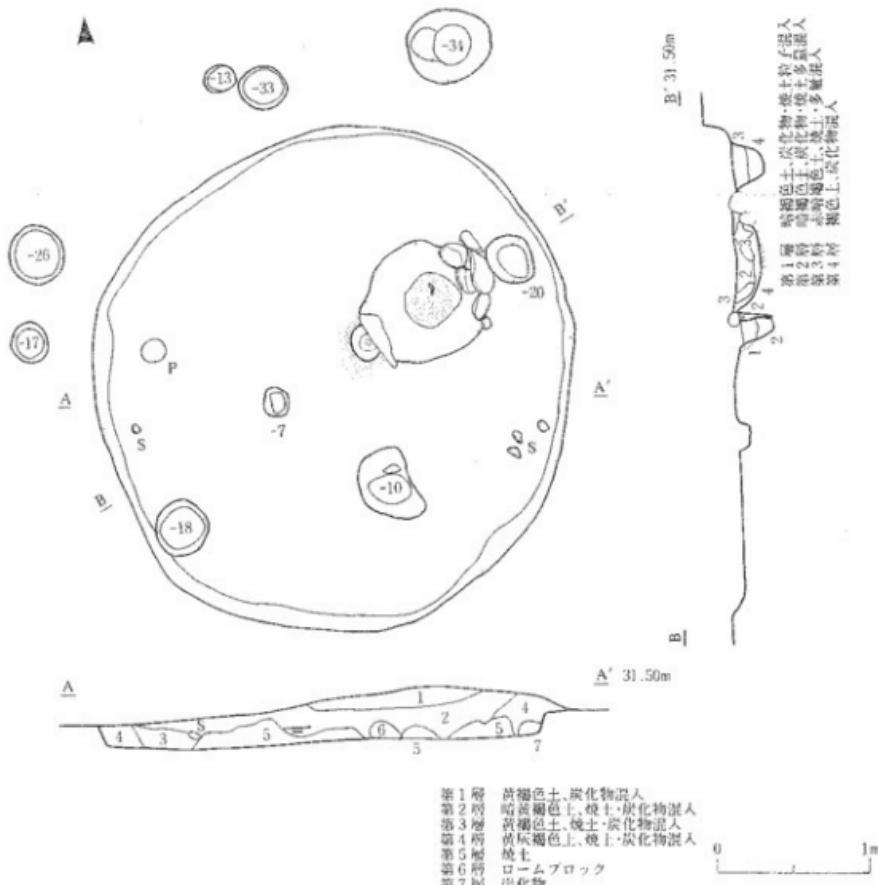


第7図 3号住居跡

72は再利用土製品で、土器片を利用したものである。

石器（第49図 8）

8は縦型石匙である。



第8図 4号住居跡

5号住居跡（第9図）

調査区西側で検出された。

プランは長軸5.3m、短軸4.7mの橢円形を呈し、確認面からの深さは40cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは11個検出され、主柱穴は深い掘り方の4個である。剖面は石器埋設部、掘り込み部、一段浅い掘り込みからなる。石器埋設部は深鉢形土器を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。掘り込み部は底・側面が火熱を受けている。一段浅い掘り込みは壁に接する。床は

中央部が若干くぼむが全体的に堅い。

出土遺物

土器（第38図9、第45図60～72）

9は炉埋設土器、72が床面、他は覆土出土である。口縁部に撻糸圧痕を施すもの、沈線区画の磨消帯を有するものである。9は口縁部が外反する深鉢形土器である。「J」字状の磨消帯が胴部中程の波状磨消帯と連絡し、地文はR L 単節斜櫛文（継位回転）である。

土製品（第160図73）

73は再利用土製品で、土器片を利用したものである。

石器（第49図9・10、第52図40）

9は横型石匙、10は搔器、40は磨石である。

6号住居跡（第10図）

調査区西側で検出された。

プランは一辺3.1mの隅丸方形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ビットは6個検出され、主柱穴は4個である。炉は土器埋設部と石組部からなる。土器埋設部は深鉢形土器（復原不可能）を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。石組部は底面と側面の石が火熱を受けており、側面の数個の石は抜き取られている。床は平坦で堅い。

出土遺物

土器（第45図73～82）

73、82は床面、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するものである。

石器（第49図11・12）

11は削器、12は磨製石斧で、刃部を欠く。

7号住居跡（第11図）

調査区西側で検出された。

プランは径2.8mの円形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁は緩く立ち上がる、ビットは6個検出され、主柱穴は4個である。炉は石畳土器埋設部と掘り込み部からなる。石畳土器埋設部は深鉢形土器の胴部を埋設し、周辺が火熱を受けて赤変している。掘り込み部は側面の一部が火熱を受けている。床は平坦で堅い。

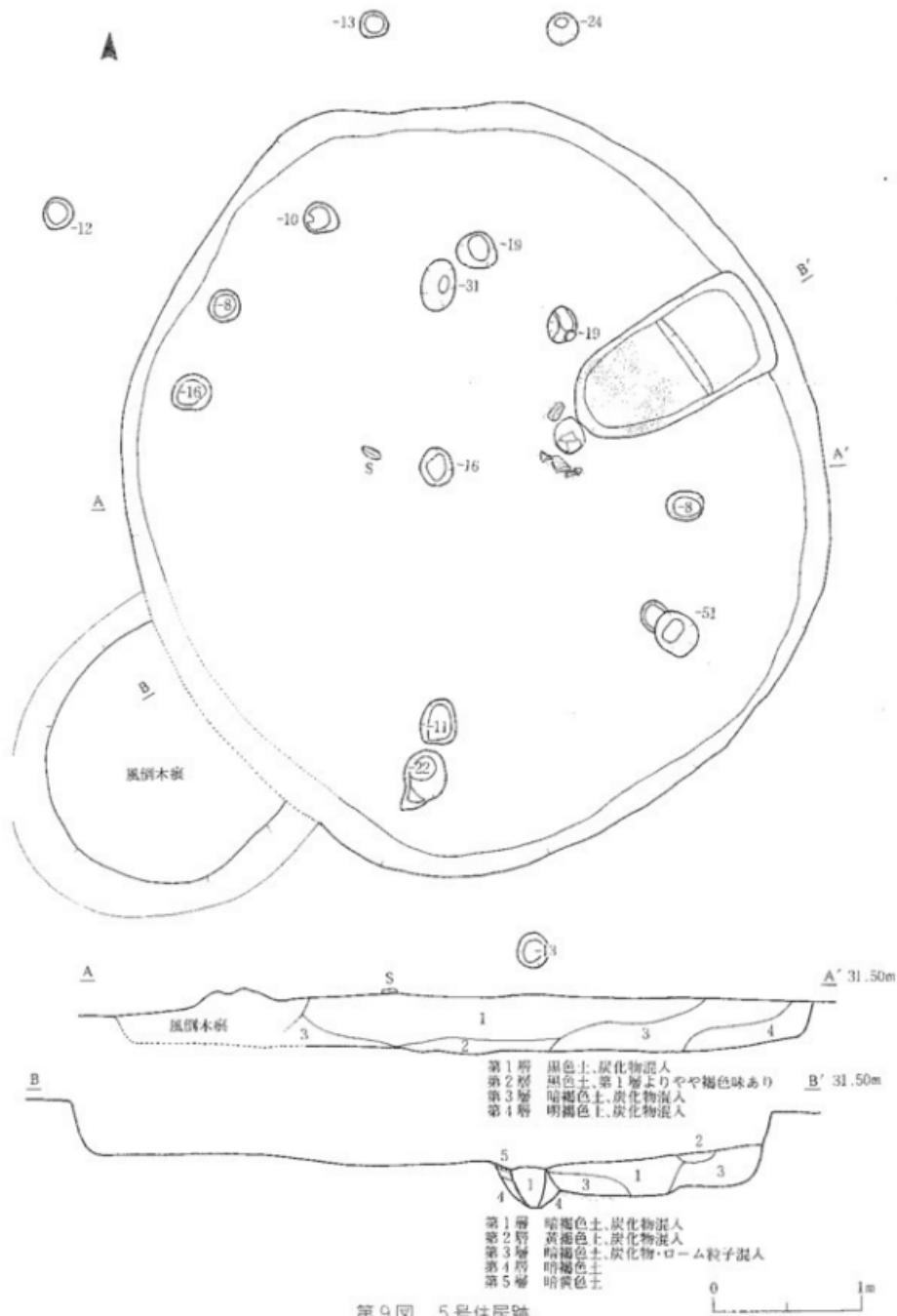
出土遺物

土器（第38図10、第45図83）

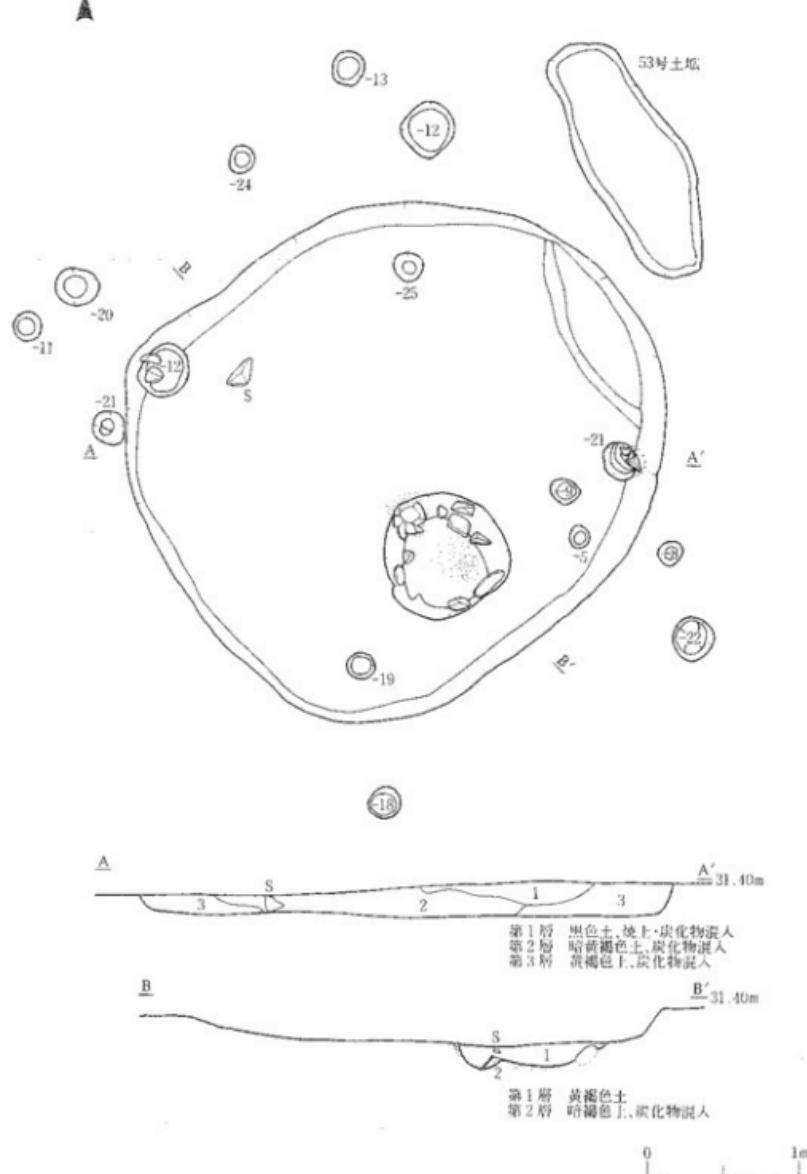
10は炉埋設土器、83は覆土出土である。10は深鉢形土器の下半分で、地文はL R 単節斜櫛文（継位回転）である。

石器（第49図13、第52図41）

13は搔器、41はくぼみ石である。



第9図 5号住居跡



第10図 6号住居跡

8号住居跡（第12図）

調査区北側で検出された。

プランは長軸2.8m、短軸2.7mのはば円形を呈し、確認面からの深さは15cmで壁はほぼ垂直に立ち上がる。

ピットは2個のみの検出で炉はない。床は平坦で堅い。

出土遺物

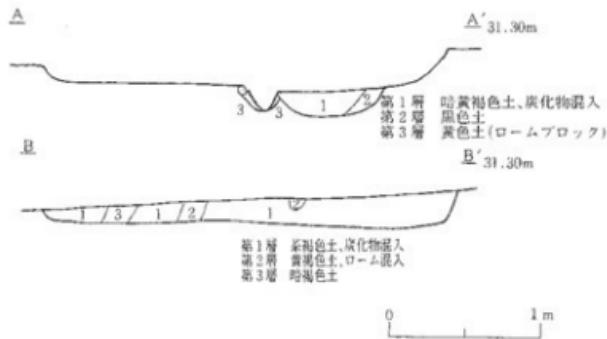
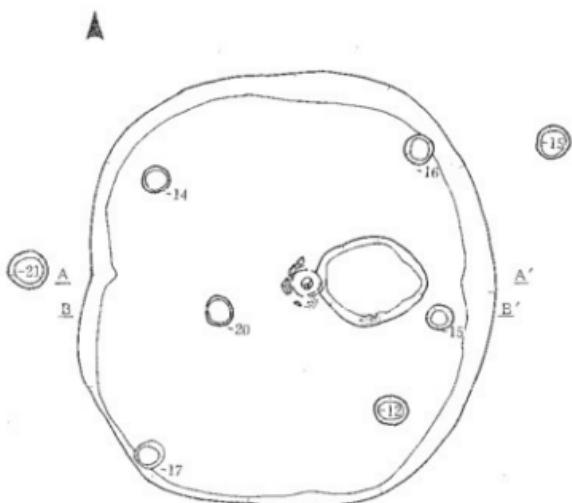
石器（第52図42）

42は石錘で、両端を打ち欠いている。

9号住居跡（第13図）

調査区北側で検出された。

プランは径3mの円形を呈し、確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは9個検出され、主柱穴は4個と考えられる。炉は2基検出された。北西側の炉は土器埋設部と掘り込み部からなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を埋設し、周辺は火熱



第11図 7号住居跡

を受けて赤変している。掘り込み部は底・側面が火熱を受けている。北側の炉は土器埋設部と掘り込み部からなる。土器埋設部は深鉢形土器を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。埋設土器の中には川原石が入っていた。掘り込み部は底・側面が火熱を受けている。本炉が北西側の炉を切っている。床は平坦で堅い。

出土遺物

土器（第38・39図11・12、第45図84・85）

11は北西側の炉埋設土器、12は北側の炉埋設土器、他は覆土出土である。11は深鉢形土器の胴部で、地文は燃糸文である。12は深鉢形土器の胴部で、磨消帶が交差する部分に刺突が施される。地文はL R 単節斜綱文（縦位回転）である。

10号住居跡（第14図）

調査区北側で検出される。

プランは径2.8mの円形を呈し、確認面からの深さは15cmで壁はほぼ垂直に立ち上がる。ビットは5個検出され、主柱穴は4個である。炉は土器埋設部と石組部からなる。土器埋設部は深鉢形土器の下半分を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。石組部は埋設土器との間に川原石を据え、底・側面が火熱を受けている。床は平坦で堅い。

出土遺物

土器（第39図13・14、第46図86～88）

13はかび埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帶を有するものである。13は深鉢形土器の下半分で、地文はR L単節斜繩文（縦位回転）である。

14は口縁部が外反する鉢形土器

で、「J」字状の磨消帶を有し、地文はR L単節斜繩文（縦位回転）である。

石器（第49図14）

14は独鉛石で、両頭部が欠損し、稜線間にはアスファルトが付着している。

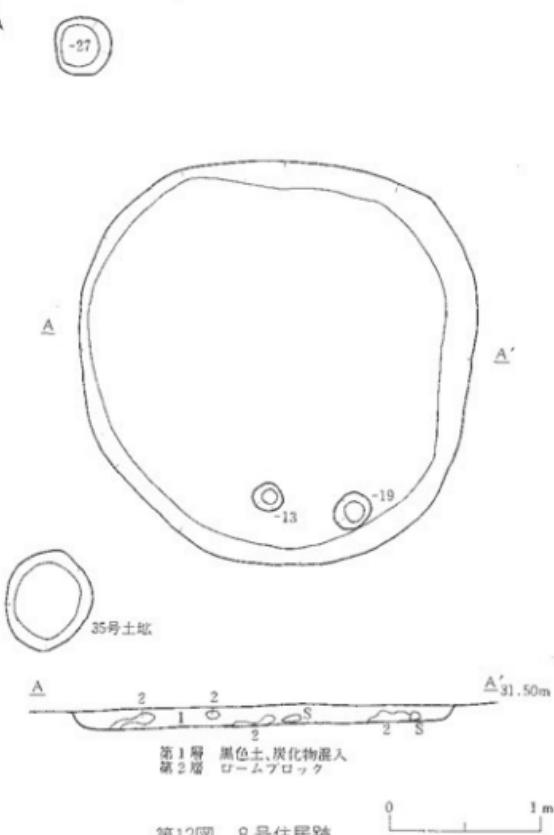
11号住居跡（第15図）

調査区北側で検出された。

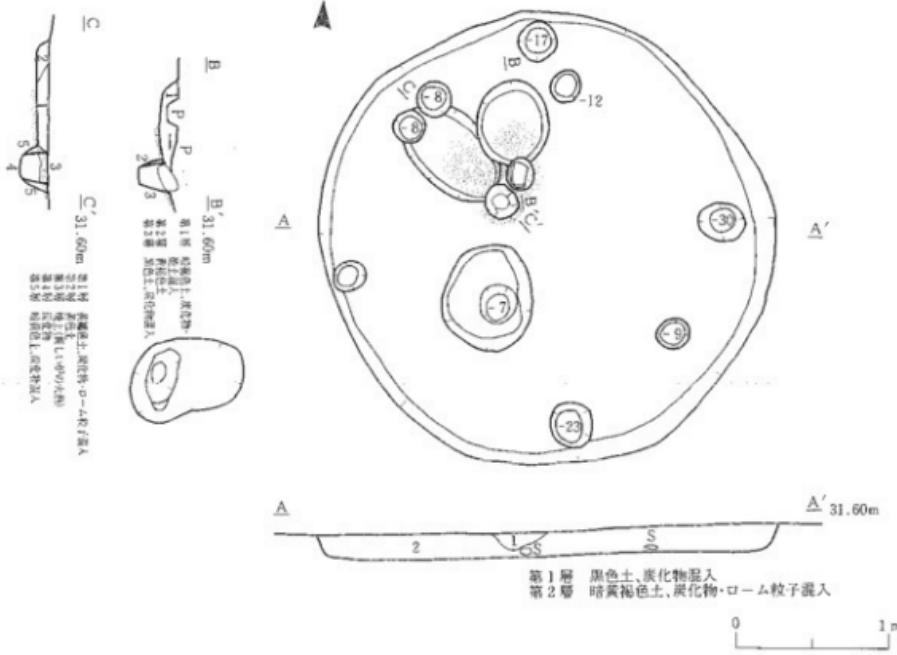
プランは径3.2mの円形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ビットは12個検出され、主柱穴は壁際の4個である。炉は石圓土器埋設部である。深鉢形土器をやや斜めに埋設し、石は3個のみ残存し他は抜き取られている。周辺は火熱を受けて赤変している。床は平坦で堅い。

出土遺物

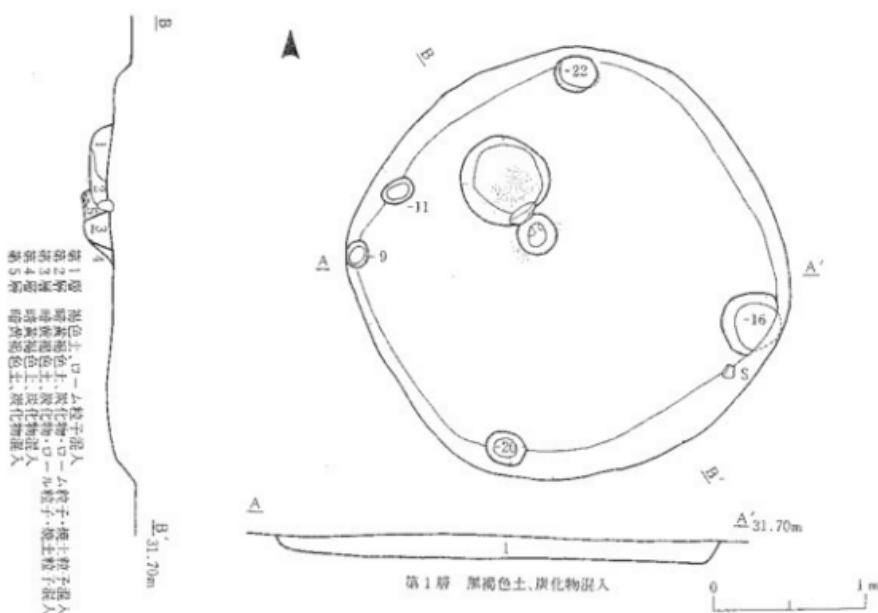
土器（第39図15～17、第46図89・90）



第12図 8号住居跡



第13図 9号住居跡



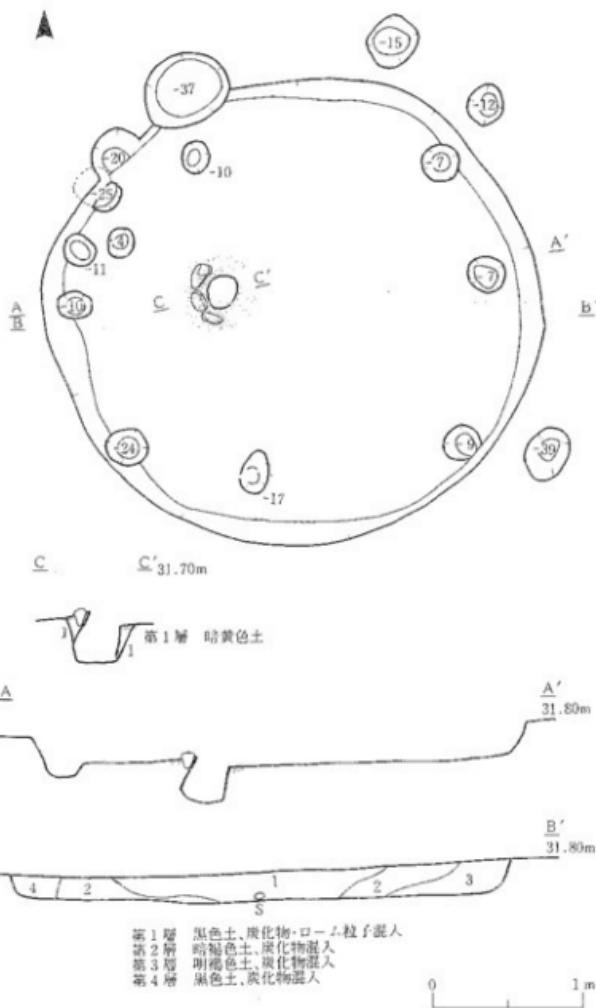
第14図 10号住居跡

15は炉埋設土器、16はピット、他は覆土出土である。沈線及び稜線区画の磨消帯を有するもの、沈線で文様を作り出すものである。15は口縁部が直立する深鉢形土器で、頭部に沈線が巡る。地文はしR単節斜縄文（縦位回転）である。16は口縁部が直立し突起をもつ深鉢形土器で、突起の下へ沈線で同心円文を施し、地文を磨消す。地文はしR単節斜縄文（縦・斜位回転）である。17は鉢形土器で、横位への磨消帯と刺突を施す。地文はR L単節斜縄文（縦位回転）である。

12号住居跡（第16図）

調査区北側で検出された。

プランは長軸3.6m、短軸3.4mの梢円形を呈し、確認B面からの深さは30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは7個検出され、柱穴は3個と考えられる。炉は石脚土器埋設部と石組

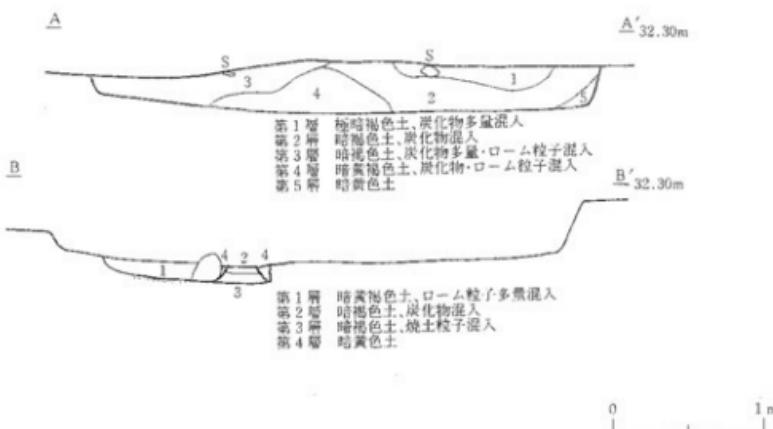
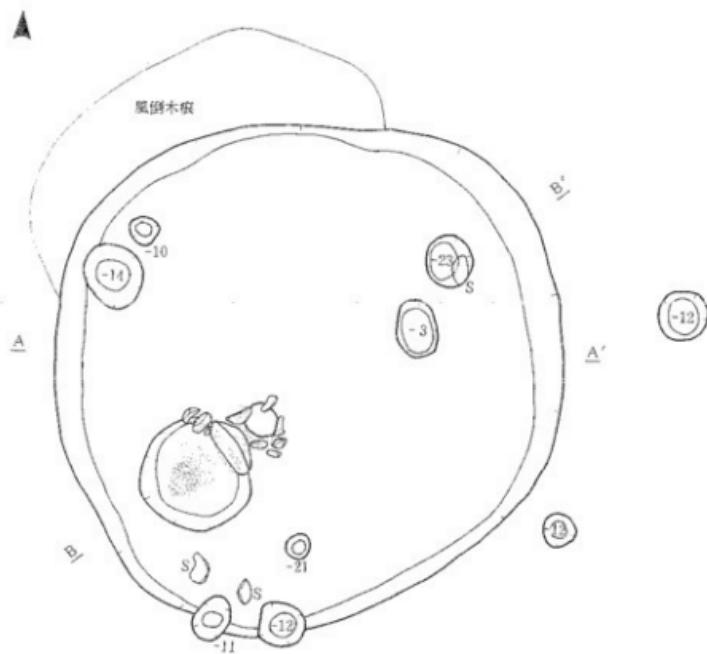


第15図 11号住居跡

部からなる。石脚土器埋設部は深鉢形土器の口縁部を倒立させて埋設し、周辺は火熱を受けて赤変し、数個の石は抜き取られている。石組部は埋設土器との間に巨礫を据え、側面に3個の石が組まれている。底面と側面の石が火熱を受けている事から、側面の石は抜き取られたものと考えられる。床は平坦で堅い。

出土遺物

土器（第40図18、第46図91～102）



第16図 12号住居跡

18は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線及び稜線区画の磨消帯を有するものである。18は口縁部が外反する深鉢形土器で、沈線と稜線区画の磨消帯を有し、地文はR L 単節斜繩文(縦位回転)である。

石器 (第50図15~17)

15は横型石匙、16は搔器、17は削器である。

13号住居跡 (第17図)

調査区北側で検出された。

プランは長軸2.6m、短軸2.4mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ビットは1個のみの検出であるが、住居外側の4個が主柱穴と考えられる。炉は土器埋設部と掘り込み部からなる。土器埋設部は深鉢形土器の胸部を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。掘り込み部は底・側面が火熱を受けている。床は平坦である。

出土遺物

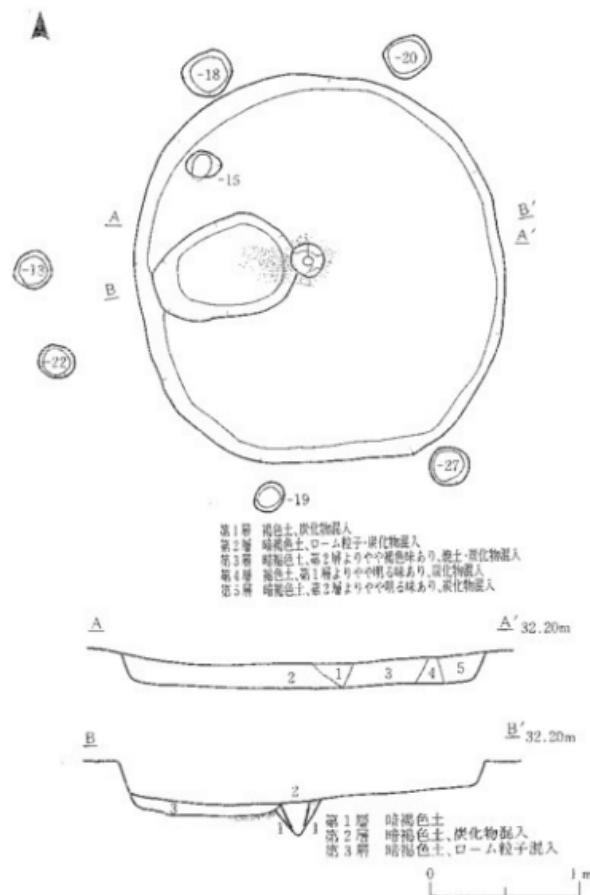
土器 (第40図19)

19は炉埋設土器である。深鉢形土器の下半分で、稜線区画の磨消帯を有する。地文はL R 単節斜繩文(縦位回転)である。

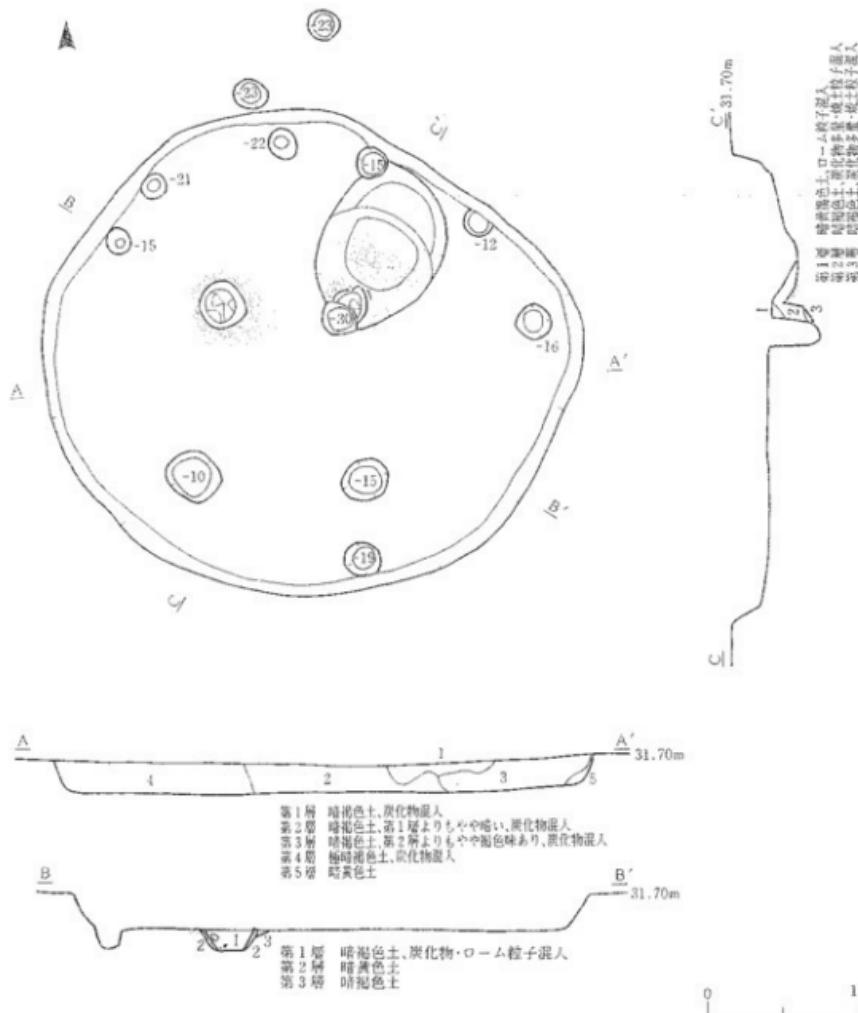
14号住居跡 (第18図)

調査区北側で検出された。

プランは長軸3.4m、短軸3.2mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ビットは9個検出され主柱穴は3個と考えられる。炉は2基検出された。北側の炉は土器埋設部、掘り込み部、一段浅い掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の胸部を埋設し、



第17図 13号住居跡



第18図 14号住居跡

周辺は火熱を受けて赤変し、南側はピットに切られている。掘り込み部は底・側面が火熱を受けている。一段浅い掘り込みは壁に接する。西側の炉は土器埋設炉である。深鉢形土器の下半分を埋設し、周辺が火熱を受けて赤変している。床は平坦で堅い。

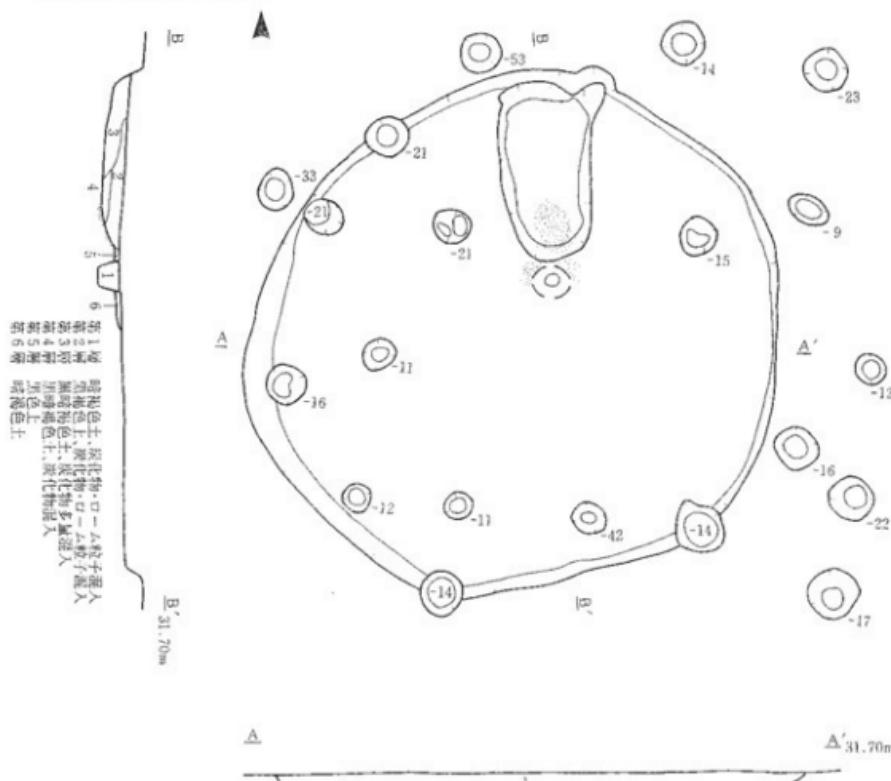
出土遺物

土器（第40図20・21、第46図103～107）

20は西側の炉埋設土器、21は北側の炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線図面の磨消帶を有するものである。20は深鉢形土器の下半分で、地文はR L 単節斜縞文（縦位回転）である。21は深鉢形土器の胴部で、地文はR L 単節斜縞文（縦位回転）である。

15号住居跡（第19図）

調査区北側で検出された。



第1層 黒色土・炭化物・部分的にロームブロック混入

第19図 15号住居跡

プランは長軸3.5m、短軸3.3mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは13cmで、壁は緩やかに立ち上がる。ピットは11個検出され、主柱穴は5個と考えられる。炉は土器埋設部と掘り込み部からなる。土器埋設部は深鉢形土器を埋設し、周辺が火熱を受けて赤変している。掘り込み部は底・側面が火熱を受けている。床は平坦で堅い。

出土遺物

土器（第40図22）

22は炉埋設土器である。深鉢形土器の胴部で、「J」字状の磨消帯を有する。地文はR L 単節斜縄文（縱位回転）である。

16号住居跡（第20図）

調査区西側で検出された。

プランは一辺6mの方形を呈し、70・71号土塙に切られている。確認面からの深さは35cmで、壁は垂直に立ち上がる。ピットは11個検出され、主柱穴は深い掘り方の5個と考えられ、北側の壁に確認面から掘られているピット2個も認められた。炉は石開土器埋設部、敷石石組部、掘り込みからなる。石開土器埋設部は深鉢形土器を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変し、カチンカチンである。敷石石組部は底・側面に石を組み、石の組まれている部分が火熱を受けている。掘り込みは一段浅く壁に接する。床は平坦で堅く、北西隅には練が7個並べられていた。

出土遺物

土器（第40図23、第47図108～111）

23は炉埋設土器、他は覆土上である。沈線区画の磨消帯を有するものである。23は口縁部が直立する深鉢形土器で、「J」字状の磨消帯が胴部中程の波状磨消帯と連絡する。地文はR L 単節斜縄文（縱位回転）である。

石器（第52図43）

43は磨石である。

17号住居跡（第21図）

調査区西側で検出された。

プランは長軸3.2m、短軸3.1mのほぼ円形を呈し、67号土塙と重複している。確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは4個検出され、4個が主柱穴である。炉は土器埋設部と掘り込み部からなる。土器埋設部は鉢形土器を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。掘り込み部は底・側面が火熱を受けている。床は若干凹凸がみられる。住居の南東側には石棒が斜めに掘えられていた。

出土遺物

土器（第41図24）

24は炉埋設土器である。口縁部が外反する深鉢形土器で、「J」字状の磨消帯を有し、地文はR

し単節斜縄文（縦位回転）である。

石器（第52図44）

44は石棒である。

18号住居跡（第22図）

調査区西側で検出された。

プランは長軸5.9m、短軸5.3mの梢円形を呈し、68・69号土塙と重複する。確認面からの深さは40cmで、壁は西側が緩く他はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは15個検出され、主柱穴は深い掘り方の5個と考えられる。炉は石器埋設部、掘り込み部、一段浅い掘り込みからなる。石器埋設部は深鉢形土器を埋設し、周辺は火熱を受けている。掘り込み部は底・側面が火熱を受け、底面はカチンカチンである。一段浅い掘り込みは壁に接し、向側にピットが認められる。床は平坦で堅い。

出土遺物

土器（第41図25、第47図112～116）

25は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するもの、変形工字文を施すものである。25は口縁部が外反する深鉢形土器で、「J」字状の磨消帯は脚部中程の波状磨消帯と連絡する。地文はR L単節斜縄文（縦位回転）である。

石器（第50図18～27、第53図45～49）

18は有茎の石鎧、19は錐部を欠く石錐、20・21は搔器、22～26は削器、27は磨製石斧、45～48は磨石、49は石皿状石器である。

19号住居跡（第23図）

調査区北側で検出された。

プランは長軸3.2m、短軸2.9mの梢円形を呈し、確認面からの深さは35cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは住居外側に3個検出されたのみである。炉は土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の下半分を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。石組部は埋設土器との間に礫を捌え、底・側面が火熱を受けている。掘り込みは一段浅く壁に接する。床は平坦で全面的に堅い。

出土遺物

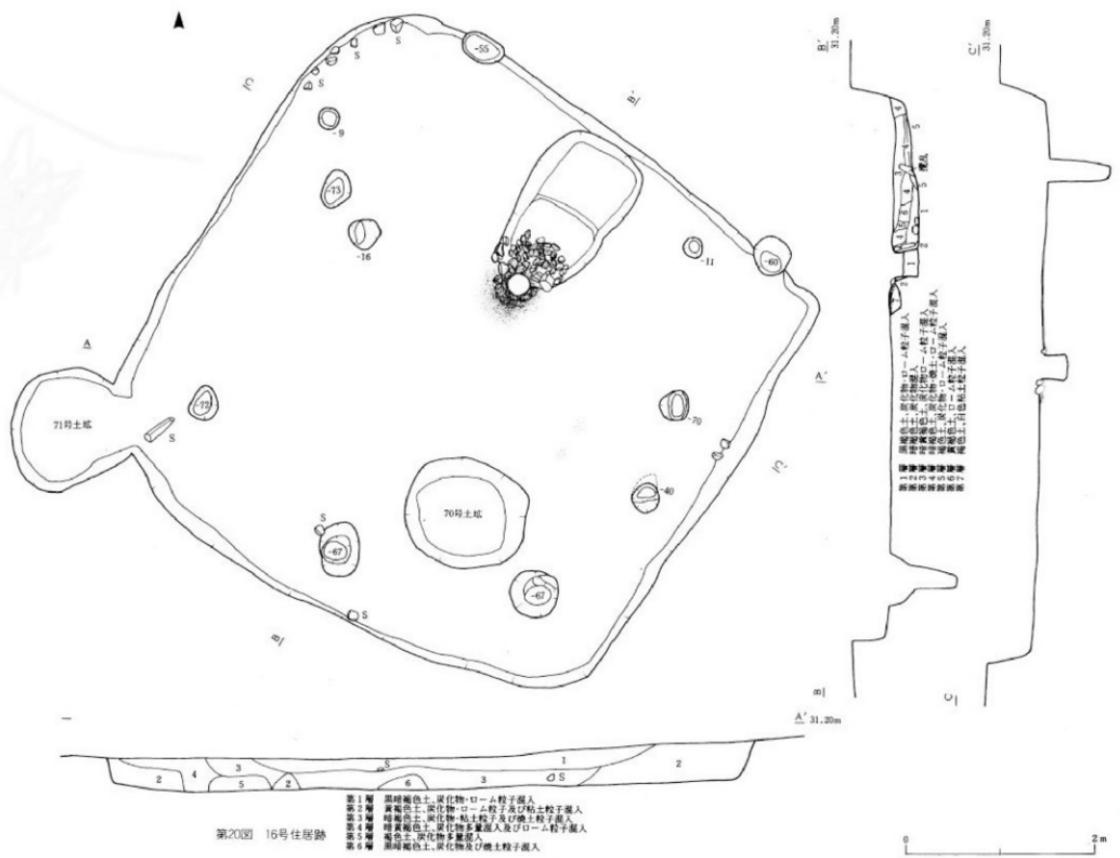
土器（第41図26、第47図117～120）

26は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するものである。26は深鉢形土器の下半分で、地文はR L単節斜縄文（縦位回転）である。

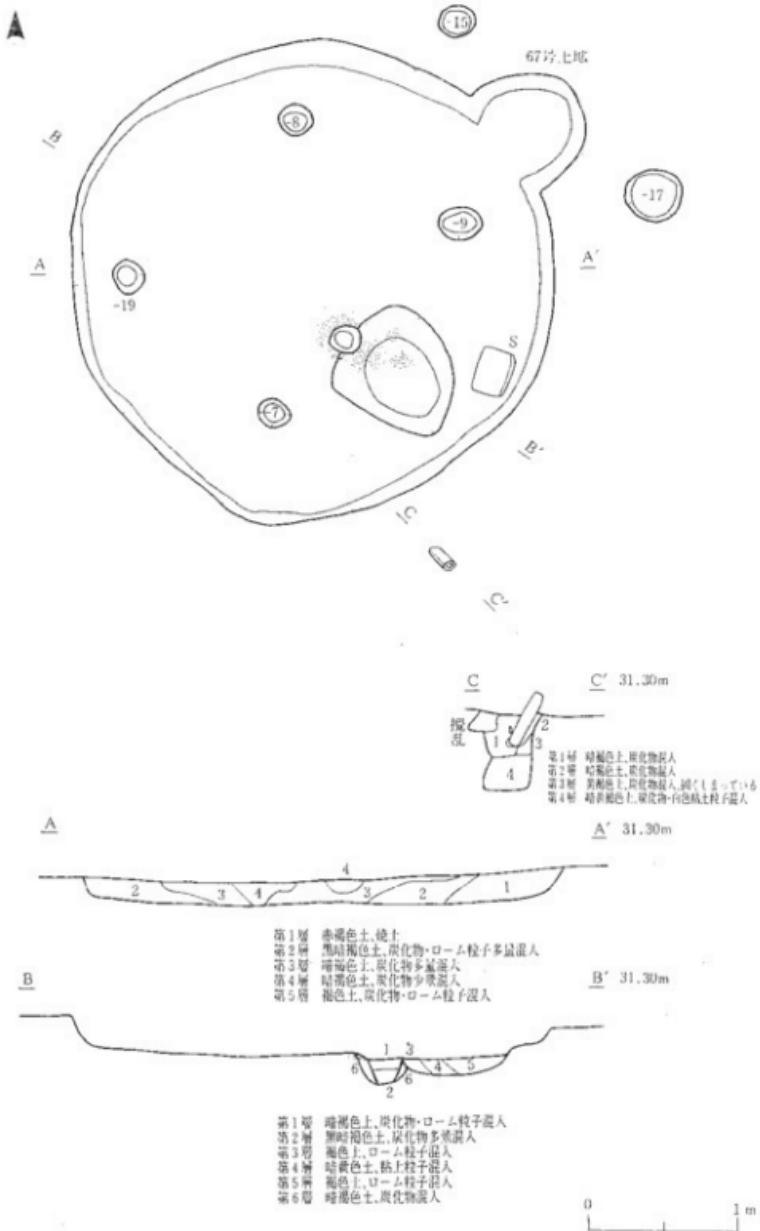
20号住居跡（第24図）

調査区西側で検出される。

プランは径2.7mの円形を呈し、65号土塙に切られている。確認面からの深さは20cmで、壁は垂直



第20図 16号住居跡



に立ち上がる。ビットは5個検出されたが、主柱穴は不明である。炉は土器埋設部と石組部からなる。土器埋設部は深鉢形土器の下部を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。石組部は埋設土器との間に礫を据え、底面が火熱を受けている。床は平坦で中央部が特に堅い。

出土遺物

土器（第41図27、第47図121～124）

27は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帶を有するものである。27は深鉢形土器の下部で、地文はR L R複節斜繩文（縦位回転）である。

21号住居跡（第25図）

調査区西側で検出された。

プランは長軸4.1m、短軸3.7mの梢円形を呈し、271号上塗に切られている。確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ビットは多数検出されたが、主柱穴は比較的深い壁際の4個と考えられる。炉は土器埋設部と石組部からなる。土器埋設部は深鉢形土器を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。石組部は側面に3個の石が組まれ、底面と石が火熱を受けている事から他の側面の石は抜き取られたと考えられる。床は平坦で中央部が堅い。

出土遺物

土器（第41図28、第47図125～129）

28は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帶を有するものである。28は口縁部がやや外反する深鉢形土器で、地文はR L 単節斜繩文である。

石器（第50図28）

28は縦型石匙である。

22号住居跡（第26図）

調査区中央部で検出された。

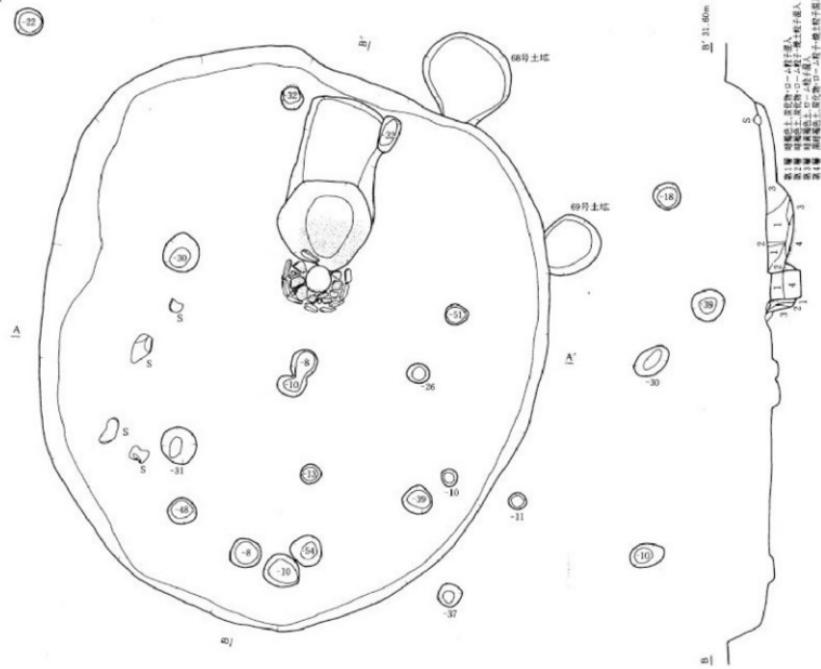
プランは長軸4.5m、短軸3.7mの梢円形を呈し、39・40号土器棺墓により切られている。確認面からの深さは10cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ビットは17個検出され、主柱穴は壁際の5個と考えられる。炉は土器埋設部で、深鉢形土器（復元不可能）を半截して横に埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。床は平坦である。

23号住居跡（第27図）

調査区中央部で検出された。

プランは長軸4.5m、短軸4.2mの梢円形を呈し、確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ビットは17個検出され、主柱穴は比較的深い壁際の5個と考えられる。炉は土器埋設部で、深鉢形土器の下部を斜めに埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。床は中央部が若干くぼむ。

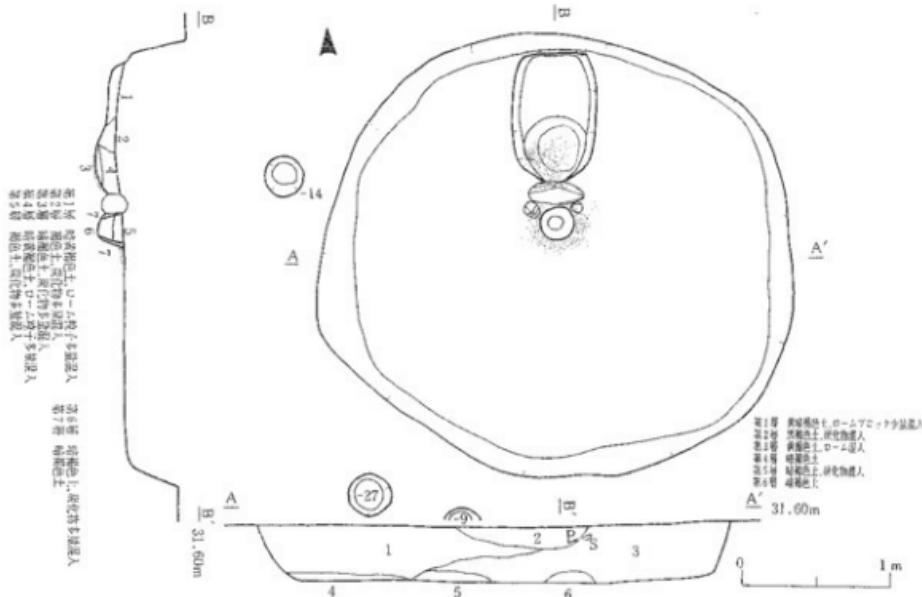
出土遺物

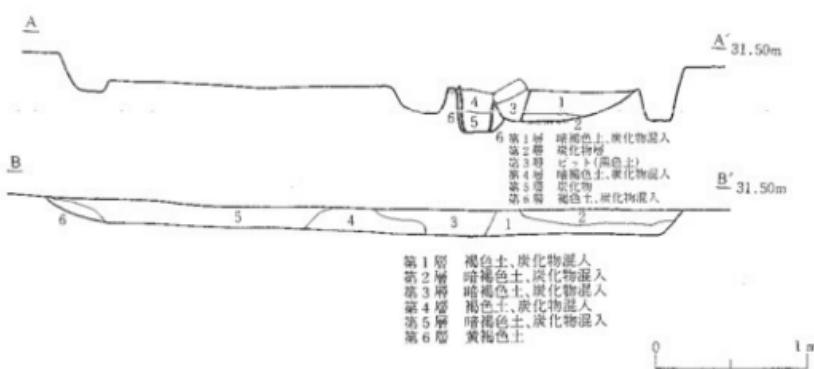
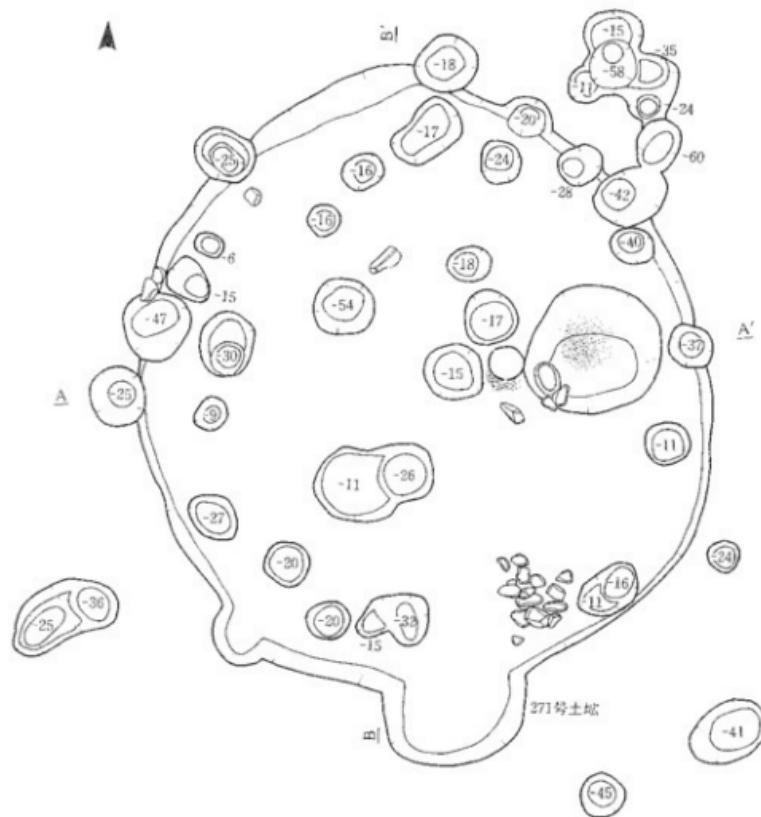


第22図 18号住居跡

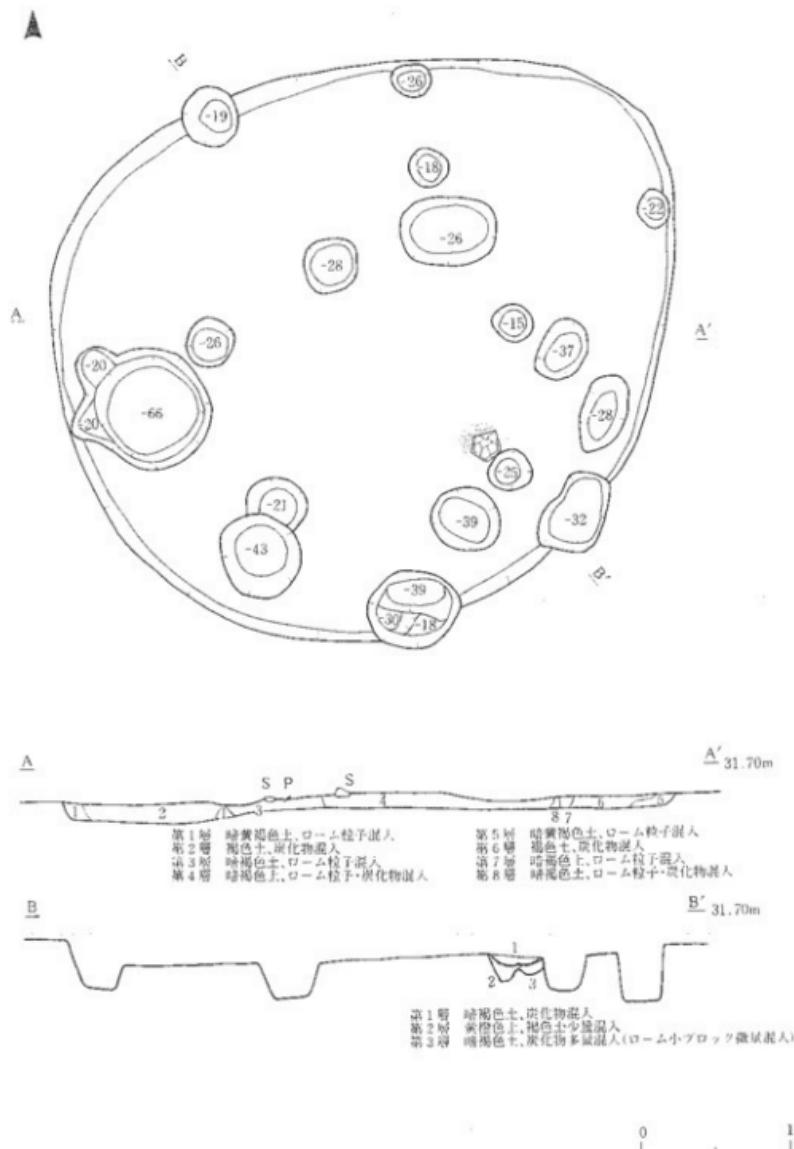
説1層 黑棕褐色土、ローム粒子少見层人
説2層 灰褐色土、ローム粒子多見层人
説3層 烧土、炭化物、ローム粒少見层人
説4層 棕褐色土、炭化物、ローム粒多見层人

0 2m

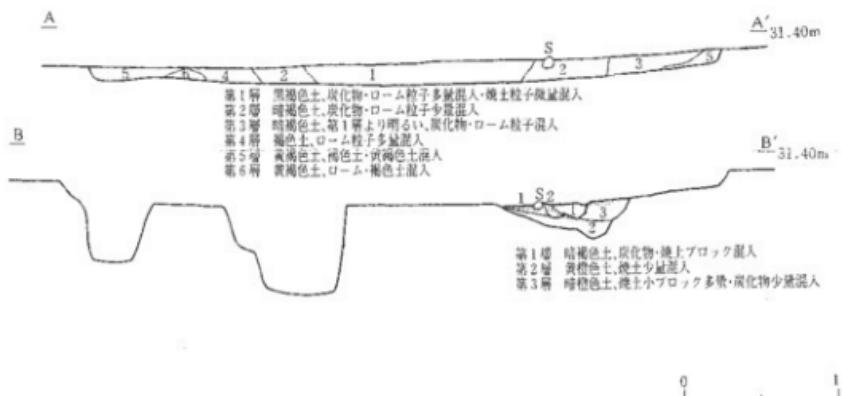
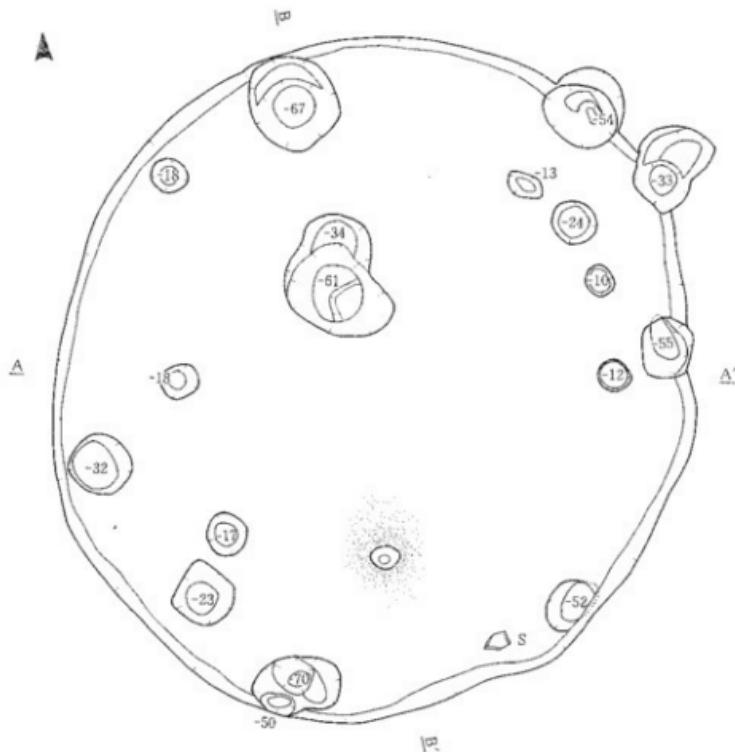




第25図 21号住居跡



第26図 22号住居跡



第27図 23号住居跡

土器 (第41図29、第47図130・131)

29は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帶を有するものである。29は深鉢形土器の下部で、地文は燃糸文である。

石器 (第50図29・30)

29・30は有茎の石鏃である。

24号住居跡 (第28図)

調査区南側で検出された。

プランは長軸2.2m、短軸2.1mのはば円形を呈し、弥生時代の柵木によって切られている。確認画からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは5個検出されたが、主柱穴は不明である。炉は石圓土器埋設炉で、深鉢形土器（復元不可能）を斜めに埋設し、西側に1個の石が認められる。周辺は火熱を受けて赤変している。床は若干南側に傾斜する。

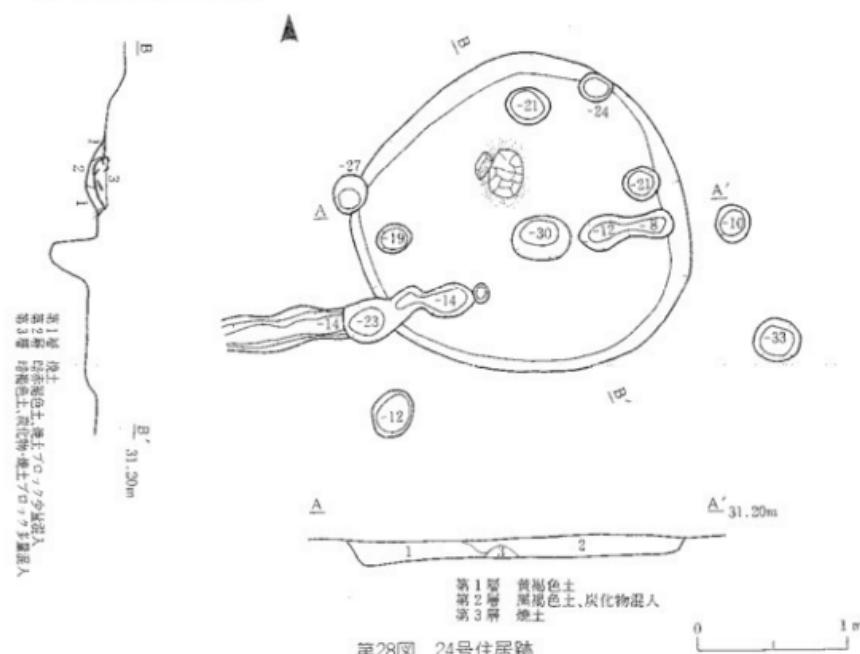
出土遺物

土器 (第47図132・133)

いずれも覆土出土で、沈線区画の磨消帶を有するものである。

25号住居跡 (第29図)

調査区南側で検出された。



第28図 24号住居跡

プランは長軸3.7m、短軸3mの橢円形を呈し、確認面からの深さは10cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは多数検出されたが、大きいものは別の時期のものである。主柱穴は壁際の5個と考えられる。炉は土器埋設炉で、深鉢形土器を斜めに埋設し、中に石が2個入り、周辺は火熱を受けて赤変している。床は平坦である。

出土遺物

土器（第42図30）

30は炉埋設土器である。深鉢形土器の下半分で、地文は撲糸文である。

石器（第50図31・32）

31は石錐、32はヘラ状石器である。

26号住居跡（第30図）

調査区南側で検出された。

プランは一辺約3.5mの方形を呈し、幅15cm、深さ6～10cmの周溝が認められ、櫛木及び264号土塙によって切られている。確認面からの深さは25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは9個検出され、主柱穴は4隅の4個と考えられる。炉は土器埋設部、敷石石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は埋設土器が抜き取られ、周辺が火熱を受けて赤変している。敷石石組部は底・側面に石を組み火熱を受けているが、抜き取られている石もある。掘り込みは一段浅く周溝に接する。床は平坦で堅い。

出土遺物

土器（第47図134）

134は覆土出士で、沈線区画の磨消帯を有するものである。

石器（第51図33・34）

33は縦型石匙、34は横型石匙である。

27号住居跡（第31図）

調査区南側で検出された。

プランは長軸2.1m、短軸1.8mの不整形を呈し、櫛木によって切られている。確認面からの深さは13cmで、壁は緩やかに立ち上がる。ピットは6個検出されたが、主柱穴は不明である。炉は土器埋設炉で、深鉢形土器の下半分を斜めに埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。床は若干凹凸がみられる。

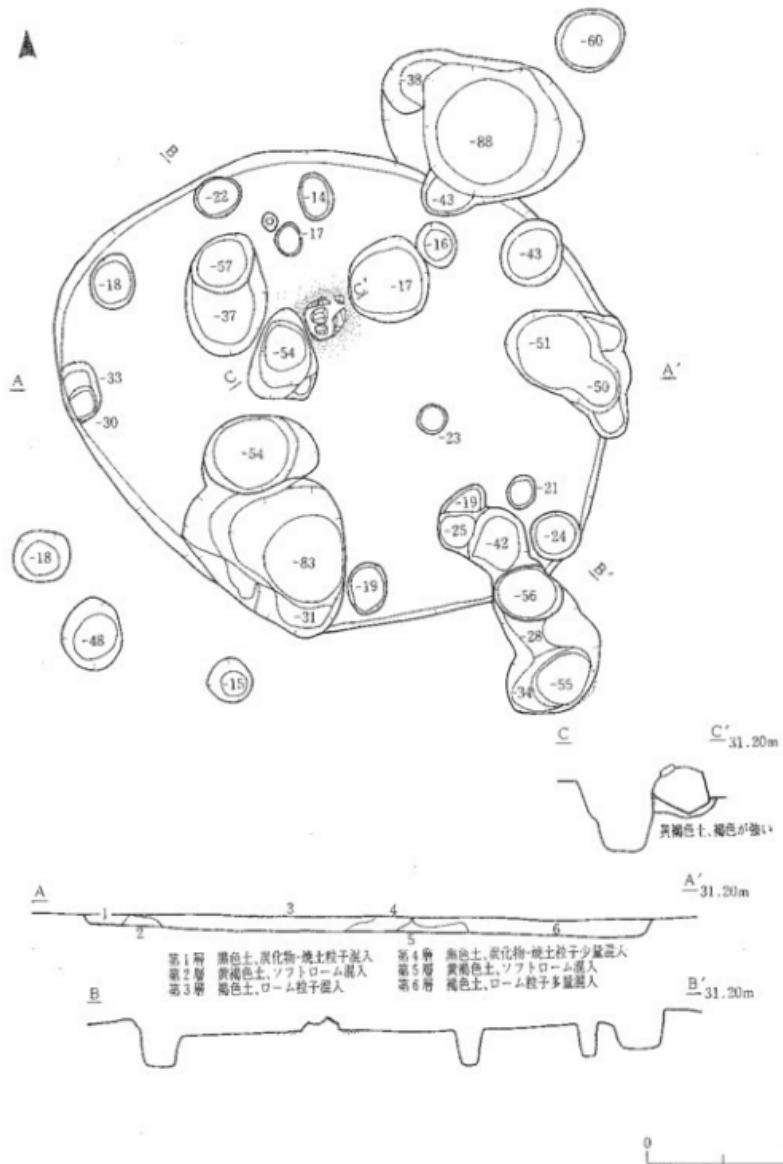
出土遺物

土器（第42図31）

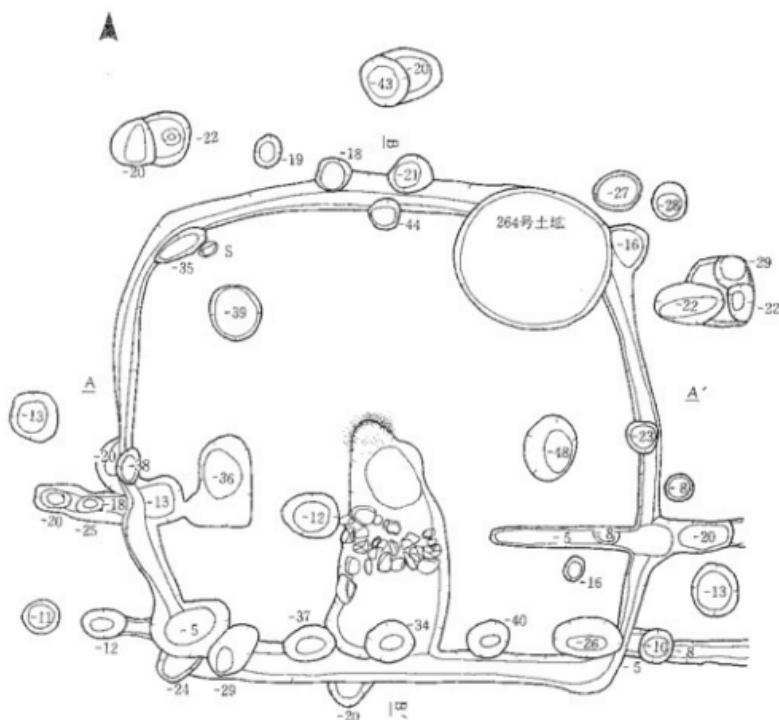
31は炉埋設土器である。深鉢形土器の下半分で、地文はR L 単節斜繩文（縦位回転）である。

28号住居跡（第32図）

調査区中央部で検出された。

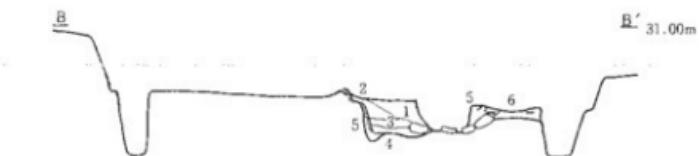


第29図 25号住居跡



A' 31.00m

第1層 黒色土、ローム粒子混入、粘着力あり
第2層 褐色土、ローム粒子混入、粘着力あり

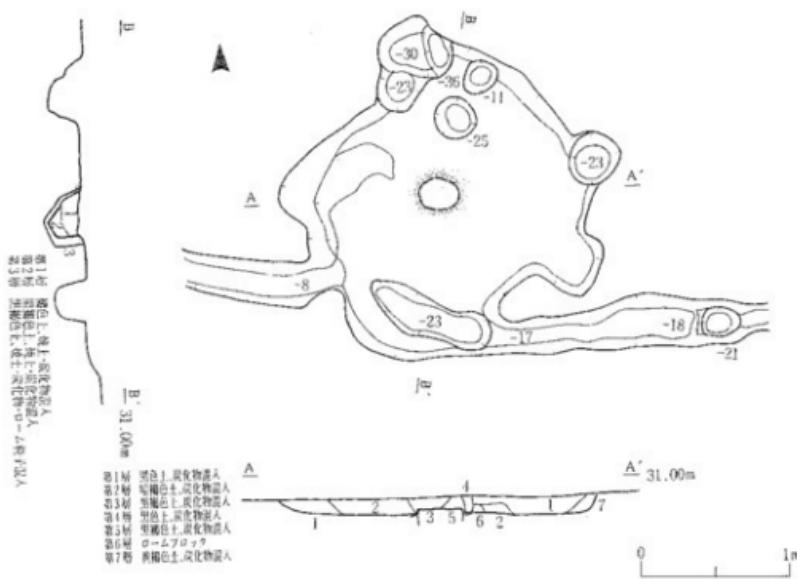


B' 31.00m

第1層 黒色土、焼土・炭化物混入
第2層 焼土
第3層 黑褐色土、焼土・炭化物混入
第4層 炭化物層
第5層 哈褐色土、炭化物混入
第6層 褐色土、炭化物混入
第7層 黑色土、焼土・炭化物混入



第30図 26号住居跡



第31図 27号住居跡

プランは長軸3.2m、短軸2.8mの橢円形を呈し、確認面からの深さは10cmで、壁は緩やかに立ち上がる。ピットは8個検出されたが、主柱穴は不明である。炉は土器埋設部で、深鉢形土器（復元不可能）を斜めに埋設し、周辺が火熱を受けて赤変している。床は平坦で堅い。

出土遺物

石器（第51図35、第53図50・51）

35は石棒、50はくぼみ石、51は磨石である。

29号住居跡（第33図）

調査区北東部で検出された。

プランは長軸3.4m、短軸3mの橢円形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは6個検出され、主柱穴は4個である。炉は石四土器埋設部と敷石石組部からなる。石四土器埋設部は深鉢形土器を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。敷石石組部は底・側面に握りこぶし大の石が、埋設土器の間と壁側に中礎が組まれ、火熱を受けている。床は平坦で堅い。

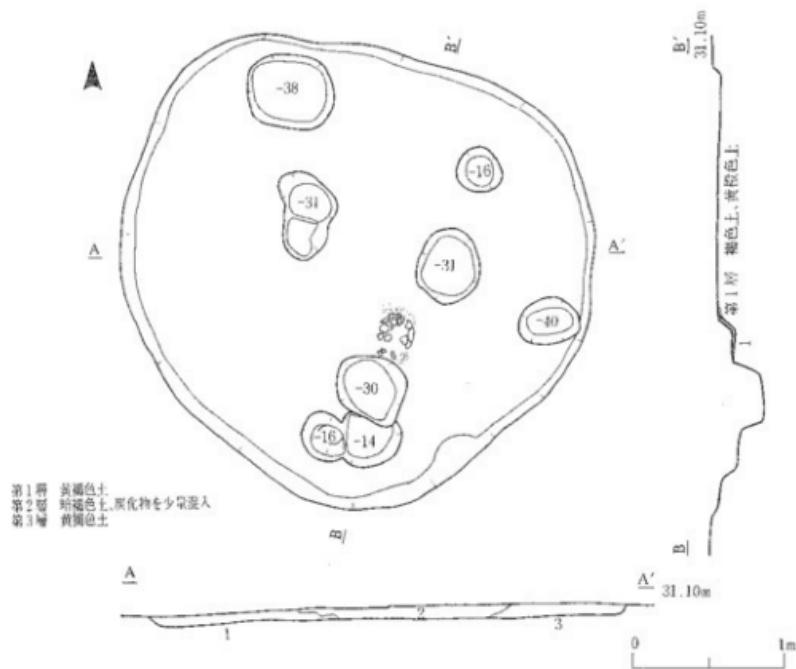
出土遺物

土器（第42図32・33、第48図135）

32は炉埋設土器、他は覆上出土である。沈線区画の磨消帯を有するものである。32は口縁部が内傾する深鉢形土器で、「ノ」字状の磨消帯を有し、地文はL R 単節斜繩文（綱位回転）である。33は口縁部が内傾する深鉢形土器で、地文はL R 単節斜繩文（綱位回転）である。

石器（第51図36・37）

36・37は磨製石斧である。



第32図 28号住居跡

30号住居跡（第34図）

調査区北西部で検出された。

プランは長軸5.5m、短軸5.1mの椭円形を呈し、306号土塹と重複する。確認面からの深さは35cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは11個検出され、主柱穴は4個である。炉は2基検出された。東側の炉は、土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。土器埋設部は埋設土器が抜き取られ、周辺は火熱を受けて赤変している。石組部は掘り込み側に5個の石が組まれ、底・側面が火熱を受けている。掘り込みは一段浅くなっている。南側の炉は石臓土器埋設部、敷石石組部、掘り込みからなる。石臓土器埋設部は深鉢形土器と埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。敷石石組部は底・側面に石を組み、火熱を受け、掘り込み側が一段浅くなっており、石は敷かれていません。掘り

込みは一段段く壁に接する。東側のがは施渠後、貼床されている。床は平坦で堅い。

出土遺物

土器（第43図34・35、第48図136～142）

34は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈縁区画の磨消帯を有するもの、数条の沈縁で文様を作り出すものである。34は口縁部が直立する深鉢形上器、地文はL R 単節斜縫文（縦位回転）である。35は変形土器である。撚糸文を施し、胴上部に粘土紐を貼り付け、後に半截竹管状工具内面による直線・曲線・弧線で文様を作り出している。胴下部は無文である。

31号住居跡（第35図）

調査区北東部で検出された。

プランは径4.5mの隅丸方形を呈し、確認面からの深さは30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる、ビットは11個検出され、主柱穴は5個である。がは土器埋設部と掘り込み部からなる。土器埋設部は深鉢形土器を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。掘り込み部は底・側面が火熱を受けている。床は平坦で堅い。

出土遺物

土器（第43図36、第48図143～145）

36は炉埋設土器、144はが掘り込み部、他は覆土出土である。沈縁区画の磨消帯を有するもの、沈縁で文様を作り出すものである。36は口縁部が外反する深鉢形土器で「J」字状の磨消帯が胴部中程の波状磨消帯と連絡する。地文はR L 単節斜縫文（縦位回転）である。

土製品（第160図74）

74は再利用土製品で、土器片を利用したものである。

32号住居跡（第36図）

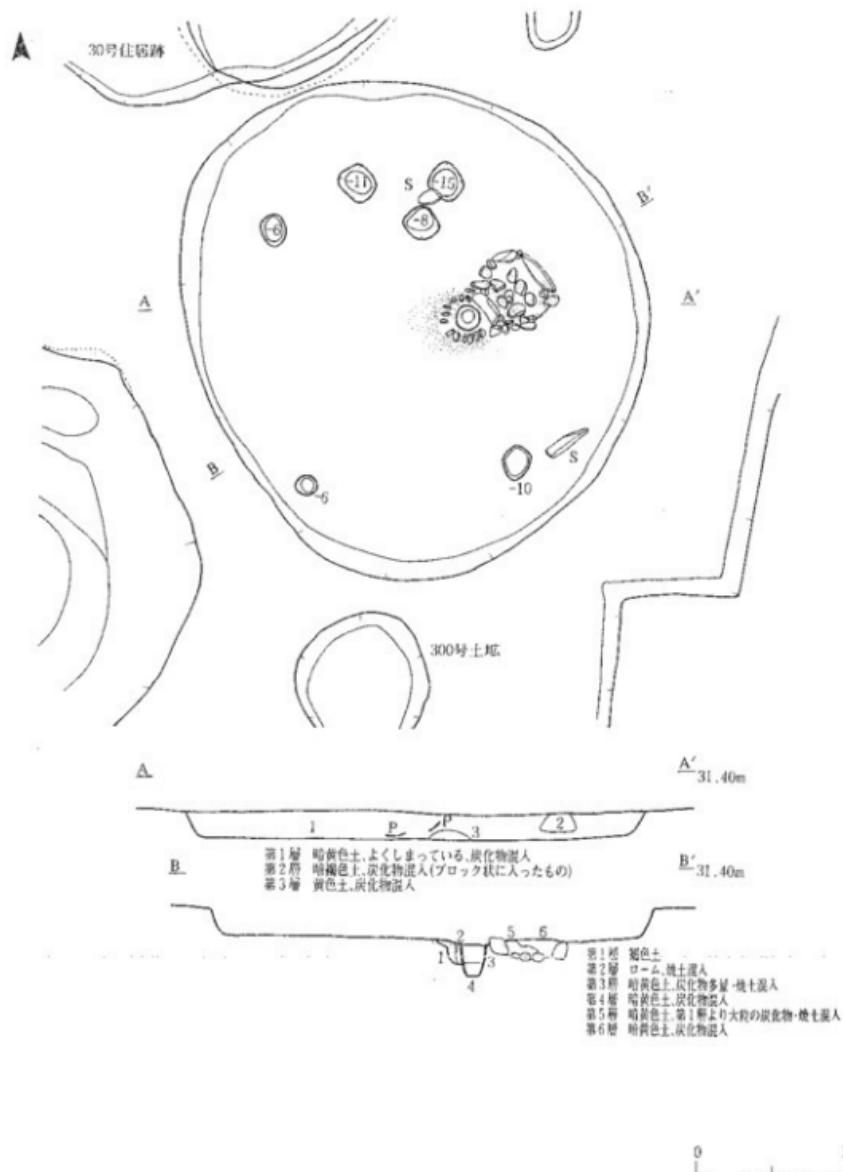
調査区北東部で検出された。

プランは長軸4.8m、推定短軸4.4mの梢円形を呈すると考えられ、北側は削られている。確認面からの深さは40cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ビットは9個検出されたが、主柱穴は不明である。がは土器埋設部と掘り込み部からなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を埋設し、周辺が火熱を受けて赤変している。掘り込み部は、底・側面が火熱を受けている。床は平坦で堅い。

出土遺物

土器（第43図37、第48図146～148）

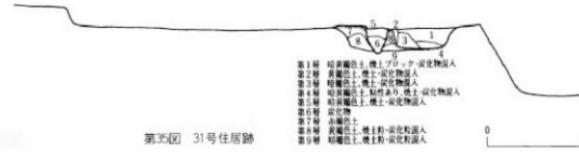
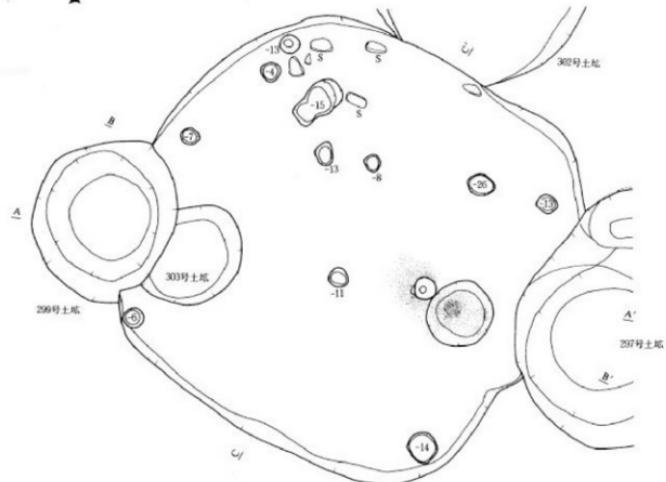
37はが埋設土器、他は覆土出土である。沈縁区画の磨消帯を有するものである。37は深鉢形上器の胴部で、地文はR L 単節斜縫文（縦位回転）である。



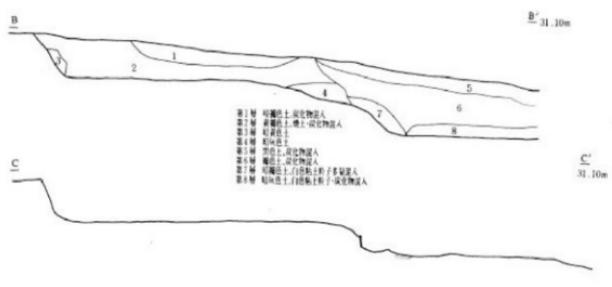
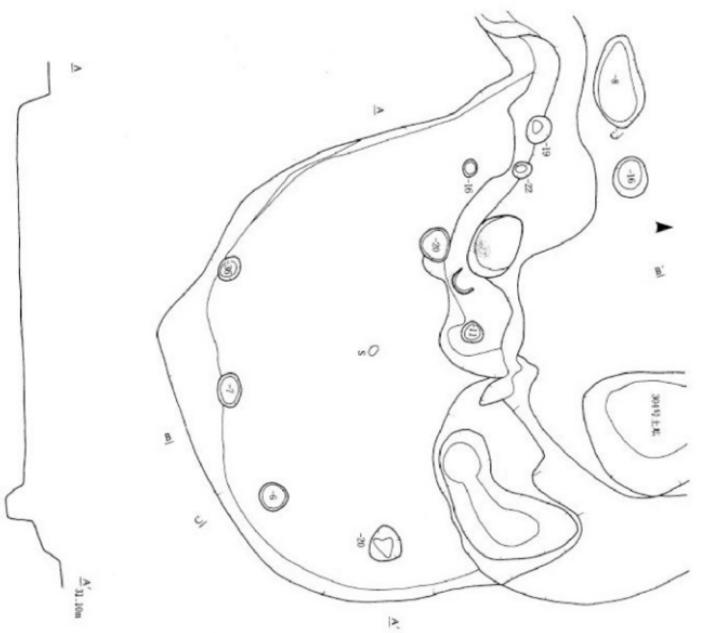
第33図 29号住居跡



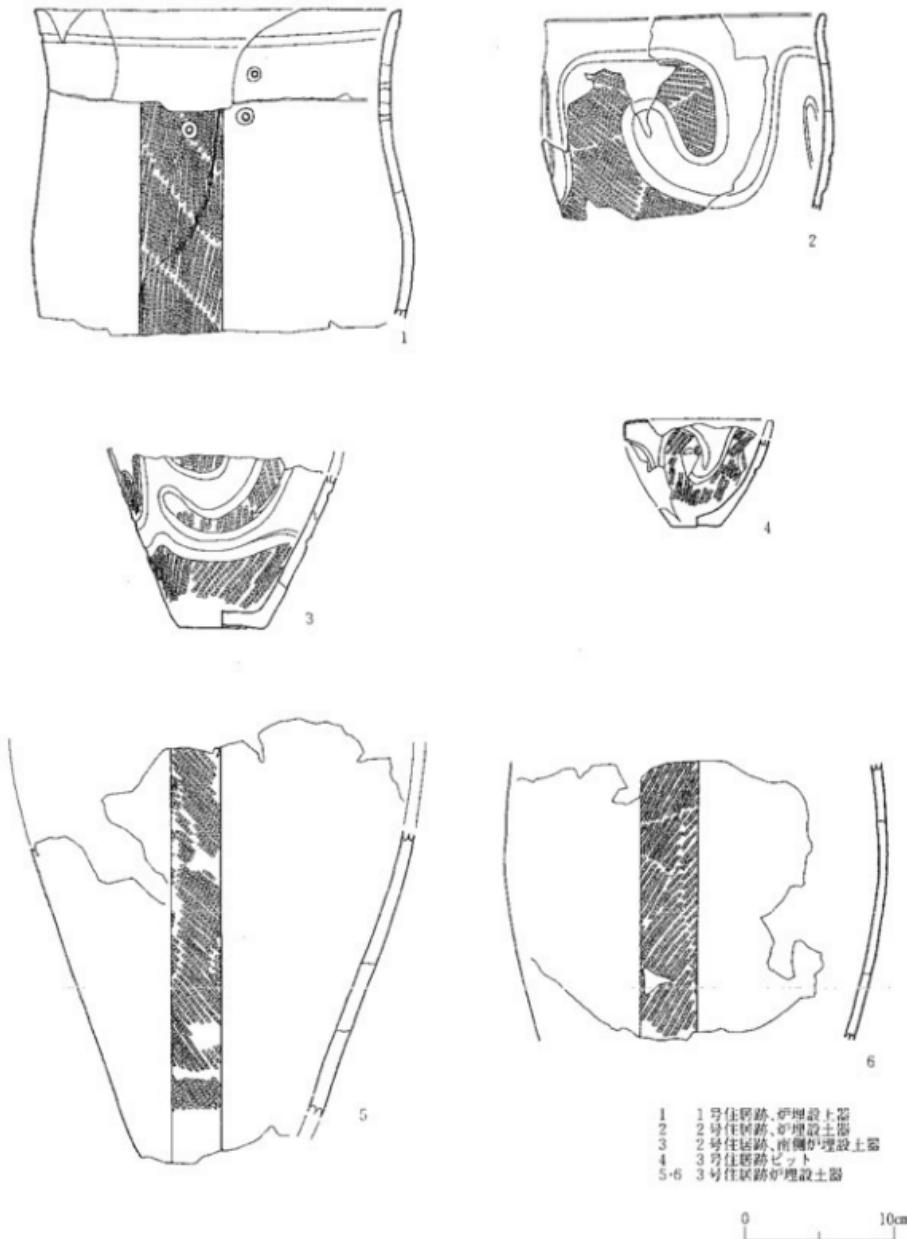
第34図 30号住居跡



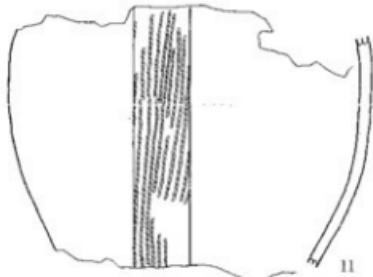
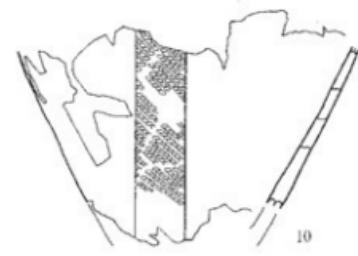
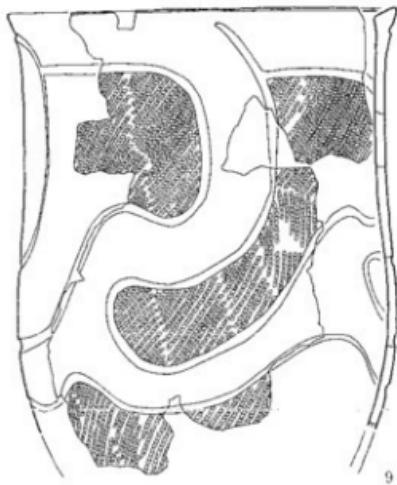
第五图 31号住居跡



第36回 32号住居跡



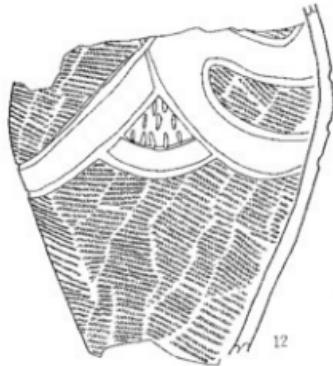
第37図 遺構内出土土器



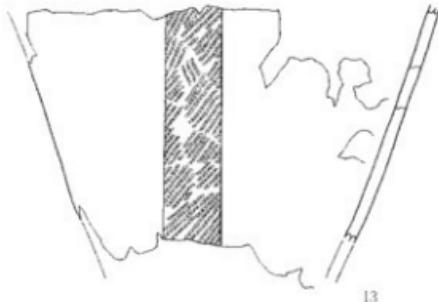
7 4号住居跡修理設上器
8 4号住居跡床面
9 5号住居跡修理設土器
10 2号住居跡修理設上器
11 9号住居跡修理設土器

第38図 遺構内出土土器





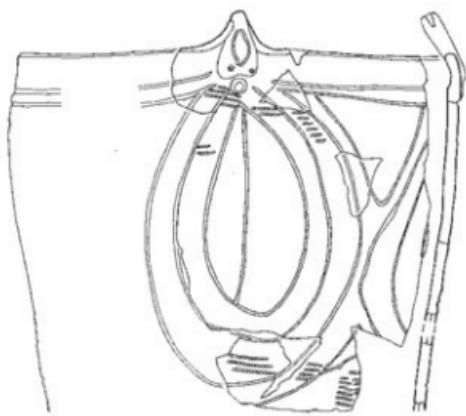
12



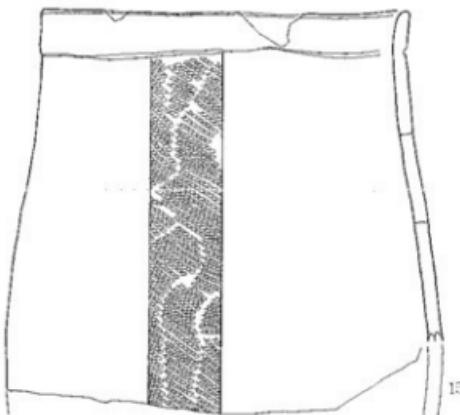
13



14



15



16

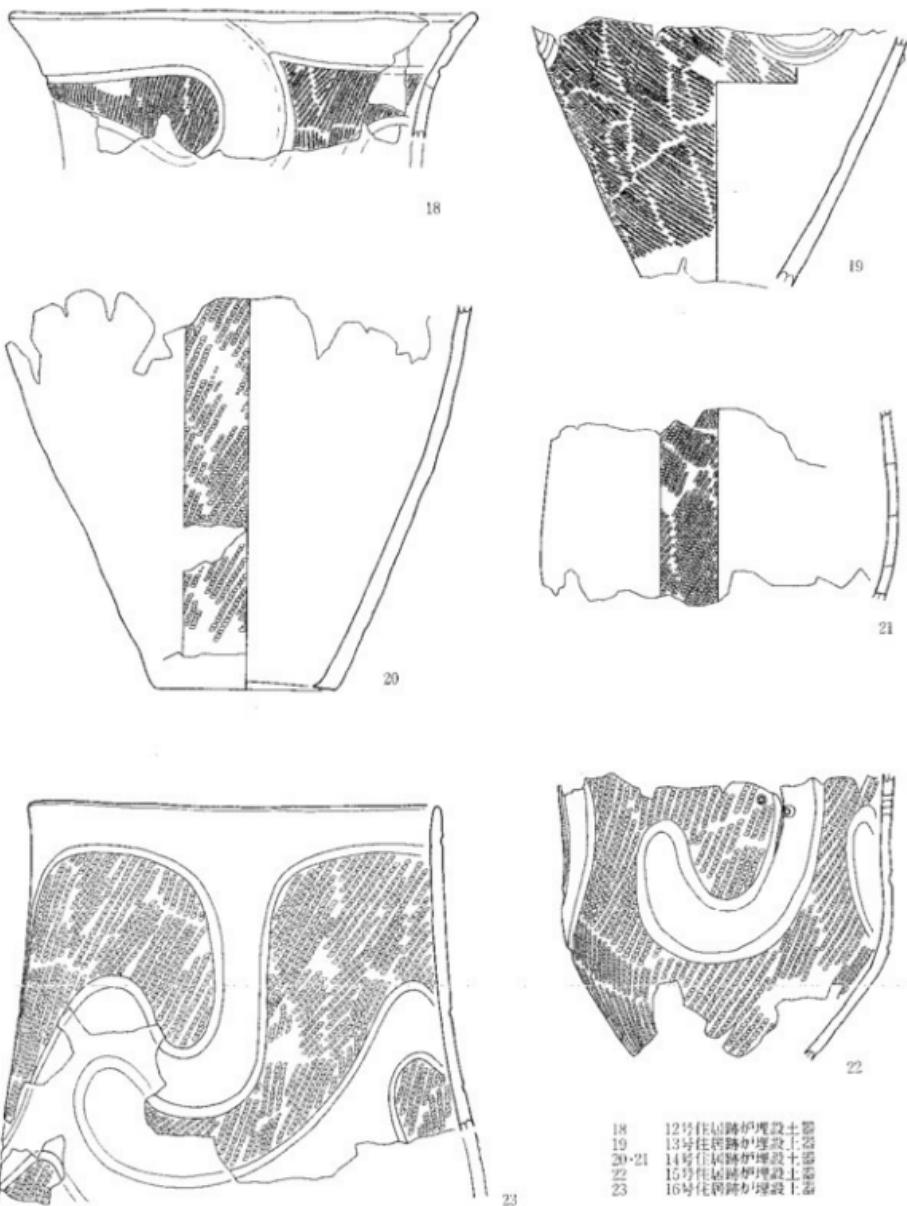


17

- 12 9号住跡跡埋設土器
13 10号住跡跡埋設土器
14 10号住跡跡蓋上
15 11号住跡跡、切妻設土器
16 11号住跡跡ビット
17 11号住跡跡蓋上

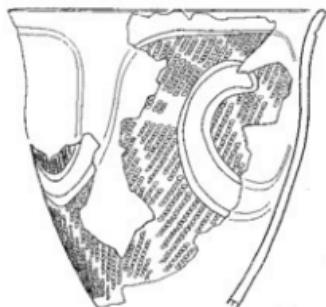


第39図 遺構内出土土器



第40図 遺構内出土土器

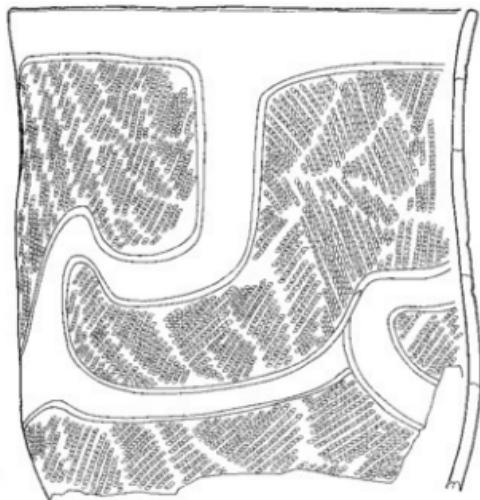
- | | |
|-------|------------|
| 18 | 12号住居跡埋設土器 |
| 19 | 13号住居跡埋設土器 |
| 20・21 | 14号住居跡埋設土器 |
| 22 | 15号住居跡埋設土器 |
| 23 | 16号住居跡埋設土器 |



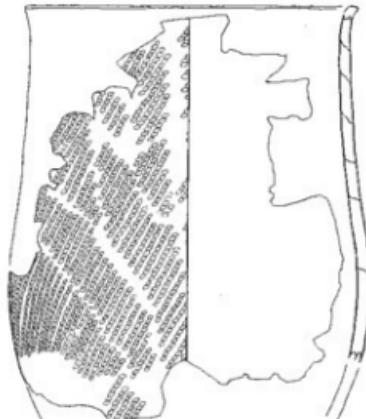
24



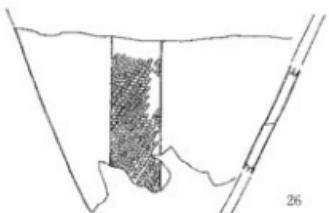
27



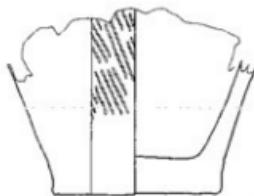
25



28



26

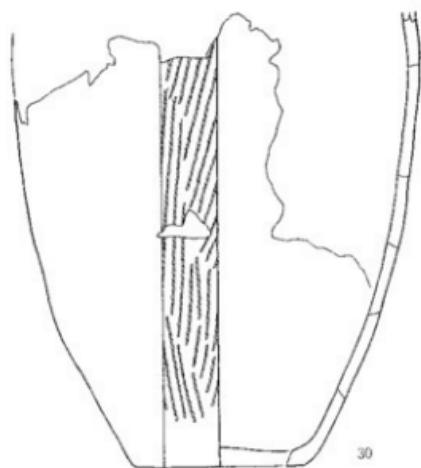


29

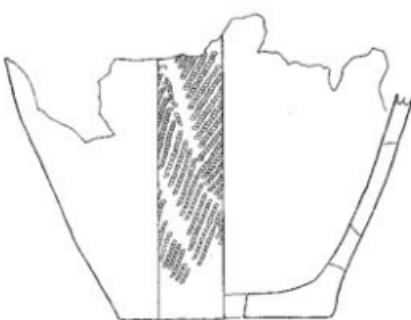
- 24 17号住居跡炉壠設土器
25 18号住居跡炉壠設土器
26 19号住居跡炉壠設土器
27 20号住居跡炉壠設土器
28 21号住居跡炉壠設土器
29 23号住居跡炉壠設土器

第41図 遺構内出土土器

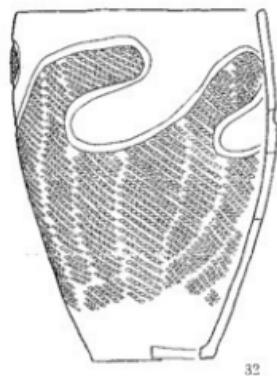




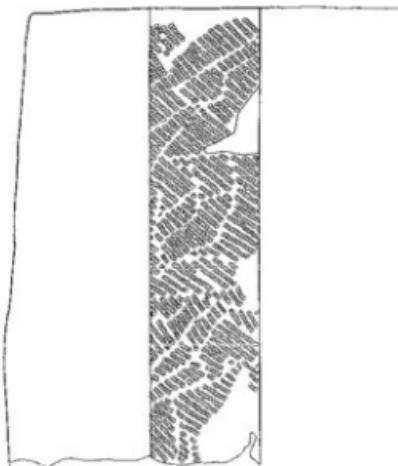
30



31



32

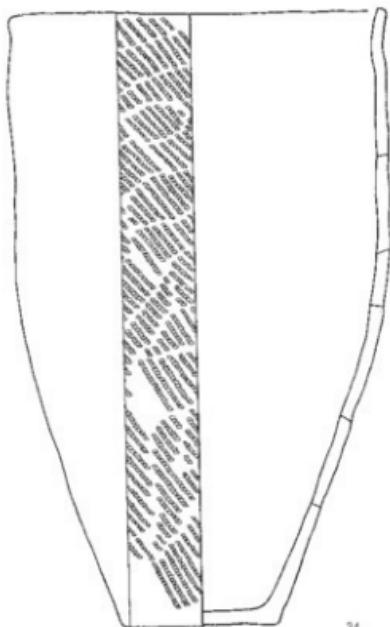


33

- 30 25号住居跡埋設土器
31 27号住居跡埋設土器
32 29号住居跡埋設土器
33 29号住居跡覆土

第42図 遺構内出土土器





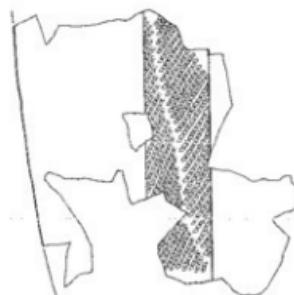
34



35



36

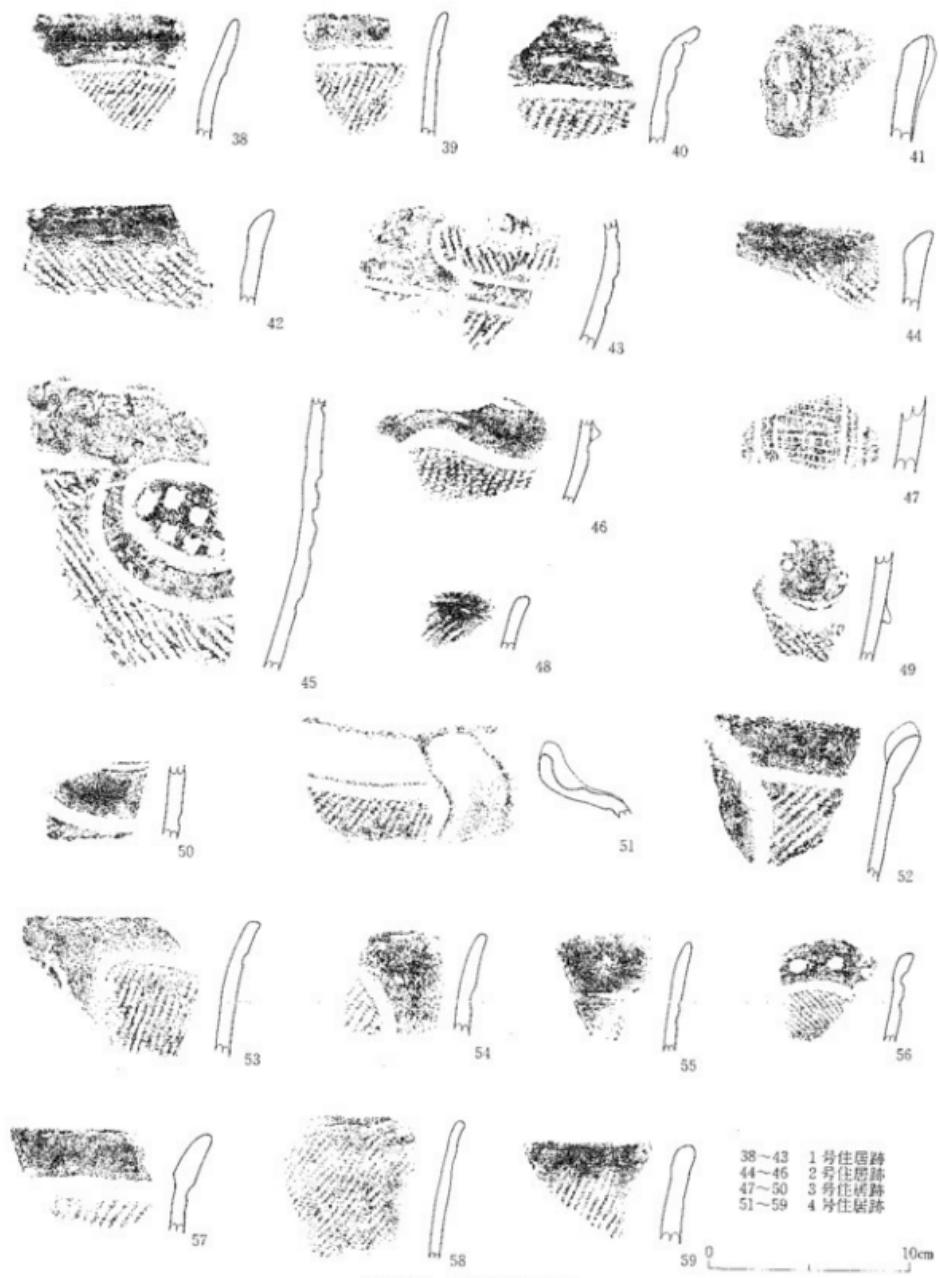


37

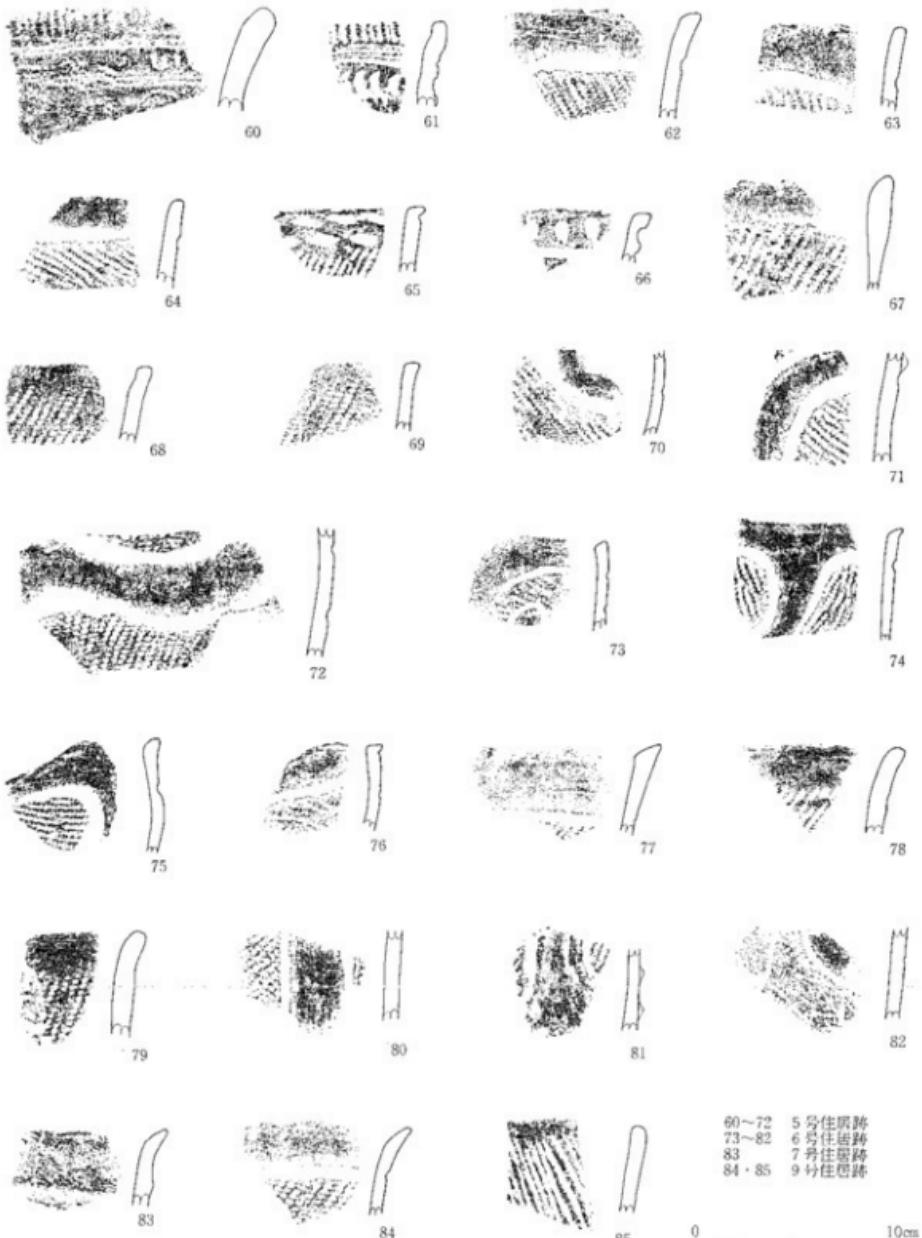
- 34 30号住居跡刨埋設土器
35 30号住居跡覆土
36 31号住居跡修理設土器
37 32号住居跡修理設土器

第43図 遺構内出土土器



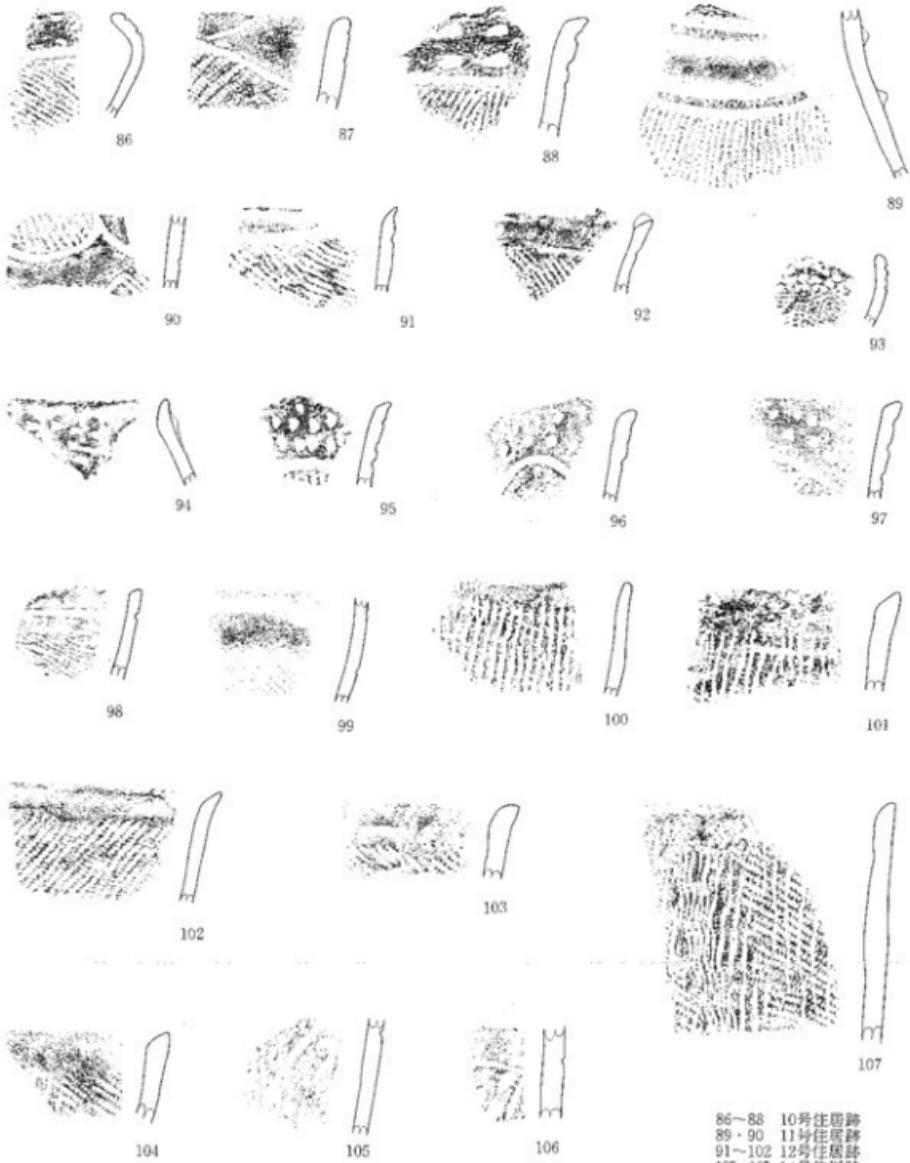


第44図 遺構内出土土器

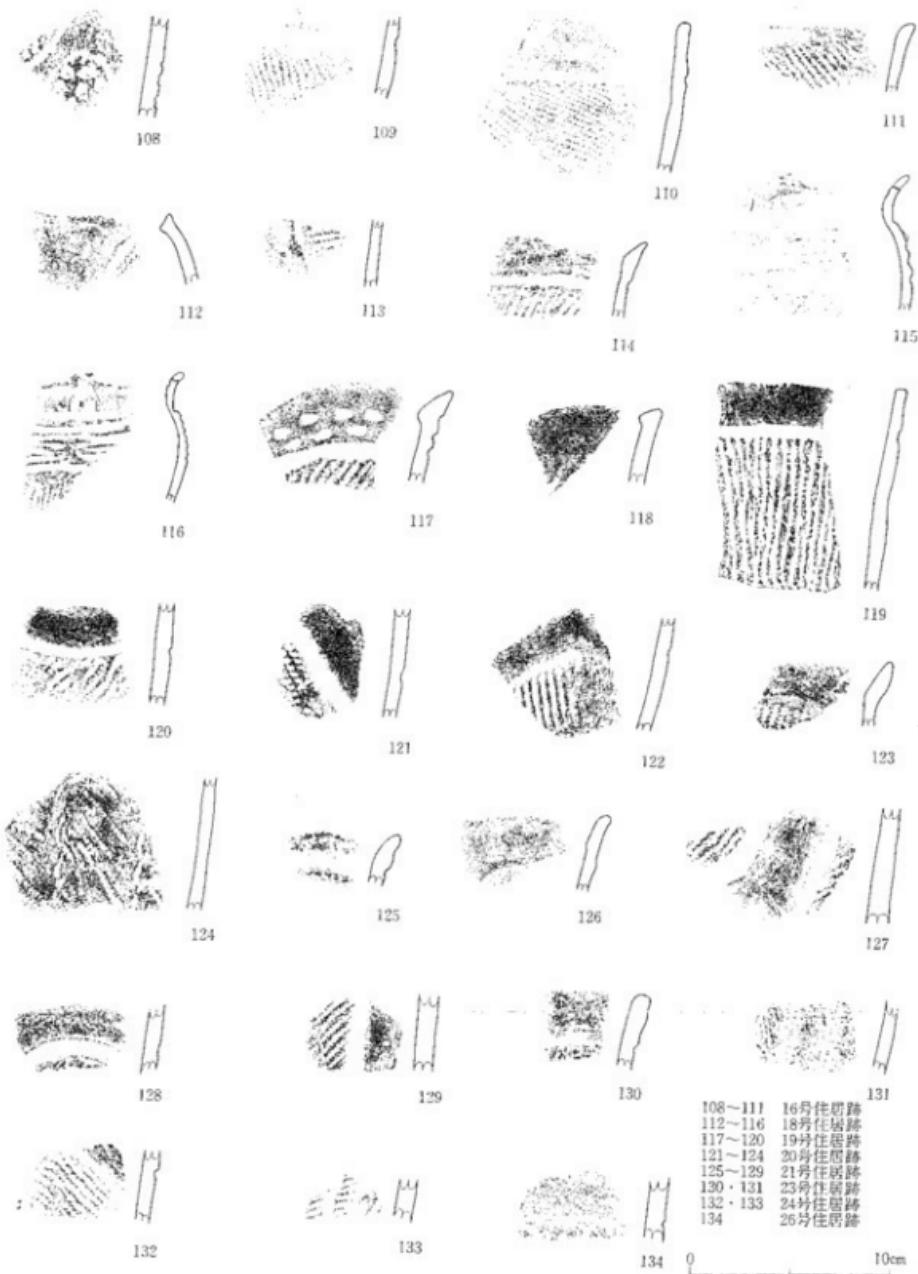


60~72 5 両住居跡
73~82 6 両住居跡
83 7 丹住居跡
84~85 9 分住居跡

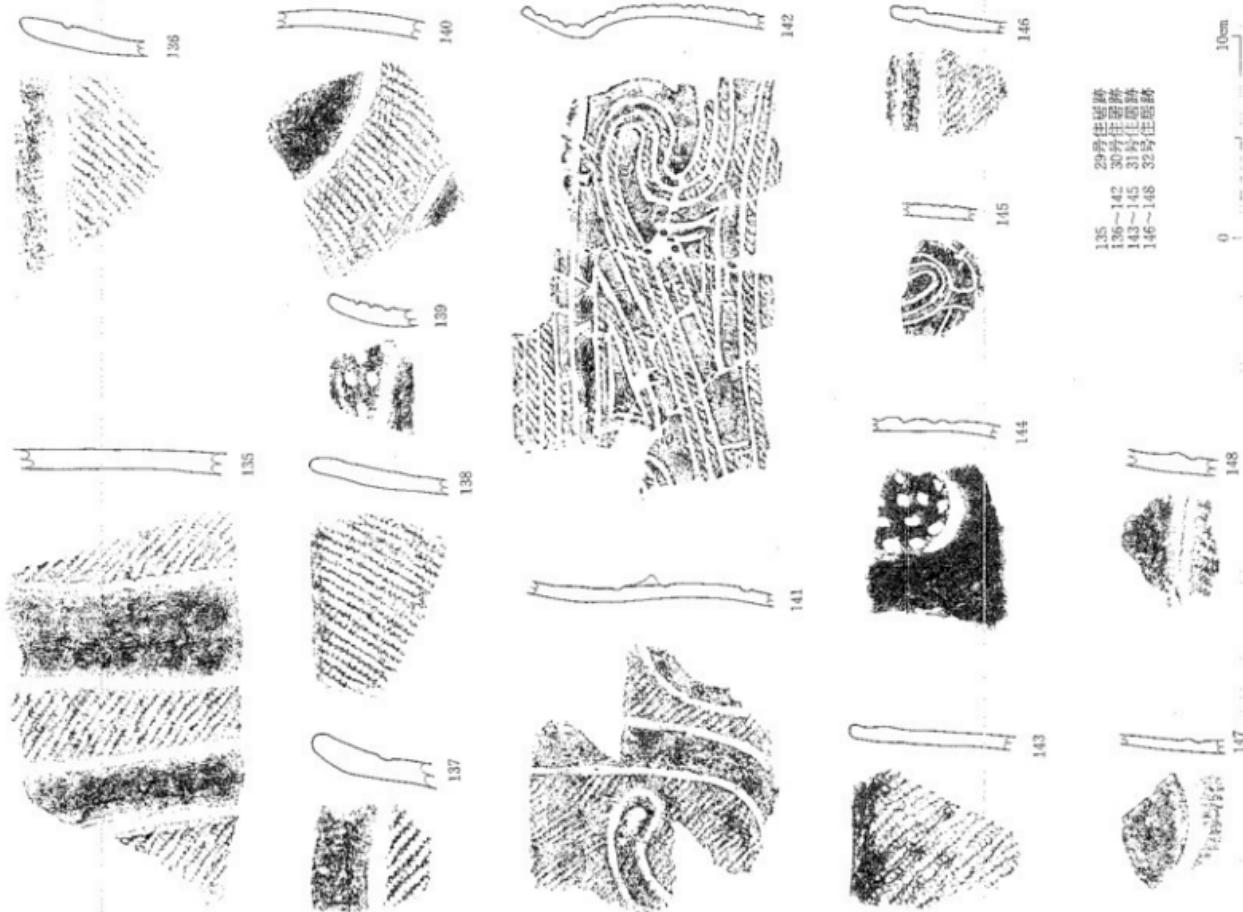
第45図 遺構内出土土器



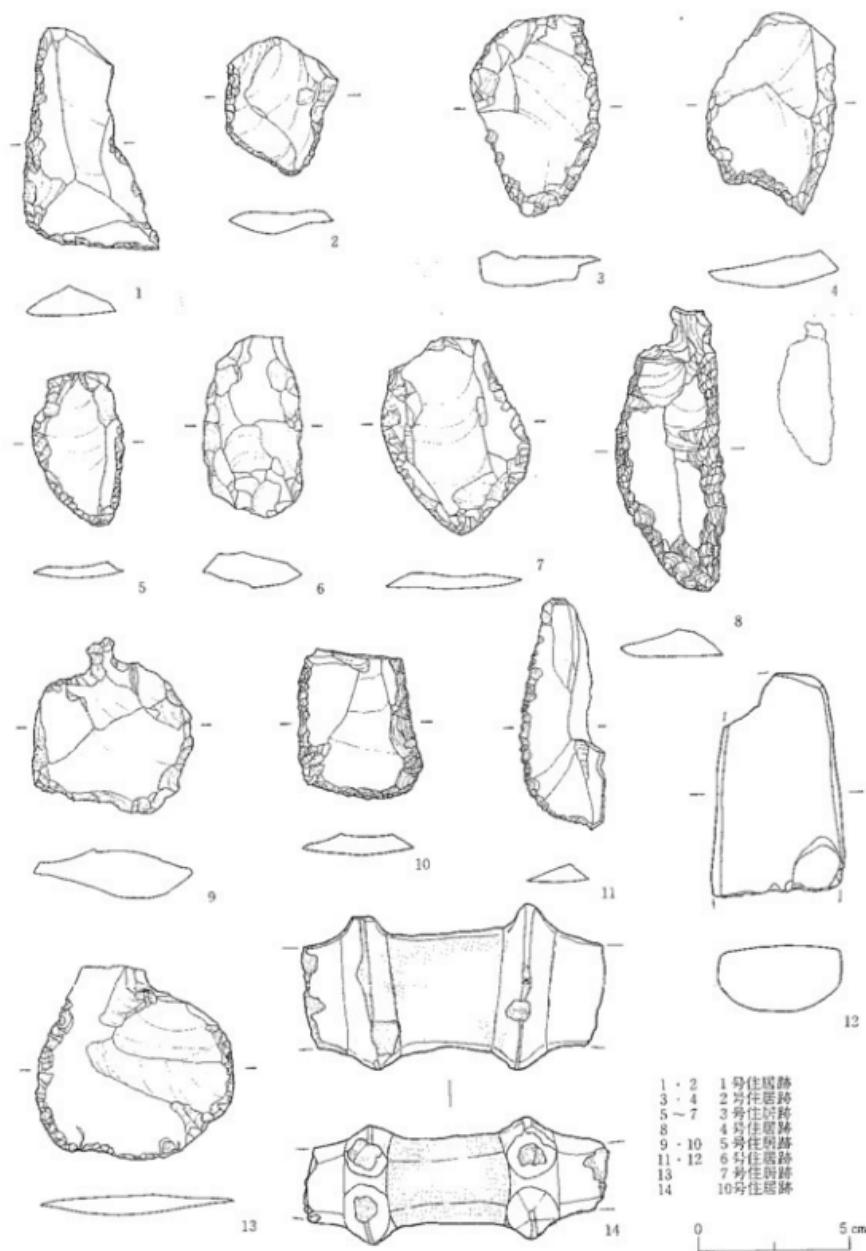
86~88 10号住居跡
 89·90 11号住居跡
 91~102 12号住居跡
 103~107 14号住居跡



第47図 遺構内出土土器



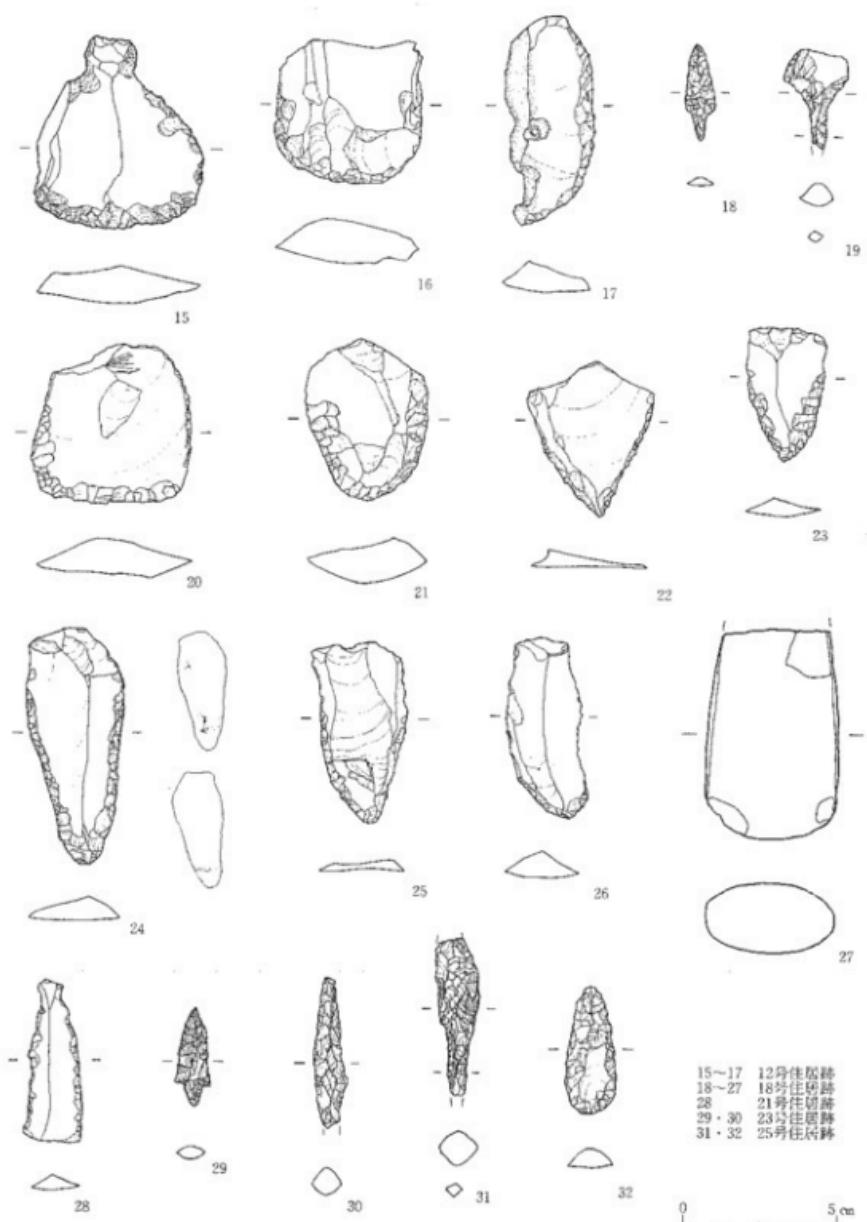
第48回 遺構内出土土器



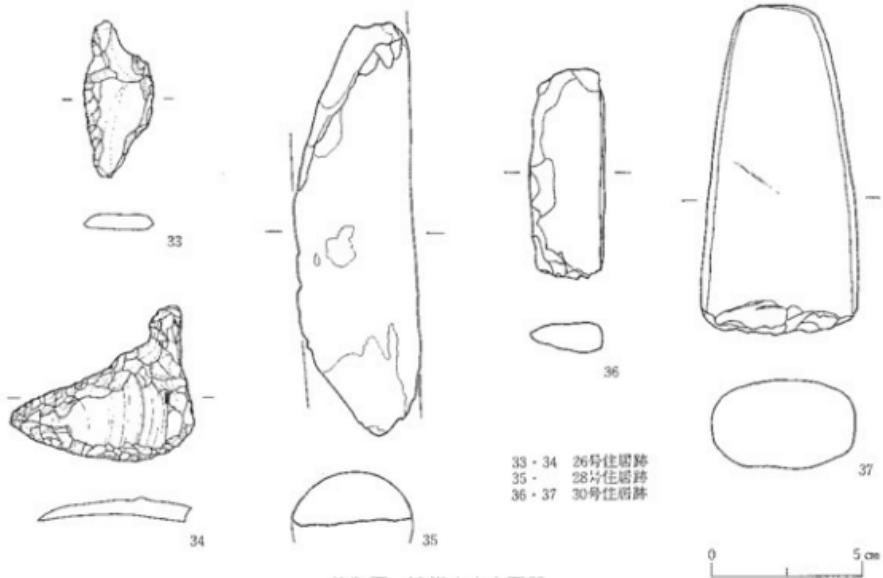
第49図 遺構内出土石器

- 1 · 2 1号住居跡
- 3 · 4 2号住居跡
- 5 · 7 3号住居跡
- 8 4号住居跡
- 9 · 10 5号住居跡
- 11 · 12 6号住居跡
- 13 7号住居跡
- 14 10号住居跡

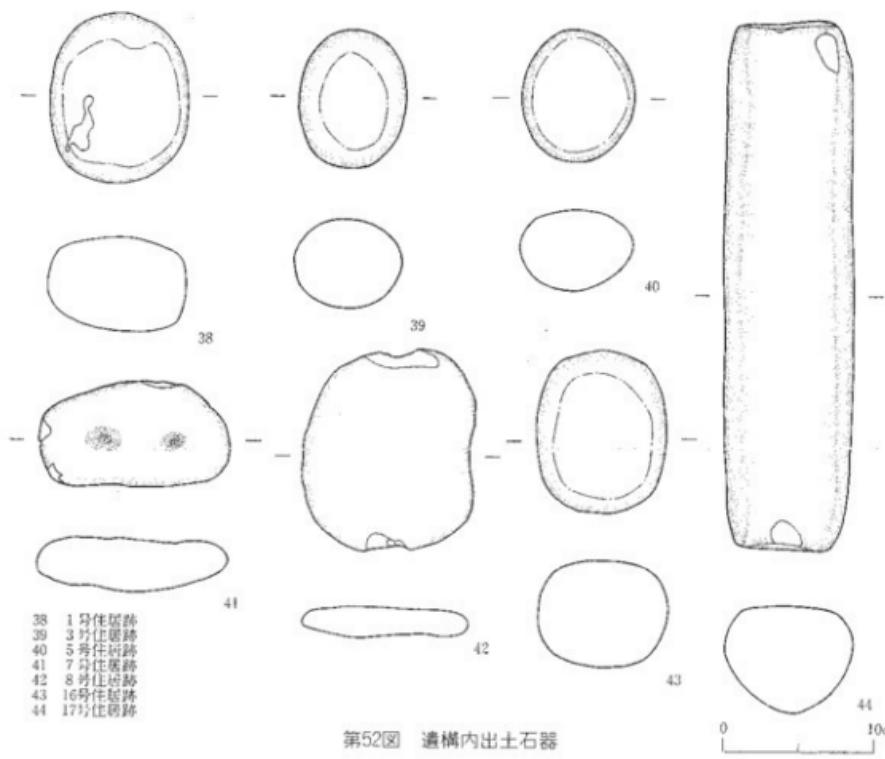
0 5 cm



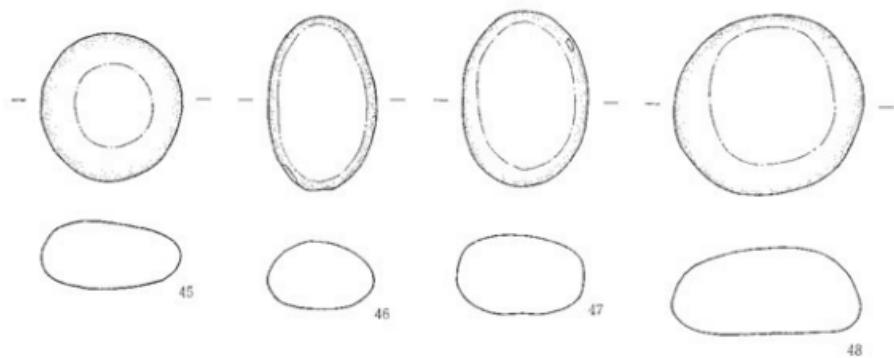
第50図 遺構内出土石器



第51図 遺構内出土石器



第52図 遺構内出土石器



45~49 18号住居跡
50・51 28号住居跡



第53図 遺構内出土石器

弥生時代

1号住居跡（I～VII）（第54図）

調査区中央部で検出された。

7本の周溝が検出され、6回の建て替えを行っている。1—I号は周溝が径8mのほぼ円形を呈し、幅20~30cm、深さ10~43cmで、南西側が途切れ、出入口施設の存在が考えられる。ピットは多数検出されたが、主柱穴はP1～P4の4個である。掘り方は径35~70cm、深さ42~75cmで、径約20cmの柱痕の認められるものもある。炉は径90cmの地床炉で若干掘り込み、炉内が強く火熱を受け赤変し、2個の礫が付設する。床はローム面を床面とするが、ローム面が若干西へ斜面をなして、るために東側を約5cm掘り込み、平坦で堅い。1—II～VII号は1—I号の北側へ移動して構築され同心円状の周溝が認められ、5回の拡張を行っている。周溝は1—II号が長軸9.6m、短軸8.4mの椭円形を呈し、幅20cm、深さ11~24cmである。1—III号は径9.3mのほぼ円形を呈し、幅20cm、深さ21~43cmである。1—IV号は径9.4mのほぼ円形を呈し、幅20cm、深さ32~43cmである。1—V号は径10.6mのほぼ円形を呈し、幅20cm、深さ16~36cmである。1—VI号は径10.8mのほぼ円形を呈し、幅20cm、深さ15~45cmである。1—VII号は径11.7mのほぼ円形を呈し、幅20cm、深さ9~70cmである。全て南側が途切れ、出入口施設の存在が考えられる。ピットは多数検出されたが、主柱穴は4個で、1—II～VII号に伴うものがP5～P8と考えられ、掘り方は径50~75cm、深さ40~75cmで、径25~35cmの柱痕の認められるものもある。1—V～VII号に伴うものがP9～P12と考えられ掘り方は径50~70cm、深さ69~80cmで、径25~30cmの柱痕が認められる。炉は2基検出された。1—I～IV号に伴うものは、新しい溝によって切られており検出されなかった。東側の炉は径80cmの地床炉で、1—V～VII号に伴うものである。西側の炉は径90cmの地床炉で若干掘り込んでおり、炉内は強く火熱を受けて赤変し、3個の礫が付設されている。検出された位置からすると、何期日の住居に伴うものが判然としない。床はローム面を床面とするが、ローム面が若干西へ斜面をなして、るために東側を約5cm掘り込み、平坦で堅い。

出土遺物

土器（第62図149～151、第63図156～162）

149は1—I号の周溝（東側）、150は1—II・III号の周溝（西側）、151は1—VII号の周溝（北東部）で出土した。149は口縁部が直線的に斜め上方に立ち上がる鉢形土器である。変形工字文が施され、2個1対の粘土粒が付く。150は蓋形土器である。笠形をなし、変形工字文が施される。151は小形の鉢形土器で、頸部に平行沈線が巡る。地文はL R 単節斜繩文（斜位回転）である。他に甕形土器、鉢形土器などの破片が出土している。

石器（第65図52～57、第66図68～72）

52～54是有茎の石鏃、55・56はヘラ状石器、57は鋸歯縁石器で両面にアスファルトが付着する。

68・69はくぼみ石、70～72は磨石である。

2号住居跡（I～V）（第55図）

調査区中央部で検出された。

5本の周溝が検出され、4回の建て替えを行っている。2—I号は周溝が径10.7mのほぼ円形を呈し、幅20cm、深さ6～23cmで、南側が途切れ、東側には周溝が確認されなかった。2—II～Vは2—I号より若干南側にずらして構築され、同心円状の周溝が認められ、3回の拡張を行っている。周溝は2—II号が径8.5mのほぼ円形を呈し、幅20cm、深さ10～38cmである。2—I号は長軸9.5m短軸9.1mの梢円形を呈し、幅20cm、深さ10～28cmである。2—IV号は径9.8mのほぼ円形を呈し、幅20cm、深さ10～28cmである。2—V号は長軸10.1m、短軸9.5mの梢円形を呈し、幅20cm、深さ13～28cmである。全て両側が途切れ、出入口施設の存在が考えられる。ピットは多数検出されたが、主柱穴は4個で、2—I号に伴うものがP1～P4と考えられ、掘り方は径30～50cm、深さ21～42cmである。2—II～V号に伴うものがP5～P8と考えられ、掘り方は径45～60cm、深さ46～89cmで、径20～30cmの柱痕の認められるものもある。炉は2基検出された。北側の炉は径1mの地床炉で、炉内が強く火熱を受けて赤変し、2—I号に伴うものと考えられる。南側の炉は長軸1.4m、短軸1mで、中央部に壺形土器を縦に割り、半分を据え、周辺は強く火熱を受けて赤変している。2—II～V号に伴うものと考えられる。床は平坦で堅い。住居内南側に長方形の掘り方がみられるが、住居に付随するものかどうかは不明である。

出土遺物

土器（第62図152、第63図163～172）

152は炉埋設土器である。壺形土器の下半部で、刪毛口調整後にLR単節斜縫文（縦位回転）を施す。他に壺形土器、鉢形土器などの破片が出土している。

土製品（第149図3）

3は土偶である。頭顔部のみで、中空である。

石器（第65図58・59、第67図73～75）

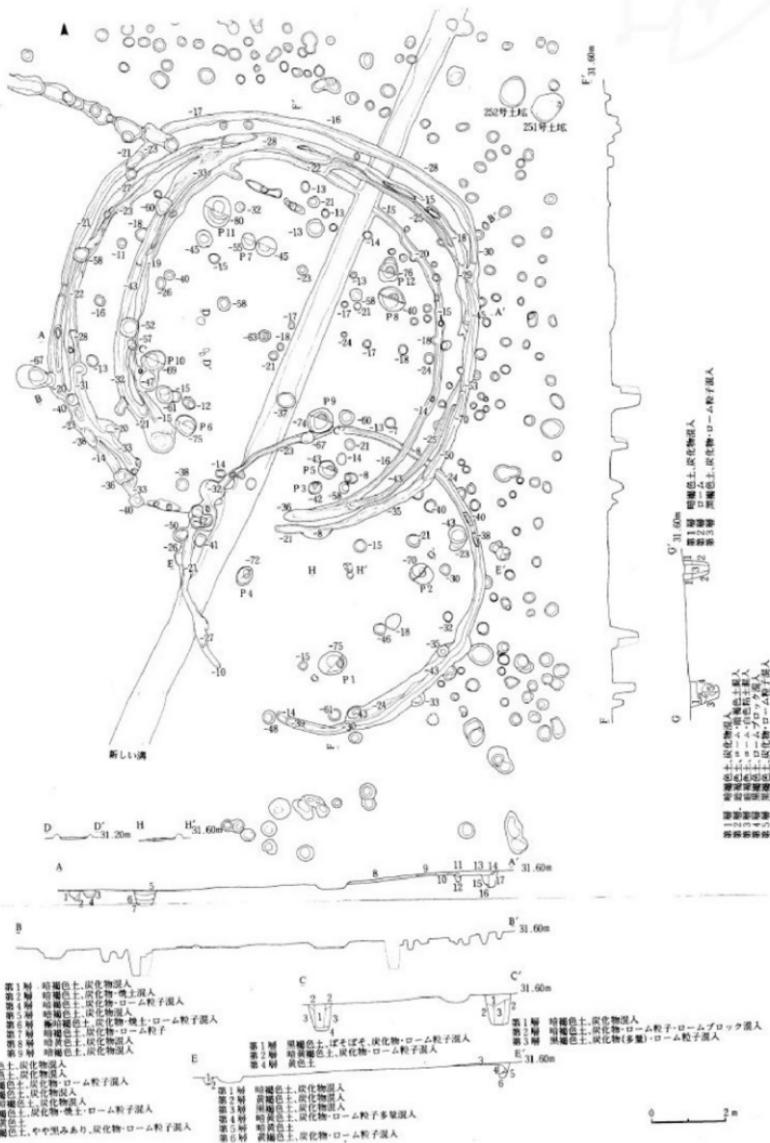
58は錐状をなす石器、59は横型石匙で、つまみ部にアスファルトが付着する。73～75は磨石である。

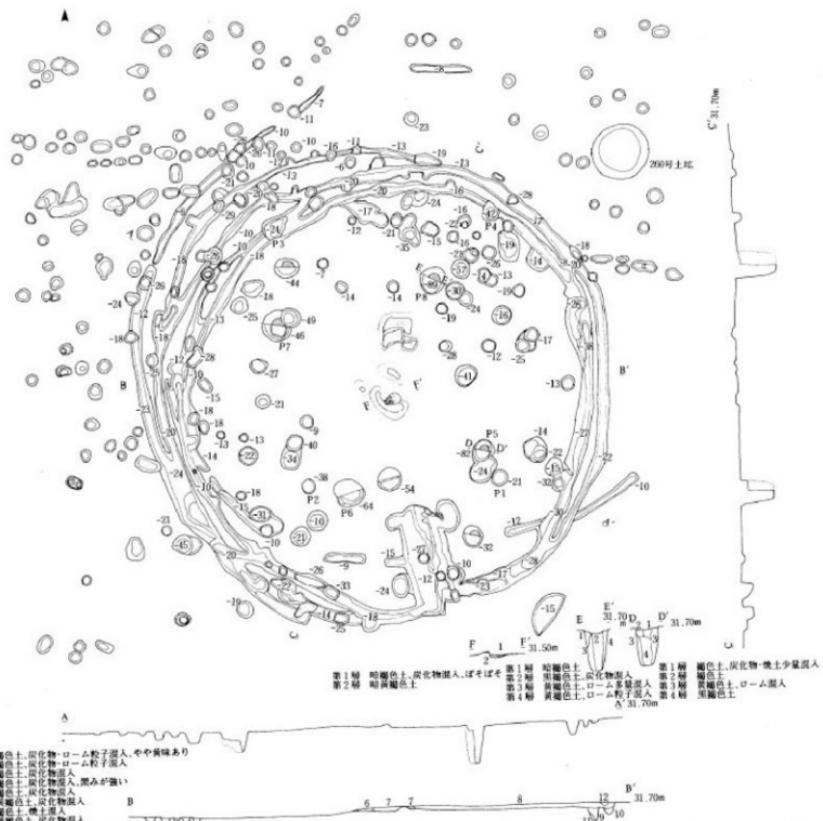
3号住居跡（I～III）（第56図）

調査区西側で検出された。

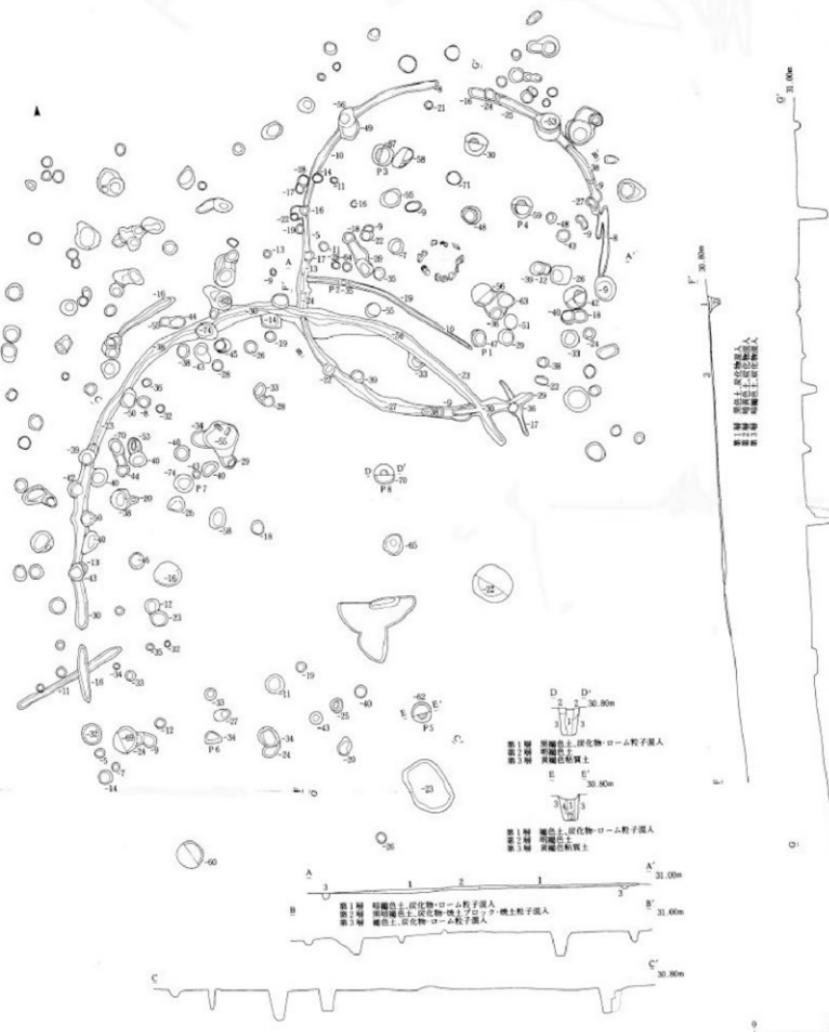
3本の周溝が検出され、2回の建て替えを行っている。3—I号は周溝が長軸8.3m、短軸7.5mの梢円形を呈し、幅20～30cm、深さ5～44cmで、南東側が途切れ、出入口施設の存在が考えられる。ピットは多数検出されたが、主柱穴はP1～P4の4個である。掘り方は径30～50cm、深さ35～67cmで、径25～35cmの柱痕の認められるものもある。かは径1mの石臼炉で、か内が強く火熱を受けて赤変している。床は平坦で堅い。3—II・III号は3—I号の南側へ移動して構築され、1回の拡張を行っている。

(P~1) 線路台 1 (西側)





第55図 2号住居跡 (I ~ V)



周溝は南斜面であるために南側は検出されず、規模は不明である。しかし、東側は途切れ、出入口施設の存在が考えられる。幅20cm、深さ10~58cmである。ピットは多数検出されたが、主柱穴はP5~P8の4個である。掘り方は径30~50cm、深さ34~74cmで、径20~25cmの柱痕の認められるものもある。かは長軸1.2m、短軸80cmの地床炉で、炉内は強く火熱を受けて赤変している。床はローム面を床面とするが、南斜面のために北側がローム面、南側は黒色土を床面としたと考えられる。北側のローム床面は平坦で堅い。

出土遺物

土器（第62図153・154、第63図173~182）

153は3-I号の床面、154は3-I号のピットより出土した。いずれも蓋形土器で、154には沈線が巡る。地文はL R 単節斜繩文（横位回転）である。他に壺形土器、鉢形土器の破片が出土している。

石器（第65図60、第67図76~78）

60は鈎結石で、両頭部が欠損する。76は石皿の破片、77・78はくぼみ石である。

4号住居跡（I~IV）（第59図）

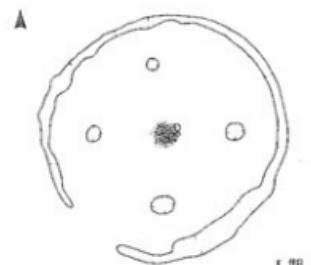
調査区南側で検出された。

4本の周溝が検出され、3回の建て替えを行っている。4-I号は周溝が径9.1mのほぼ円形を呈し、幅20cm、深さ6~26cmで、北西部が途切れ、出入口施設の存在が考えられる。ピットは多数検出されたが、主柱穴はP1~P4の4個である。掘り方は径25~50cm、深さ47~67cmで、径30cmの柱痕の認められるものもある。かは径1.1mの地床炉で、炉内が強く火熱を受けて赤変し、1個の礫が付設する。床は平坦で堅い。4-II・III号は4-I号の西側へ移動する。周溝は4-II号が長軸12m、短軸10mの橢円形を呈し、幅20cm、深さ4~55cmである。4-III号は長軸13m、短軸11mの橢円形を呈し、幅20cm、深さ4~39cmで、いずれも北東側が途切れ、出入口施設の存在が考えられる。北西部と南東部は風倒木のために検出されない。ピットは多数検出されたが、主柱穴は4個である。P5~P7と東側にも存在するが、北東側の柱穴は位置からして4-IV号の炉の下にあると考えられるが確認していない。掘り方は径70~80cm、深さ87~90cmで、径50cmの柱痕の認められるものもある。かは径1.4mの石窯炉で中央部がくぼみ、炉内は強く火熱を受けて赤変している。床は平坦で堅い。4-IV号は4-II・III号の東側へ移動する。周溝は径11mのほぼ円形を呈し、幅20cm、深さ5~23cmで北東側が途切れ、出入口施設の存在が考えられる。ピットは多数検出されたが、主柱穴は4個である。P8~P10と東側にも存在すると考えられるが、柱穴は風倒木により検出できなかった。掘り方は径40~60cm、深さ29~53cmである。炉は数個の礫は残っていないが径90cmの石窯炉で、炉内が強く火熱を受けて赤変している。床は平坦で堅い。

出土遺物

土器（第62図155、第64図183~193）

155はP 8より出土した壺形土器である。刷毛目調整後にL R 単節斜繩文（横位回転）を施す。頭部と肩部に2条の平行沈線を巡らし、平行沈線間に長さ1~2cmの列点文を施す。縦位の3条の平行沈線間にも2条の長さ1~2cmの列点文が施され、頭部と肩部の平行沈線と連絡する。6単位である。口唇部にも繩文が施され、内外面に1条の沈線が巡る。胎土に小石粒が多く混入する。他に

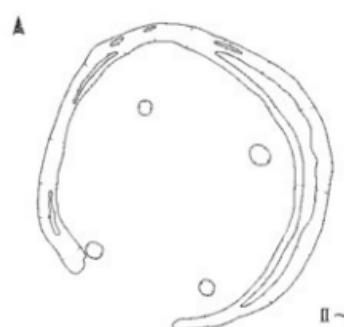


I期

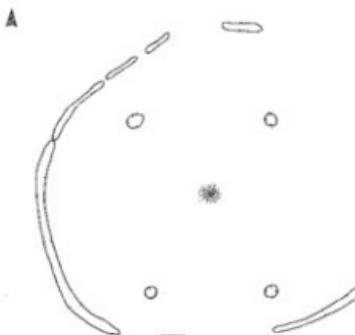
壺形土器、鉢形土器、高環形土器の脚部、壺形土器の破片が出土している。

石器（第66図61~67、第67図79・80）

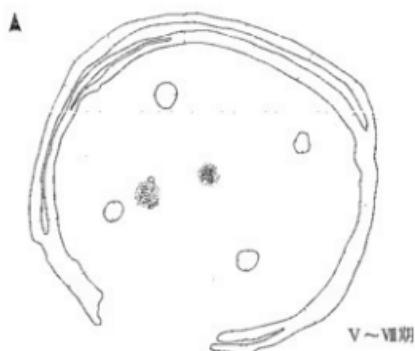
61~65は石鏃で、61~64は有茎、65は無茎である。66はヘラ状石器、67は磨製石斧である。79・80は磨石である。



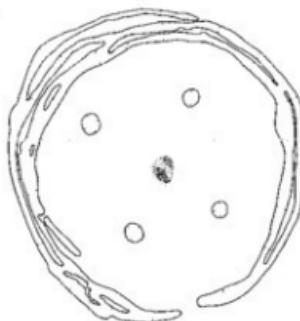
II~IV期



I期



V~VIII期



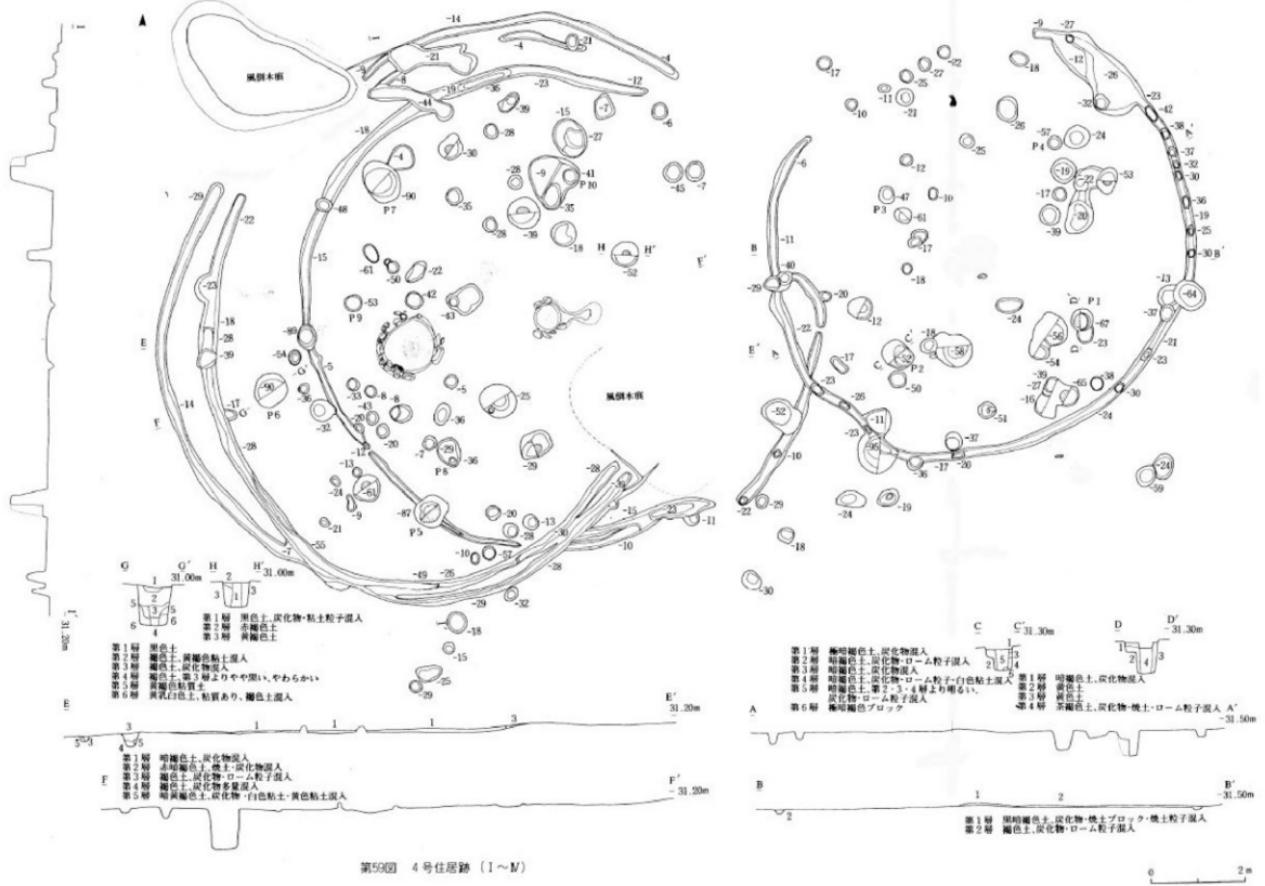
II~V期

0 5 m

0 5 m

第58図 2号住居跡の変遷

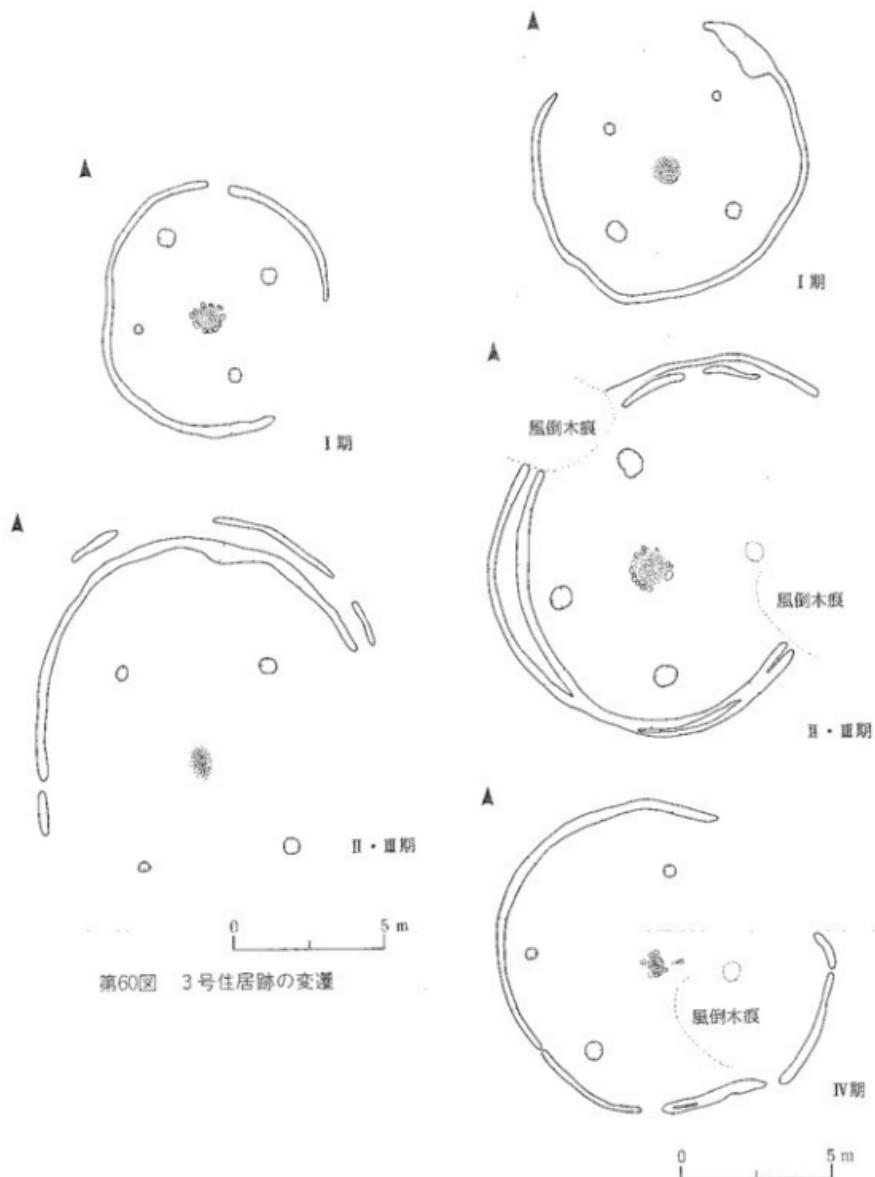
第57図 1号住居跡の変遷



第59回 4号住居跡 (1~M)

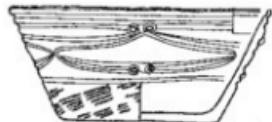
第1層 塗壁焼土・炭化物混入
第2層 塗壁焼土・D=1cm粒子混入

0 2m



第60図 3号住居跡の変遷

第61図 4号住居跡の変遷



149



150



151



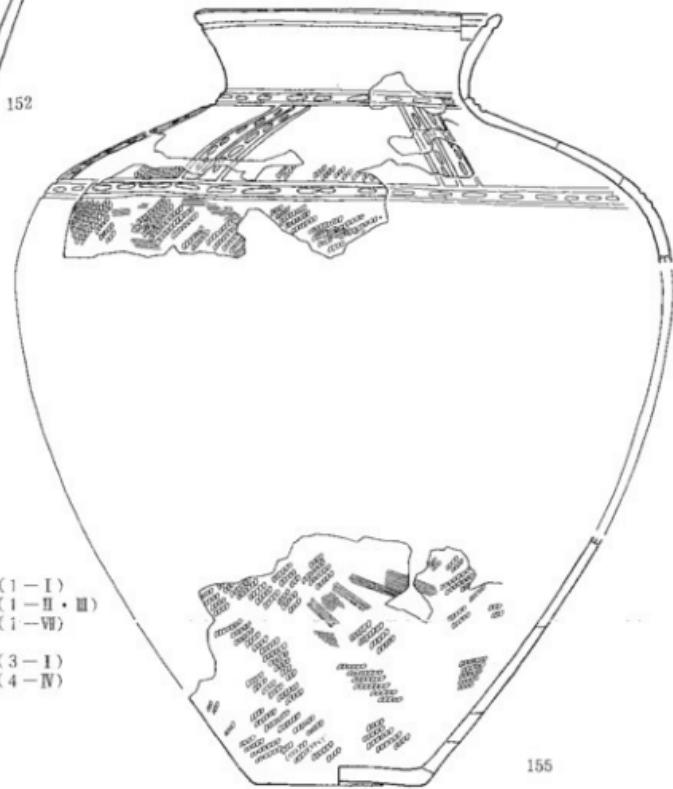
152



153



154

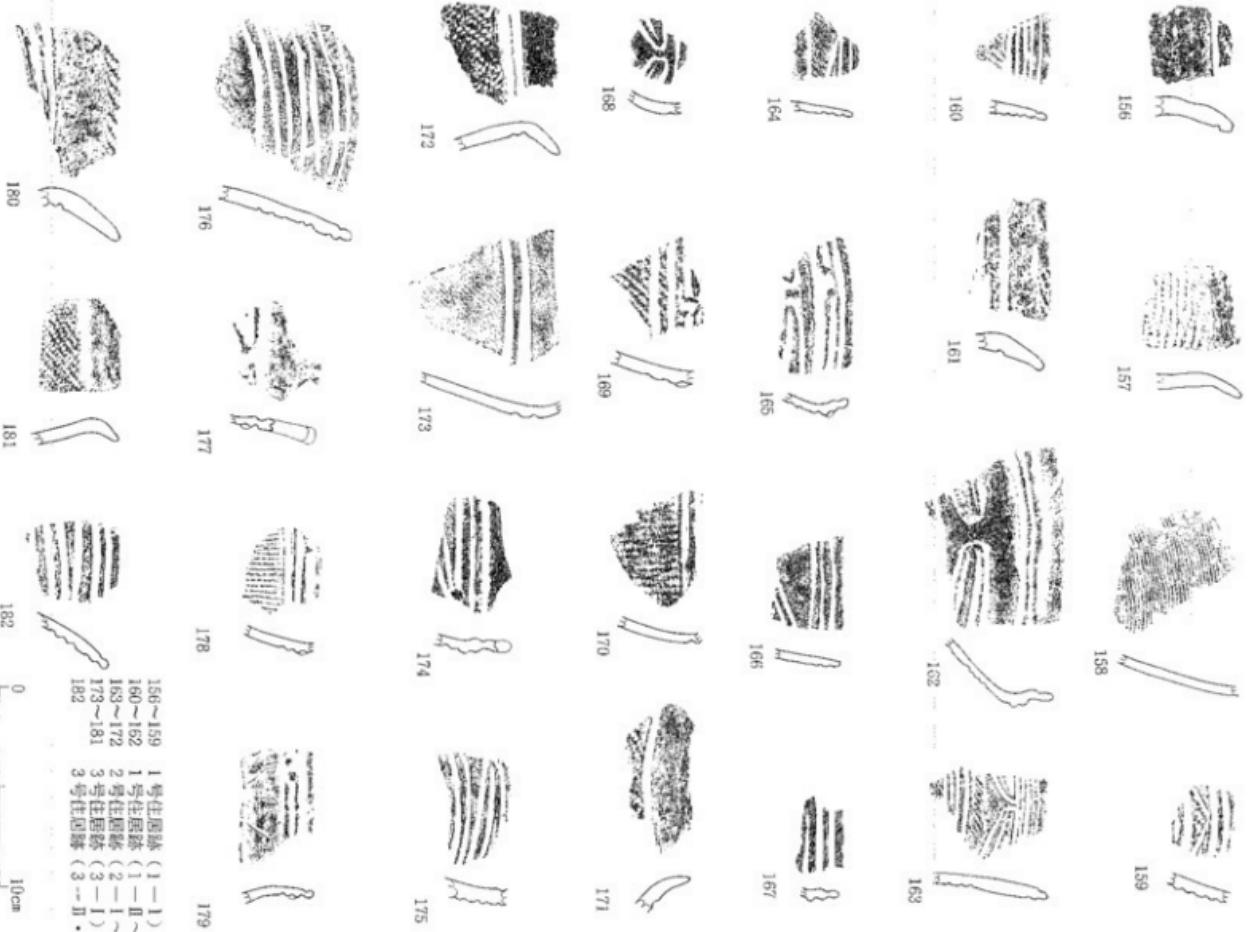


155

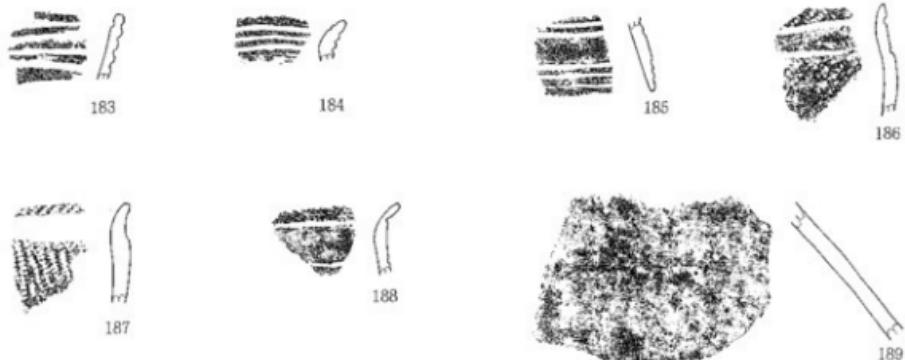
- 149 1号住居跡 (1-I)
 150 1号住居跡 (1-II・III)
 151 1号住居跡 (1-VII)
 152 2号住居跡
 153・154 3号住居跡 (3-I)
 155 4号住居跡 (4-IV)

第62図 遺構内出土土器

0 10cm



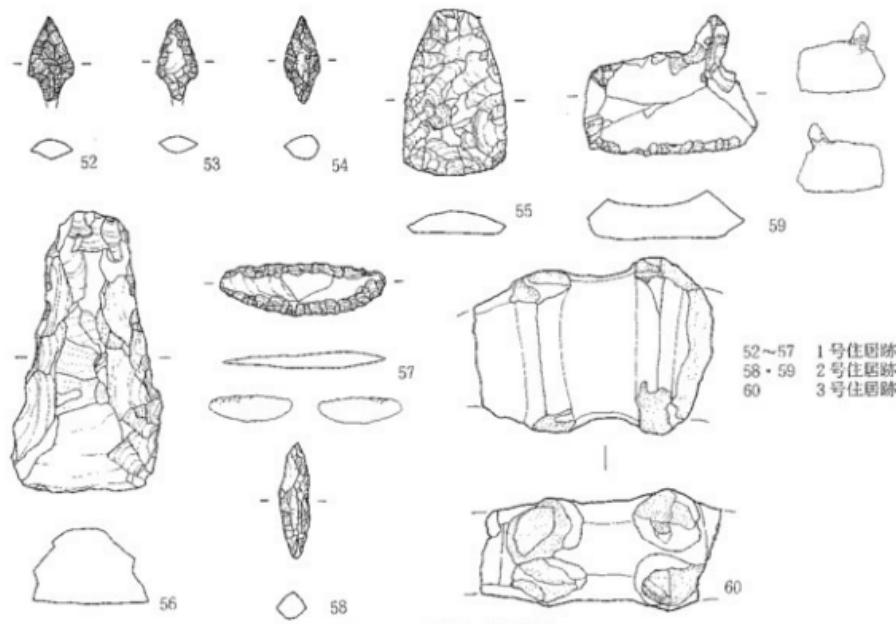
156~159 1号住居跡 (1-1)
160~162 1号住居跡 (1-II~IV)
163~172 2号住居跡 (2-I~V)
173~181 3号住居跡 (3-I)
182 3号住居跡 (3-II・III)



183~189 4号住居跡(4-I)
190~193 4号住居跡(4-II・III)

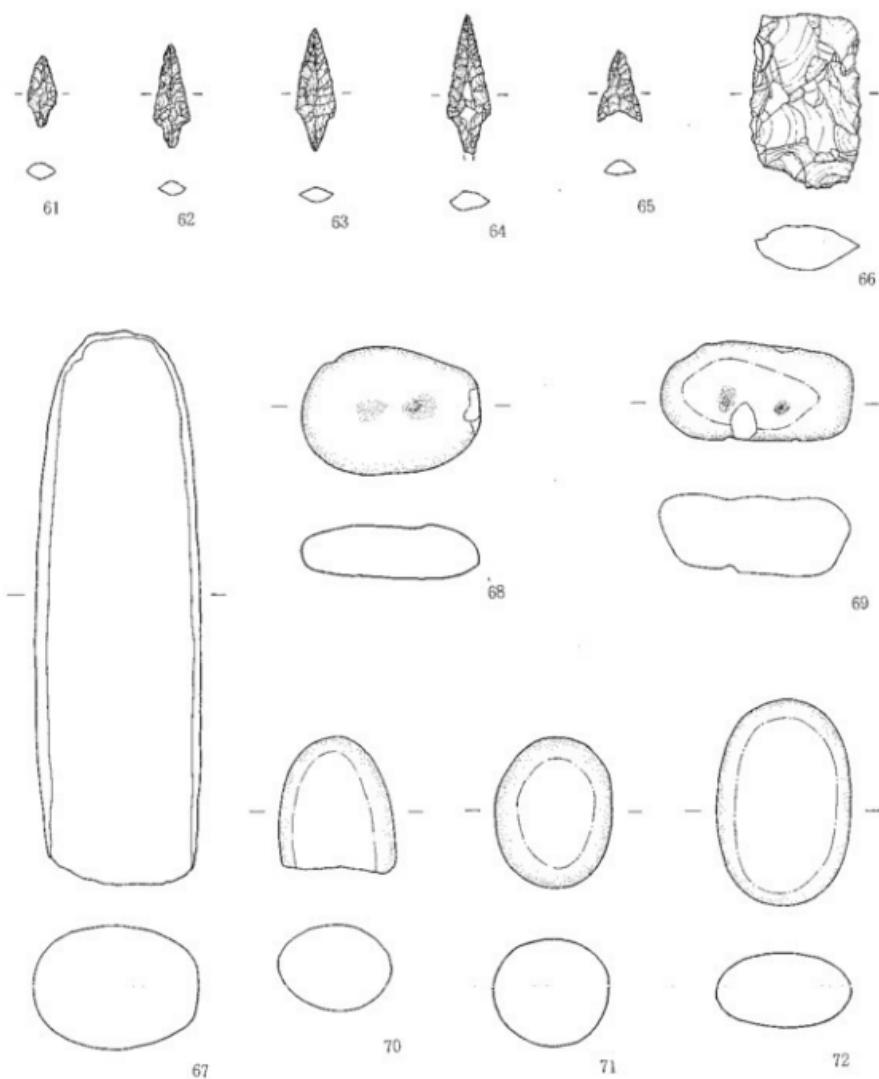
第64図 遺構内出土土器

0 10cm



第65図 遺構内出土石器

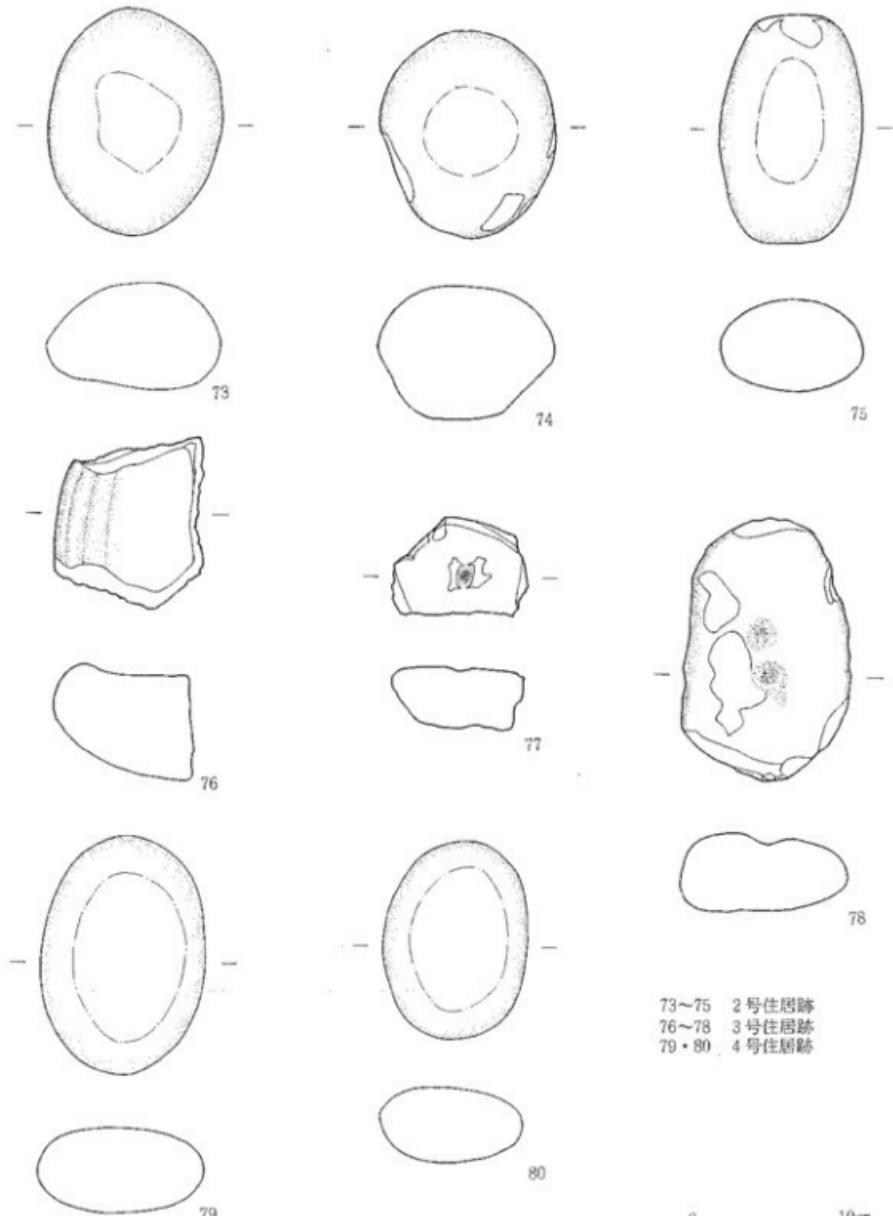
- 90 -



61～67 4号住居跡
68～72 1号住居跡



第66図 遺構内出土石器



73~75 2号住居跡
76~78 3号住居跡
79・80 4号住居跡

第67図 遺構内出土石器

柵木跡（第215・216図）

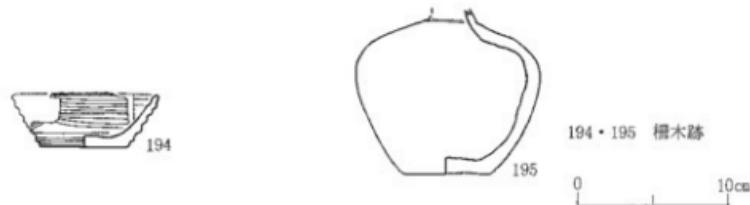
調査区中央部で、4軒の住居跡を測るよう検出された。北側は集石遺構、東側に土塙墓、土器棺墓の区域が位置し、南・西側は台地縁辺部である。

柵木跡は、幅20~30cm、深さ30~60cmのピットが連続するように認められ、柱列をなしていたと考えられる。本柵木跡は3本検出され、内側のものは長軸61m、短軸47mの椭円形を呈し、全周する。中間のものは長軸64m、短軸50mの椭円形を呈し、検出されない部分もあり、南西部は内側の柵木跡と併用されると考えられる。両柵木跡は平行するように通り、1・2号住居跡と重複する。また、数ヶ所途切れる箇所があり、出入口施設の存在が考えられ、特に北西部は約1.5m途切れ、外側に平行してピット列が検出された。外側のものは南東部のみの検出で、南側は未調査のために不明である。また、南西部で内側の柵木跡に直交するように溝状（ピットあり）の遺構が認められたが、本柵木跡と同一のものかは判然としない。

出土遺物

土器（第68図194・195）

内側の柵木跡より出土した。194は小形の鉢形土器である。体部から口縁部にかけてほぼ直線的に斜め上方に立ち上がる器形、変形工字文が施される。195は小形の壺形土器で、無文である。



第68図 遺構内出土石器

土器棺墓（第69~71図）

調査区南側で検出された。

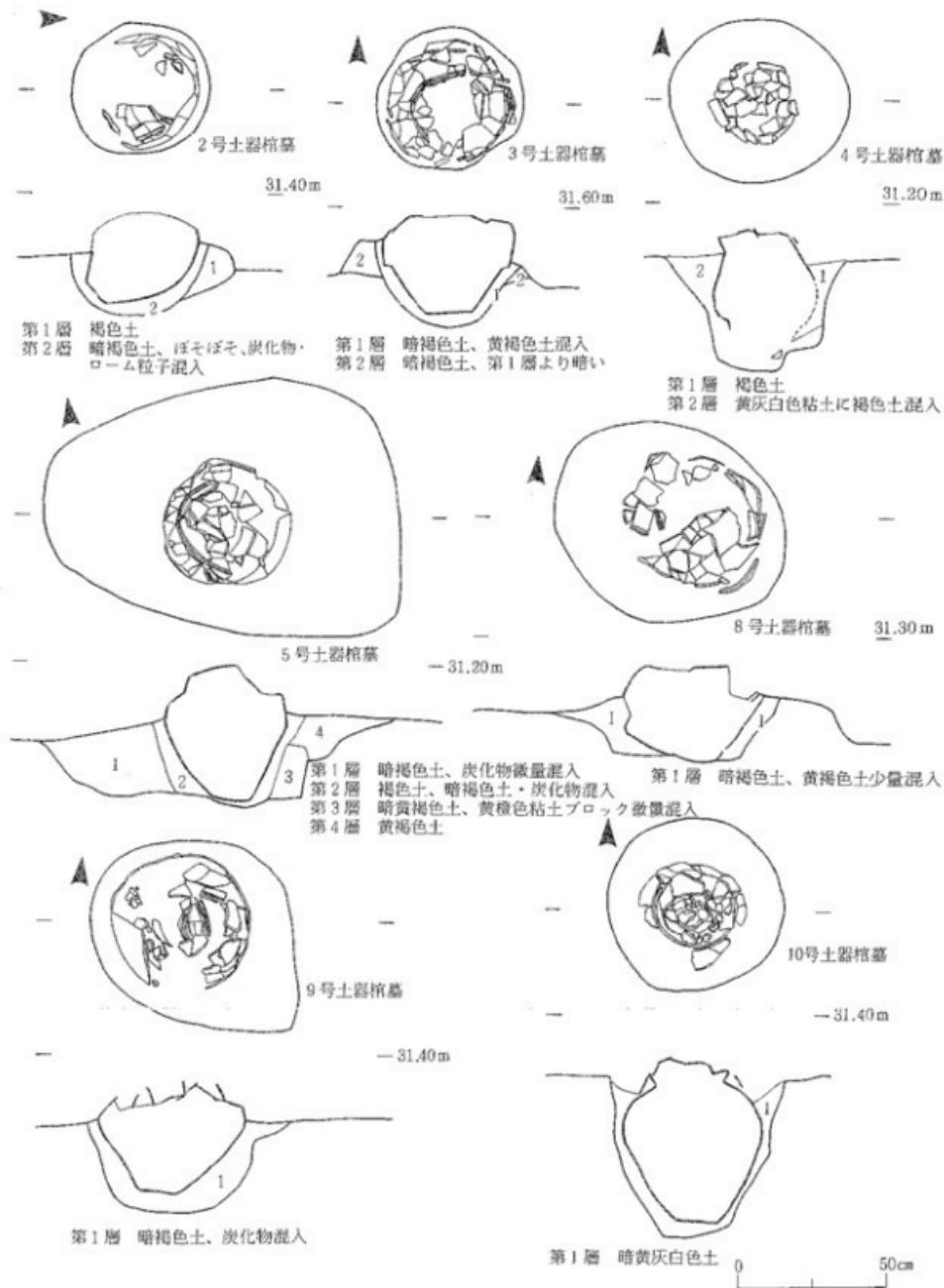
25基検出され、土塙墓の区域及びその周辺で、特に規則性はみられない。土塙墓と重複するものではなく、39・40号は縄文時代中期末の22号住居跡と重複する。土器棺は壺形土器と甕形土器の2種類認められ、2・4・5・8・9・10・21・26・30号には蓋が伴う。口縁部や胴上部が欠損するものもみられ、畑の耕作などにより蓋が削除されたものもあると考えられる。蓋は蓋形土器、鉢形土器甕形土器で、26号は偏平な自然石を用いている。4号は一回り大きな甕形土器を覆い被せている。39号は壺形土器の中に甕形土器が入っていた。底部穿孔のあるものとないものがある。

出土遺物（第72~79図196~230）

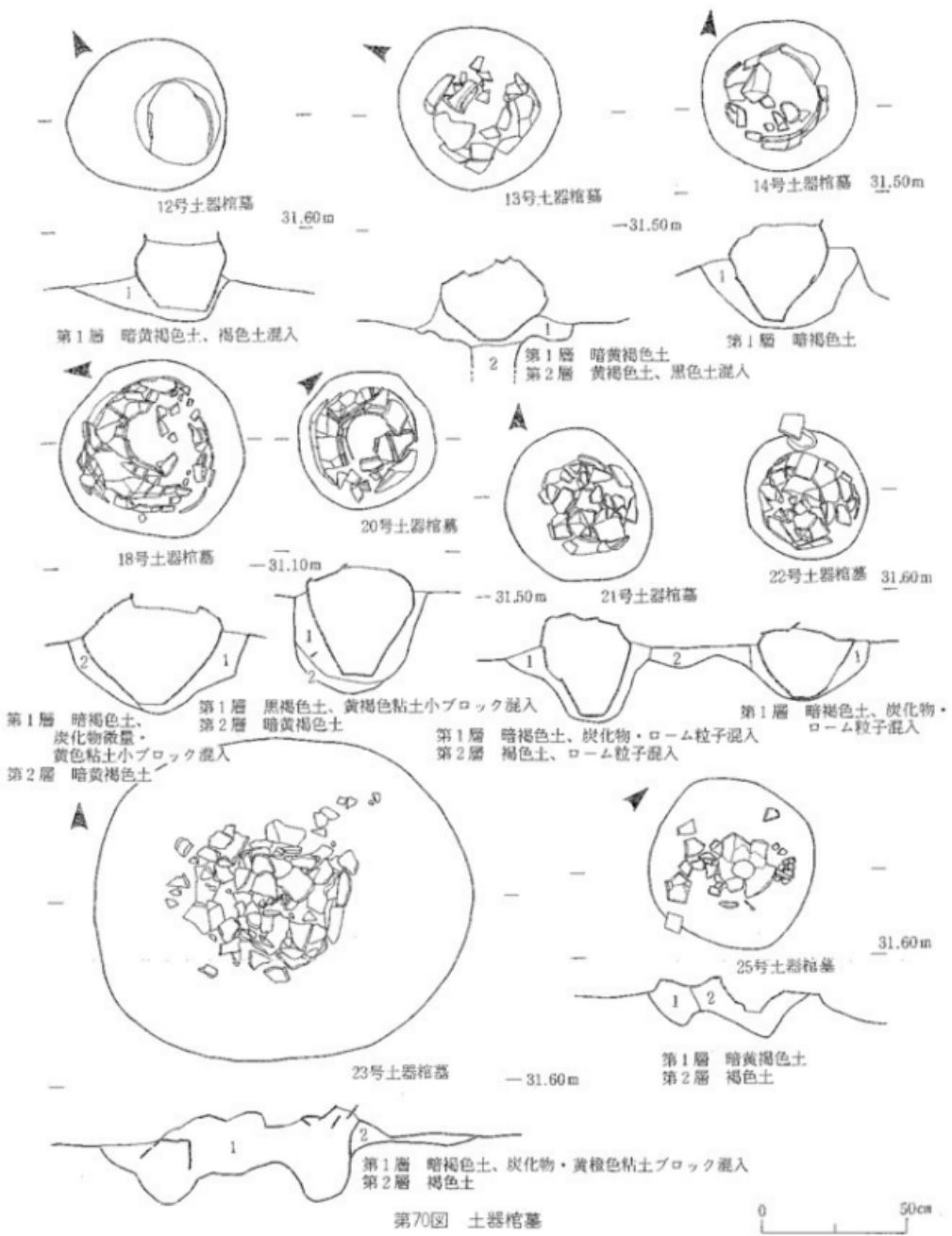
土器棺は壺形土器、甕形土器の2種類があり、壺形土器が多い。

甕形土器は口縁部が外反し、肩部の張る器形である。197・206・220・221は頸部に平行沈線及び

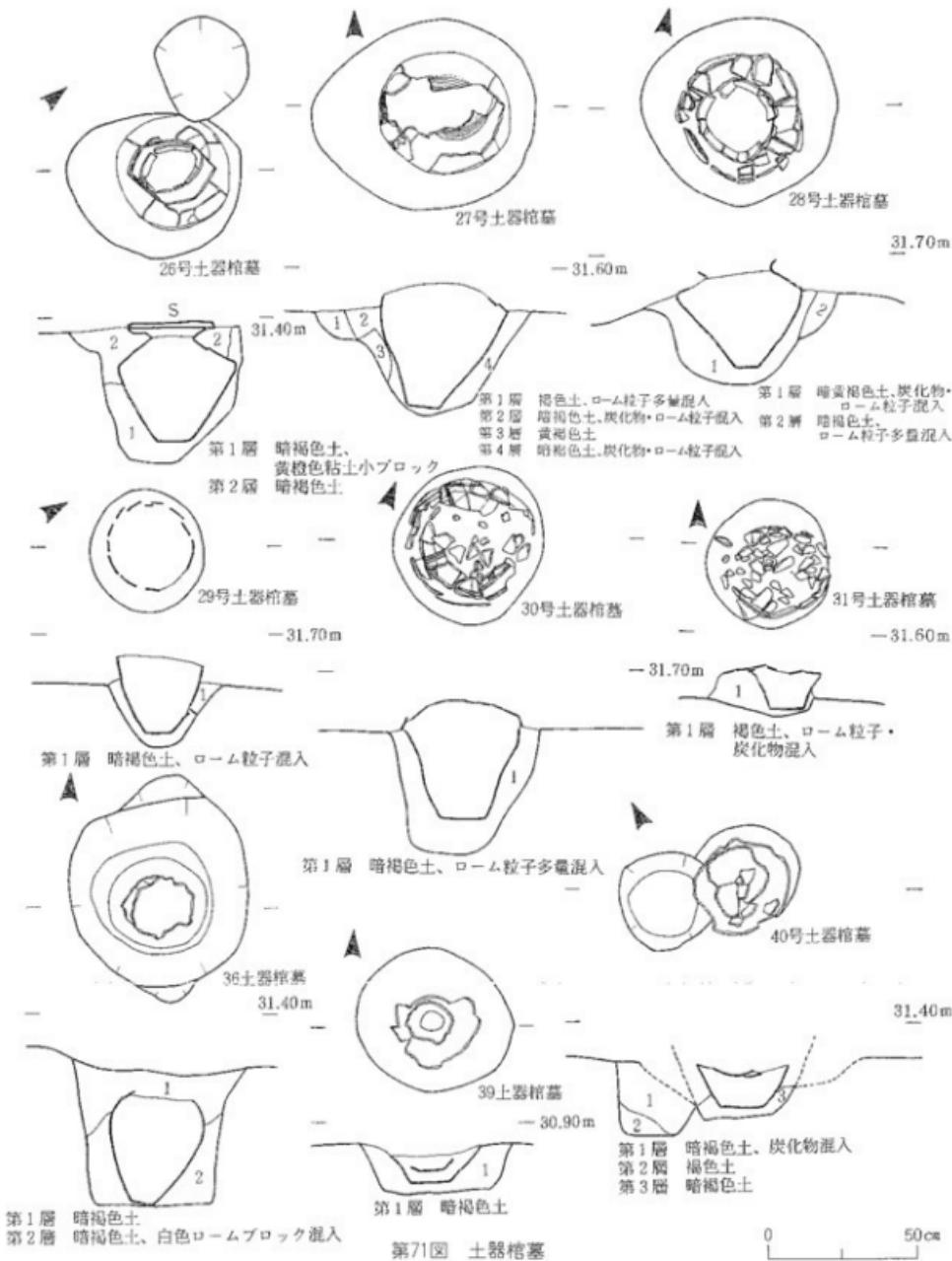
平行沈線間に列点文を施すものである。197・220・221は刷毛目調整後にL R 単節斜繩文（縦・斜位回転）を施し、刷毛目調整痕は内面にもみられる。底部穿孔である。206は口径22.2cm、器高46.8cm、胸部最大径45.7cmである。比較的肩部の張る器形で、地文はL R 単節斜繩文（縦・斜位回転）である。底部穿孔でない。198は口縁部が欠損し、胸部最大径37.8cmである。頸部と肩部に平行沈線を巡らすものである。地文はL R 単節斜繩文（縦・斜位回転）で、肩部は磨消されている。底部穿孔でない。213・222・225・226は頸部と肩部の平行沈線間に縦位の平行沈線が連絡するものである。222は口径24.2cm、器高42.8cm、胸部最大径39.5cmである。6単位構成で、刷毛目調整後にL R 単節斜繩文（縦・斜位回転）を施し、肩部にも地文がみられる。刷毛目調整痕は内面にもみられる。底部穿孔である。213は5単位、225は4単位、226は6単位で、地文L R 単節斜繩文（縦・斜位回転）で、肩部は磨消されている。底部穿孔である。217・229・230は頸部と肩部の平行沈線間に文様を施すものである。217は口径24cm、器高50.6cm、胸部最大径49.2cmである。「X」字状文と円文を沈線で区画し、周辺を磨消しするもので、8単位である。地文はL R 単節斜繩文（縦・斜位回転）である。胴下部に補修孔が認められ、28孔が列をなしている。底部穿孔でない。229は口径20.8cm、推定器高52.6cm、胸部最大径48.2cmである。平行沈線の中に列点文を施し、肩部に鋸齒状文を施す。口縁部内面に3本1組の縦位沈線がみられ4単位である。地文はなく、器面は良く磨かれている。胴下部の割れ口をアスファルトで補修している。底部穿孔でない。230は口縁部を欠損し、胸部最大径43.9cmである。鋸齒状文が2列に施され、その間が磨消されている。地文はL R 単節斜繩文（縦・斜位回転）である。底部穿孔でない。204・208・210・212は地文がなく、胎土が積運され、小石粒がほとんどなく砂粒が多く含まれ、焼成良好で器面に光沢がみられるものである。色調は210を除いて橙黄色で、所々に黒斑がみられる。204は口径25.2cm、器高50cm、胸部最大径44.2cmである。頸部と肩部に3条の平行沈線が巡り、口唇部には刻み目を施し、4単位である。胴部に幅2~3mmで2本1組の副目状の痕跡が観察され、龍目と思われる。底部穿孔でない。208は口径25.5cm、器高48.6cm、胸部最大径48.3cmである。頸部と肩部に平行沈線が巡り、これらに縦位の平行沈線が連絡する。頸部の平行沈線の下方には刺突文が施される。胴下半の割れ口をアスファルトで補修している。底部穿孔である。210は口径20.2cm、器高33.2cm、胸部最大径35cmである。頸部に平行沈線及び列点文が巡り、色調は黒褐色を呈する。底部穿孔でない。212は口径24.3cm、器高47cm、胸部最大径45cmである。肩部に平行沈線を巡らし、平行沈線の間に刺突文を施す。刺突文の中には条がみられ、刷毛目工具によるものと思われる。肩部の平行沈線に縦位の平行沈線が連絡され、6単位である。これらの平行沈線の周囲には刷毛目調整痕が残り他は磨消されている。底部穿孔でない。202・216・227は無文のものである。202は口径22.7cm、器高45.4cm、胸部最大径38.6cmである。胎土に小石粒が多く混入し、器面に露出している。底部穿孔でない。216・227は薄手で、胎土に砂粒が多く混入する。底部穿孔である。218・221は下半分である。



第69図 土器棺墓



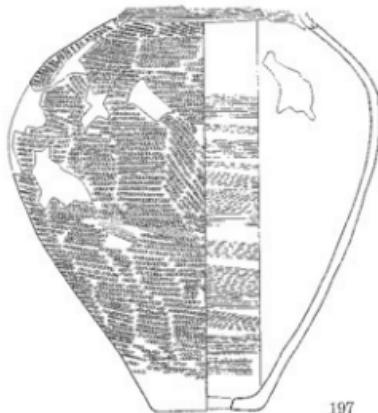
第70図 土器棺墓



第71図 土器棺墓



196



197



199



198



200

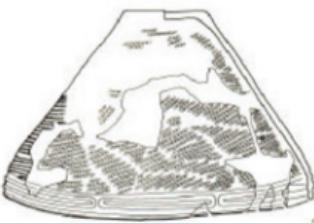
196・197 2号土器棺
198 3号土器棺
199・200 4号土器棺

第72図 土器棺

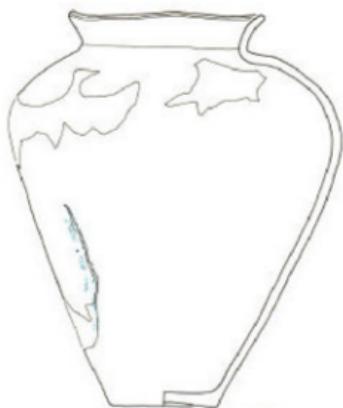
0 20cm



201



203



202

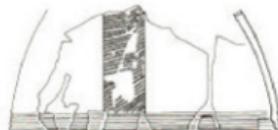


204

201・202 5号土器棺
203・204 8号土器棺



第73図 土器棺



205



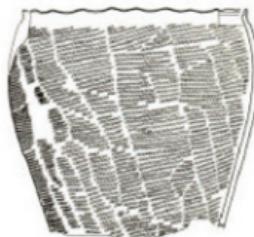
207



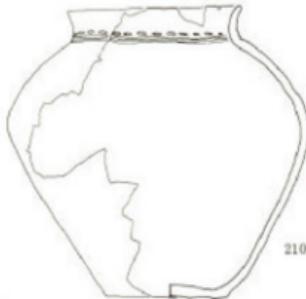
206



208



209



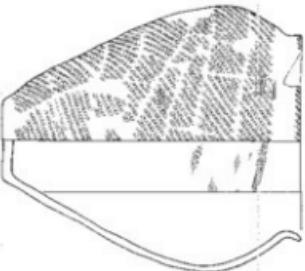
210

205・206 9号土器棺
207・208 10号土器棺
209 12号土器棺
210 13号土器棺

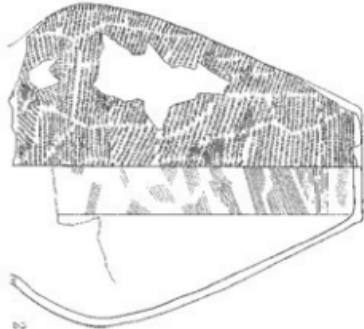
第74図 土器棺

0 20cm

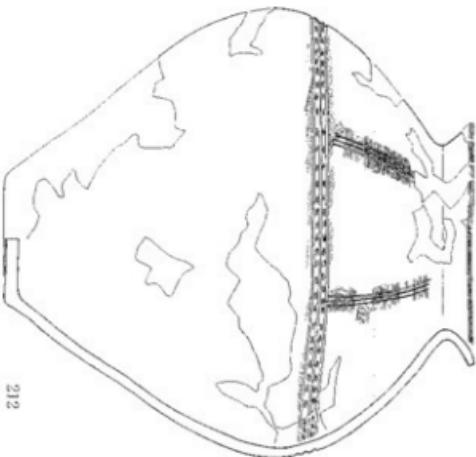
第五圖 土器棺



215



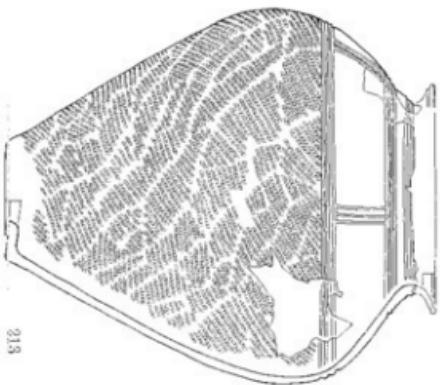
214



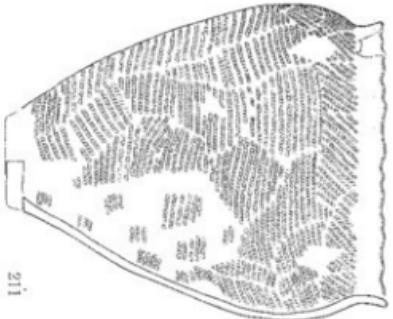
212



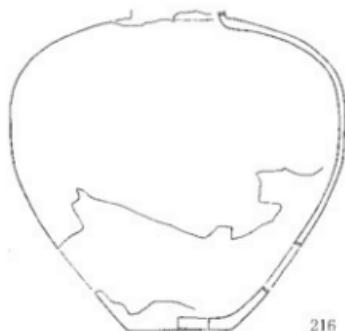
213



211



- 211
14号土器棺
212
18号土器棺
213
20号土器棺
214・215
21号土器棺



216



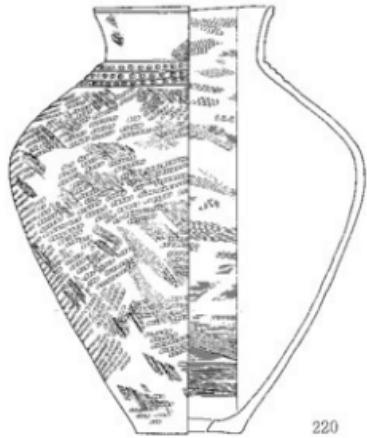
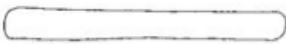
218



217



219



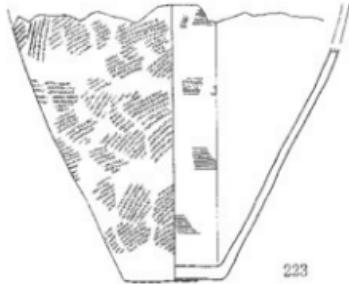
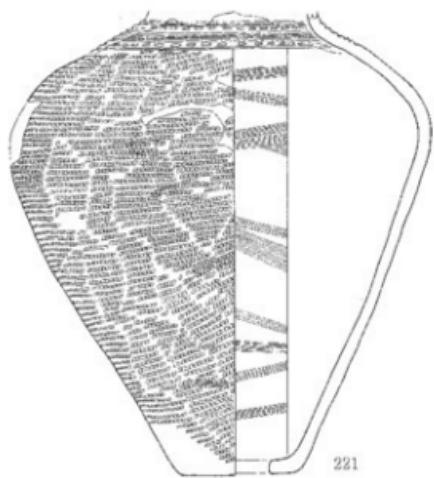
220

- 216 22号土器棺
 217 23号土器棺
 218 25号土器棺
 219・220 26号土器棺



第76図 土器棺

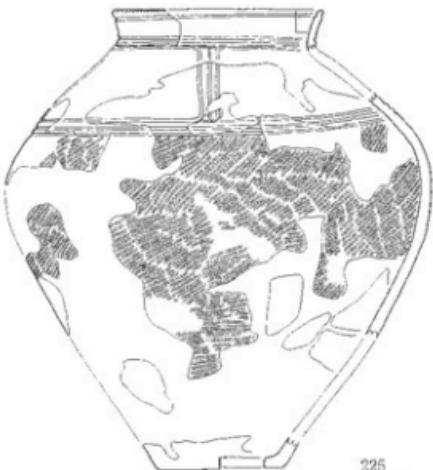
0 20cm



223



224



225



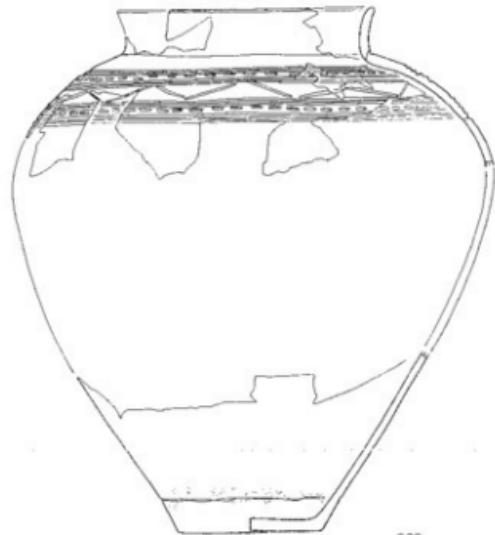
222



221 27号土器棺
222 28号土器棺
223 29号土器棺
224・225 30号土器棺

第77図 土器棺

0 20cm



226 31号土器棺
227 36号土器棺
228・229 39号土器棺

第78図 土器棺

0 20cm



第79図 土器棺

施している。

土埴墓（第86～93図）

調査区南側で検出された。柵木跡の東側で、中・外側の柵木跡と重複するものもある。

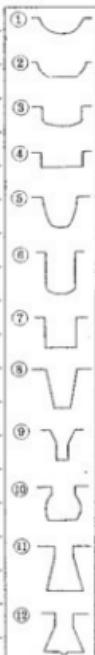
51基検出され、長軸30m、短軸20mの楕円形を呈する範囲で、長軸は南東・北西方向である。上埴輪全体の配置は2列に配され、中央には検出されない。形態は小判形、楕円形、長方形、隅丸長方形を呈するもので、小判形をなすものが多い。規模は長軸の長さが最長のものが204cm、最短のものが95cmで、100～150cmの範囲に入るものが多い。長軸方向はN 108°W～N 79°Eの範囲で、北一束の範囲に入るものが若干多い。重複については明確に切り合い関係を把握できるものはなかった。副葬品は224号より小玉、258号より玉、管玉、勾玉が出土した。227号よりベンガラが検出され、長軸は東西方向で、検出位置は西側である。

變形土器は228を除いては地文のみのものである。口縁部が平縁のものと波状をなすものがある。地文はL R 単節斜繩文（縦・斜位回転）である。波状口縁のものは口縁部を磨消しするが、平縁口縁のものは口縁上部又は口唇部に地文を残す。200・211は底部穿孔である。228は刷毛目調整後にL R 単節斜繩文（縦位回転）を施し、頸部に3条の平行沈線が巡る。

蓋及び合口は蓋形土器、鉢形土器、偏平な自然石を用いている。鉢形土器は口縁部に平行沈線を施すものが多い。變形土器は214が刷毛目調整、207が頸部に列点文を施す。199は口縁部が無文帶で口唇部に地文を

土 坨 一 覧 表

番号	規 模 (cm)			平 面 形	断面形	土 坤 磨 長軸方向	出 土 遺 物
	長軸	短軸	深さ				
1	130	69	12	椭円形	②		
2	56	46	8	椭円形	②		
3	75	55	17	椭円形	②		
4	102	66	11	椭円形	②		
5	98	70	20	小判形	②		
6	98	70	16	椭円形	②		第104図263、縄文中期末
7	98		15	円形	②		
8	82	71	21	椭円形	②		
9	98	83	8	椭円形	②		
10	105	80	20	椭円形	①		
11	80		40	円形	④		第104図264・265、縄文中期末
12	116	96	10	椭円形	②		
13	48		51	円形	⑨		第110図100(磨石)・101(くぼみ石)
14	60	45	43	椭円形	②		第108図81(石錐)
15	68		18	円形	①		
16	74		37	円形	④		第104図266～268、縄文中期末
17	87		21	円形	②		第104図269・270、縄文中期末
18	95	54	15	椭円形	②		
19	69		10	円形	②		
20	96	85	52	椭円形	⑩		第104図271・272、縄文中期末
21	116	100	25	椭円形	②		第104図273、縄文中期末
22	80	65	20	椭円形	②		
23	84	73	7	椭円形	②		
24	83	56	9	不整形	②		
25	98	68	37	椭円形	⑪		第104図274、縄文
26	170	120	22	椭円形	②		
27	90		22	円形	①		
28	95		10	円形	②		第104図275、弥生
29	98		6	円形	②		
30	94		12	円形	②		
31	140	127	30	椭円形	②		
32	80	70	20	椭円形	④		
33	94	72	16	椭円形	②		
34	80		23	円形	①		
35	65		15	円形	②		



番号	規 模 (cm)			平 面 形	断面形	土 塚 基 長軸方向	出 土 遺 物
	長軸	短軸	深さ				
36	122	82	15	小 判 形	②		
37	113		36	円 形	②		
38	153	68	40	小 判 形	②		
39	73		8	円 形	②		
40	120	98	10	椭 圓 形	②		
41	116		13	円 形	②		
42	125		8	円 形	②		
43	96		13	円 形	②		
44	102		23	円 形	②		
45	49		25	円 形	②		
46	88		21	円 形	①		
47	104	100	12	方 形	②		第104図276、弥生
48	118	98	23	椭 圓 形	②		第100図231、第104図277、弥生
49	90	72	11	小 判 形	②		
50	146		29	円 形	①		第104図278、縄文中期末
51	147	127	34	椭 圓 形	②		
52	115	77	8	椭 圓 形	①		第104図279、弥生
53	173	65	15	長 円 形	②		
54	112	88	8	椭 圓 形	②		
55	114	110	25	不 整 形	①		第104図280、弥生
56	137	128	28	椭 圓 形	②		
57	92	67	17	不 整 形	②		
58	148		20	円 形	②		
59	82	58	13	椭 圓 形	②		
60	70		10	円 形	②		第104図281、弥生
61	68		20	円 形	①		
62	153	130	30	椭 圓 形	④		
63	104		29	円 形	②		
64	191	163	18	椭 圓 形	②		第100図232・233、第104図282、弥生
65	110	74	30	椭 圓 形	①		第104図283、縄文中期末、第110図102(磨石)
66	87	76	28	椭 圓 形	④		
67	80		23	円 形	②		第105図284・285、弥生
68	94		8	円 形	②		第105図286・287、縄文中期末
69	62		13	円 形	②		
70	130	115	12	椭 圓 形	②		

番号	規 模 (cm)			平面形	断面形	土 塚 墓 長軸方向	出 土 遺 物
	長軸	短軸	深さ				
71	136	123	21	楕円形	②		第100図234
72	96		9	円 形	②		
73	93	72	10	楕円形	②		
74	68		26	円 形	⑩		
75	146	98	43	小判形	③		
76	128	112	6	楕円形	②		
77	230	153	49	不整形	②		第100図235、第105図288～291、縄文後期初頭
78	135		95	円 形	⑧		第105図292、縄文後期初頭、第108図82(石匙)
79	130	110	35	楕円形	①		第105図293～295、縄文後期初頭
80	103	92	32	楕円形	②		
81	97	67	11	楕円形	②		
82	120	102	82	不整形	⑩		第100・101図236～238、第105図296、縄文、第108図83(石匙)
83	112	96	38	楕円形	②		
84	118	98	59	不整形	⑩		第108図84(磨製石斧)、85(ヘラ状石器)
85	142	135	50	楕円形	④		
86	128	98	28	不整形	②		第105図297～300、縄文後期初頭、第108図86(搔器)
87	142	67	8	小判形	②		
88	114	82	7	楕円形	①		
89	156	105	28	楕円形	②		
90	76		105	円 形	⑪		
91	79	69	72	楕円形	⑦		
92	108	68	24	楕円形	②		
93	150	126	3	楕円形	②		
94	66	50	7	楕円形	②		
95	152	140	7	楕円形	②		
96	90		6	円 形	②		
97	140	115	15	楕円形	②		第108図87(ヘラ状石器)
98	127	90	72	不整形	⑥		第101図239・240、第105図301、縄文後期初頭
99	88	70	27	不整形	②		
100	93	75	18	不整形	②		
101	95	85	43	楕円形	③		
102	45		5	円 形	①		
103	218	188	65	不整形	①		第106図302・303、縄文後期初頭
104	112		60	円 形	⑩		第101図241、第106図304・305、縄文後期初頭
105	176	128	50	楕円形	②		第106図306～308、縄文後期初頭、第108図88(石匙)

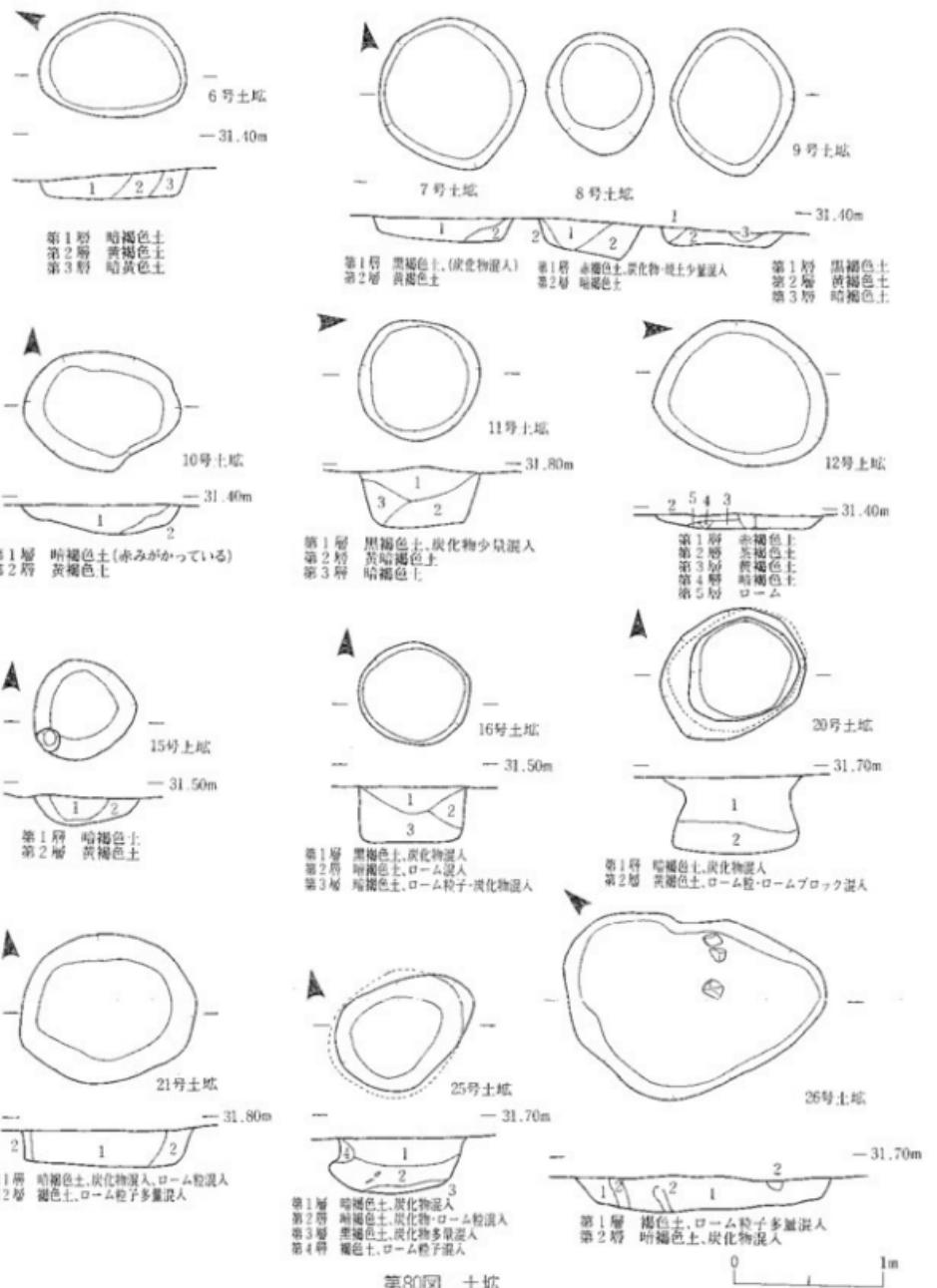
番号	規 模 (cm)			平 面 形	断面形	土 埼 墓 長軸方向	出 土 遺 物
	長軸	短軸	深さ				
106	156		79	円 形	⑨		
107	133	123	30	椭 圆 形	②		第106図309、縄文後期初頭、第108図89（振器）
108	70	60	7	椭 圆 形	②		
109	145		20	円 形	④		第106図310、縄文後期初頭
110	64		10	円 形	②		
111	117	66	27	小 判 形	③		
112	130		31	円 形	②		
113	129		21	円 形	②		第106図311、縄文後期初頭、第108図90（磨製石斧）
114	93		29	円 形	③		
115	100		8	円 形	②		
116	88		40	円 形	④		
117	123	111	57	椭 圆 形	⑨		第106図312、縄文後期初頭
118	208	105	7	不 整 形	②		
119	60		43	円 形	⑨		
120	55	45	11	椭 圆 形	②		
121	130	110	20	椭 圆 形	②		
122	80	53	42	椭 圆 形	⑨		
123	98	84	19	椭 圆 形	②		
124	65	55	37	椭 圆 形	②		
125	85		16	円 形	①		
126	115	78	30	小 判 形	③		
127	130	73	20	小 判 形	②		
128	112	68	22	小 判 形	②		
129	77		31	円 形	③		
130	145	91	28	不 整 形	②		
131	150	90	30	椭 圆 形	②		
132	120	54	18	小 判 形	③	N 52° E	
133	98	46	12	小 判 形	②	N 54° W	
134	118	46	16	小 判 形	②	N 72° W	
135	120	105	47	不 整 形	⑨		
136	168	125	85	不 整 形	⑨		
137	135	79	22	長 方 形	②	N 6° E	
138	155		113	円 形	⑩		第106図313・314、縄文後期初頭
139	128		23	不 整 形	②	N 56° E	第106図315、縄文後期初頭
140	88		15	円 形	②		第106図316・317、縄文後期初頭

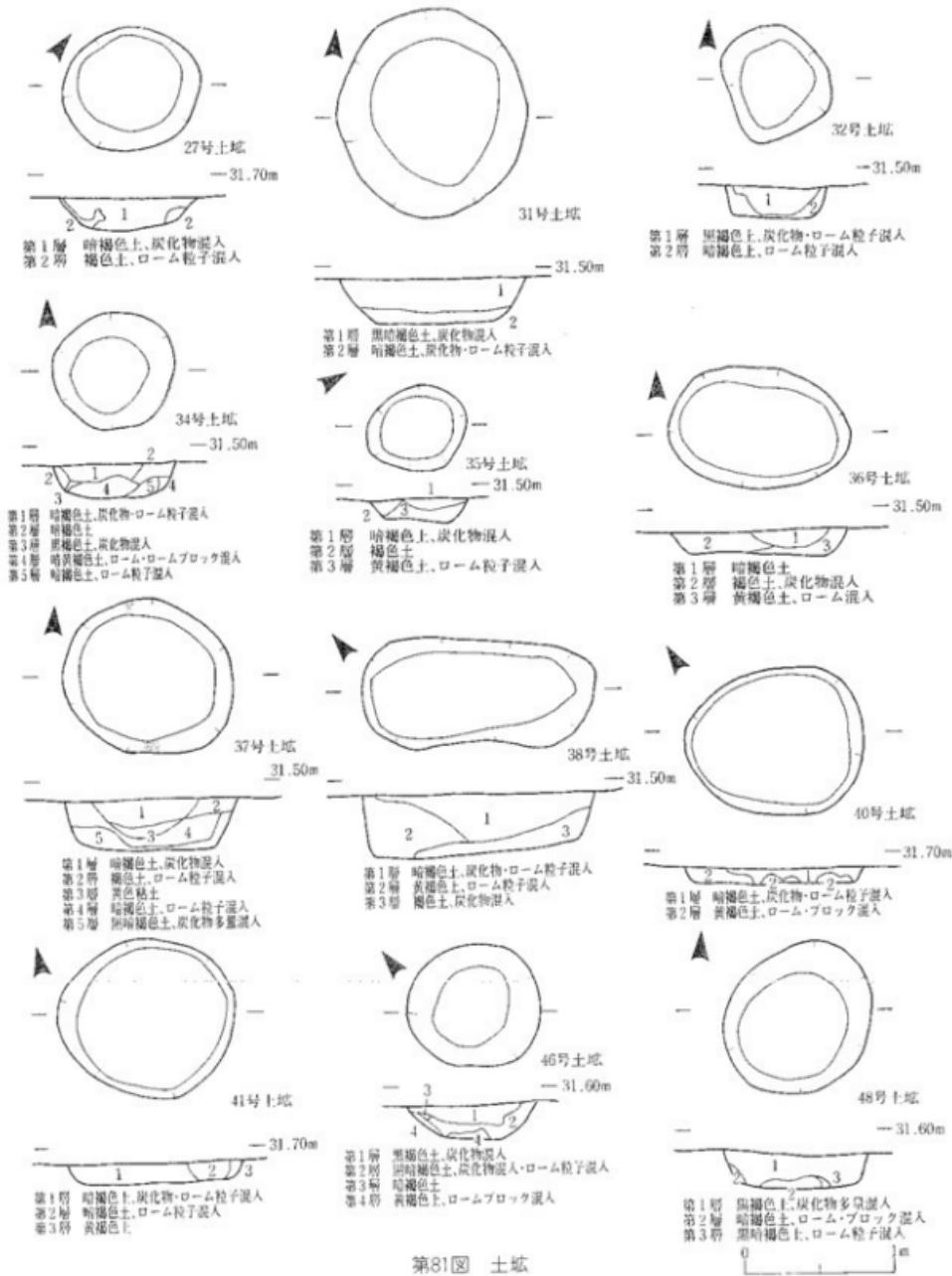
番号	規 模 (cm)			平 面 形	断面形	土 塚 基 長軸方向	出 土 遺 物
	長軸	短軸	深さ				
141	105	80	12	椭 円 形	②		
142	110	68	12	小 判 形	②	N17°W	
143	113	80	35	不 整 形	②		
144	100	80	19	椭 円 形	②		第110図103 (石皿)
145	78	70	14	方 形	①		
146	78	60	64	椭 円 形	②		
147	141		36	円 形	②		第101図242・243、弥生
148	130	50	12	不 整 形	②		
149	78	54	14	椭 円 形	②		
150	100		13	方 形	②		
151	90		25	円 形	②		
152	118		25	円 形	②		第106図318、縄文後期初頭
153	65		8	円 形	②		
154	148	89	10	小 判 形	②		
155	106	91	22	椭 円 形	②		
156	87	83	12	椭 円 形	②		
157	144	96	26	椭 円 形	②		第102図244・245、縄文後期初頭
158	173	128	20	椭 円 形	②		第108図91 (磨製石斧)
159	107	75	25	小 判 形	②		
160	83		88	円 形	⑪		第102図246
161	71		20	円 形	②		
162	132		20	円 形	②		
163	144	128	88	椭 円 形	⑪		第102図247・248、縄文後期初頭
164	143	104	37	椭 円 形	②		第106図319、弥生
165	110	55	8	長 方 形	②		
166	60		17	円 形	②		
167	108	85	35	椭 丸 方 形	②		
168	104	74	9	椭 円 形	②		
169	84	68	18	椭 円 形	②		
170	142	96	22	椭 円 形	②		第108図92・93 (石鍬)・94 (石匙)
171	125	96	36	不 整 形	②		
172	63		10	円 形	②		第106図320、弥生
173	81		48	円 形	⑤		
174	109	66	10	小 判 形	②	N19°E	
175	139	79	12	小 判 形	②	N52°E	

番号	規 模 (cm)			平 面 形	断面形	土 塚 蓋 長軸方向	出 土 遺 物
	長軸	短軸	深さ				
176	109	67	48	不 整 形	②		
177	150	118	33	椭 圆 形	②	N35° E	第106図321、弥生
178	138	107	34	椭 圆 形	②	N15° E	第106図322、弥生
179	134	70	26	小 判 形	②	N 8° E	
180	122		22	円 形	②		
181	180	98	33	小 判 形	②	N47° E	第106図323、弥生
182	114	123	17	小 判 形	②	N35° E	第106図324、弥生
183	98	58	12	小 判 形	②	N 4° E	
184	128	63	25	小 判 形	②	N64° E	
185	145	81	25	椭 圆 形	②	N18° E	
186	154	81	17	小 判 形	②	N35° E	
187	145	84	15	椭 圆 形	②	N18° E	
188	160	77	12	不 整 形	②		
189	132	74	5	不 整 形	②		
190	85	58	9	小 判 形	①		
191	84	41	10	椭 圆 形	②		
192	145	76	16	小 判 形	②	N36° E	
193	145	111	27	小 判 形	②	N41° E	
194	120	65	28	小 判 形	②	N52° E	
195	135	74	20	小 判 形	②	N13° E	
196	98	86	10	隅 丸 長 方 形	②		
197	128	105	21	不 整 形	②		
198	148	68	9	小 判 形	②	N33° E	
199	111	65	14	小 判 形	②	N 5° W	
200	108	100	16	椭 圆 形	②		
201	119	83	19	小 判 形	②	N51° E	第106図325、弥生
202	138	66	12	小 判 形	②	N 4° W	
203	109	84	8	椭 圆 形	②		
204	204	105	8	不 整 形	②	N53° E	
205	96	75	8	椭 圆 形	②		
206	116	78	21	小 判 形	②	N34° E	
207	102	70	104	隅 丸 長 方 形	②	N52° E	
208	100	70	26	小 判 形	②	N35° E	
209	128	50	7	隅 丸 長 方 形	②		
210	117	68	11	隅 丸 長 方 形	②		

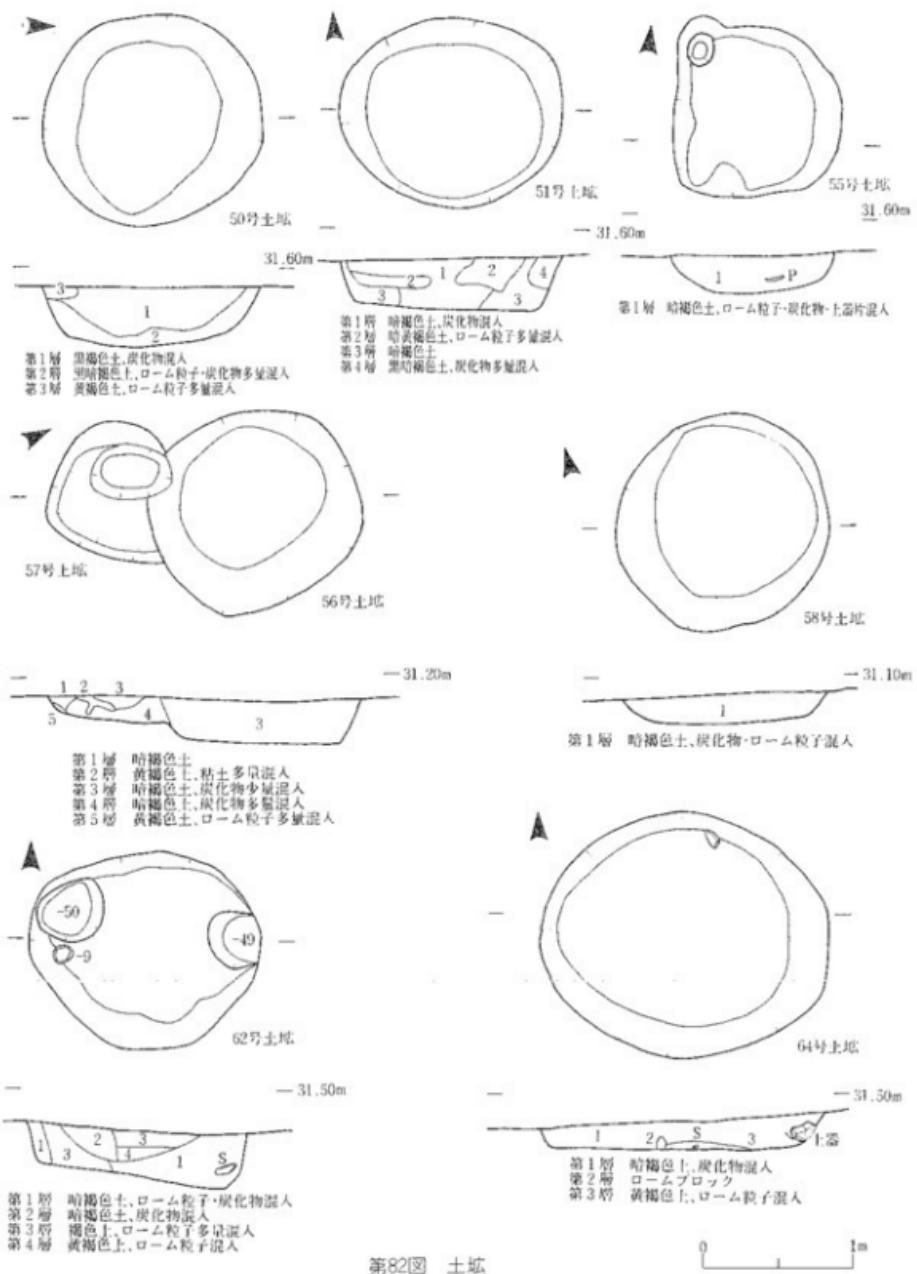
番号	規 模 (cm)			平 面 形	断面形	土 埴 墓 長軸方向	出 土 遺 物
	長軸	短軸	深さ				
211	125	70	10	小 判 形	②	N33°W	
212	121	73	13	椭 圆 形	②		
213	96		22	円 形	②		第106図326、弥生
214	154	89	14	小 判 形	②	N39° E	
215	120	83	13	小 判 形	②	N55° E	
216	125	100	25	小 判 形	②	N 4° W	
217	153	102	13	小 判 形	②	N65° E	第106図327、弥生
218	173	113	15	小 判 形	②	N20° E	
219	153	101	20	小 判 形	②	N29° E	
220	116	72	36	楕丸長方形	②	N51° E	
221	112	70	12	小 判 形	②	N59° W	
222	91	78	10	椭 圆 形	②		
223	95	52	22	小 判 形	②	N17° E	
224	125	46	14	小 判 形	②	N25° E	第207図1(小玉)
225	150	76	18	椭 圆 形	②	N25° E	
226	122	50	13	小 判 形	②	N41° E	
227	114	56	12	楕丸長方形	②	N108° W	
228	101	64	7	小 判 形	②	N29° E	
229	140	112	37	椭 圆 形	②		
230	204	108	35	椭 圆 形	②		
231	207	81	18	小 判 形	②	N14° W	
232	80	78	9	不 整 形	②		第102図249、弥生
233	139	112	18	不 整 形	②	N38° W	
234	138	106	10	不 整 形	②	N22° W	
235	124	95	23	椭 圆 形	②		
236	85		43	円 形	②		
237	83	77	6	椭 圆 形	②		
238	102	63	23	小 判 形	②	N22° W	
239	148	111	16	不 整 形	②	N45° W	第107図328、弥生
240	110	62	8	椭 圆 形	②		
241	140	110	10	椭 圆 形	②		
242	216	163	22	椭 圆 形	②		
243	108	91	26	椭 圆 形	②		
244	75		52	円 形	②		
245	45		36	円 形	②		

番号	規 模 (cm)			平面形	断面形	土 塚 基 長軸方向	出 土 遺 物
	長軸	短軸	深さ				
246	113	102		椭円形	⑧		
247	67	55		椭円形	⑨		
248	43			円 形	⑨		
249	83			円 形	⑨		
250	100	90		椭円形	①		
251	86	70	12	椭円形	③		
252	80	64	8	椭円形	②		
253	96		18	円 形	②		
254	112		28	円 形	②		
255	92	78	15	椭円形	③		第107図329、弥生、第110図104(くぼみ石)
256	124	95	27	椭円形	④		
257	96		16	円 形	①		
258	150	79	39	不整形	②	N16°E	第107図330、弥生、第109図95(石槍)、第207図2 (玉)・3(管玉)・4(勾玉)
259	90	84	11	椭円形	②		
260	120		25	円 形	②		
261	147	128	24	椭円形	②		
262	133	118	22	椭円形	②		第102図250・251、弥生
263	88		16	円 形	②		第107図331、弥生
264	102		34	円 形	②		
265	150		31	円 形	②		第107図332～334、縄文後期初頭、第109図96(搔器)
266	76		78	円 形	⑥		
267	156	128	21	椭円形	①		
268	98	60	63	椭円形	④		
269	75	76	74	椭円形	④		
270	233	180	31	不整形	⑧		第109図97(石鎚)
271	95		20	円 形	②		
272	132	61	46	小判形	④		第103図252・253、弥生
273	135	109	48	椭円形	⑧		
274	164	160	49	椭円形	③		第109図98(へり状石器)
275	265	110	11	不整形	③		
276	110	96	46	円 形	②		
277	125	115	63	椭円形	⑧		
278	156	135	67	椭円形	⑤		
279	226		118	円 形	②		第109図99(磨製石斧)
280	117	88	31	椭円形	③		

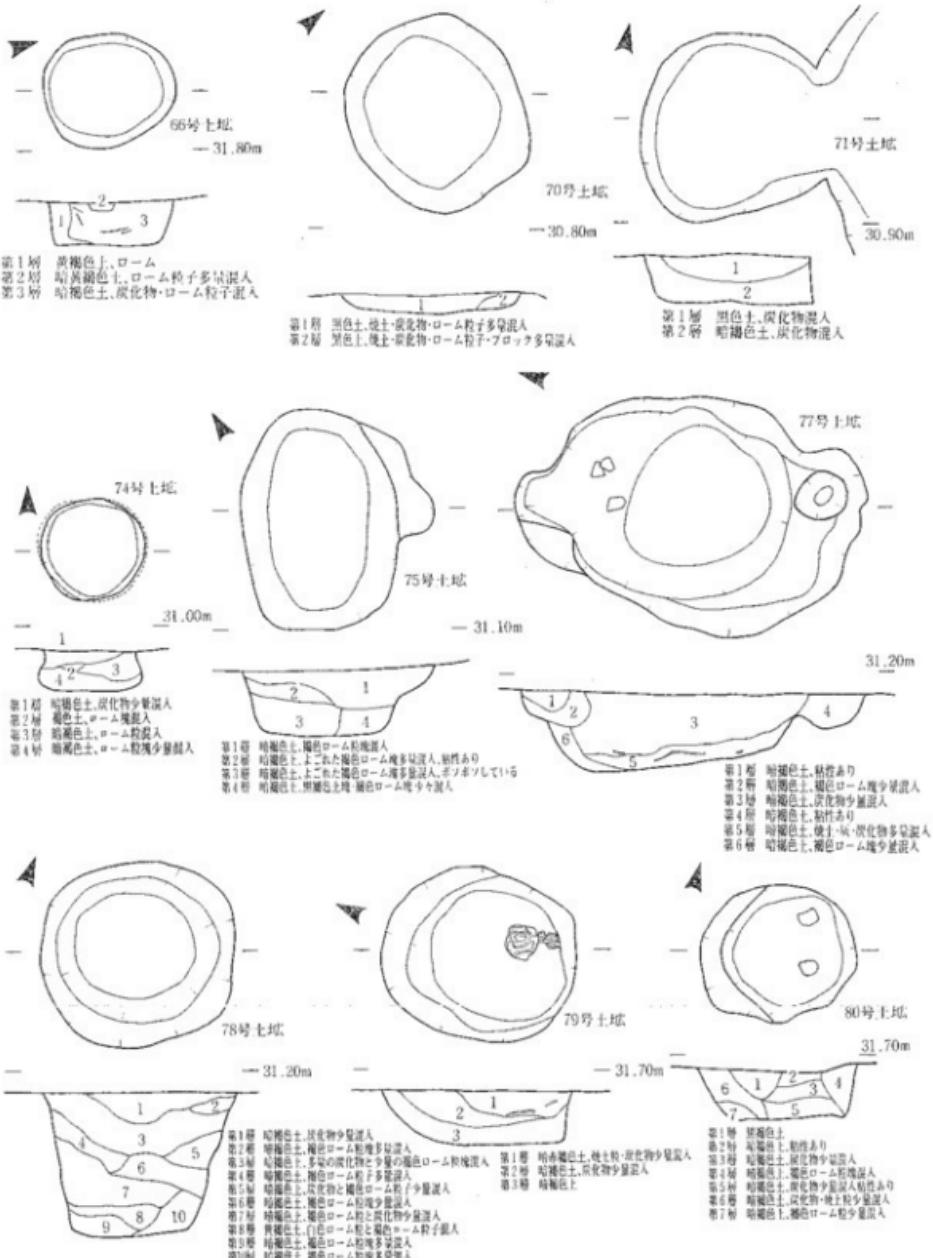




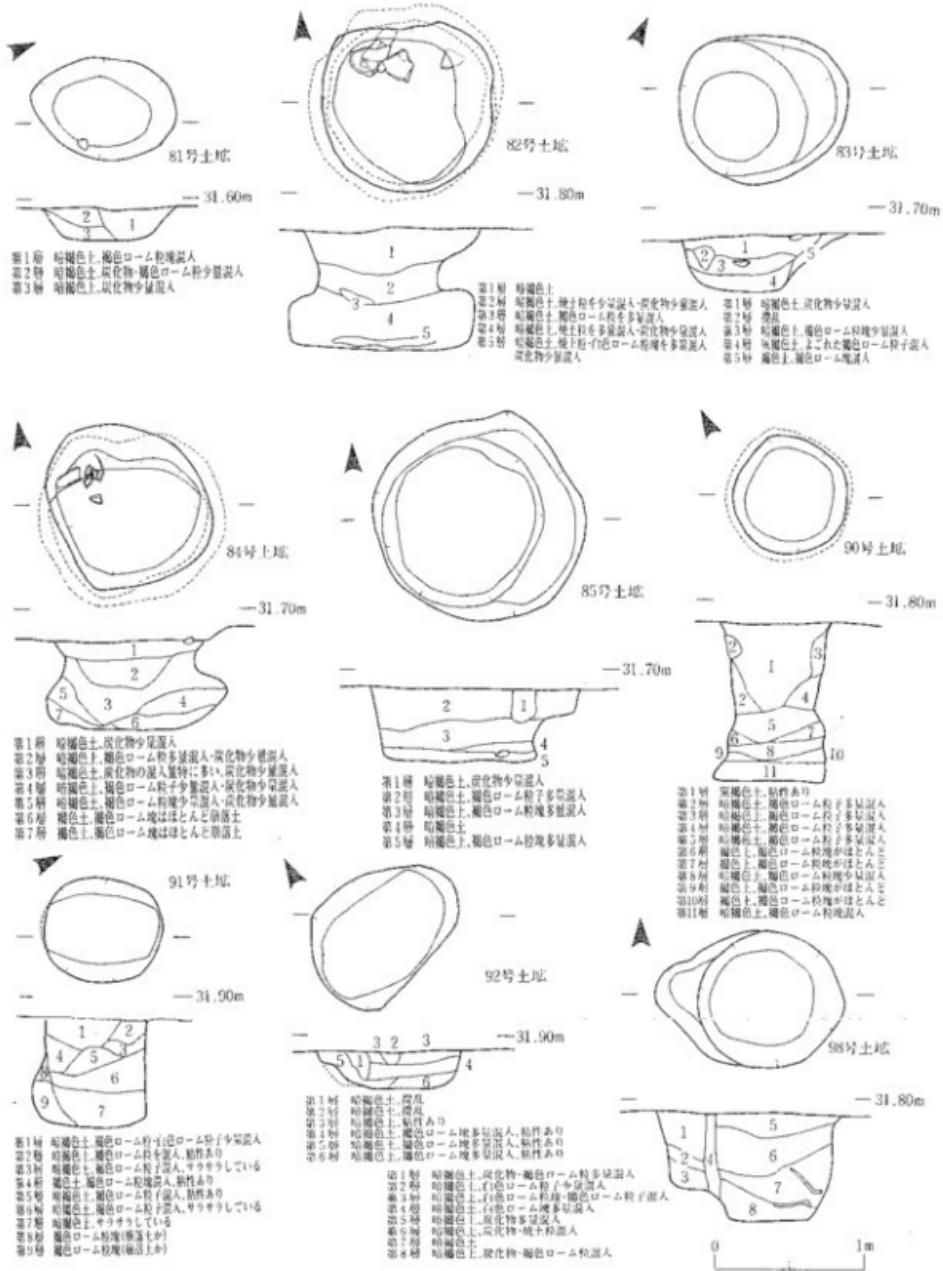
第81図 土塚



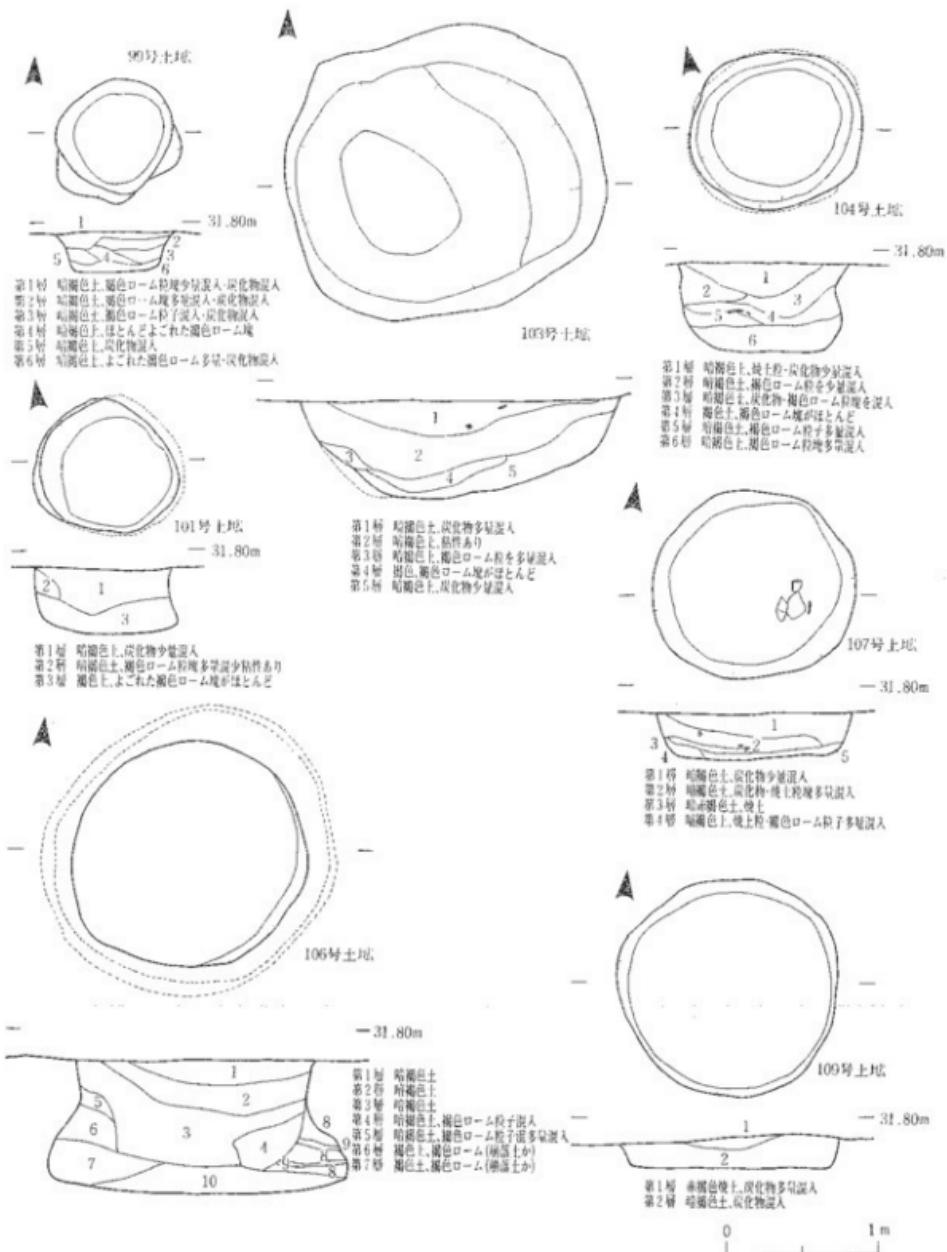
第82図 土堆



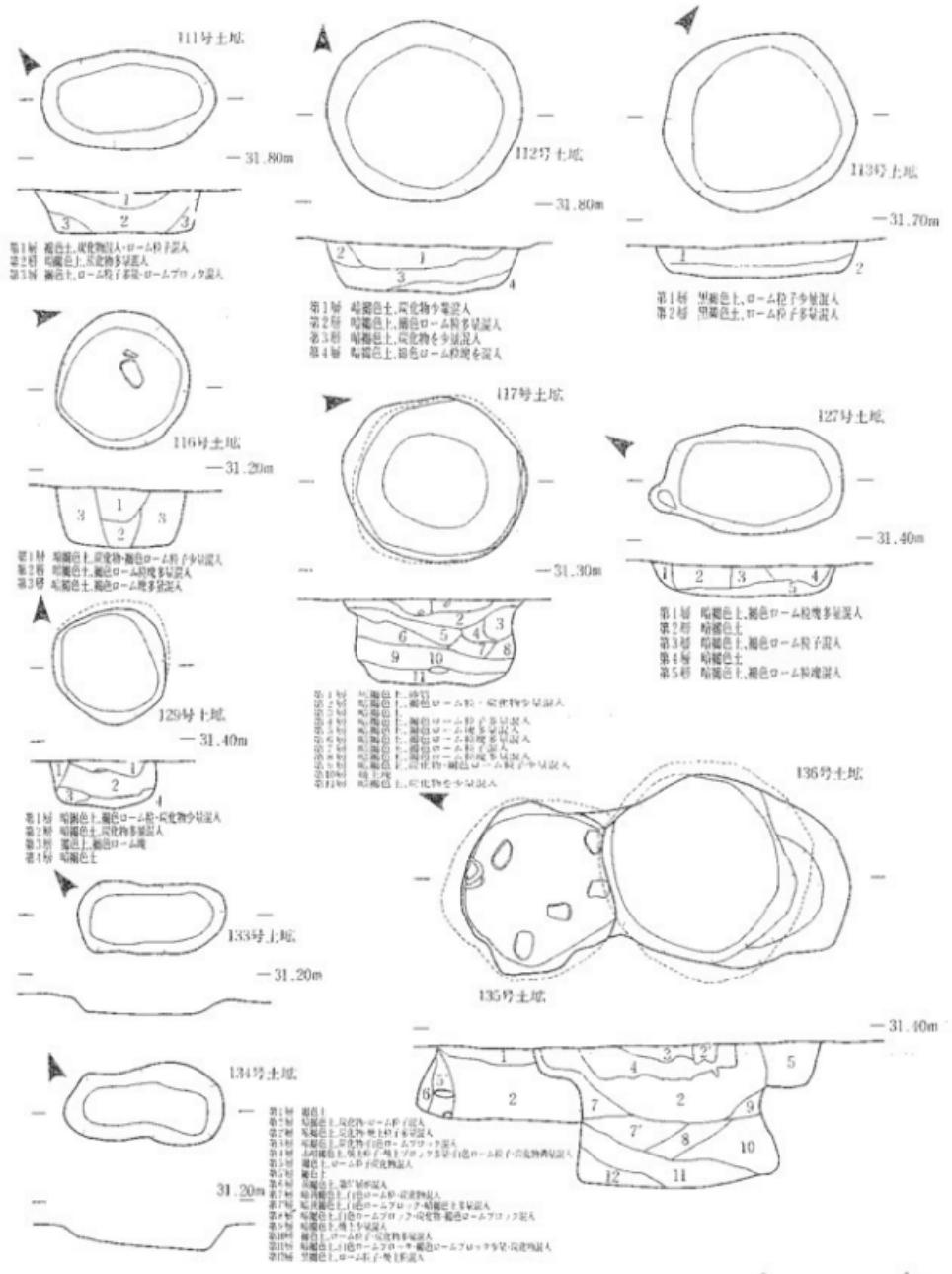
第83図 土壌



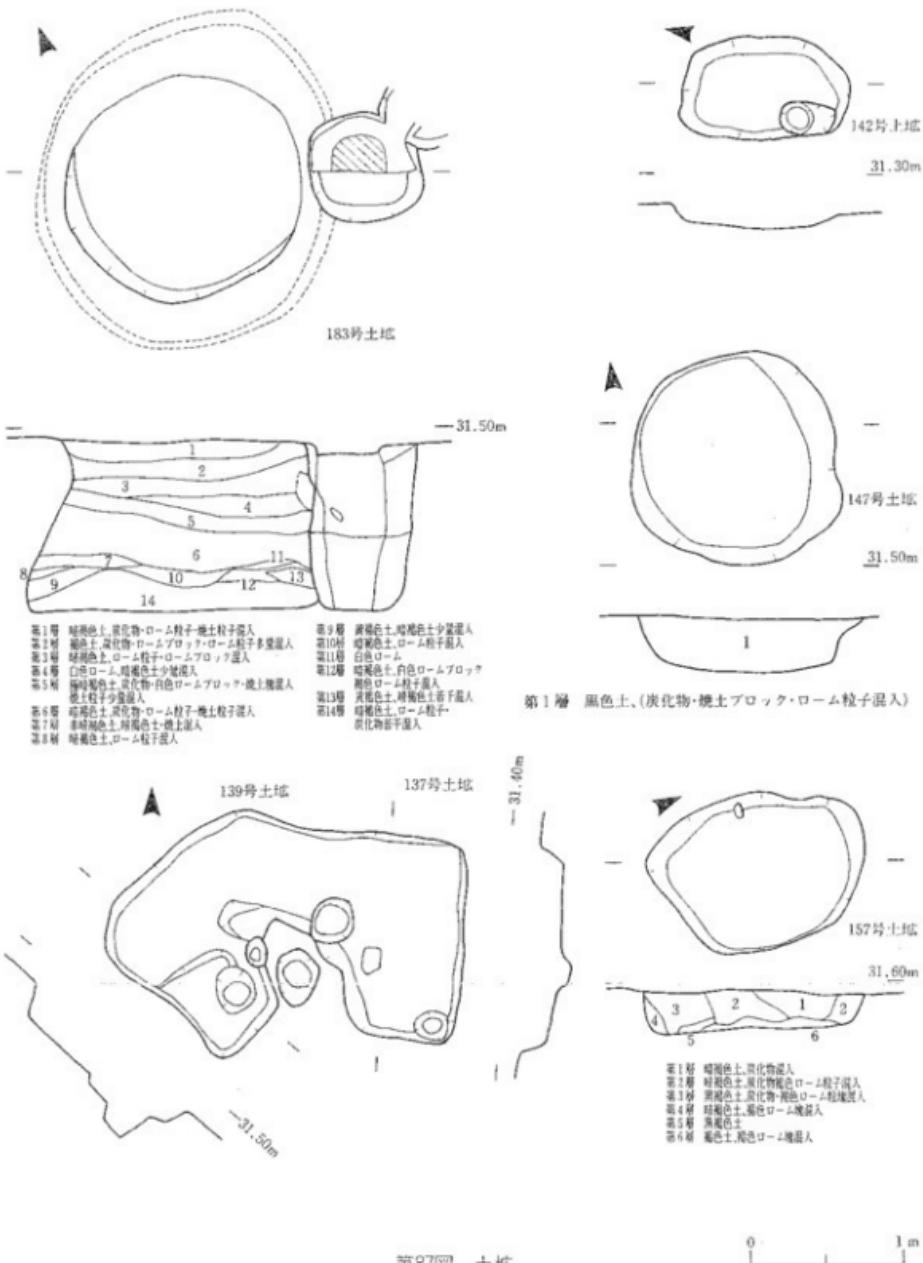
第84図 土壌

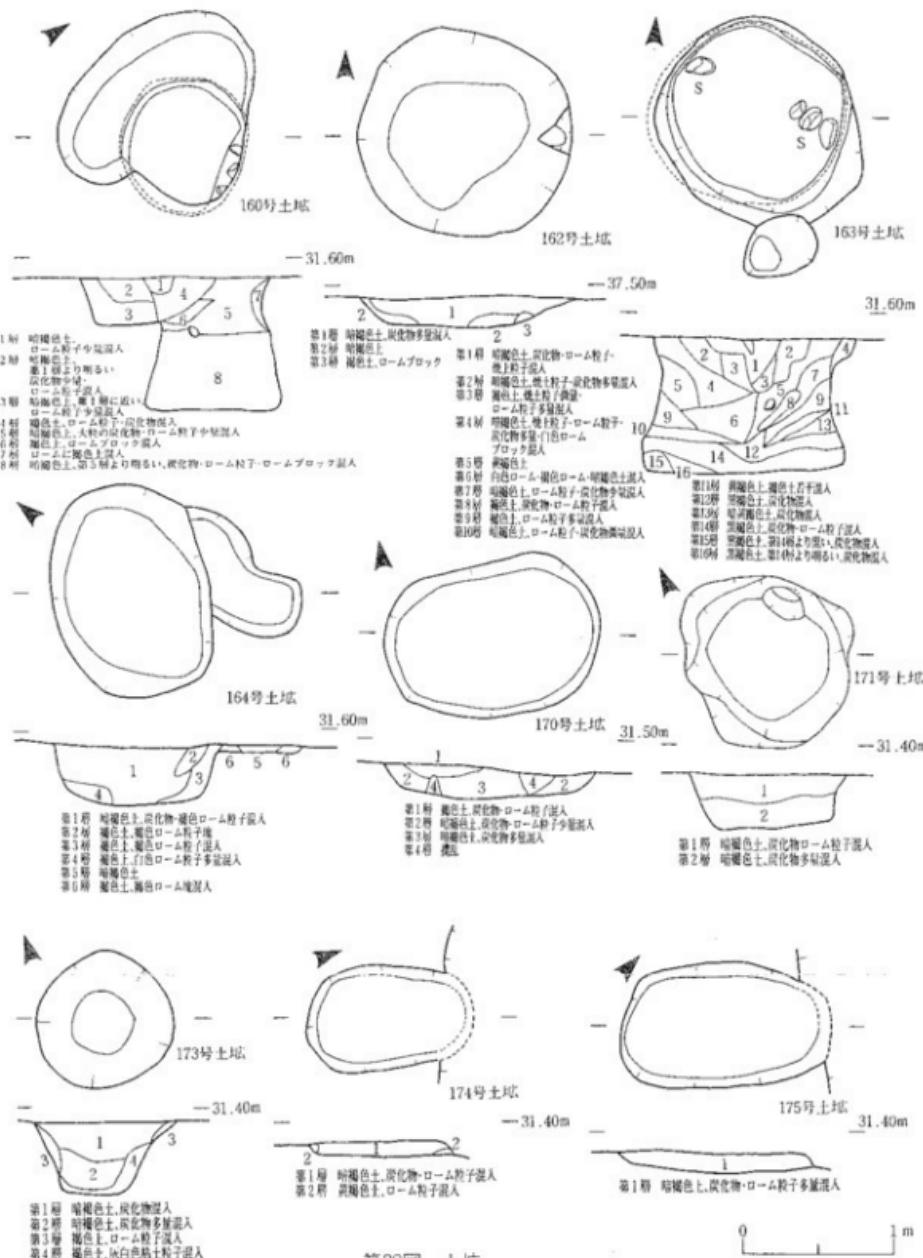


第85図 土塙

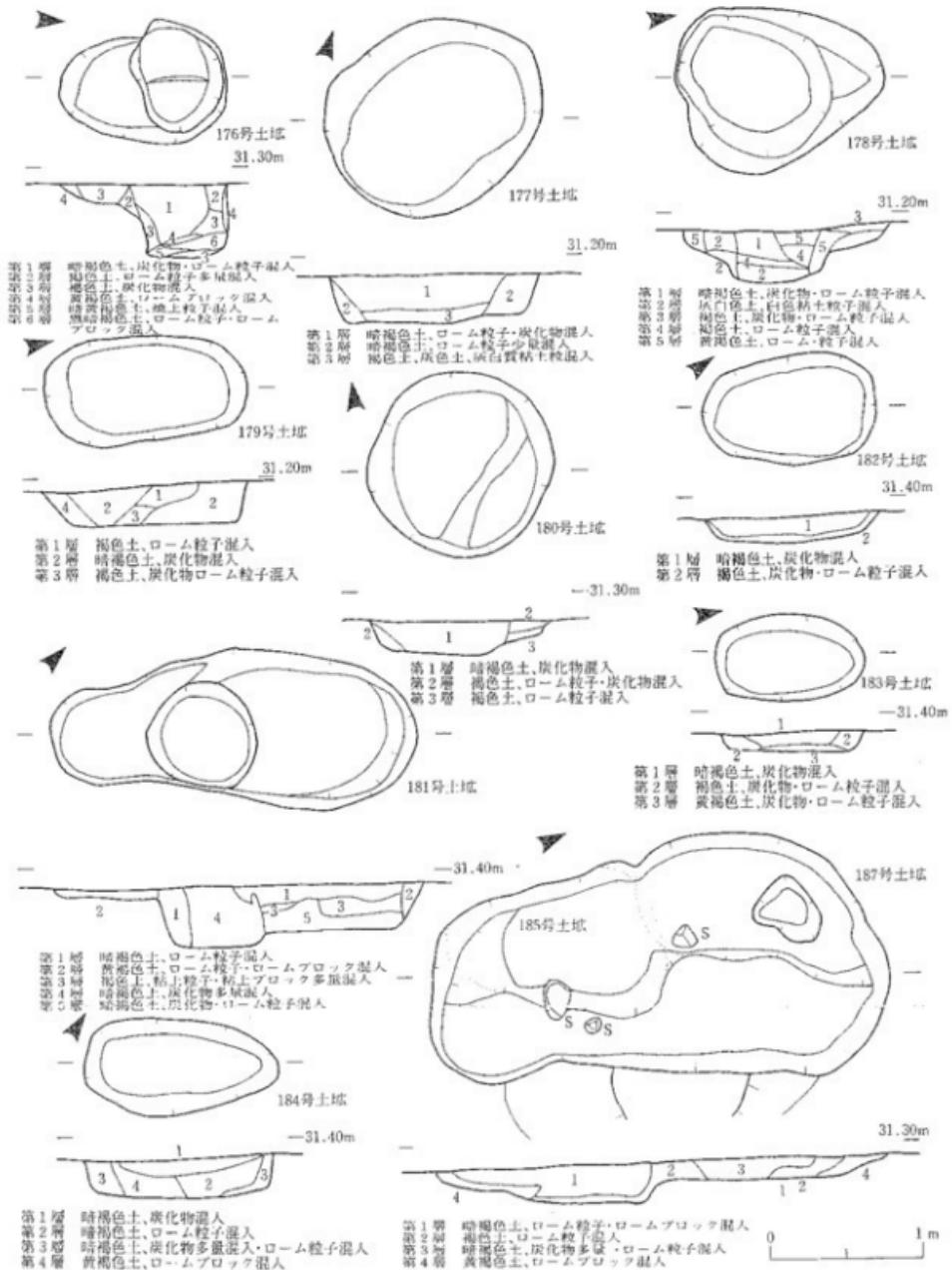


第86図 土塚

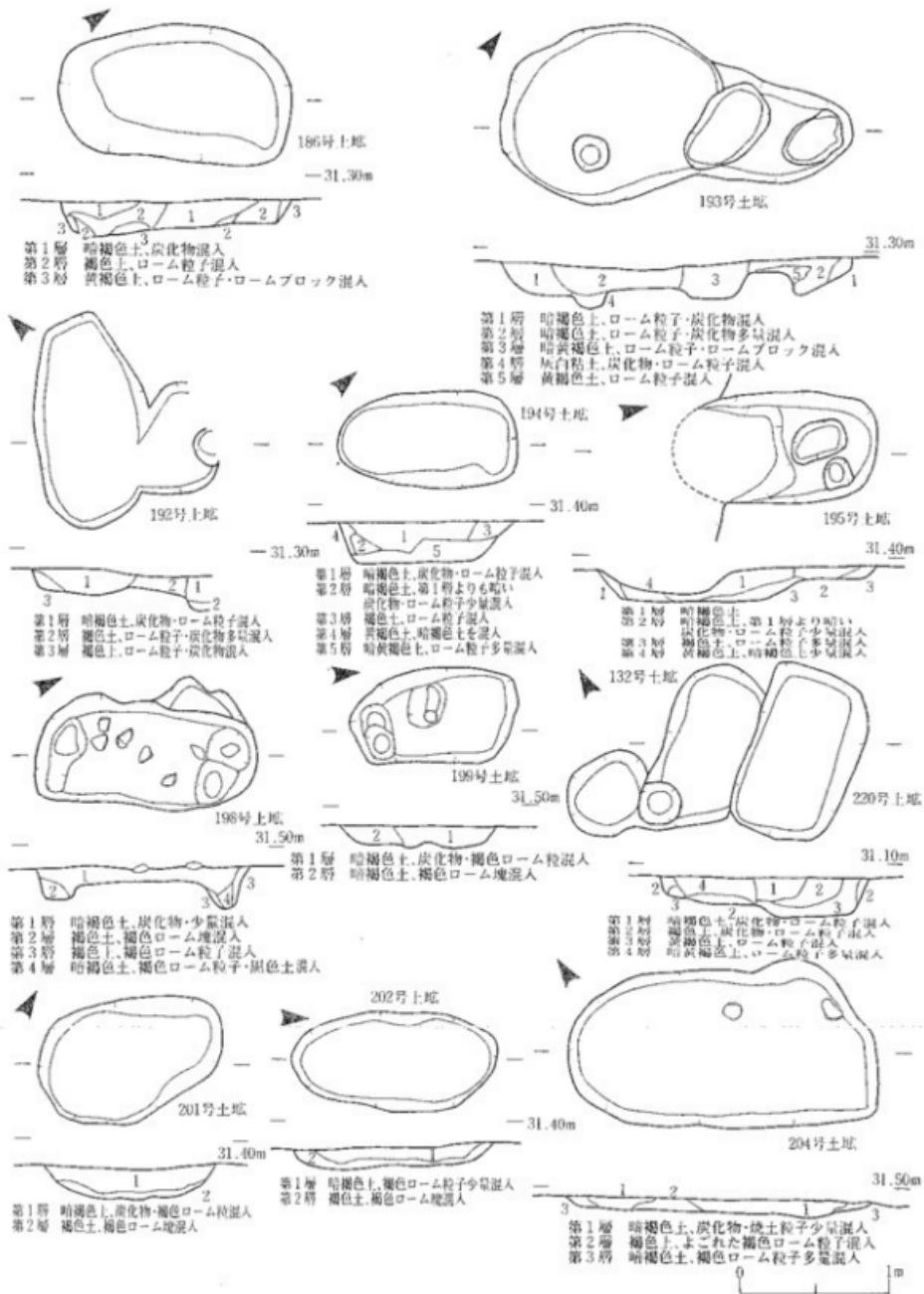




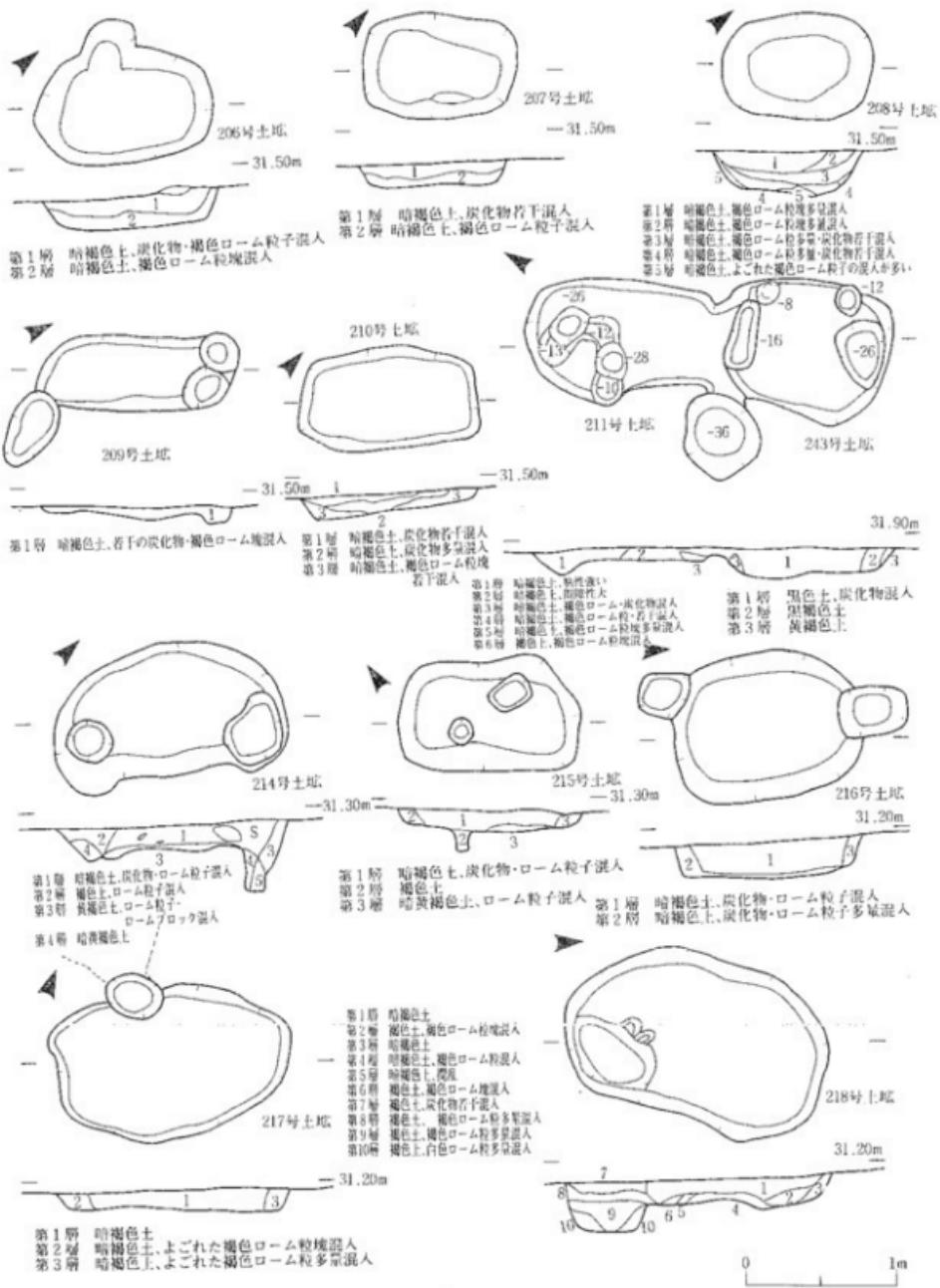
第88図 土塙



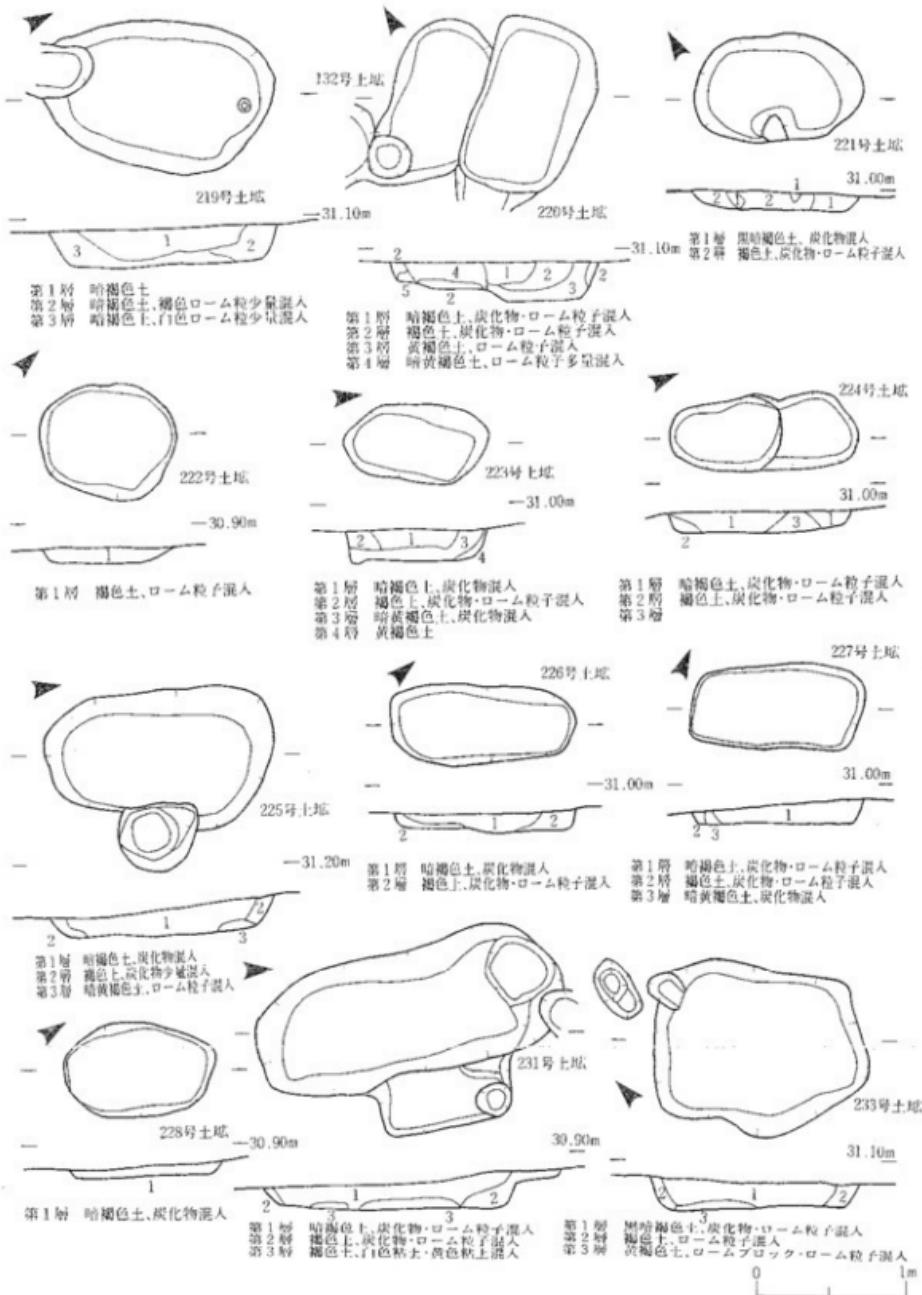
第89図 土壌



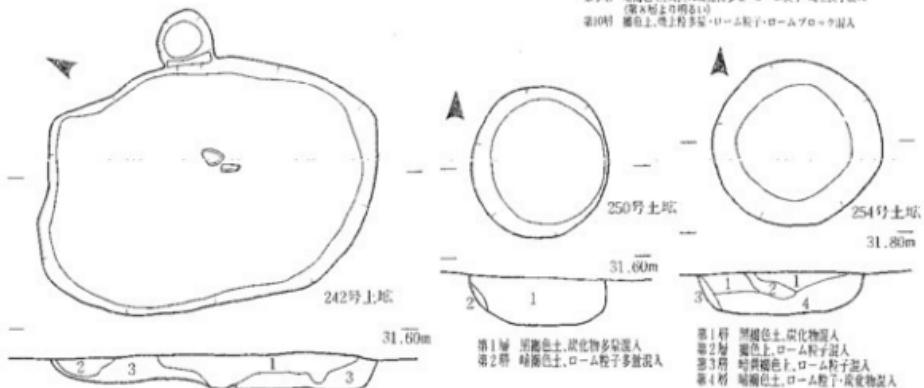
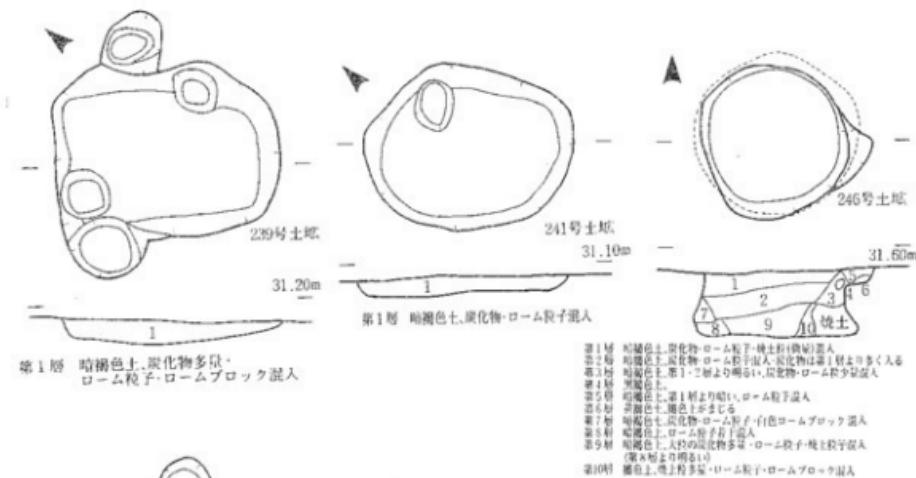
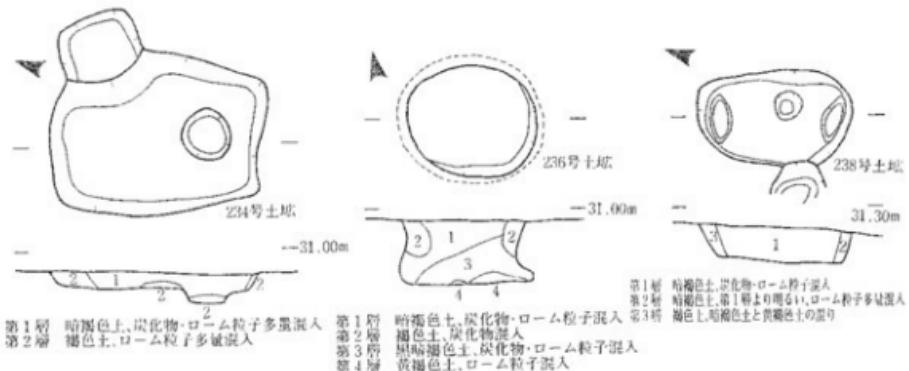
第90図 土壌



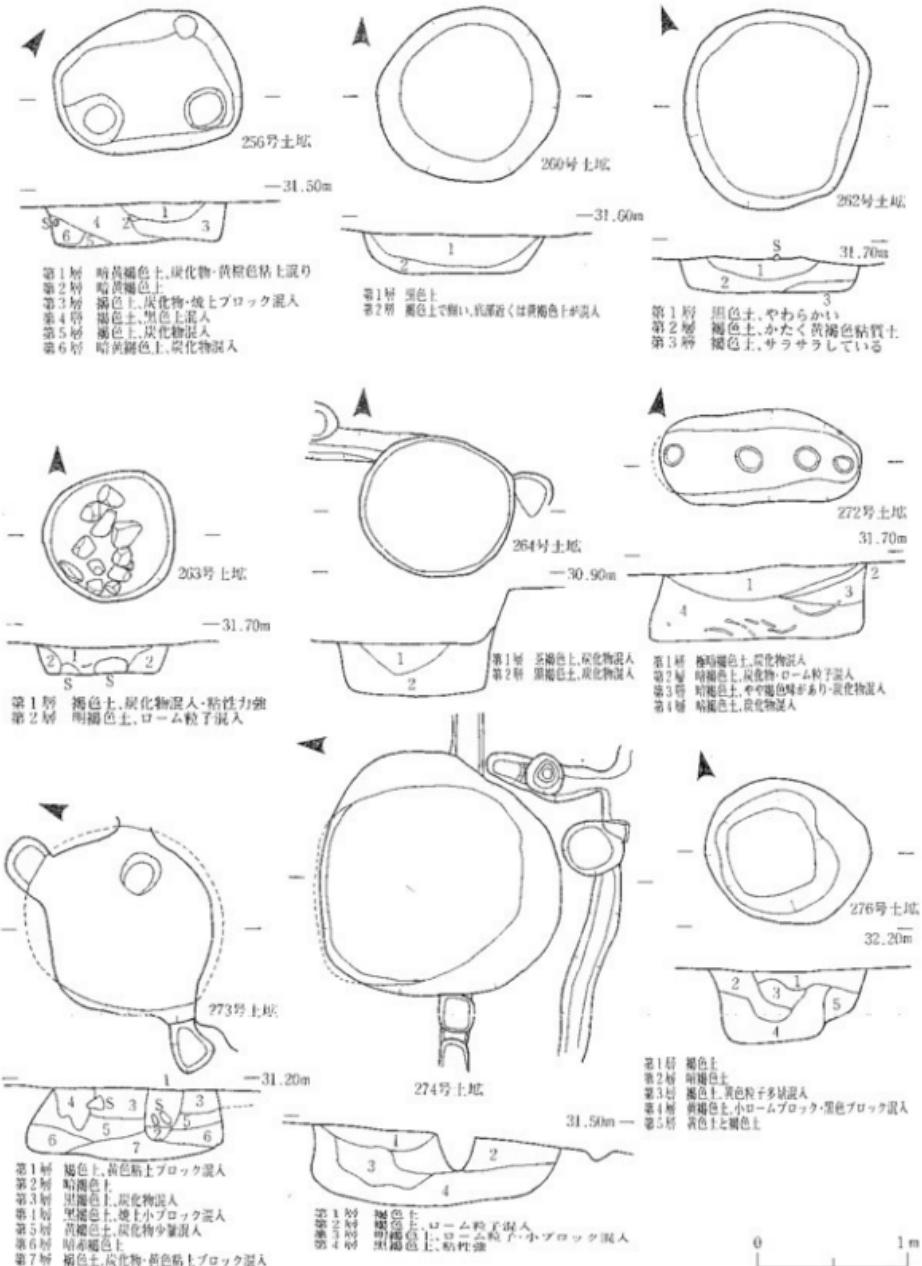
第91図 土塙



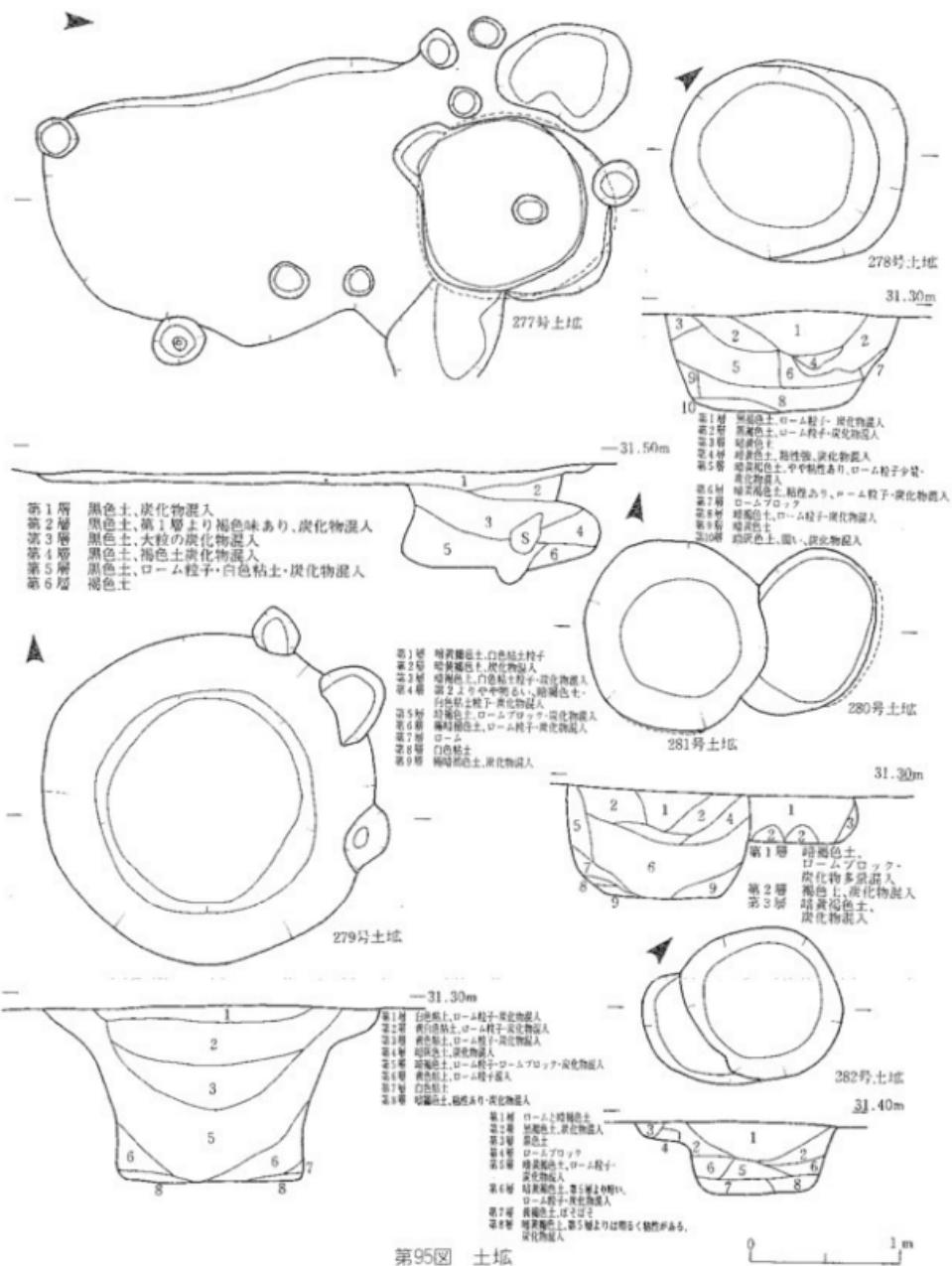
第92図 土壌



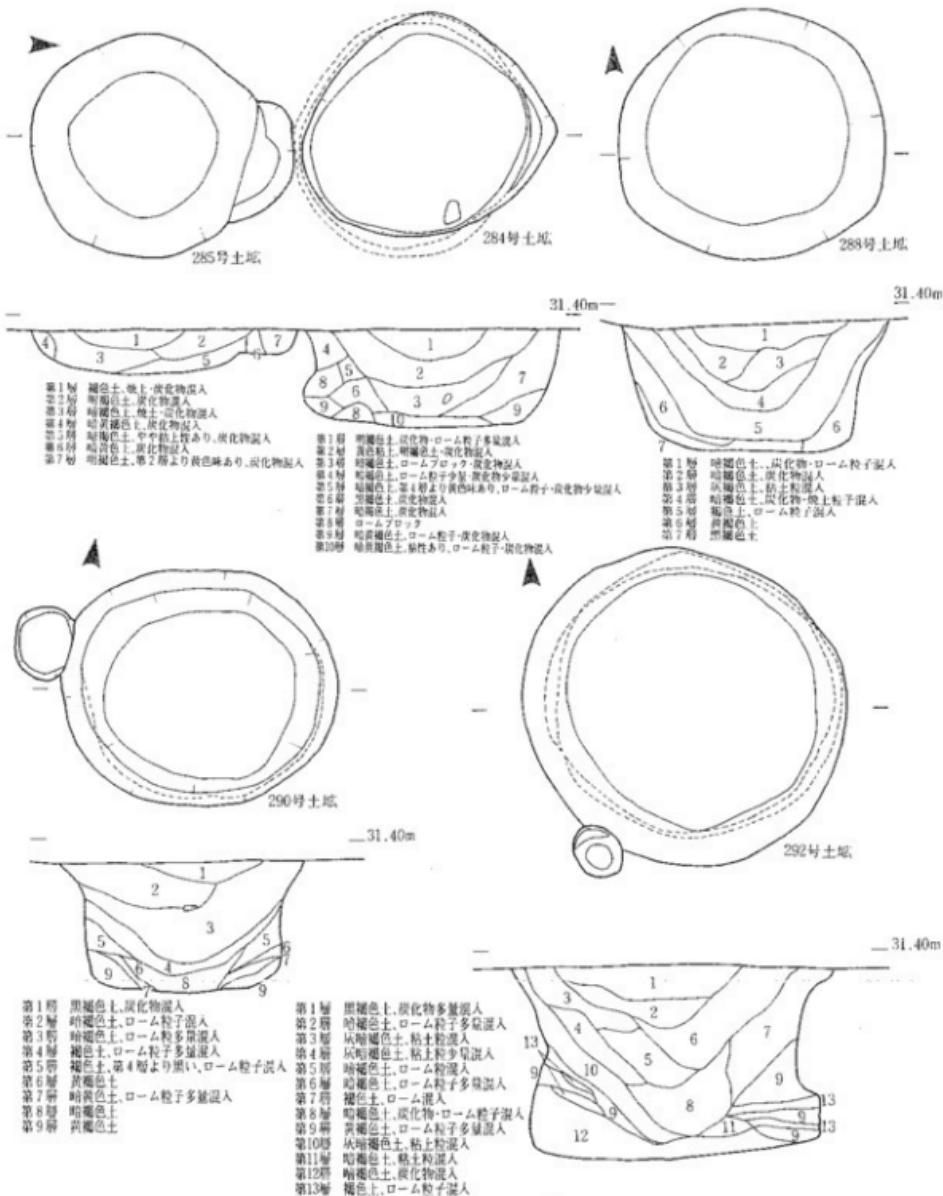
第93図 土壠



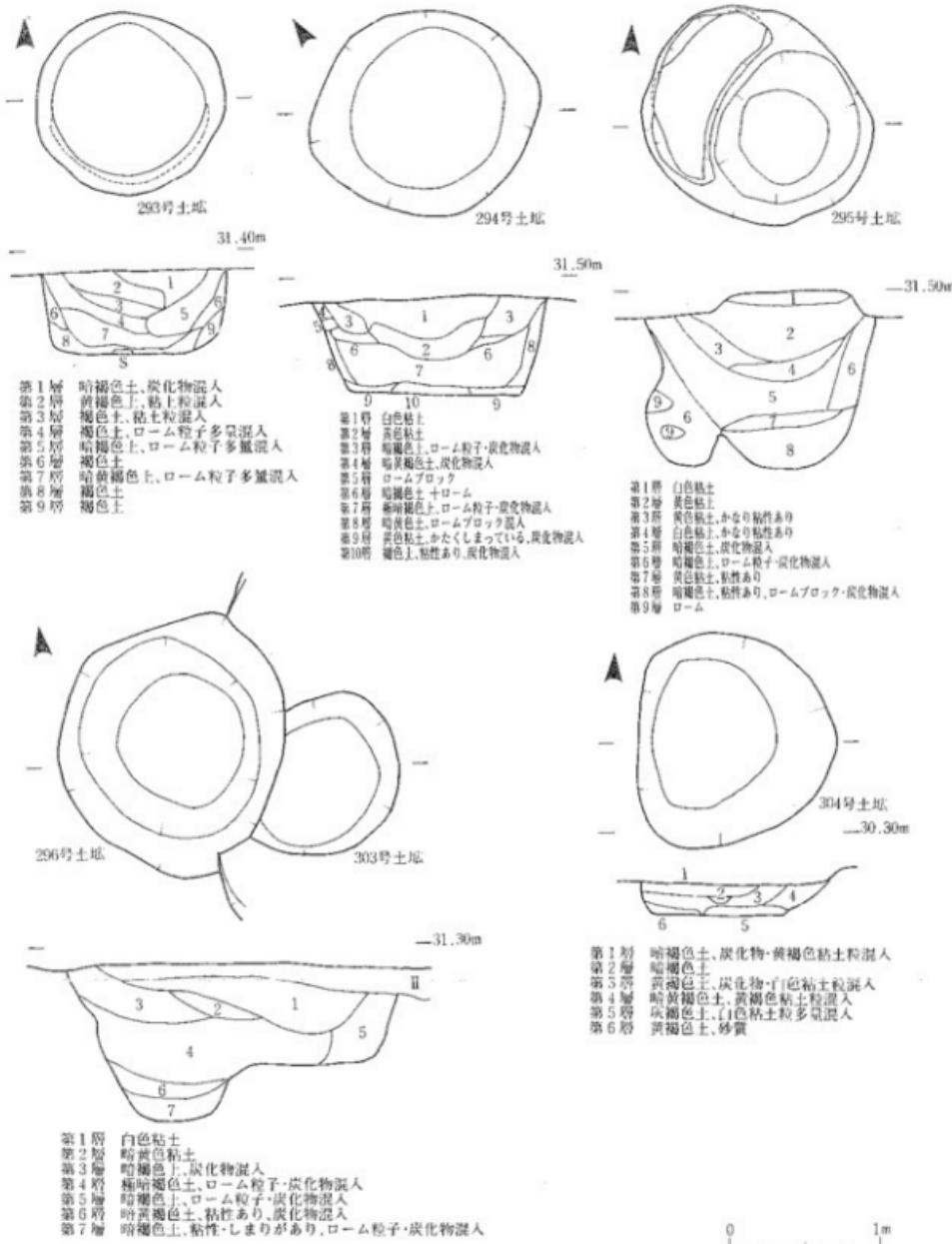
第94図 土塙



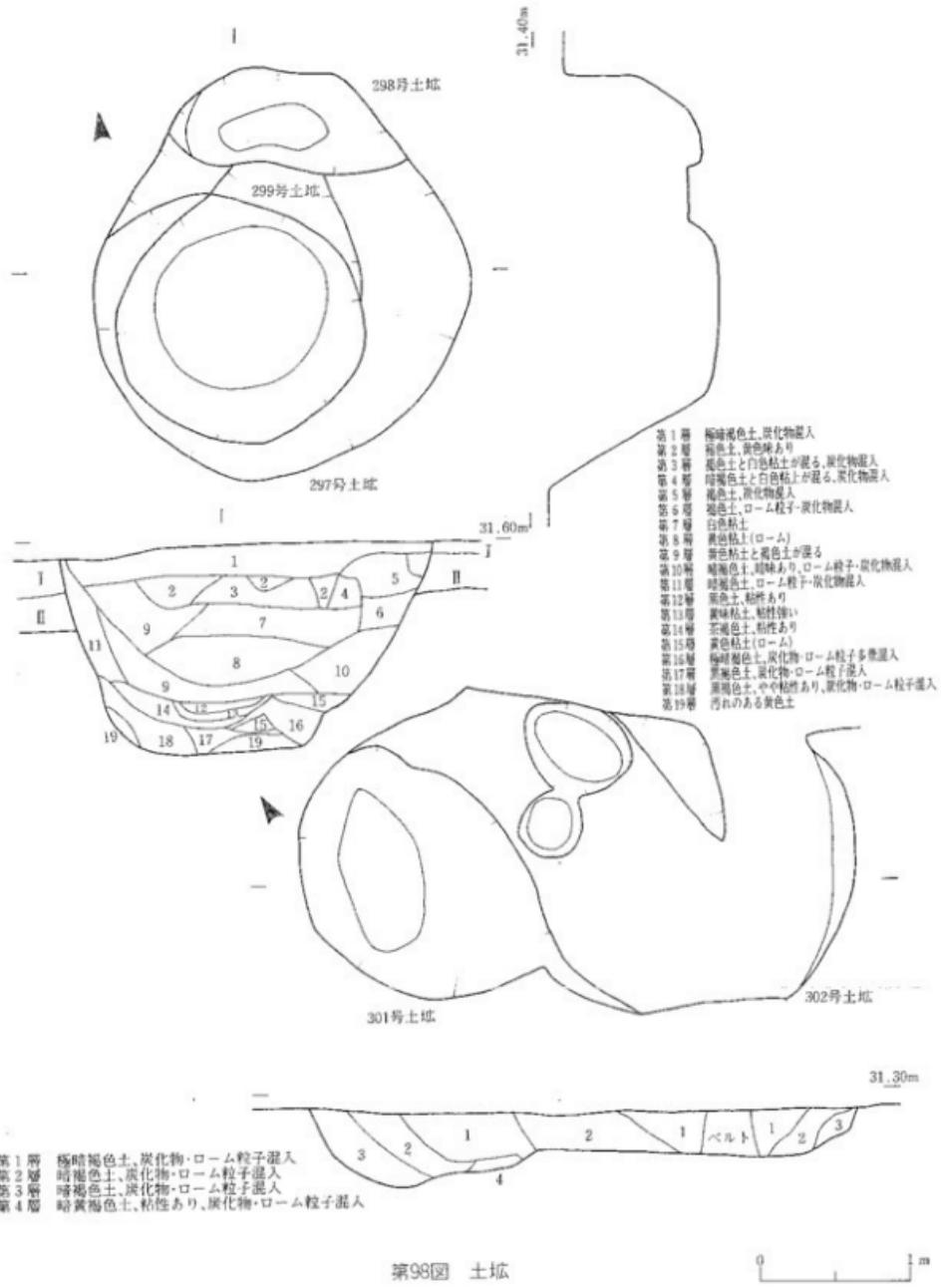
第95図 土壌



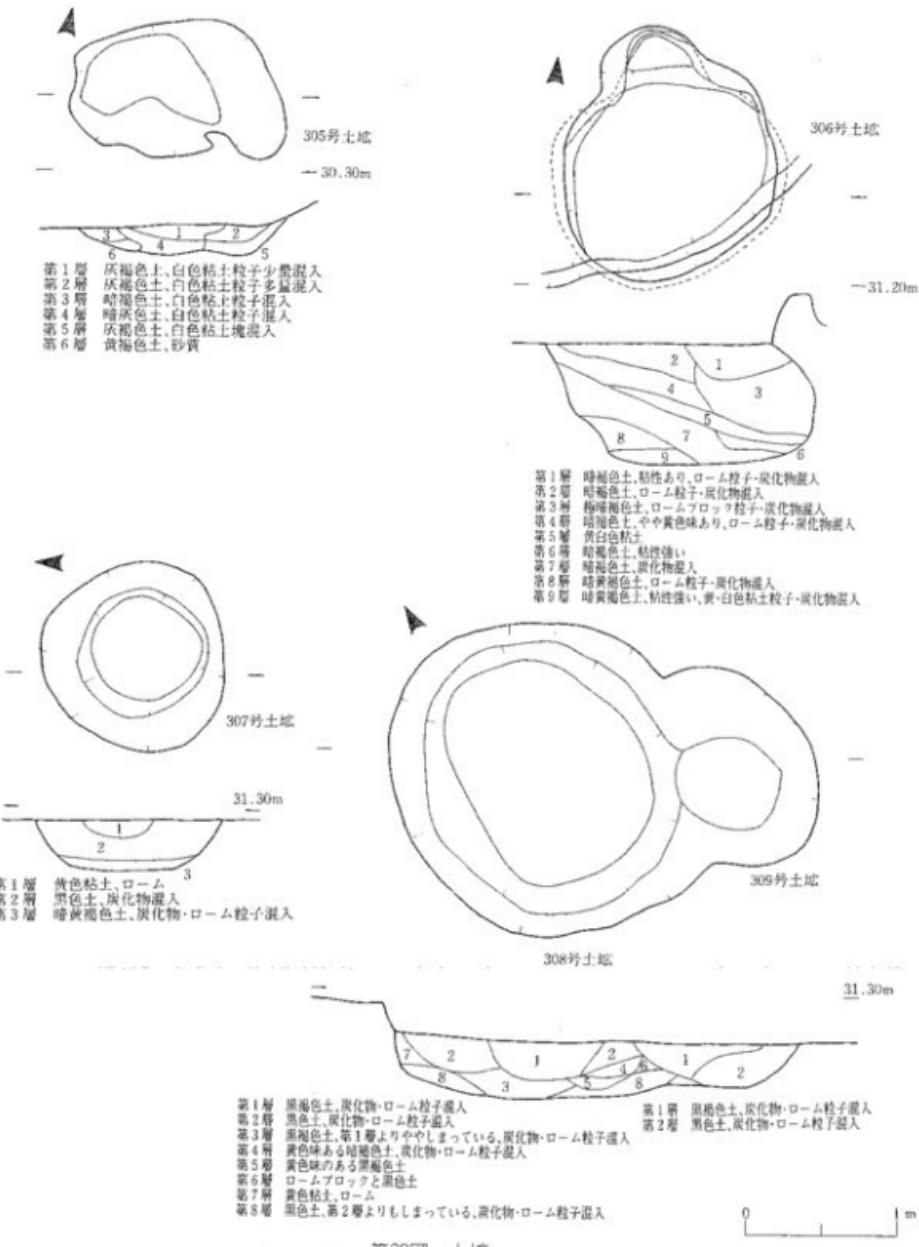
第96図 土壠

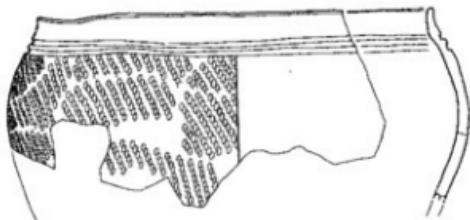


第97図 土壌



第98図 土塙





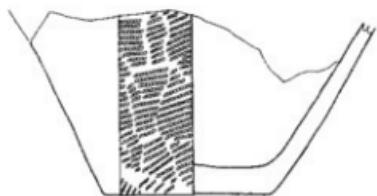
231



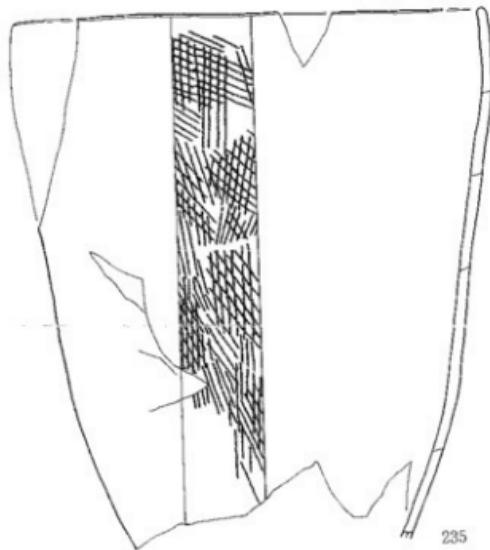
233



232



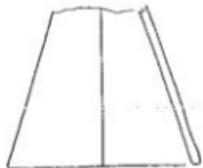
234



235



236

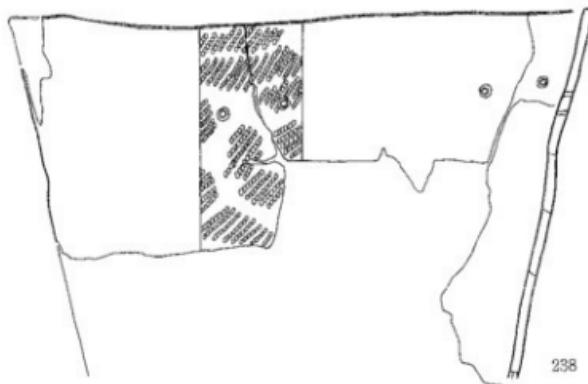


237

231 48号土壙
232・233 64号土壙
234 71号土壙
235 77号土壙
236・237 82号土壙



第100図 遺構内出土土器



238



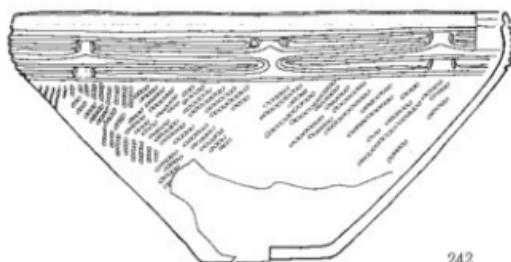
239



240



241



242

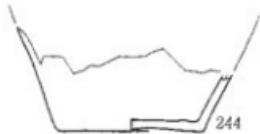


243

238 82号土塚
239・240 98号土塚
241 104号土塚
242・243 147号土塚



第101図 遺構内出土土器



244



245



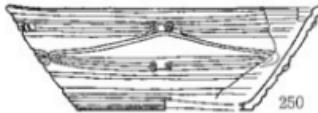
246



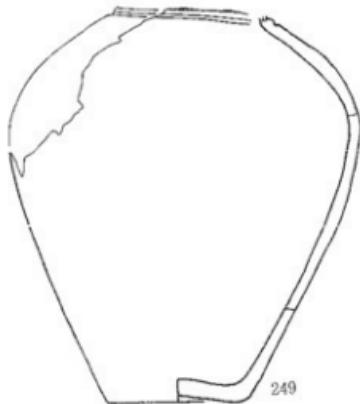
247



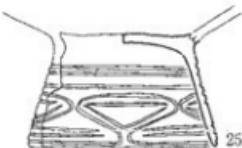
248



250



249

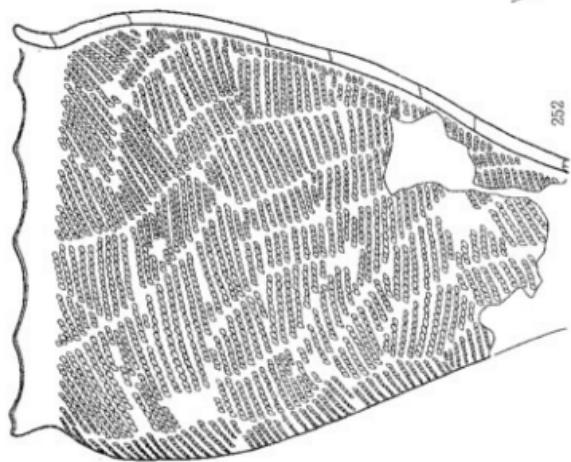


251

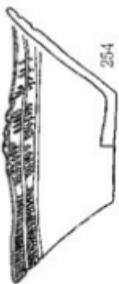
- 244・245 157号土塙
246 160号土塙
247・248 163号土塙
249 232号土塙
250・251 262号土塙



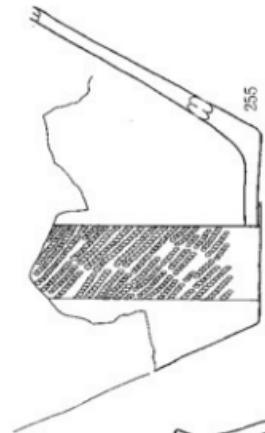
第102図 遺構内出土土器



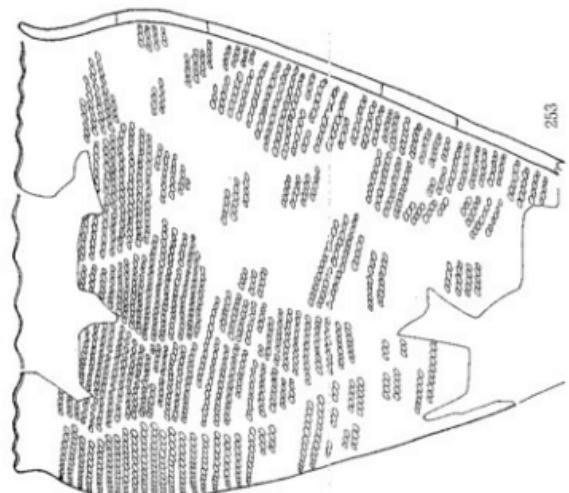
252



254



255



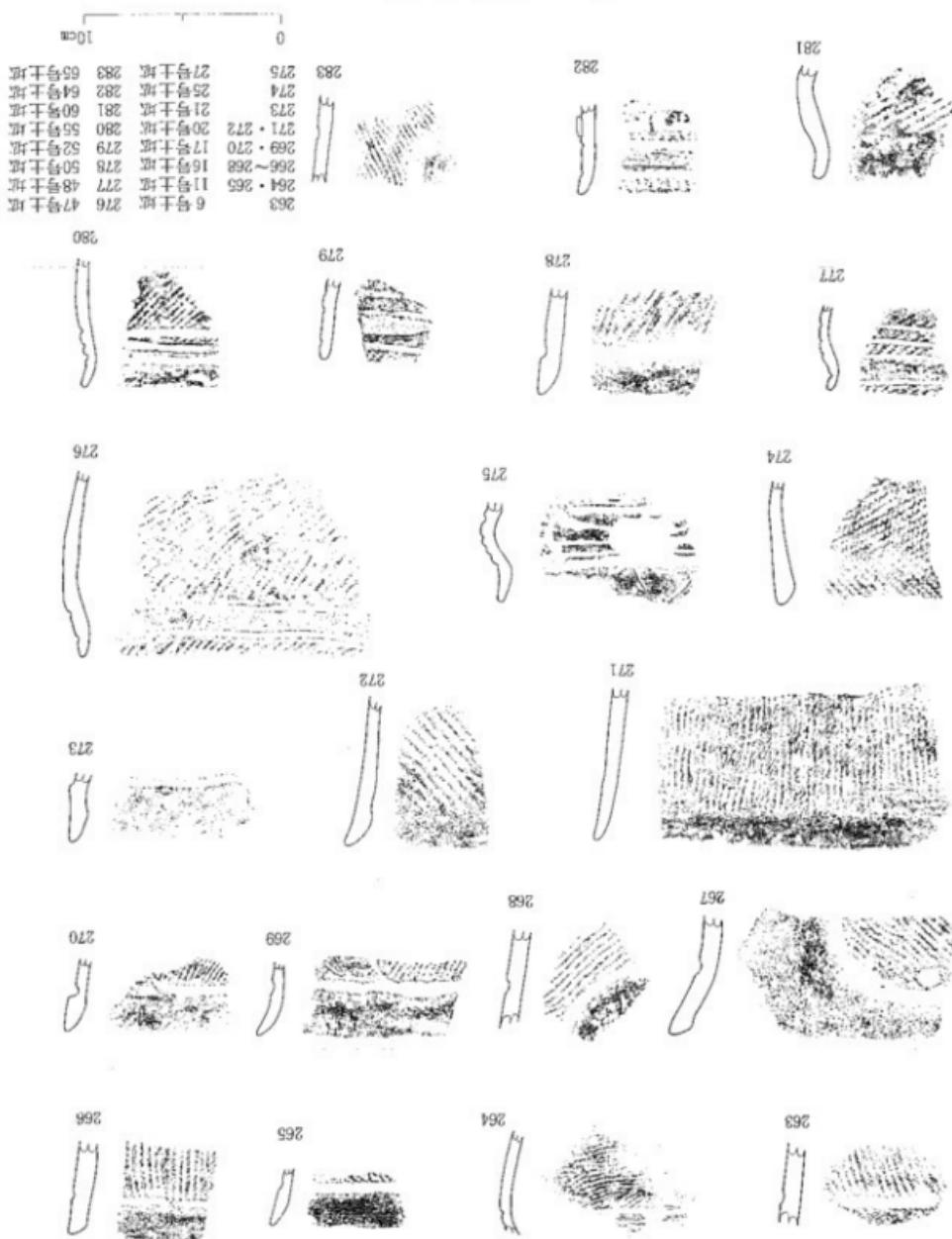
253

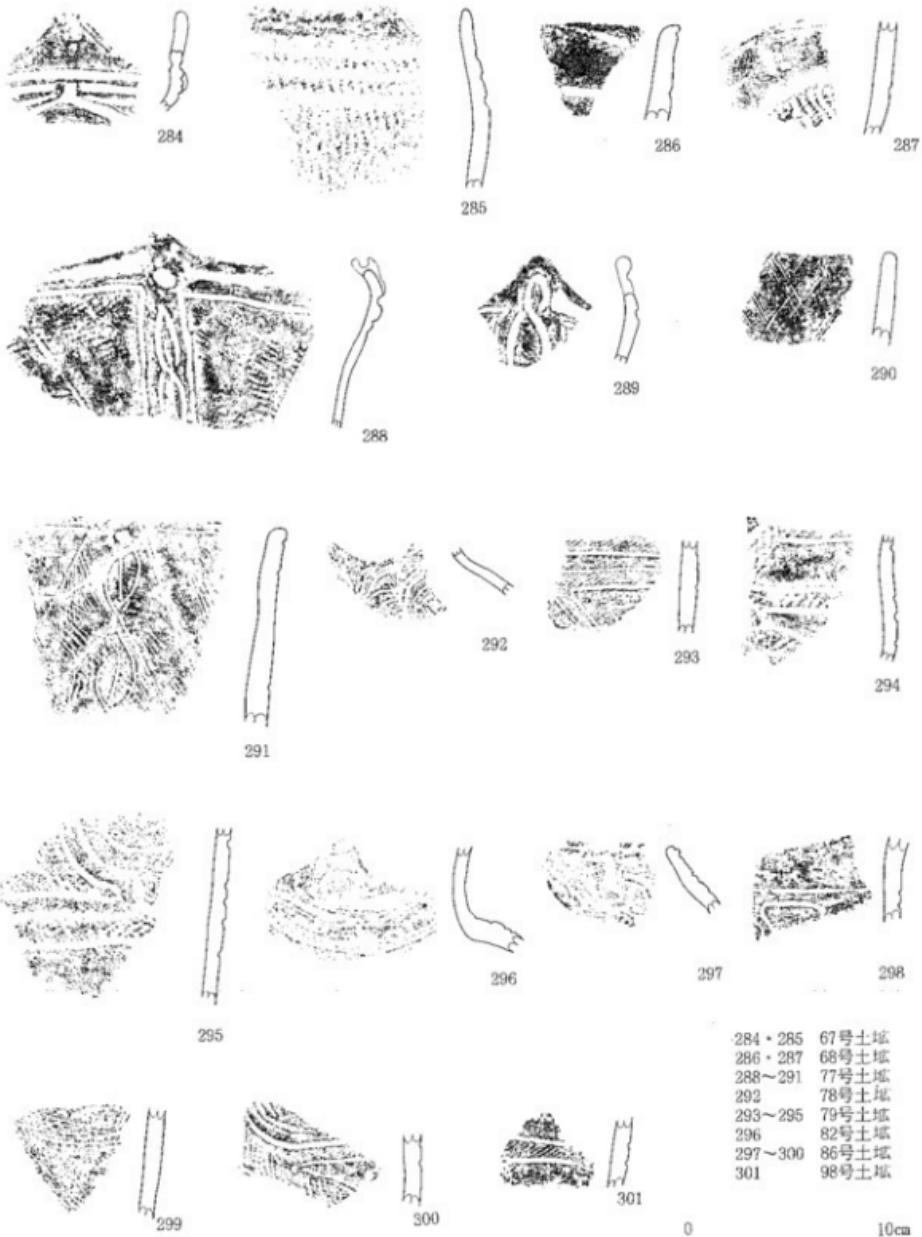
252・253 272号土灰
254 297号七灰
255 306号土灰

0 10cm

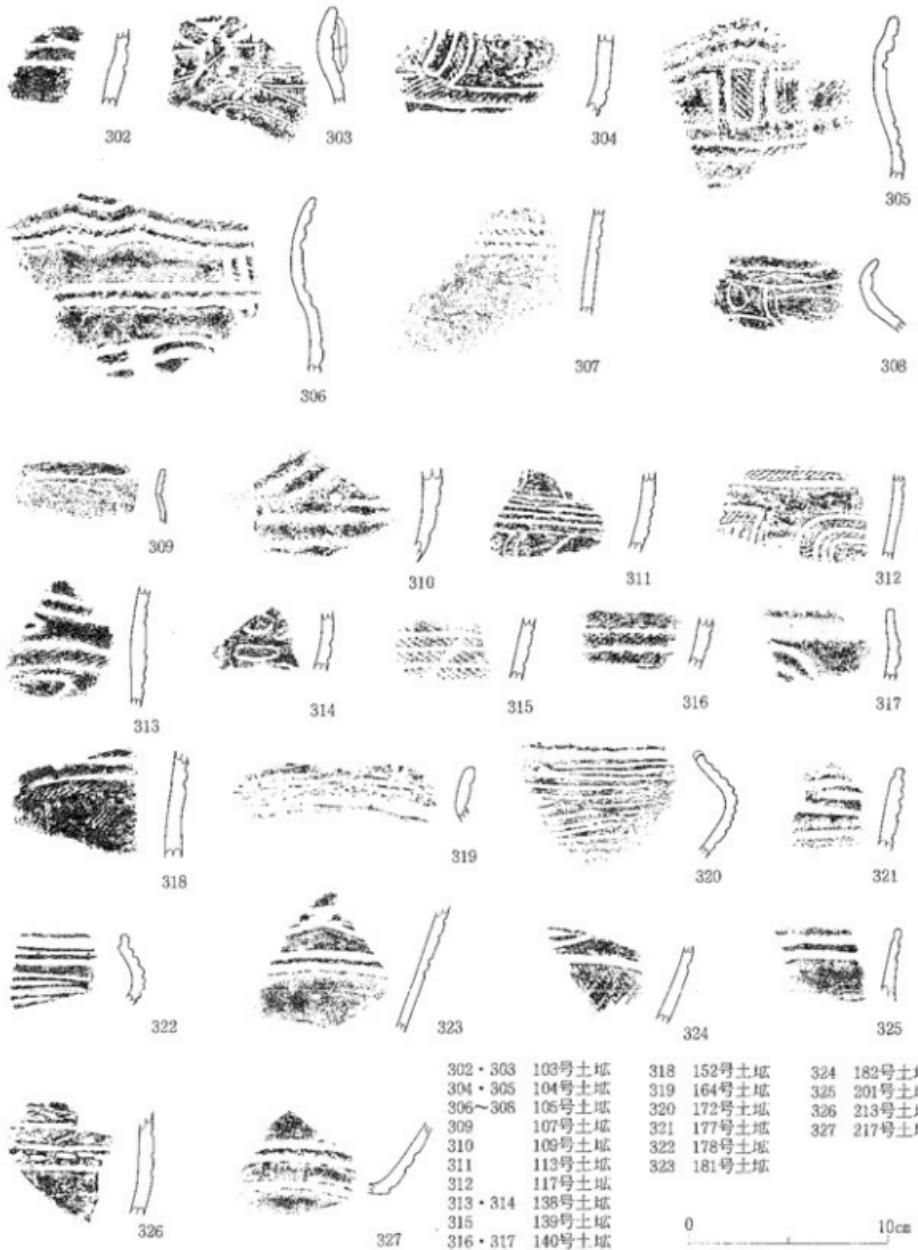
第103圖 遷構內出土土器

第104图 遗物出土土器

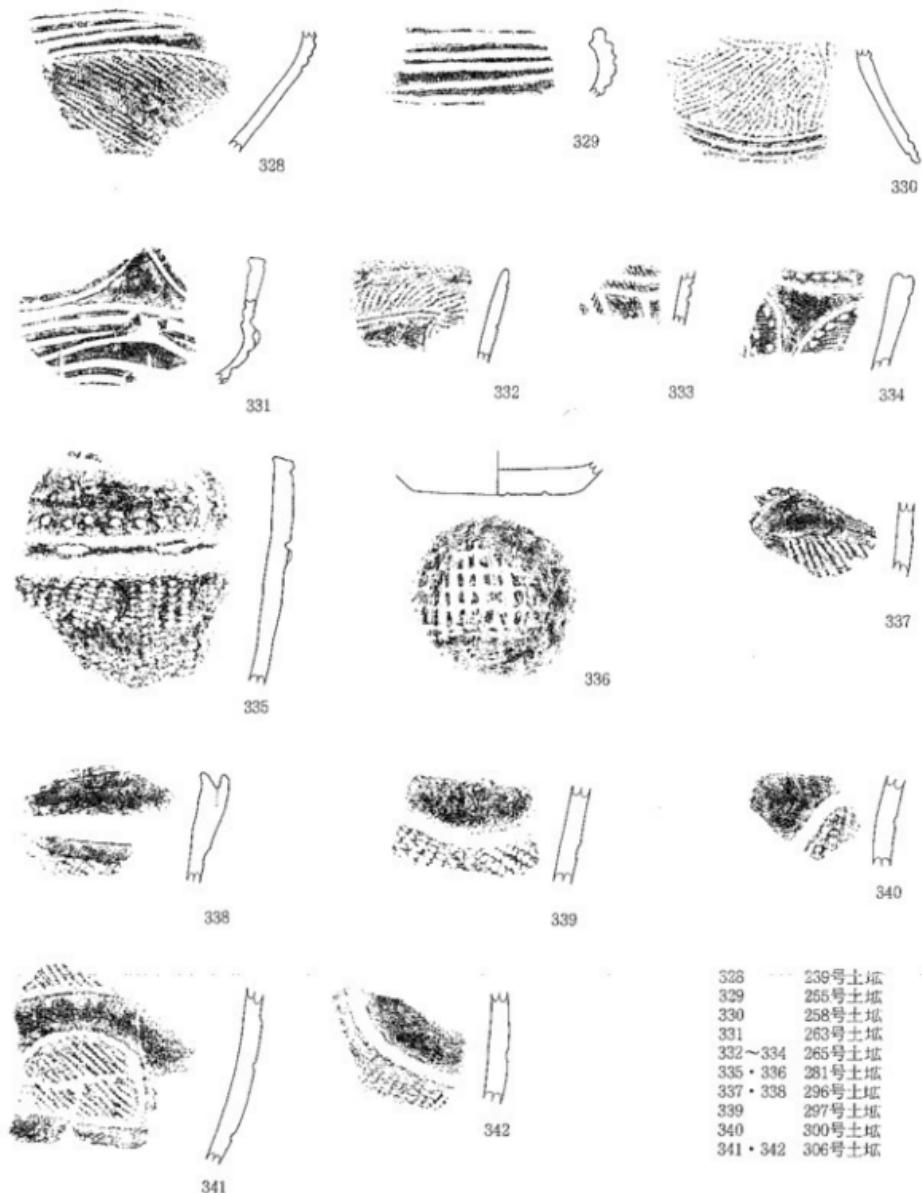




第105図 遺構内出土土器



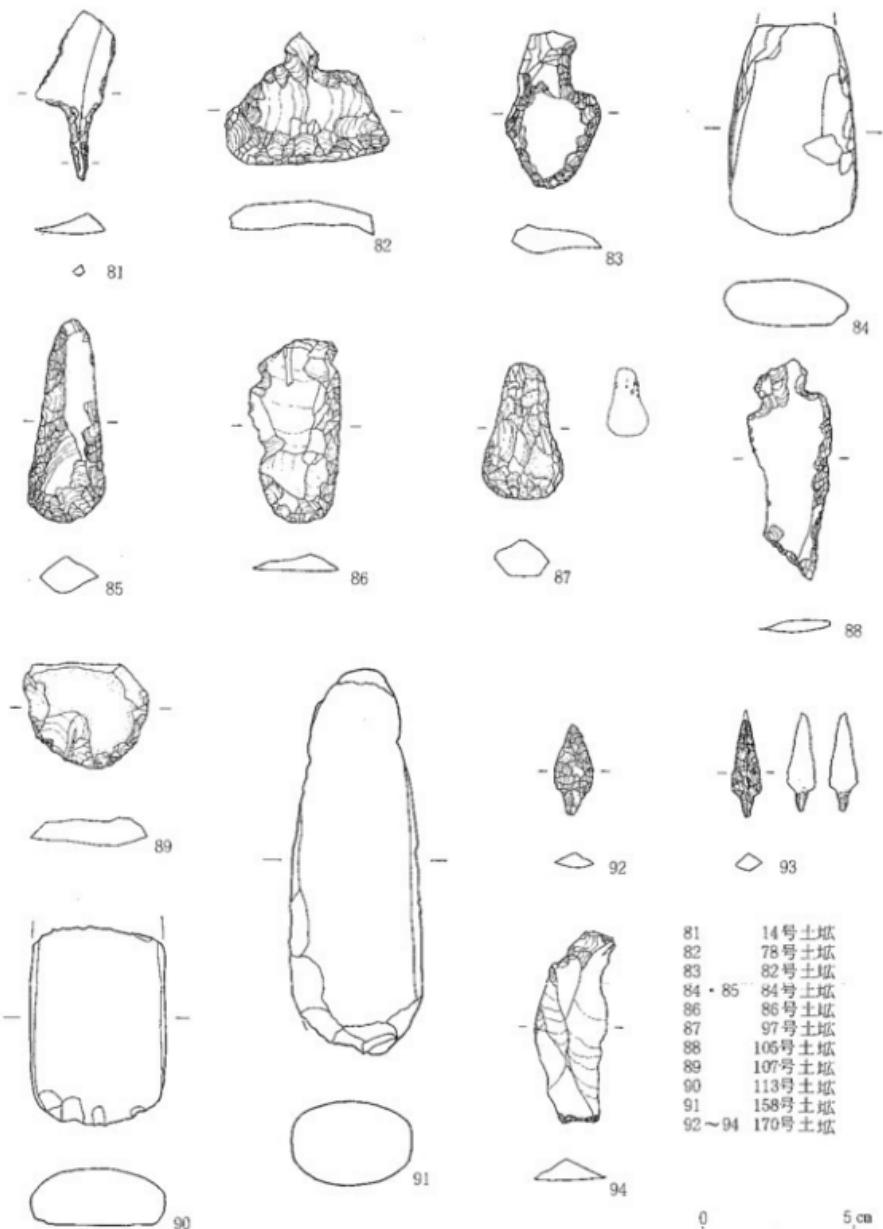
第106図 遺構内出土土器



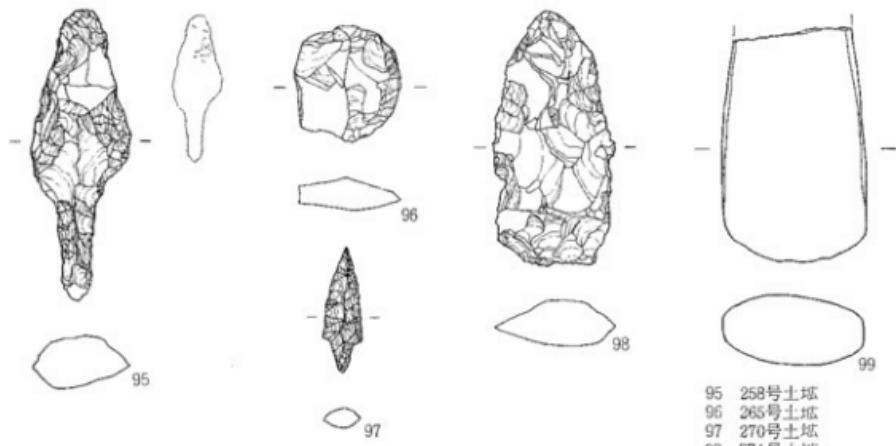
- 328 239号土壤
 329 255号土壤
 330 258号土壤
 331 263号土壤
 332～334 265号土壤
 335・336 281号土壤
 337・338 296号土壤
 339 297号土壤
 340 300号土壤
 341・342 306号土壤

0 10cm

第107図 遺構内出土土器



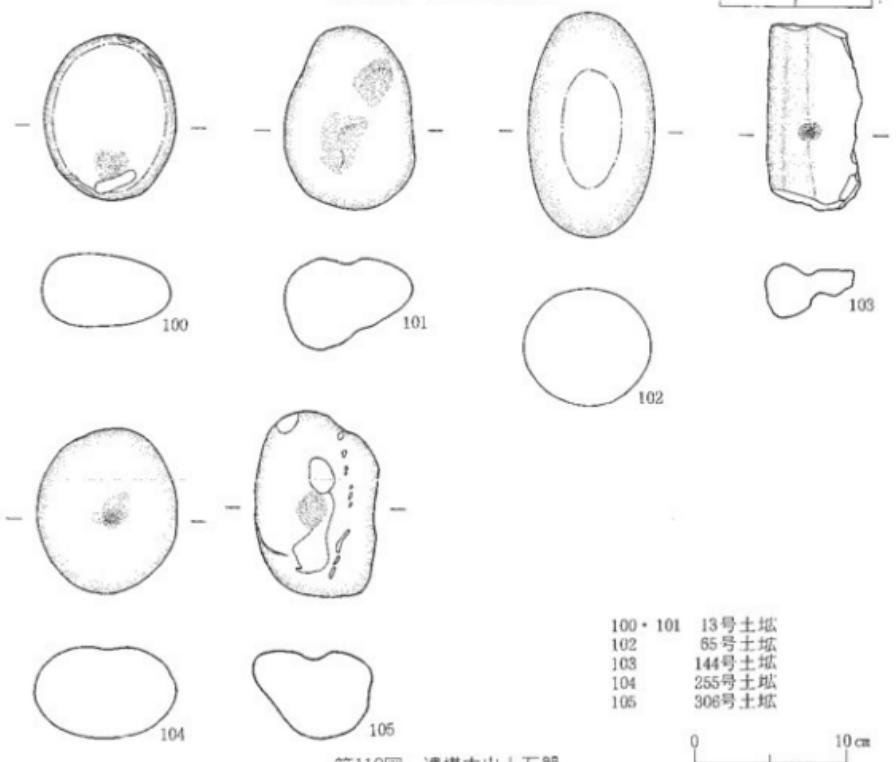
第108図 遺構内出土石器



第109図 遺構内出土石器

95 258号土塙
 96 265号土塙
 97 270号土塙
 98 274号土塙
 99 279号土塙

0 5 cm



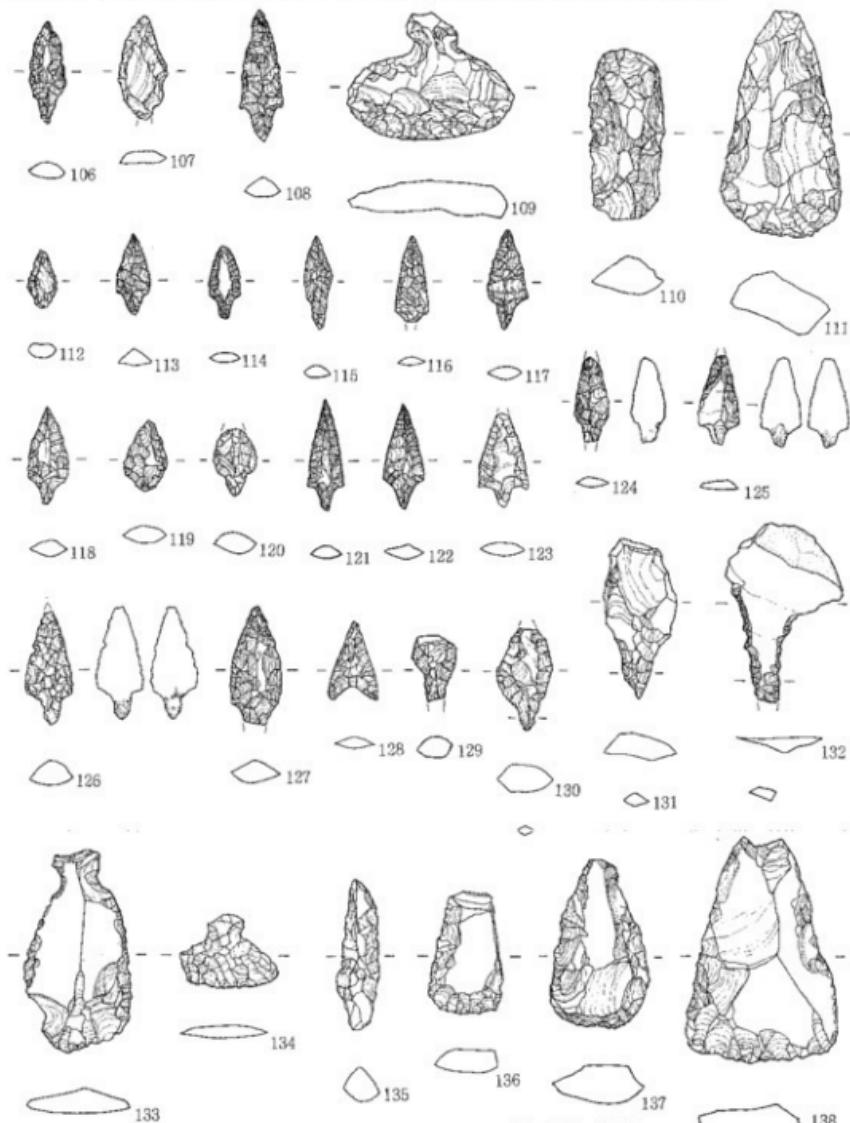
第110図 遺構内出土石器

100・101 13号土塙
 102 65号土塙
 103 144号土塙
 104 255号土塙
 105 306号土塙

0 10 cm

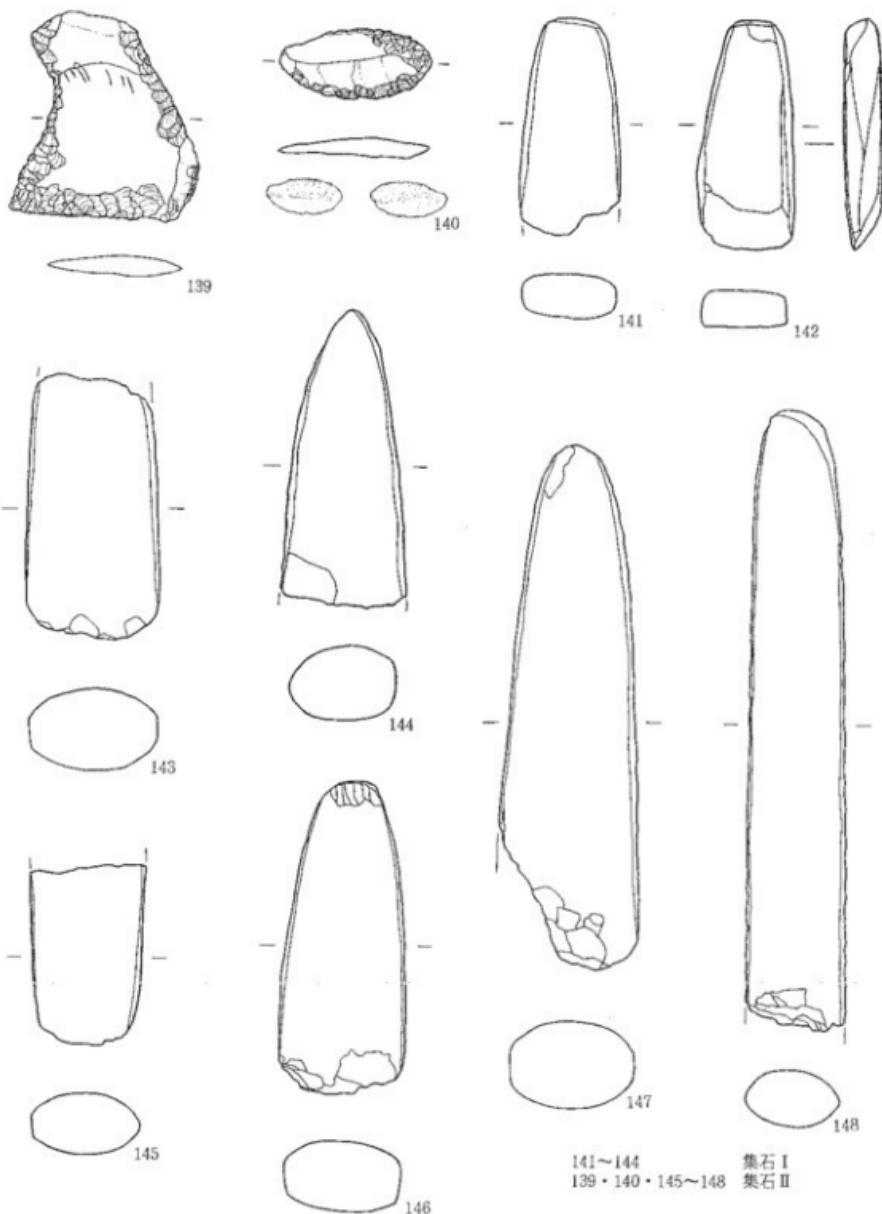
集石遺構（第216図）

調査区全面に礫が検出されるが、特に多量に集中して検出される箇所を集石Ⅰ、集石Ⅱとした。礫は第Ⅱ層の遺物包含量より10~20cmの厚さで検出され、握りこぶし大から人頭大及び巨礫である。礫の他に土器や石器も多量に出土し、土器はほとんどが破片である。集石Ⅰは調査区の西側で、長軸25m、短軸20m、集石Ⅱは調査区の北側で、長軸30m、短軸10mの範囲である。



第111図 集石出土石器

106~111 集石Ⅰ
112~138 集石Ⅱ



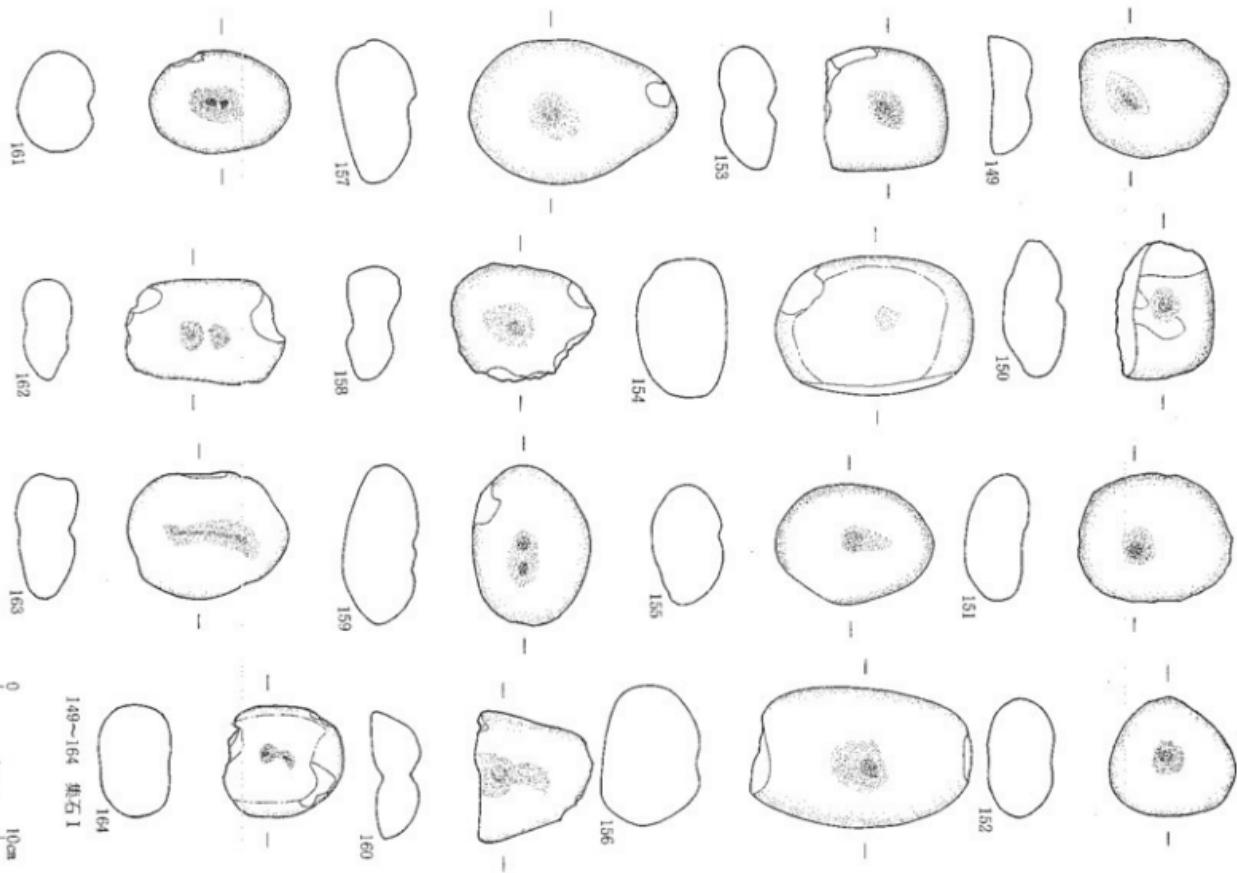
第112図 集石出土石器

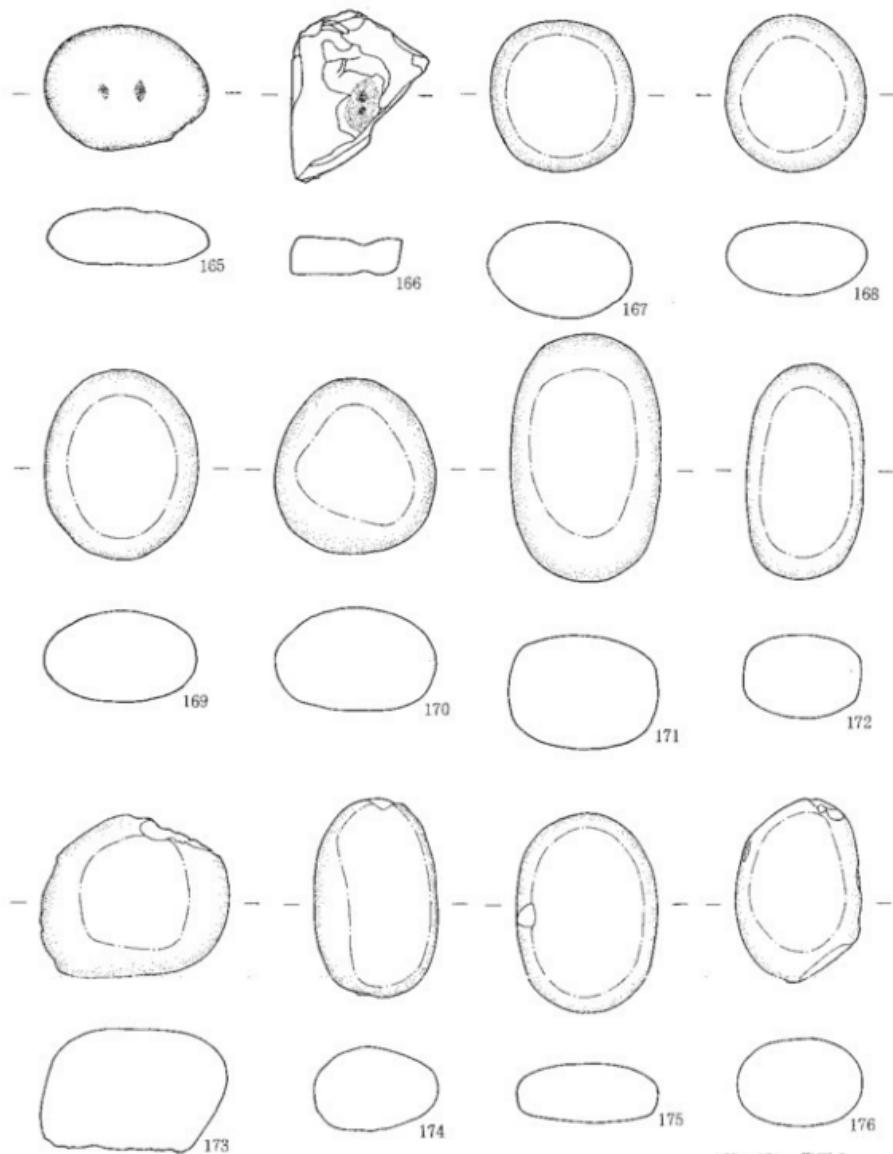
141~144
139・140・145~148 集石Ⅰ

集石Ⅱ

0 5 cm

第113図 集石出土石器

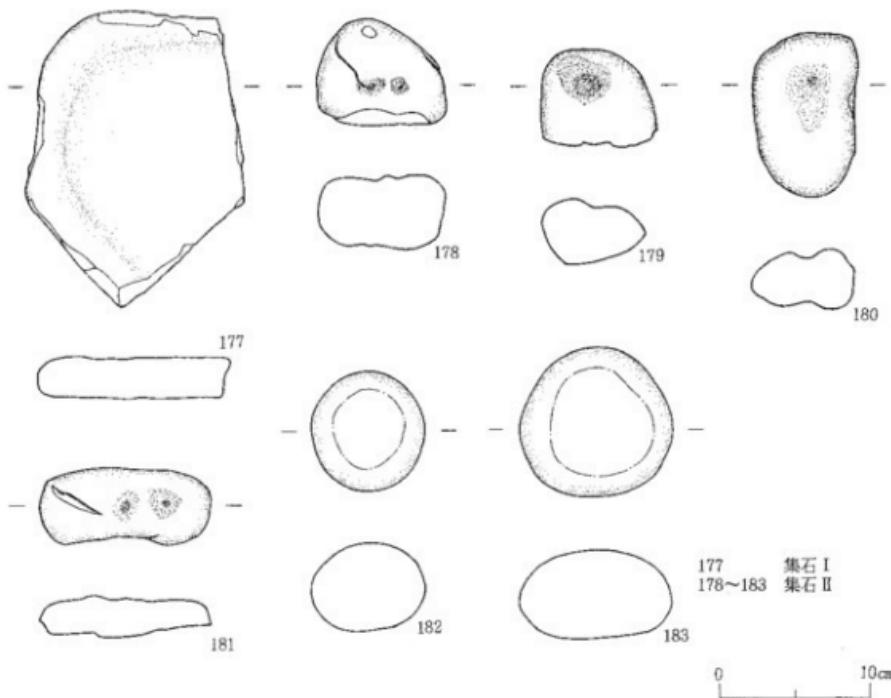




165~176 集石 I

第114図 集石出土石器





第115図 集石出土石器

石器（第111～115図106～183）

106～108・112～128は石鏃である。有茎のものが多く、基部にアスファルトの付着するものもある。石質はほとんど硬質頁岩である。129～132は石錐である。基部と錐部が明瞭に区別されるもので、129・132は錐部が途中で折れている。石質は硬質頁岩である。109・133・134は石匙である。133は縦型である。石質は硬質頁岩である。135は槍先状石器で、石質は硬質頁岩である。110・111・136～138はヘラ状石器である。左右対象で両面加工のものである。石質は硬質頁岩である。139は撚器状石器である。片面加工で、石質は硬質頁岩である。140は鋸齒緣石器である。半月形をなすもので、体上半にアスファルトが付着する。石質は硬質頁岩である。141～147は磨製石斧である。破損品が多く、142は片刃である。石質は凝灰岩である。148は石棒である。断面は凸レンズ状をなし、途中から折れている。石質は粘板岩である。149～166・178～181はくぼみ石である。くぼみ部が数ヶ所みられるもの、片面、両面のものがある。167～176・182・183は磨石、敲打である。全面を磨るもの、側面に敲打痕の認められるものがある。177は石皿状石器である。破損品で、中央部が良く磨かれている。

炉（第116図）

1～4号はローム面、5～7号は第Ⅱ層面で検出された。1号は石頭土器埋設炉、2・3号は土器埋設炉、4号は石頭土器埋設部と掘り込み部からなるいわゆる複式炉である。2・3号は埋設土器の周辺は火熱を受けて赤変しているが、1号は判然としない。4号は埋設土器の周辺は火熱を受けて赤変するが、掘り込み部は一部の検出で確認できなかった。5～7号は石が検出されない部分もあるが、石頭がと考えられる。いずれも炉内が強く火熱を受けて赤変している。

出土遺物

土器（第117図256～258）

256～258は炉埋設土器である。いずれも深鉢形土器である。256・258は胴部で、地文はL R 単節斜繩文（縦位回転）である。257は上半分で、口縁部がやや外反する。口縁部は無文帶で、地文はR L 単節斜繩文（縦位回転）である。

建物跡（第118図）

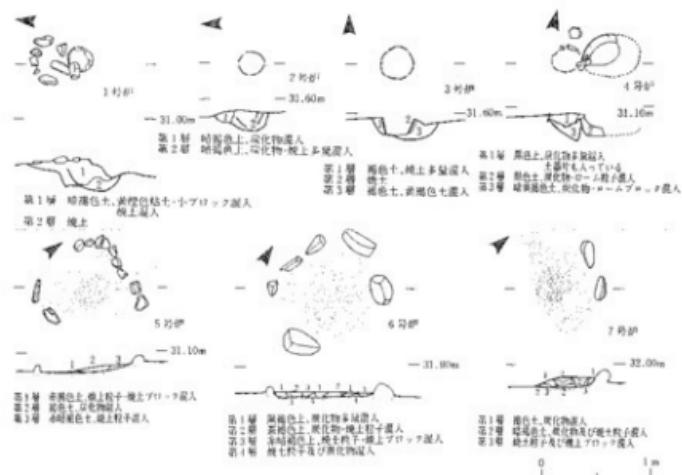
調査区東側で検出された。

梁行1間＝3m×桁行2間＝4.5m（東から2.1m+2.4m）の掘立柱建物跡である。建物方向は北で東へ2°振れている。掘り方は径70～90cm、深さ99～110cmで、径30～40cmの柱痕が認められる。138号土塗を切っている。

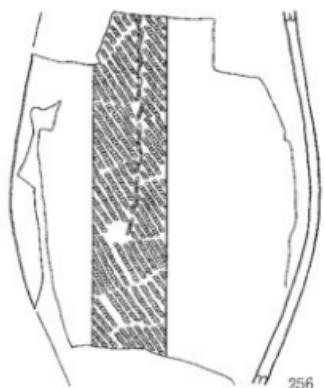
出土遺物

土製品（第159図67）

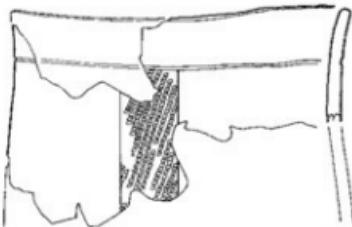
67は南東隅柱より出土した。環状土製品で、欠損している。両側面に沈線が巡る。



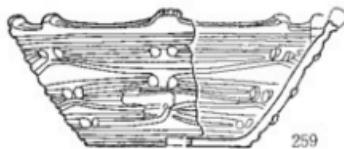
第116図 炉



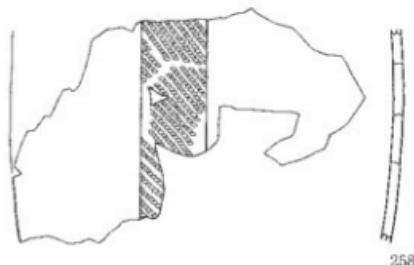
256



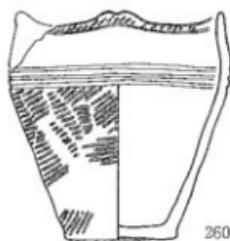
257



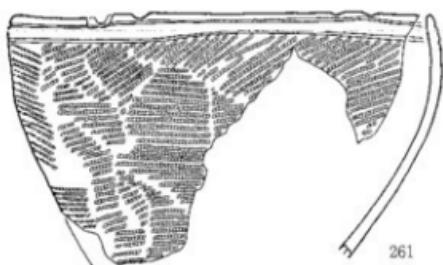
259



258



260



261

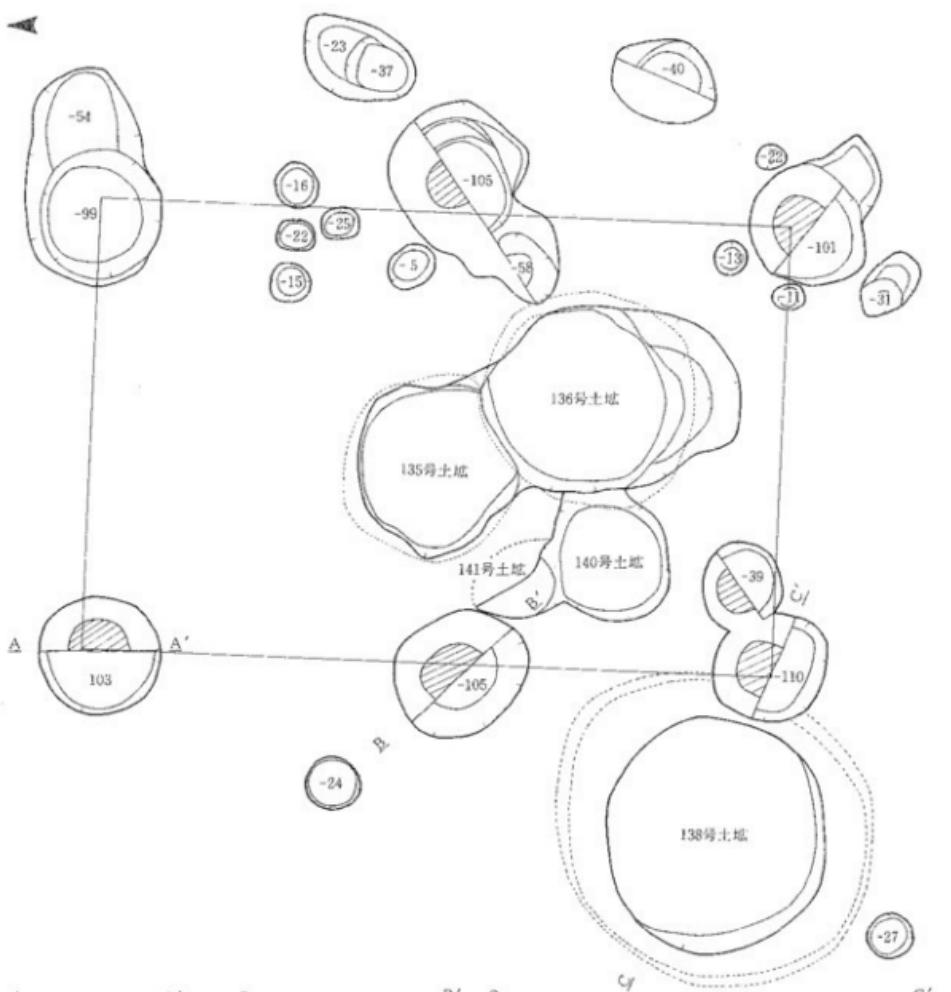


262

- 256 1号炉埋設土器
 257 2号炉埋設土器
 258 3号炉埋設土器
 259 ピット(3-C-9グリッド)
 260 ピット(11-G-1グリッド)
 261 ピット(7-A-2グリッド)
 262 北東部落込み

0 1 10 cm

第117図 遺構内出土土器



第118図 建物跡

遺構外出土土器

遺構外より出土した土器を、縄文時代、弥生時代に大別し、器形と文様について分類した。

縄文時代（第119図343～349、第129～131図446～505）

446～458は沈線区画の磨消帯を曲線的に施すものである。稜線をもつもの、刺突を加飾するものもある。口縁部が無文帯で、副部地文のものも含めた。口縁部が外反する深鉢形土器が多い。

347・459～463は連鎖状文のみられるものである。口縁部が複雑な作りをするものもみられ、459も含めた。深鉢形の器形である。

343～346・348・349・464～505は数条の平行沈線を主体に文様を作り出すものである。平行沈線は平行・弧状・「S」字状・渦巻状などの文様が施され、沈線間の地文を磨消すものと残すものがある。器形は深鉢形・鉢形・壺形がみられ、348は注口土器、349は磨消繩文を施す小形の壺形土器である。502～505は把手部で、複雑な作りをするものである。

弥生時代

壺形土器（第120・121図350～359、第132～140図506～695）

口縁部が外反し、胴上部に張りのある壺形のものが多い。平縁口縁が多く、波状口縁や小突起をもつものもある。文様は口縁部が無文帯のもの、口唇部及び口縁上部に地文が残り中間を磨消するもの、全面が地文のもの、沈線を巡らすもの、沈線と列点文を巡らすものがある。

350・506～541は口縁部が無文帯のものである。地文を磨消しするもので、平縁口縁（506～515）と波状口縁（350・516～541）とがある。刷毛目調整の見られるものもあり、地文はL R 単節斜繩文が多く、512はR L 単節斜繩文（横位回転）、541はR L 無節斜繩文（横位回転）で内面にも施される。

351・542～561は口唇部及び口縁上部に地文が残り中間を磨消しするものである。全て平縁口縁で、542～548は口唇部に、351・549～561は口縁上部に地文が認められる。地文はL R 単節斜繩文が多い。

352・562～564は全面が地文のものである。平縁口縁が多く、口唇部に地文はない。地文はL R 単節斜繩文である。

565～621は1～5条の沈線が巡り、口縁部が無文帯となるものである。口縁部は外反するものが多く、平縁口縁、波状口縁、口唇部に小突起をもつものがみられる。口唇部に地文をもつものも認められる。地文はL R 単節斜繩文が多く、刷毛目調整痕の残るものもある。622～625は頸部に1～2条の沈線が巡り、口縁上部に地文が残るものである。口縁部は外反するもので、625は波状口縁である。622は全面に地文があり、他は口縁上部を残して磨消しする。356・626～666は口縁上部に1条の沈線と、頸部に1～4条の沈線が巡るものである。口縁部は外反するものが多く、平縁口縁、波状口縁、口唇部に小突起をもつものがある。口縁部の沈線間は磨消しされるもので、623・624は口縁上部の沈線より上方が磨消しされ、他は地文が残る。地文はL R 単節斜繩文が多い。667～683は口縁上部に2条の沈線と、頸部に2～4条の沈線が巡るものである。口縁部は外反するものが多く、平縁口縁、波状口縁、口唇部に小突起をもつものがある。口縁部の沈線間は磨消しされるもの

で、口縁上部の沈線より上方に地文が残る。地文はLR単節斜縫文が多い。684は口縁上部に3条の沈線と、頸部に4条の沈線が巡るものである。685～687は口縁部に4・5条の沈線が巡るもので、686の沈線間は磨消されている。地文は685がRL単節斜縫文(横位回転)、他はLR単節斜縫文(縦・斜位回転)である。

688～695は列点文を施すものである。口縁部は外反するものが多く、平縁口縁である。列点文は平行沈線の下方に施すものと、沈線間に施すものがある。地文はLR単節斜縫文(横位回転)で、口縁上部及び口唇部に認められるものもあり、刷毛目調痕痕の残るものもある。

鉢形土器 (第121～125図360～399、第142～145図696～767)

口径が比較的大きいもの、比較的小形で變形土器に近いもの、体部から口縁部にかけて内湾しながら斜め上方に立ち上がるもの、体部から口縁部にかけてほぼ直線的に斜め上方に立ち上がるものがある。

379・380・696～706は口径が比較的大きいもので、浅鉢形土器に近い器形をなすものである。口縁部は内湾気味に立ち上がる平縁口縁のものが多く、口唇部に705はくぼみが、706は突起がみられる。文様は平行沈線文、変形工字文などが施される。地文はLR単節斜縫文(縦位回転)である。

360～372、707～728は比較的小形で變形土器に近いものである。口縁部は直立又は外反するものが多く、平縁口縁、波状口縁、山形口縁、口唇部に小突起をもつものがある。文様は無文帶、平行沈線文、変形工字文のもので、2個1対の粘土粒が付くものもある。台付きのものもあり地文はLR単節斜縫文が多い。

373～378・381・382・729～743は体部から口縁部にかけて内湾しながら斜め上方に立ち上がるものである。平縁口縁が多く、口唇部に2個1対の小突起あるいは小さな山形突起をもつものがあり、内面に1条の沈線が巡るものである。文様は変形工字文を施すもので、2個1対の粘土粒が付くものがある。体全面に文様が施されるもの、体下部に地文が残るものと磨かれるものがあり、地文はLR単節斜縫文である。

383～389・744～767は体部から口縁部にかけてほぼ直線的あるいは幾分内湾気味に斜め上方に立ち上がるもので、体部が直立するものもある。平縁口縁が多く、口唇部に2個1対の小突起あるいは二又の小突起の付くものがあり、内面に1～2条の沈線が巡るものである。文様は変形工字文を施すもので、2個1対の粘土粒の付くものが多い。体全面に文様が施されるもの、体下部に地文が残るものと磨かれるものがあり、地文はLR単節斜縫文が多い。

390・391は体部から口縁部にかけて内湾しながら斜め上方に立ち上がるもので、390は4脚が、391は台の付くものである。390は口縁部が二又の山形口縁をなし、山形口縁の下に2個1対の孔(4単位か)をもつもので、脚は外側へ反るものである。脚の付根部分には細い粘土紐を数本貼り付けて刻みを入れている。392～399は台部で、鉢形土器に付くものである。沈線を巡らすもの、無文のもの透しのあるものがある。

高环形土器（第125図400～404、第146図768～785）

頸部から口縁部にかけてのものと、脚部の資料である。頸部が内窓気味にくびれて口縁部が外傾する器形で、比較的大口径の大きいものである。口輪部に小突起や頂部の肥大する突起が付く。文様は変形工字文が施され、2個1対の粘土粒の付くものが多い。400～404・784・785は脚部で直線的なものと、幾分膨らみのあるものがある。上・下端に1～3条の沈線を巡らすもの、上・下端の平行沈線間に3条の平行沈線及び波状沈線を巡らすものがある。

壺形土器（第125・126図405～414、第147図786～799）

薄手のものと厚手のものがある。405～413、786～791は薄手のもので、小形のものもみられる。口縁部はゆるく外反し、平縁口縁で、小突起をもつものもあり、内面に沈線が巡る。414・792～799は厚手のもので大形の器形をなし、土器柄の破片と考えられる。口縁部はゆるく外反し、平縁口縁である。頸部と肩部に平行沈線及び列点文を施すものである。刷毛目調整痕の認められるものもあり、地文はL R 単節斜縞文、R L 単節斜縞文が見られる。

笠形土器（第126・127図415～429、第148図800～808）

笠形をなすもの、逆皿状をなすもの、円盤状をなすものがある。

415～419、800～807は笠形をなすものである。体部の文様は変形工字文、平行沈線文などで、刺突を施すものもある。地文はL R 単節斜縞文が多く、地文のみのもの、刷毛目調整痕のみられるものもある。419は小形で、頂部に小さなつまみをもち、対象的に2個1対の孔が穿たれている。

420～427・808は逆皿状をなすものである。上面が平坦で、対象的に2個1対、1個1対の孔が穿たれるものもあり、422は側面に穿たれている。上面は沈線で同じ円文や4区画の十字状文などが施され、側面にも平行沈線文などを施す。808は上面に地面を施すものである。425は刺突が加飾され、427は無文である。

428・429は円盤状をなすものである。428は対象的に2個1対、429は対象的に1個1対の孔が穿たれるが、428は5個みられる。いずれも無文である。

その他の土器（128図430～445）

小形の土器を一括したものである。

初圧痕土器（図版83）

器面に初圧痕の観察される土器が4点出土した。初痕は、鉢形土器の口縁部外面、内面、胴下部の外面、大形壺形土器の内面にみられる。

土製品（第149～160図1～84）

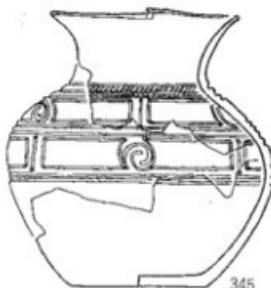
1～42は土偶である。完形のものはない。中空のもの（1・3～6・18・19・22～31）が多く、7・8も中空と考えられ、比較的大形のものである。頭部は帽子を表現するものや、複雑な作りをするものである。顔部は目・鼻・口・耳が明確に表現されている。体部は沈線や刺突を施すものである。1は中空で、両足が欠損し、右足の切断部にはアスファルトが付着している。ベンガラが認



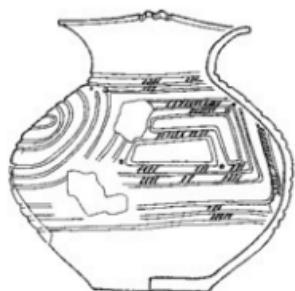
343



344



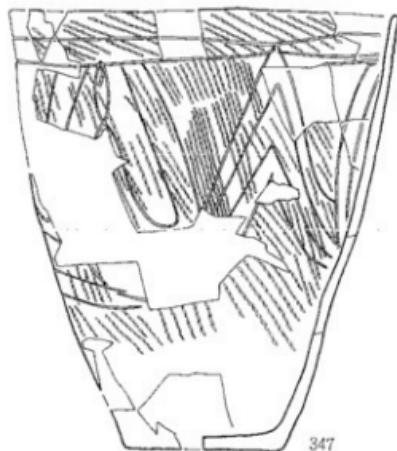
345



346



348



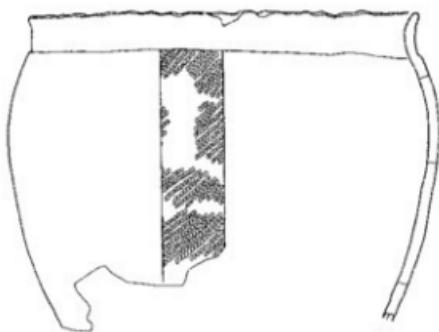
347



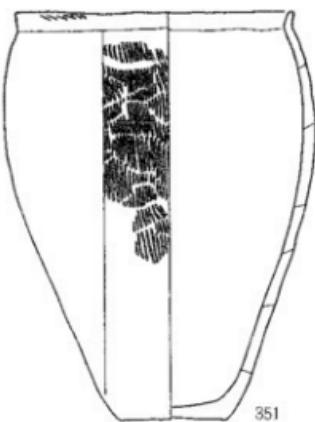
349



第119図 遺構外出土土器(縄文時代後期)



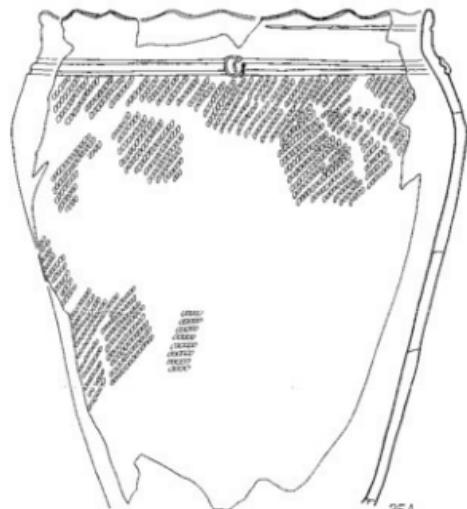
350



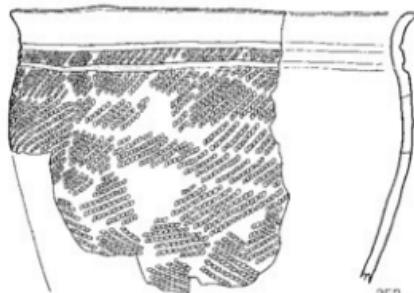
351



352



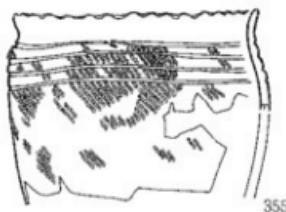
354



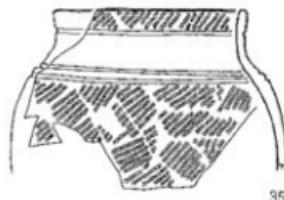
353

0 10cm

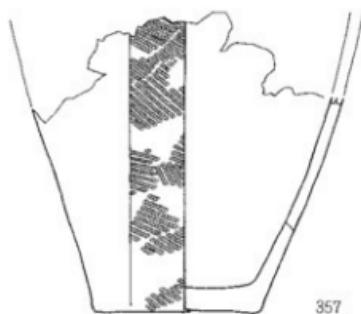
第120図 遺構外出土土器(弥生時代)



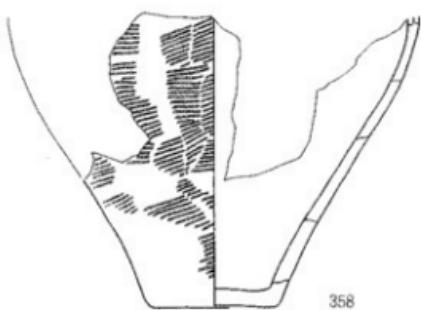
355



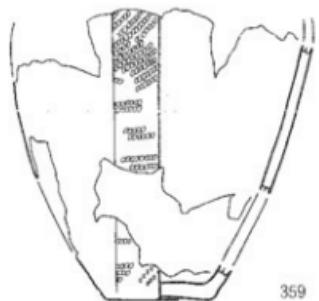
356



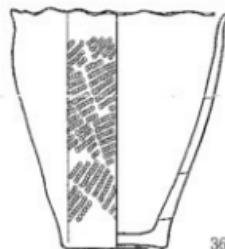
357



358



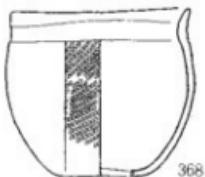
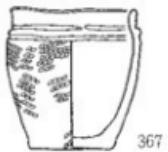
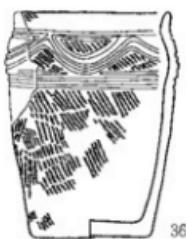
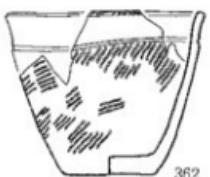
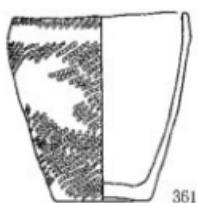
359



360

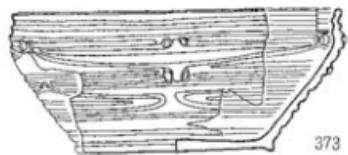


第121図 遺構外出土土器（弥生時代）

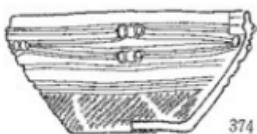


0 10cm

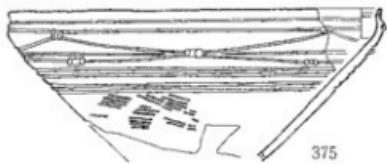
第122図 遺構外出土土器(弥生時代)



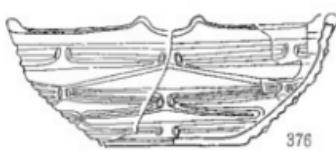
373



374



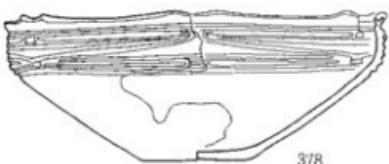
375



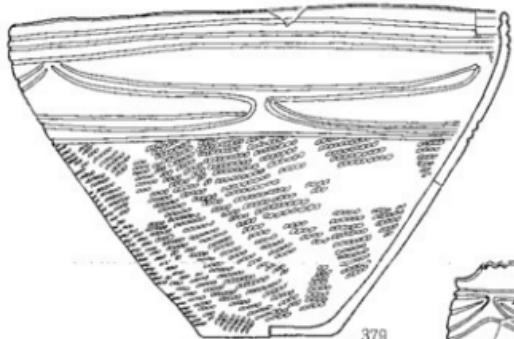
376



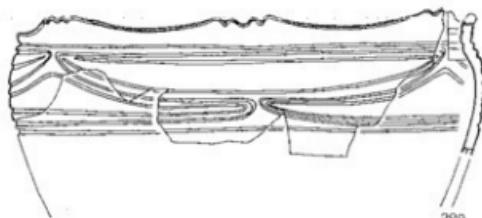
377



378



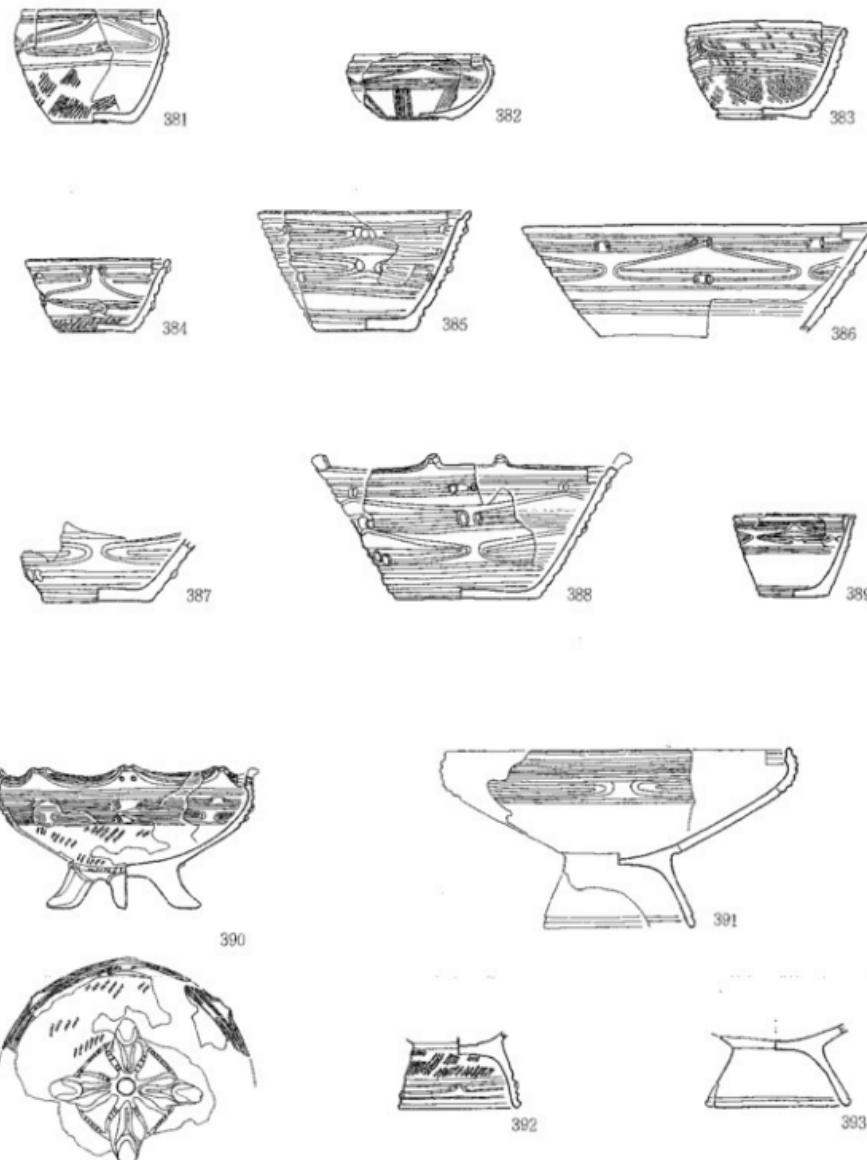
379



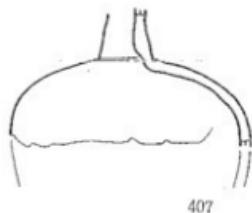
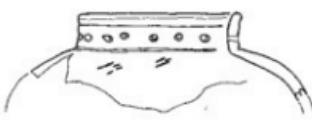
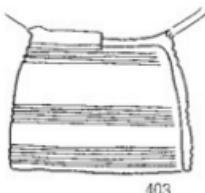
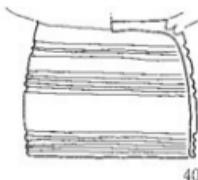
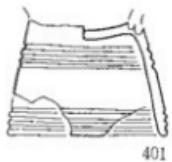
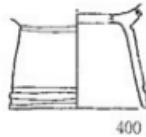
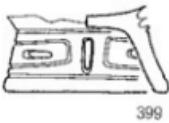
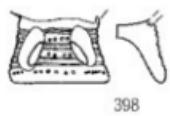
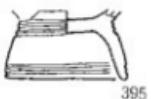
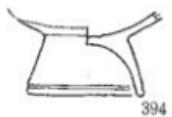
380

0 10cm

第123図 通構外出土土器（弥生時代）

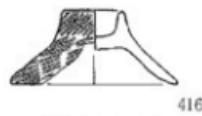
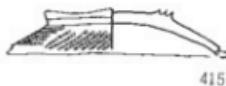
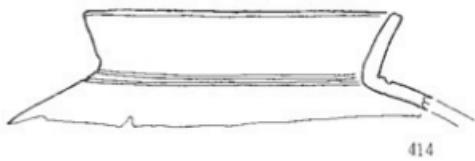
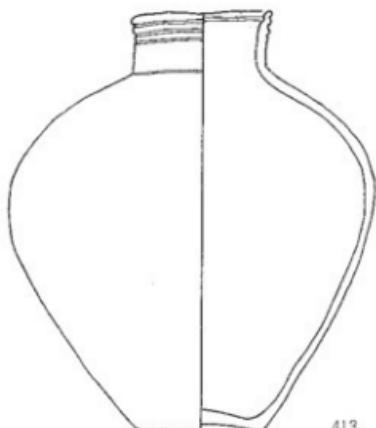
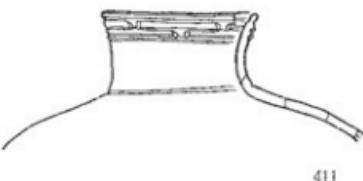
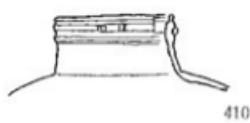


第124図 遺構外出土土器（弥生時代）



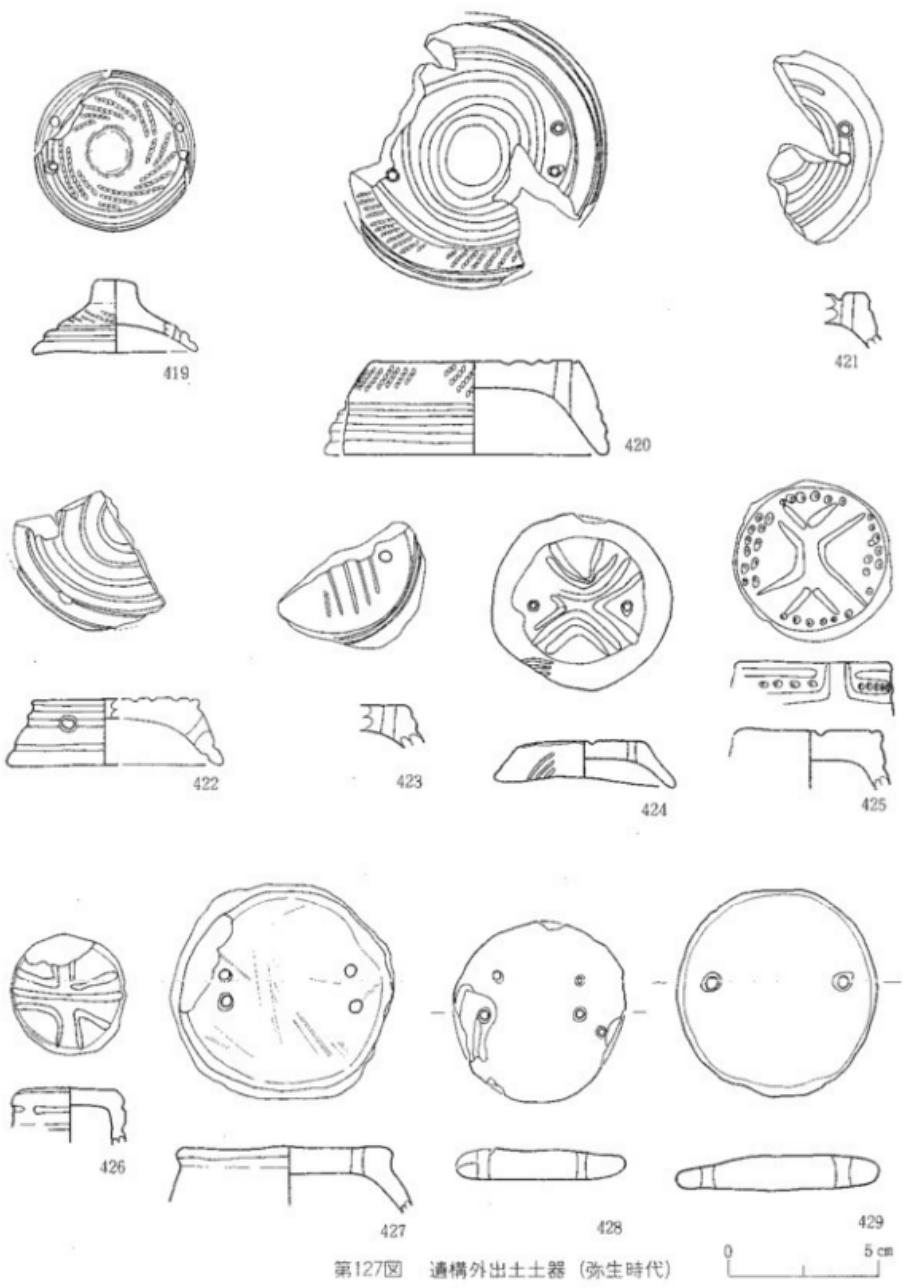
0 10cm

第125図 遺構外出土土器（弥生時代）



第126図 遺構外出土土器（弥生時代）

0 10cm





430



431



432



433



434



435



436



437



438



439



440



441



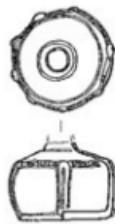
442



443



444

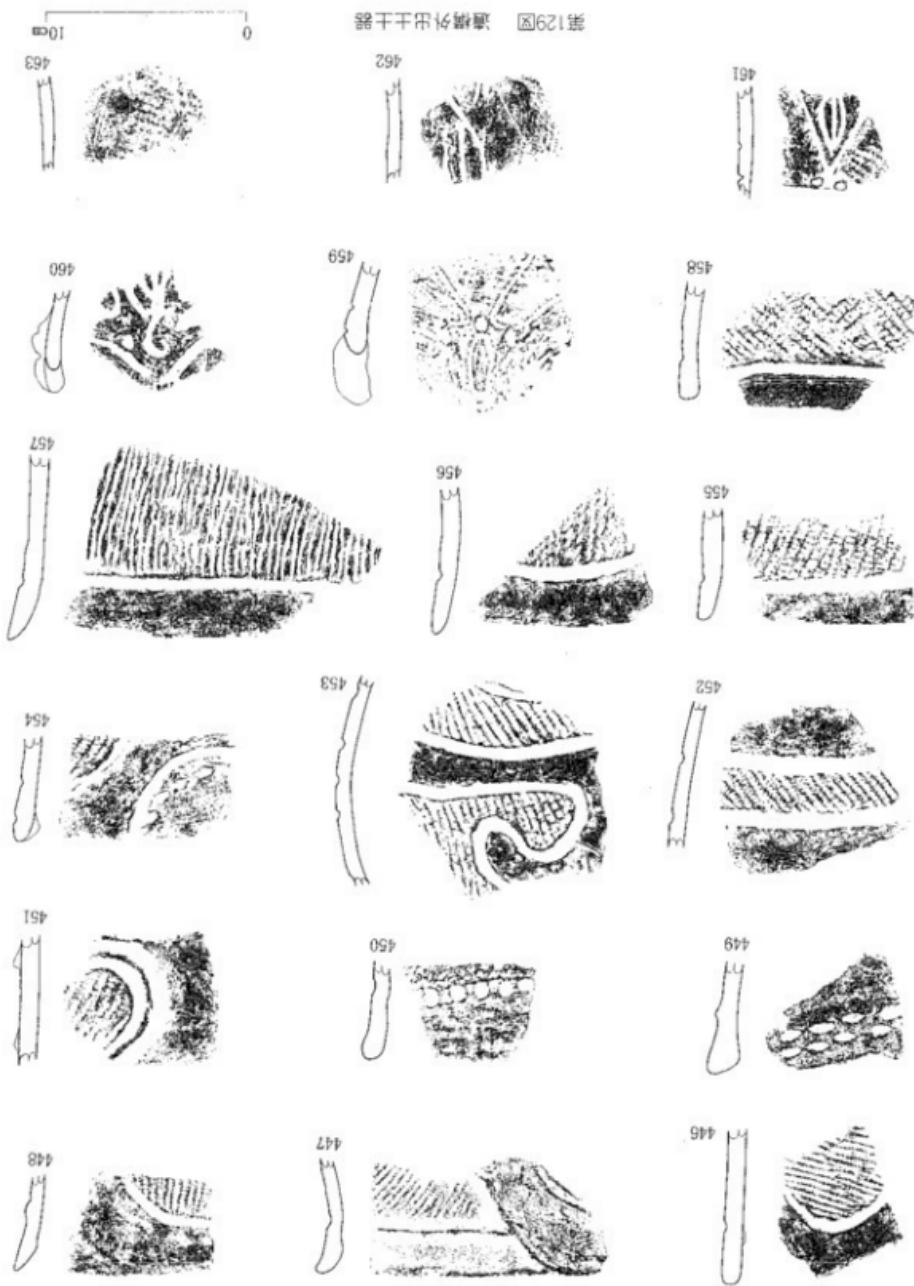


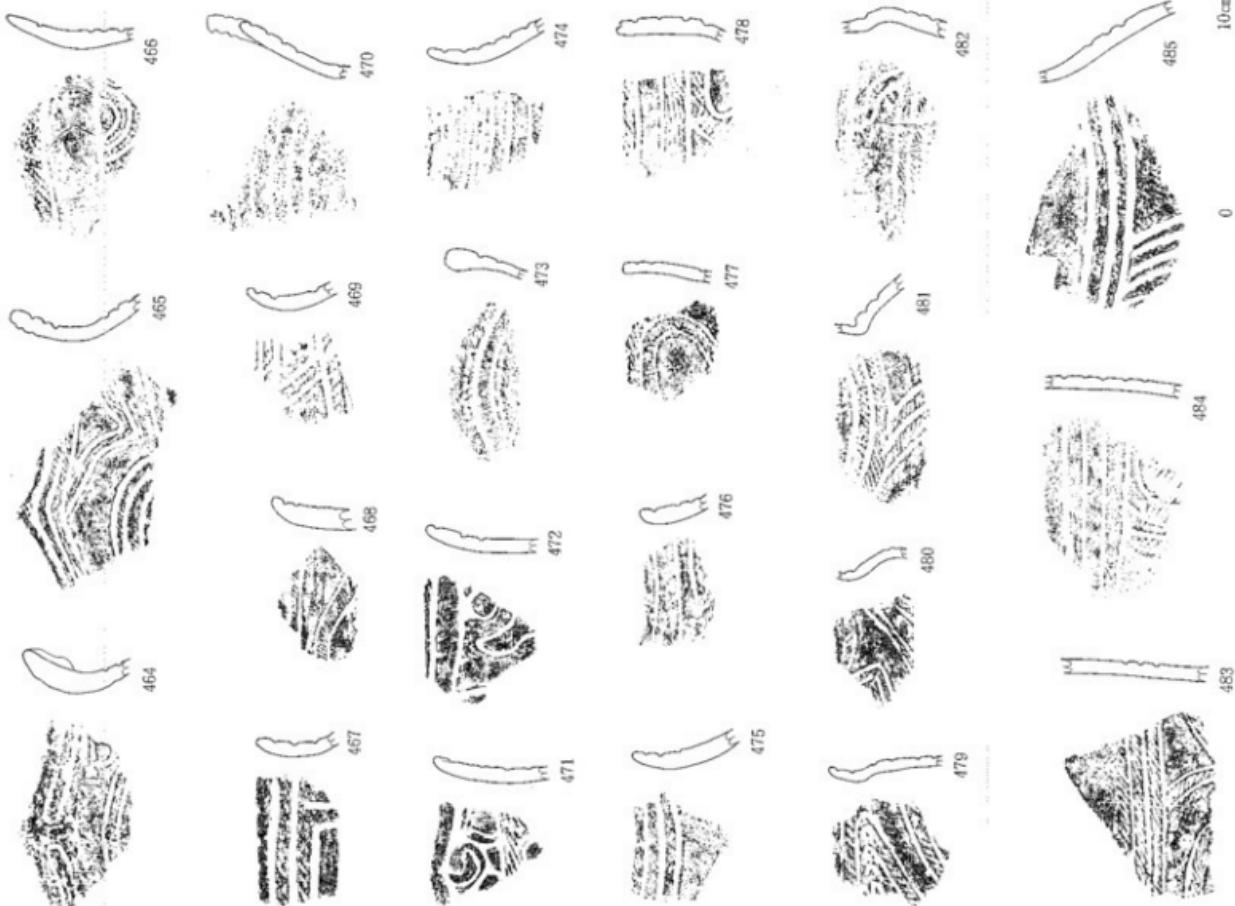
445

0 10cm

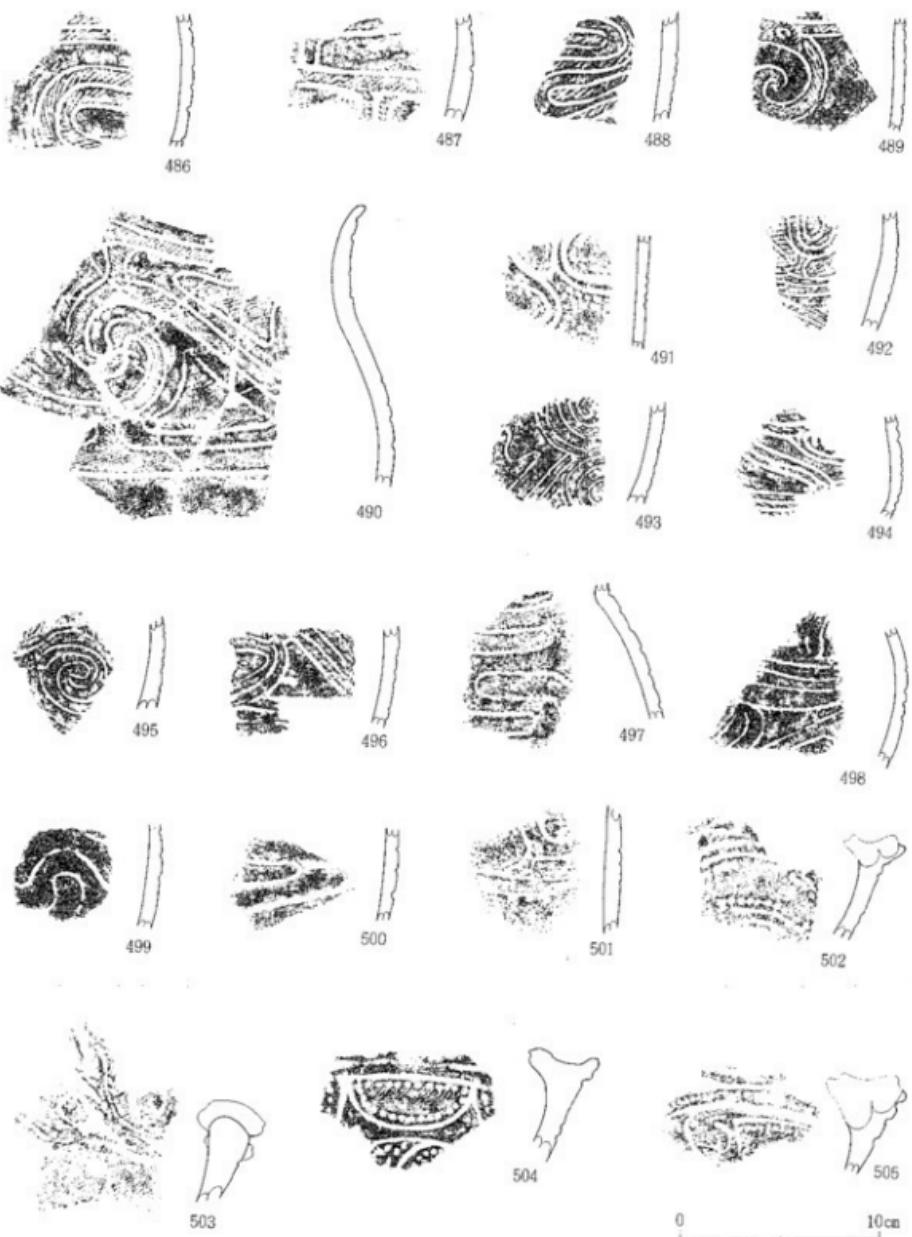
第128図 遺構外出土土器（弥生時代）

第129图 遗物出土工具

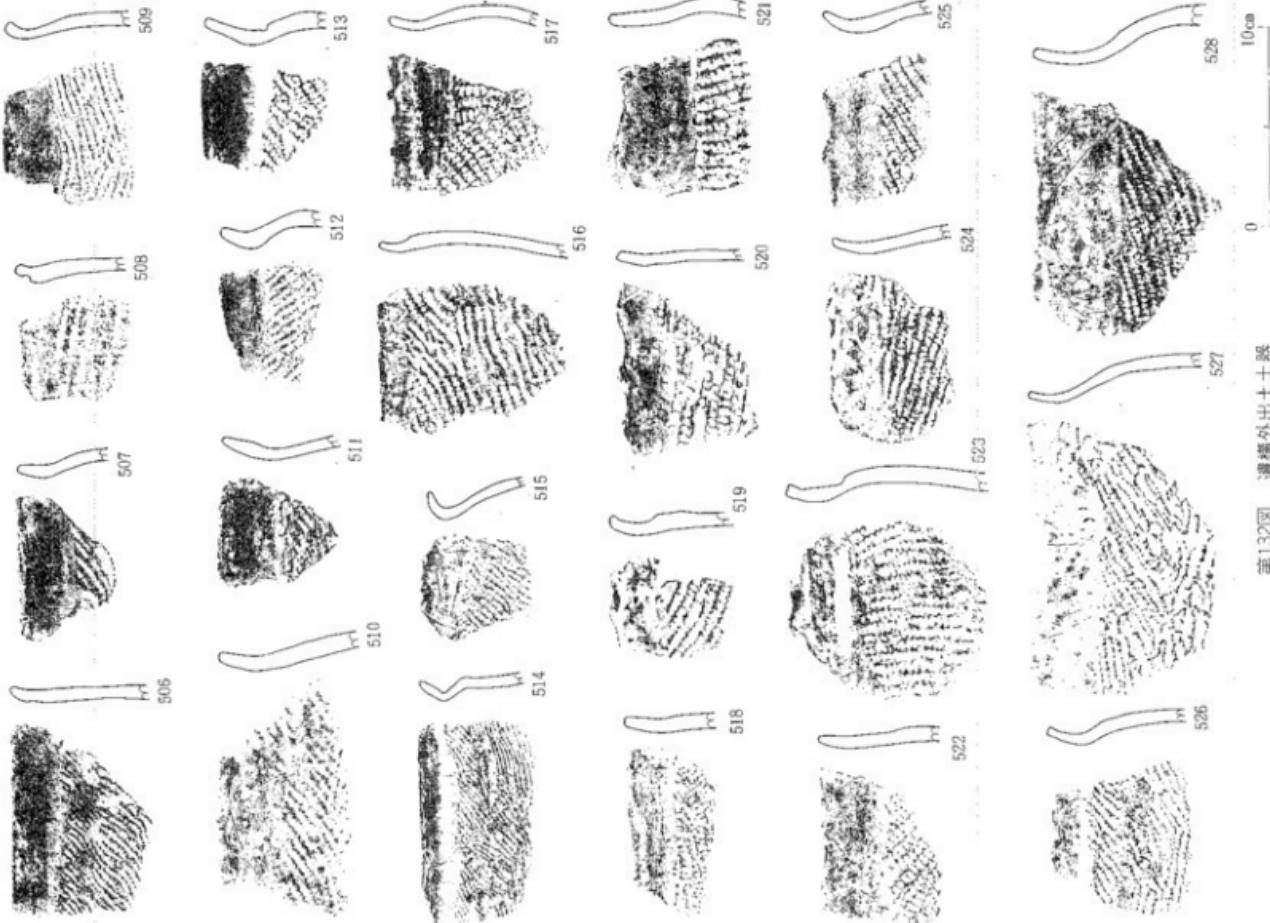




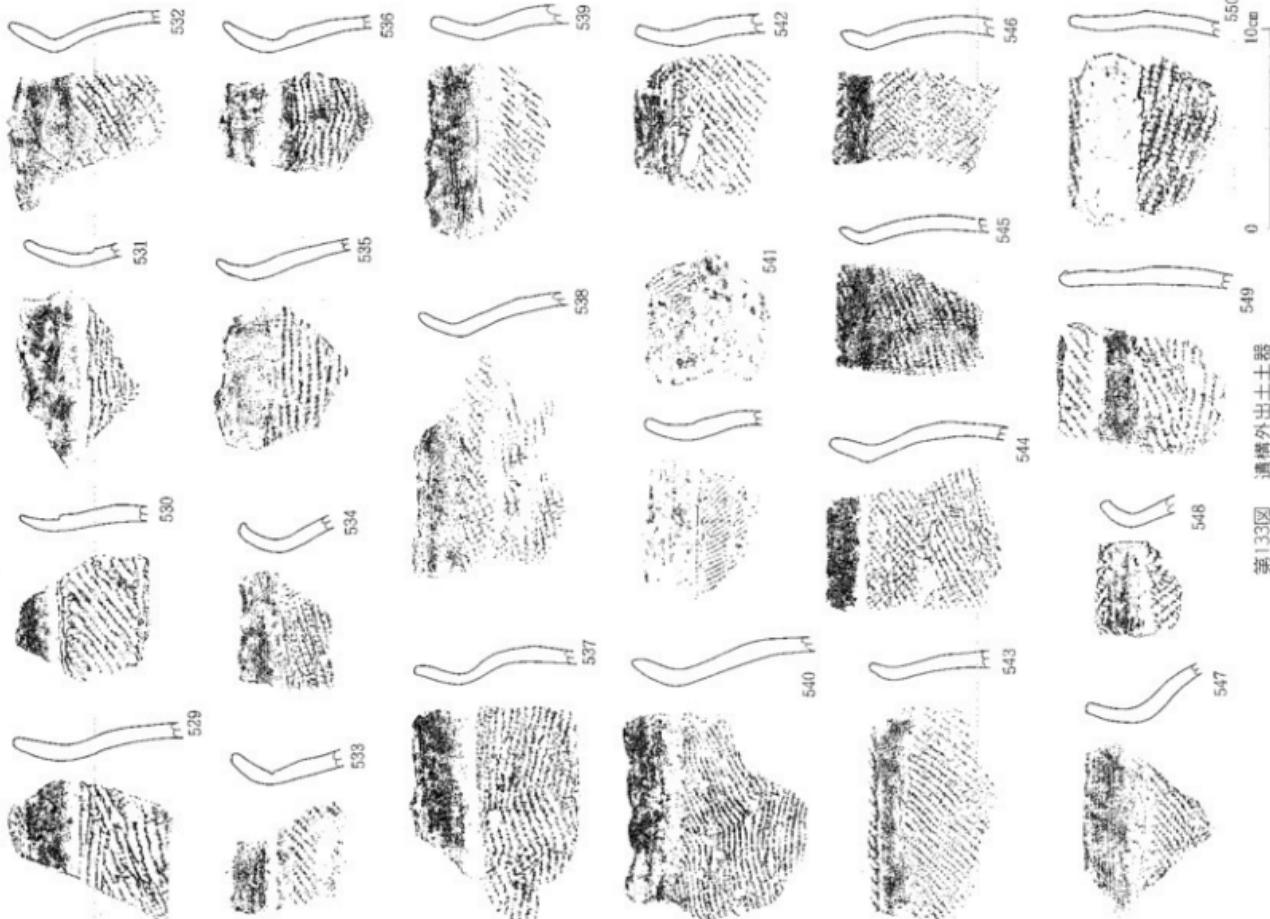
第130图 道沟出土器



第131図 遺構出土土器

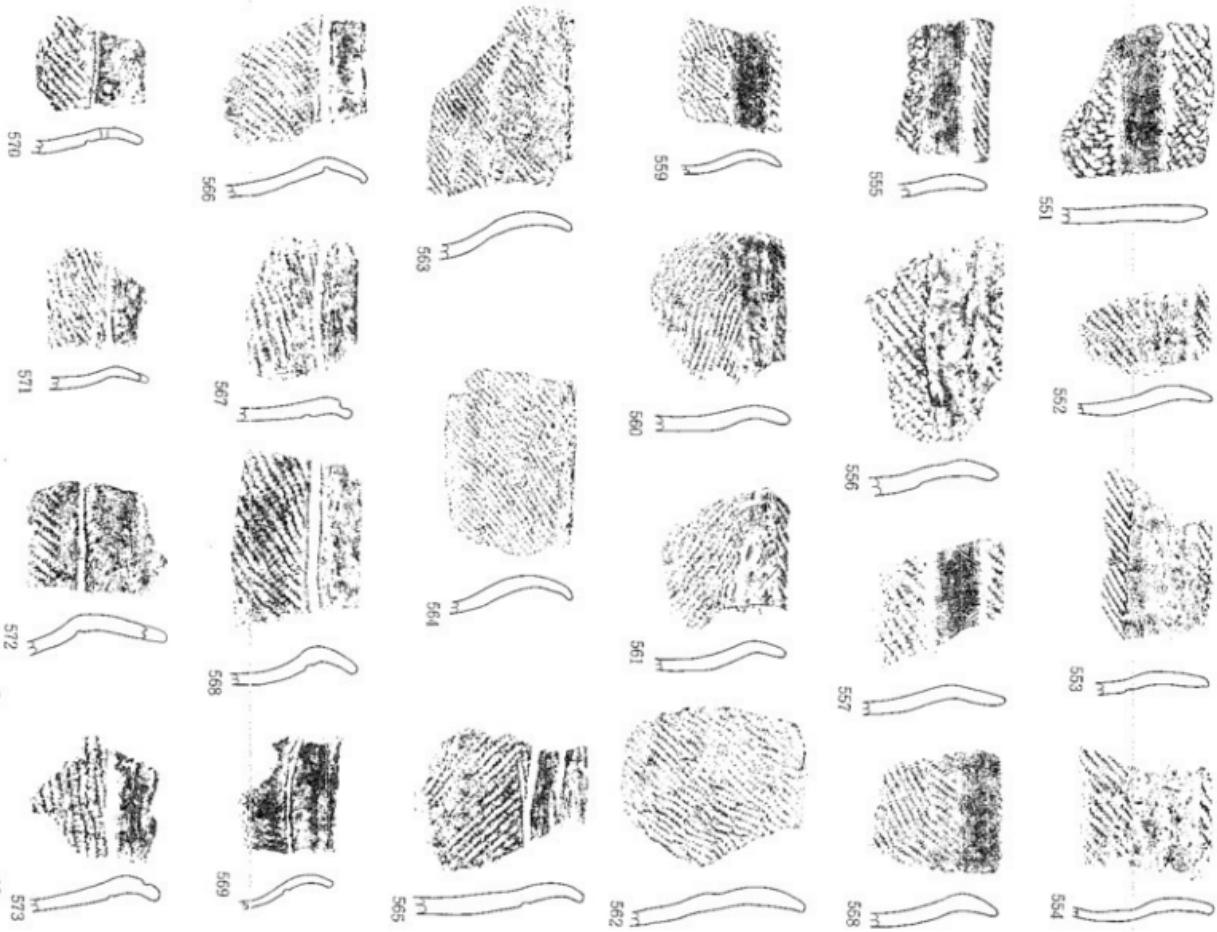


第132圖 遺構外出土器

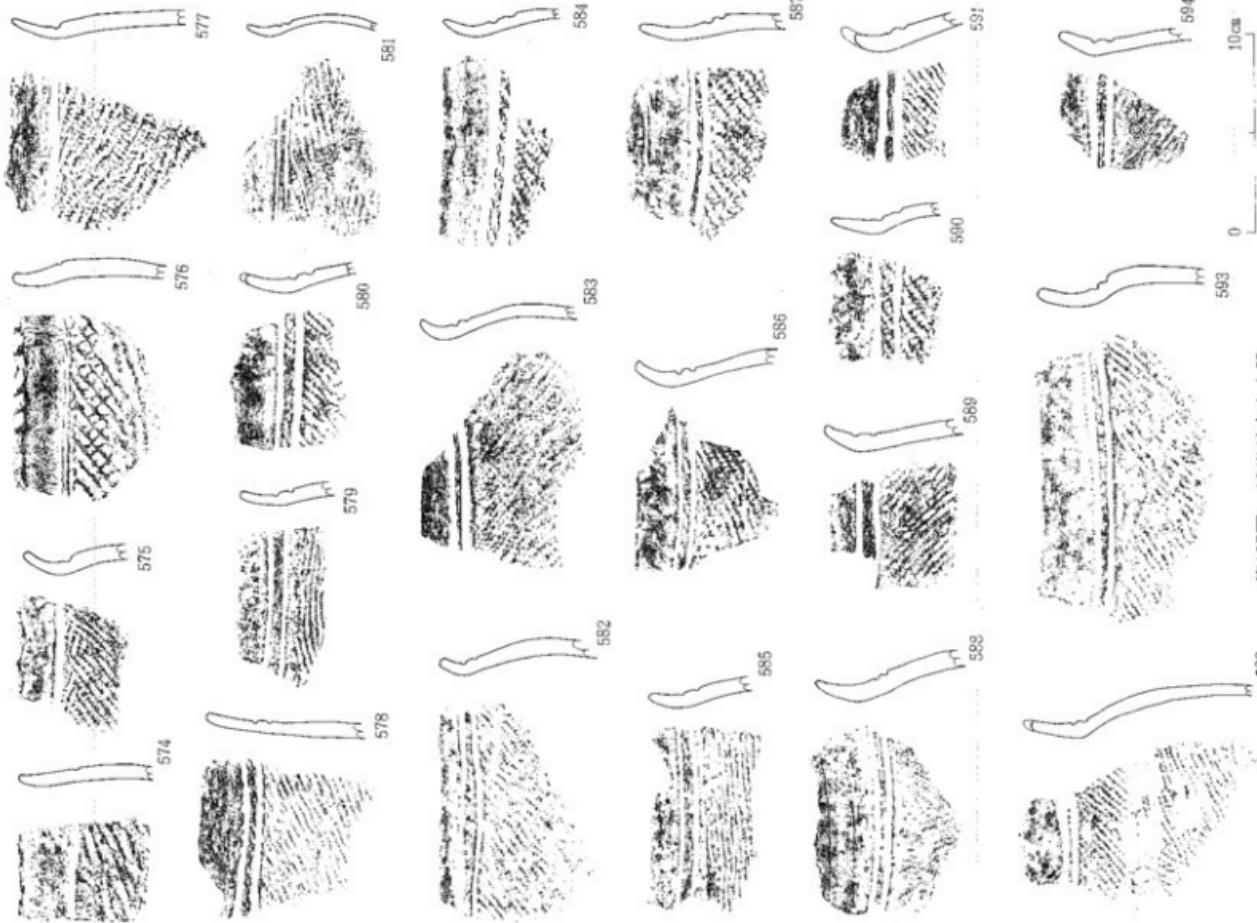


第133图 遗構外出土器

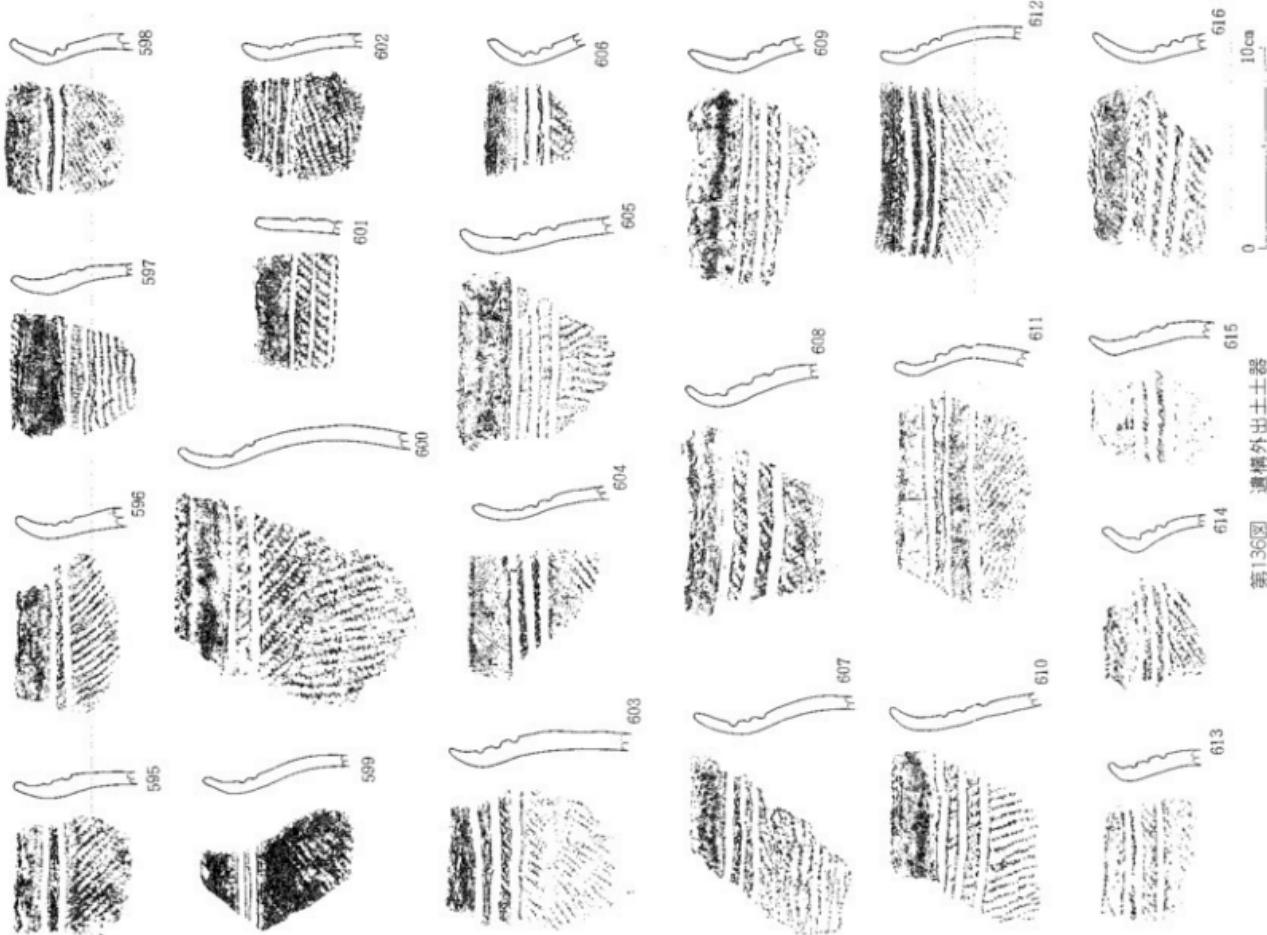
第134圖 遺構外出土器



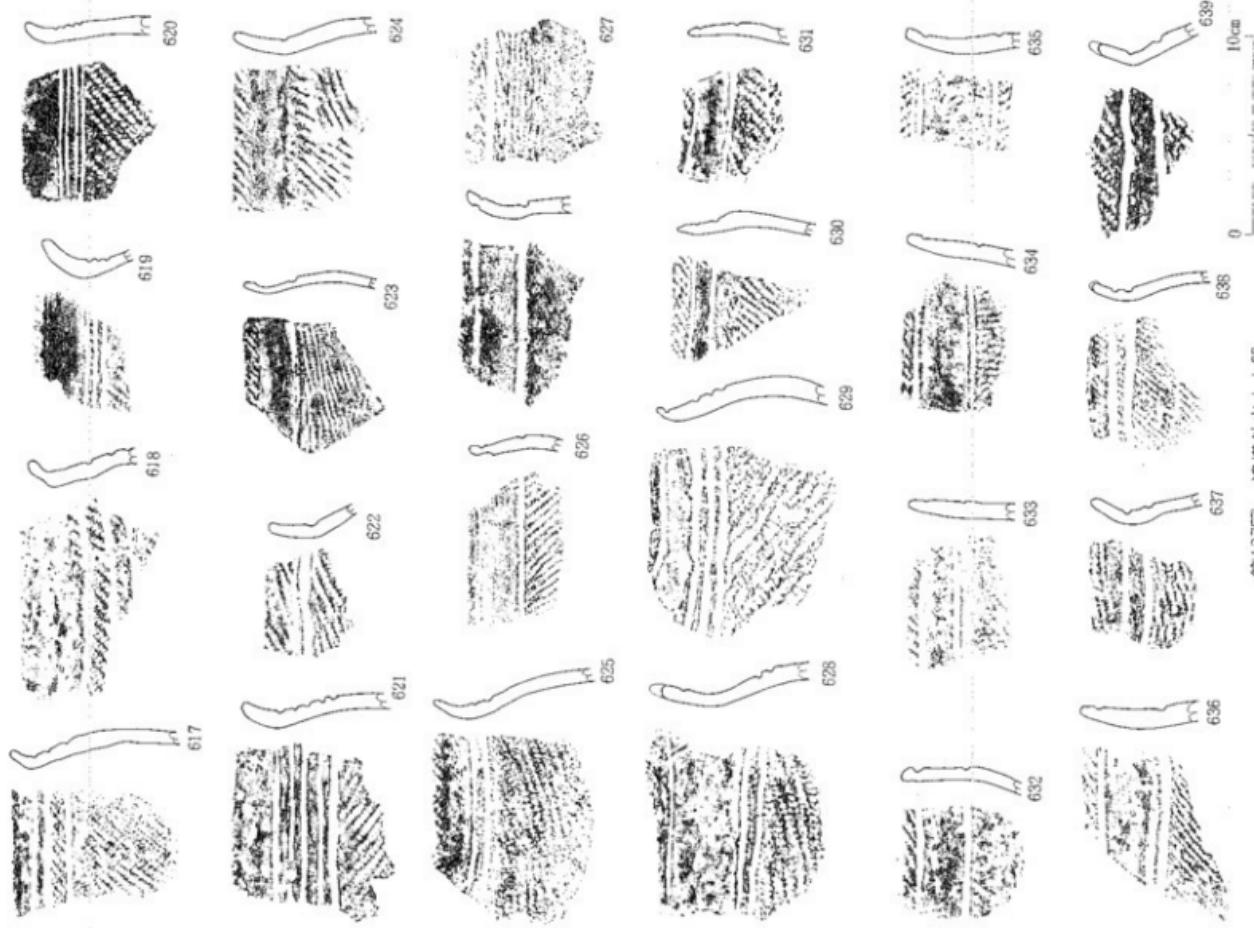
0 10cm



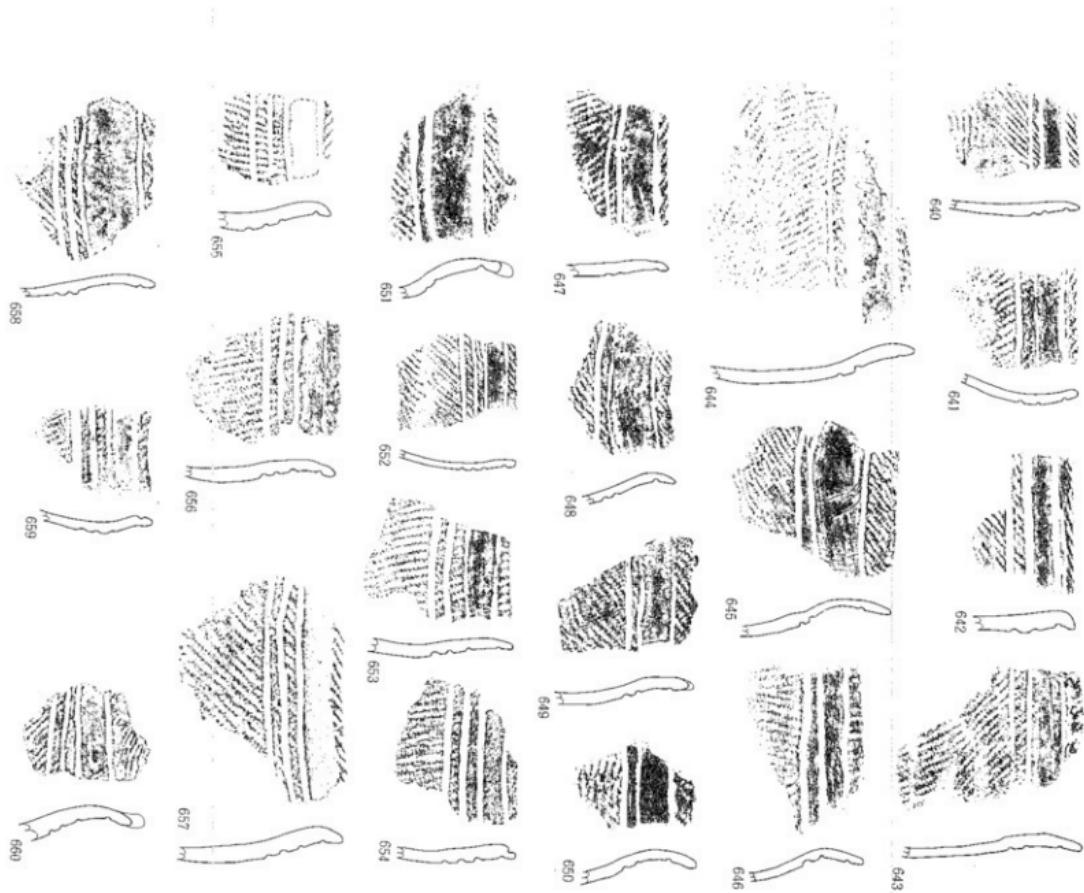
第135図 遺構外出土土器



第136圖 遺構外出土器

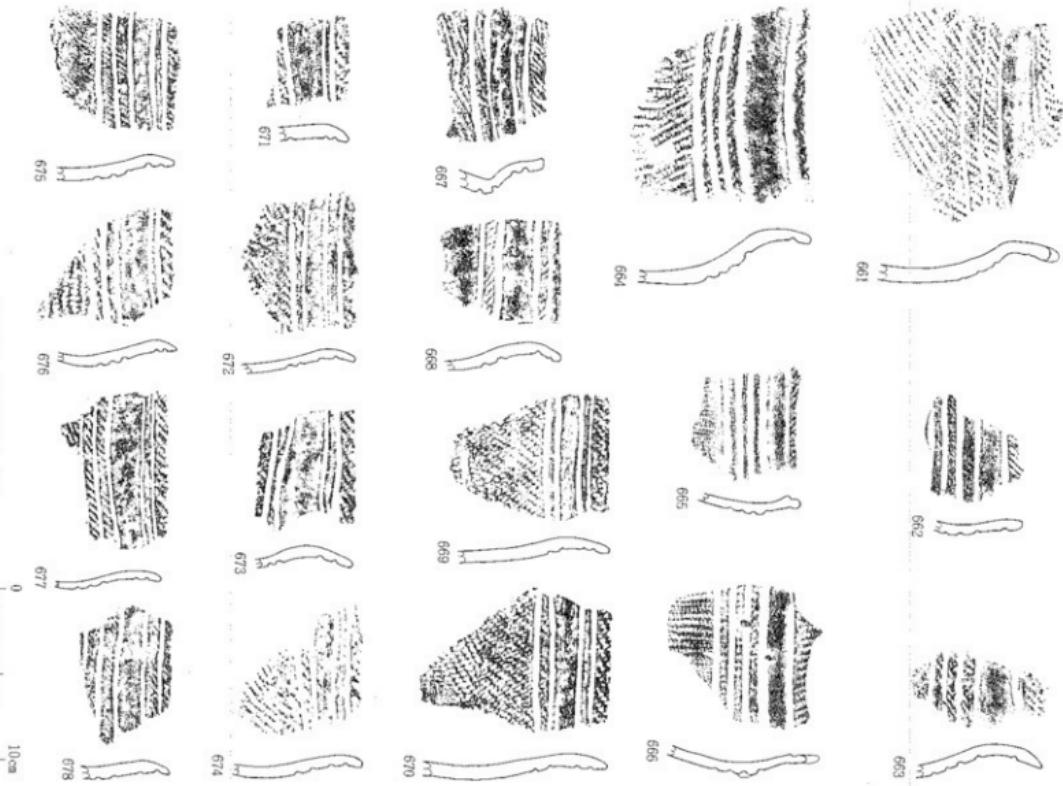


第137图 遗物外出土土器



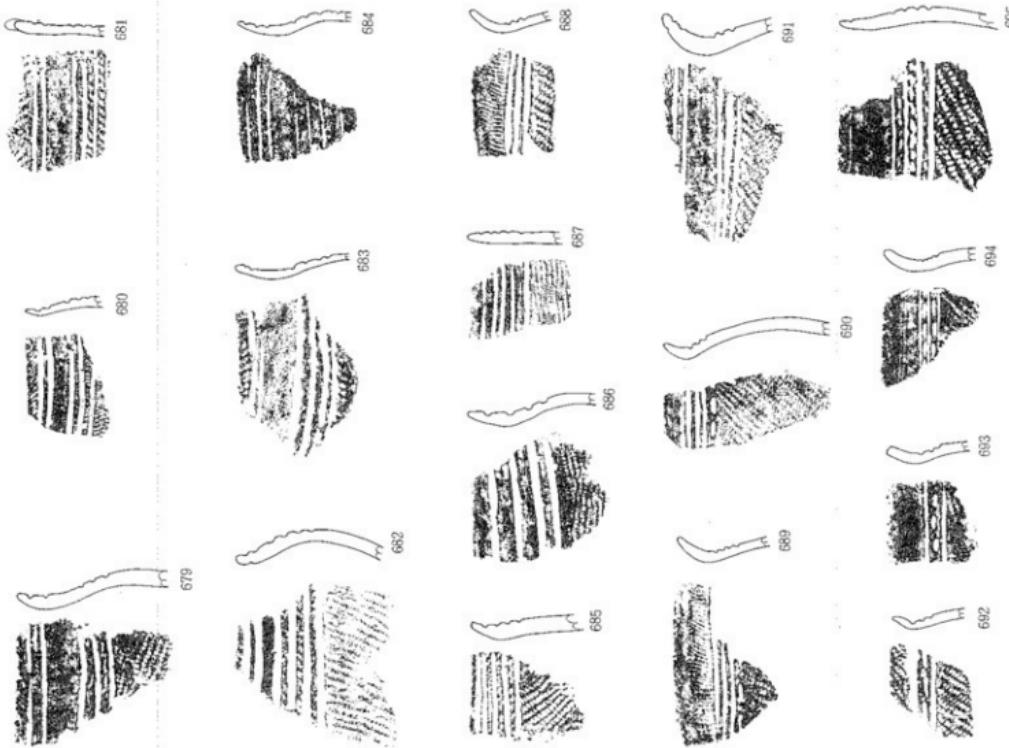
第138圖 通鑑外出土器

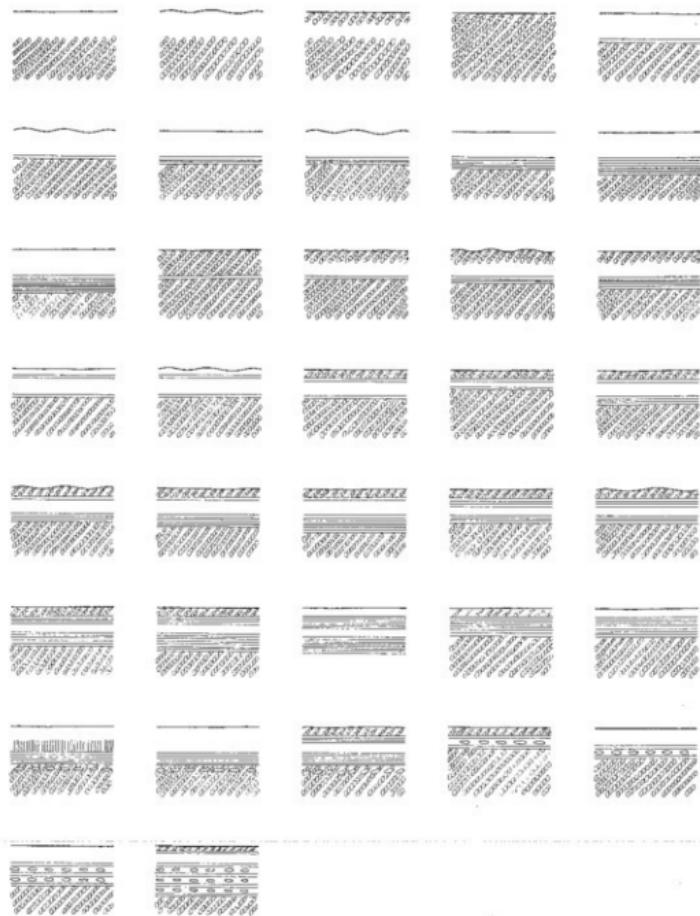
第139図 遺構外出土土器



第140圖 通橫外出土器

0 10cm



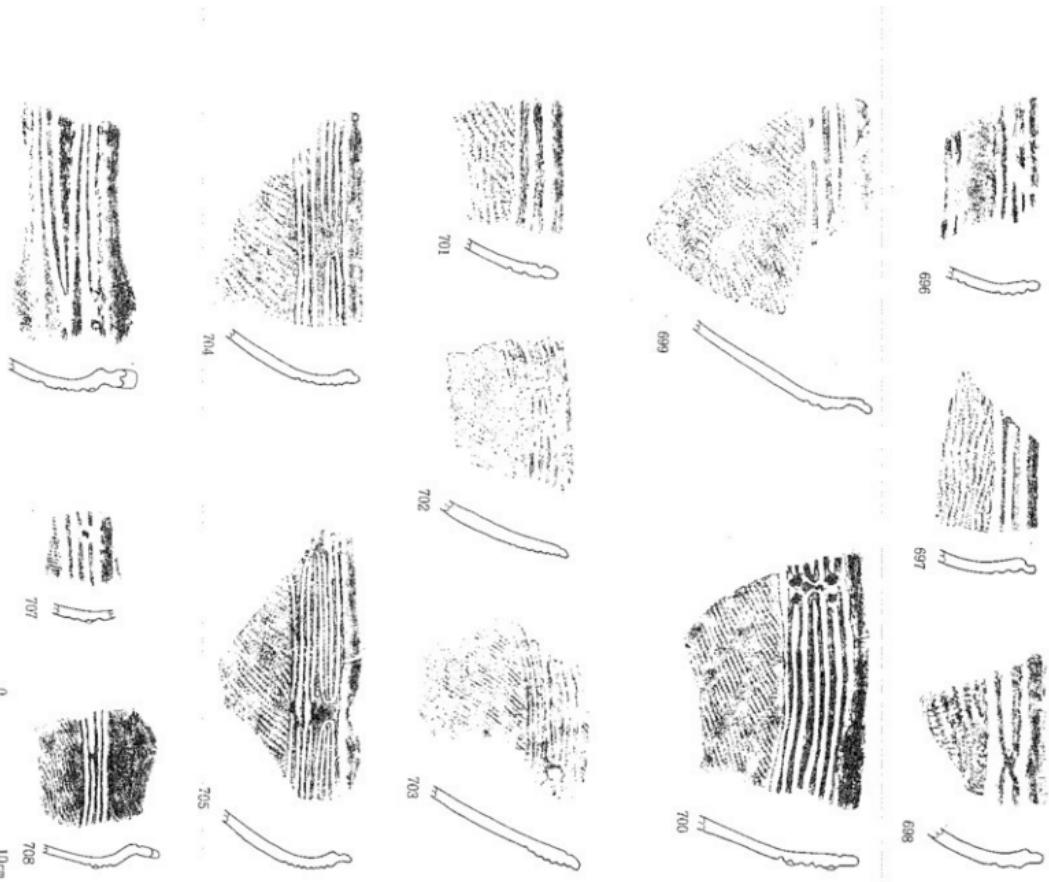


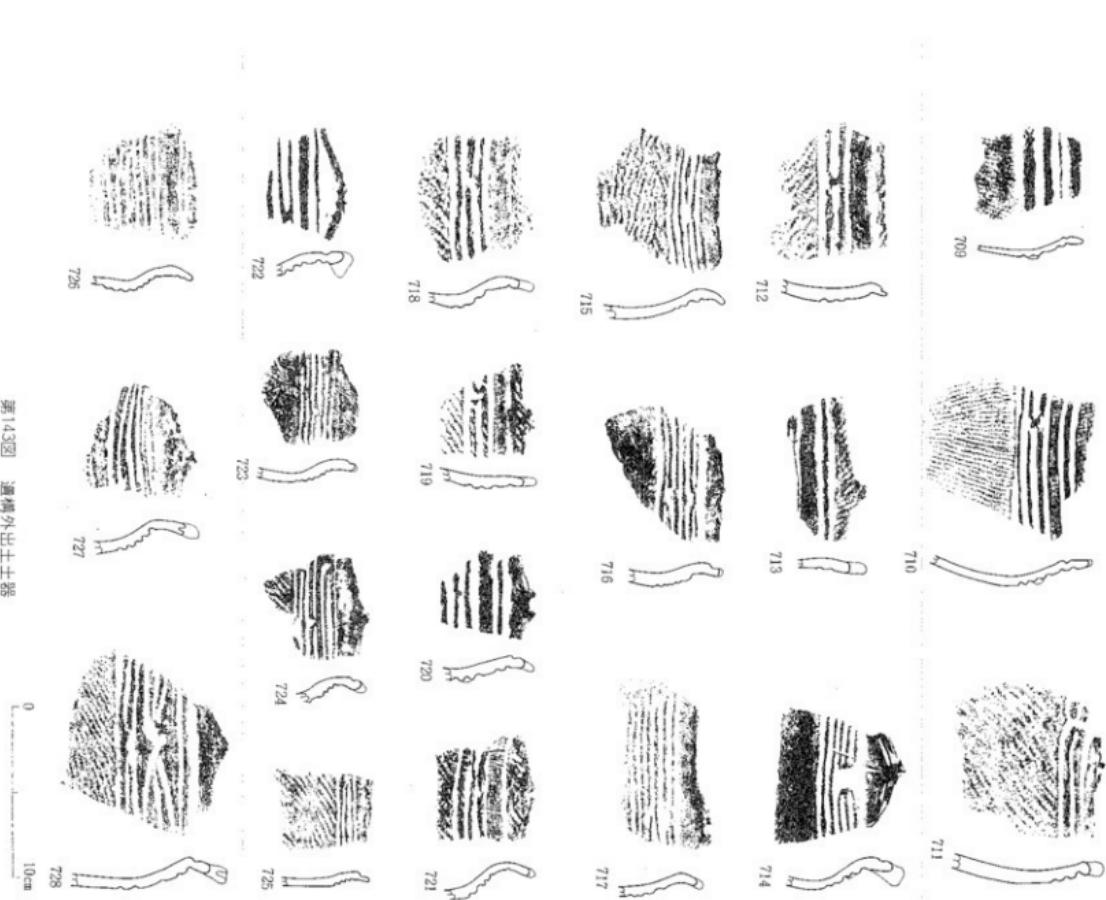
第141図 頸部文様



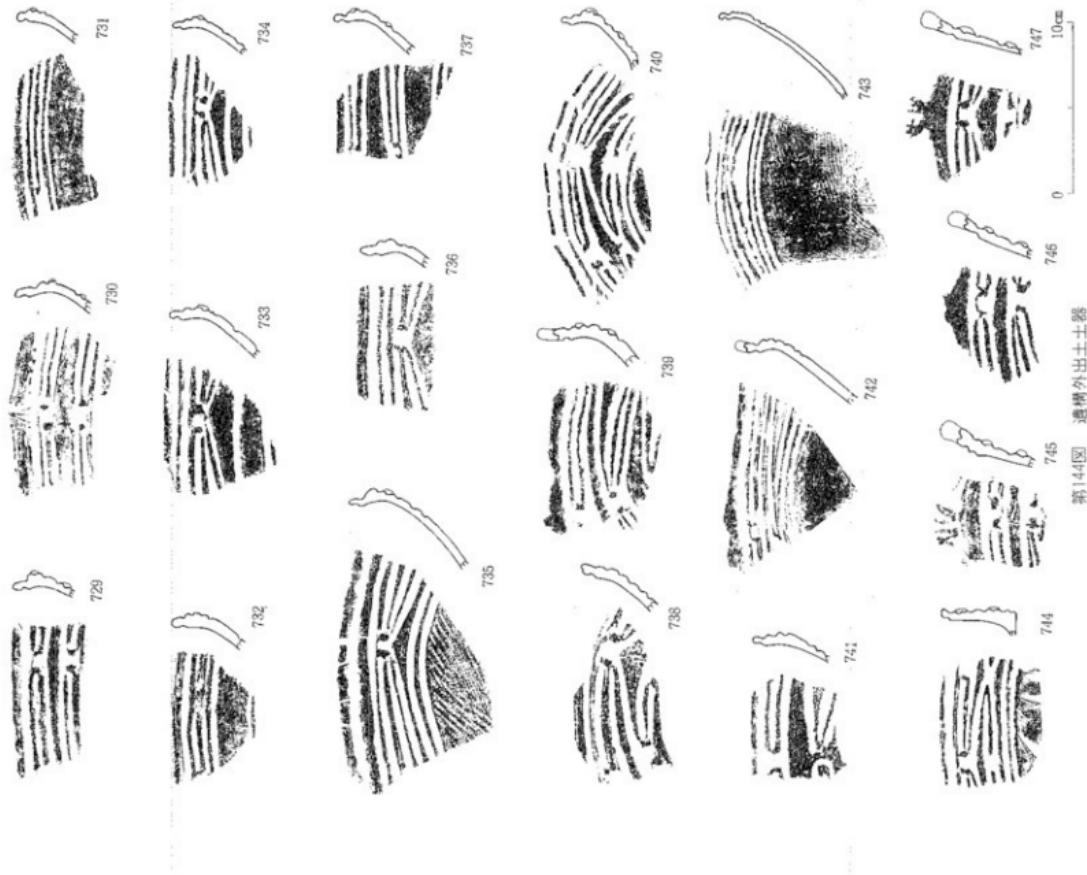
第142圖 通橋外出土土器

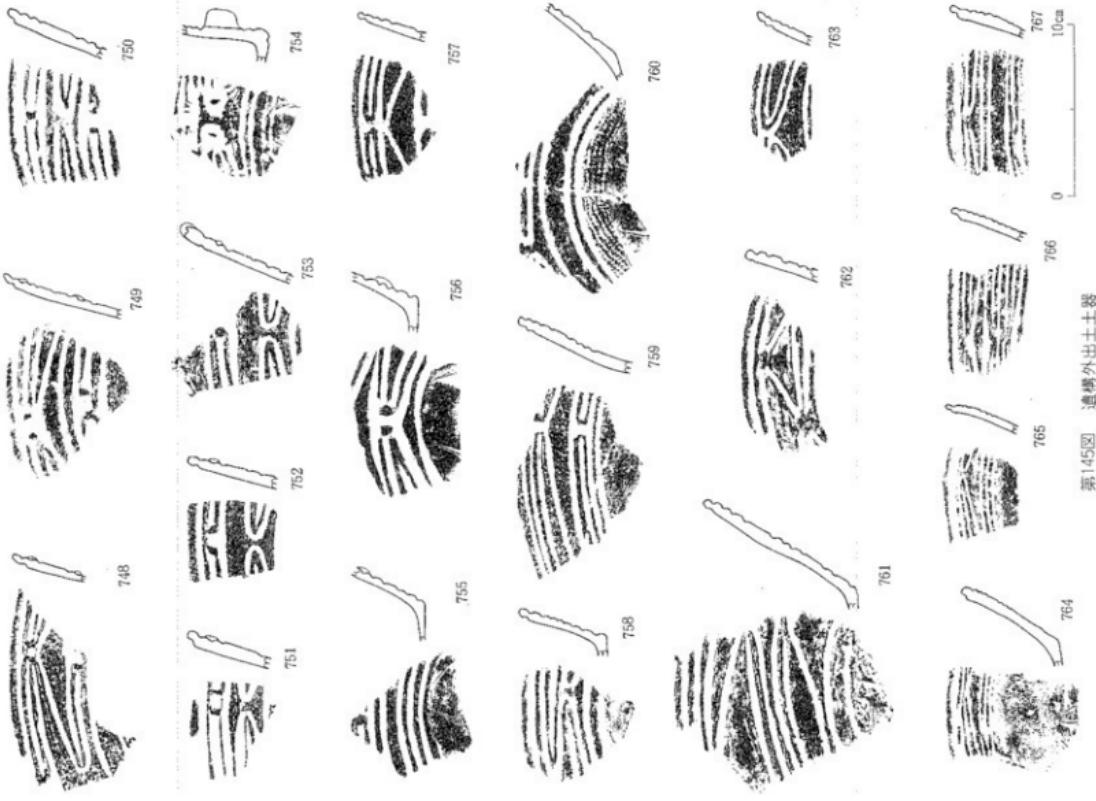
- 179 -



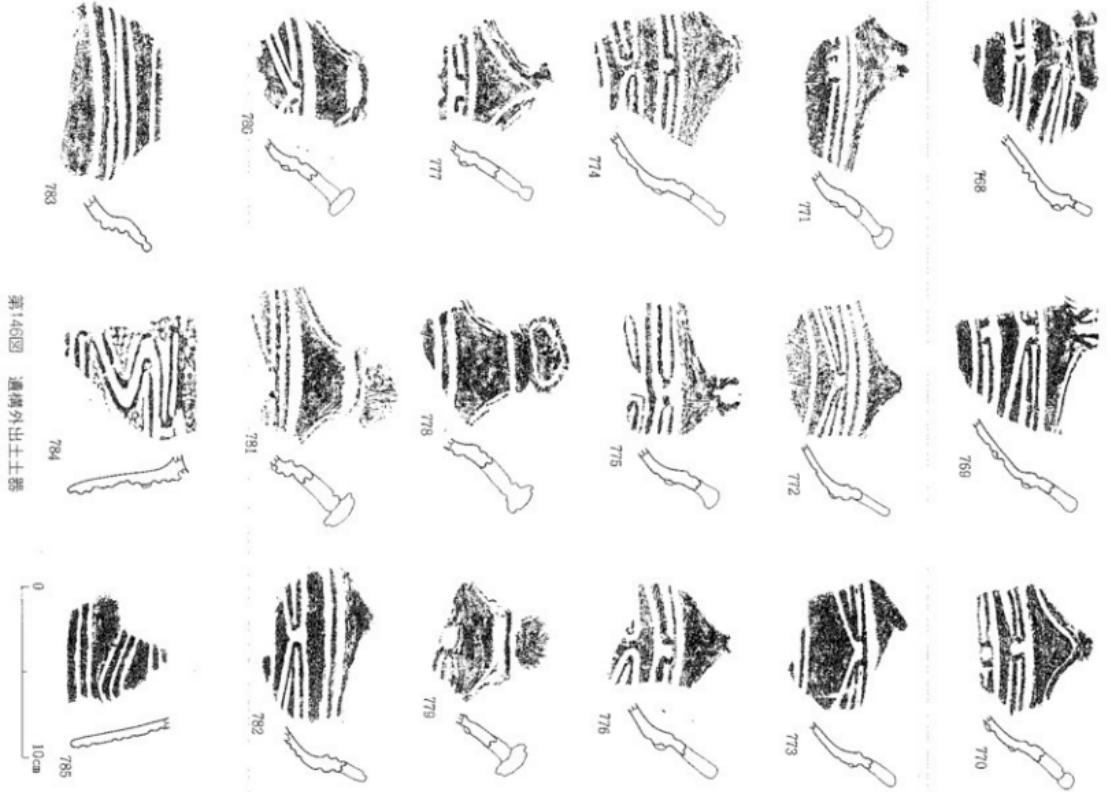


第143図 遺構外出土土器





第145图 通判外出土土器



第146図 通溝外出土土器

第147図 遺構外出土土器

0

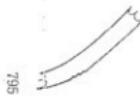
10cm



797



795



793



790



788



786



788



798



791



792

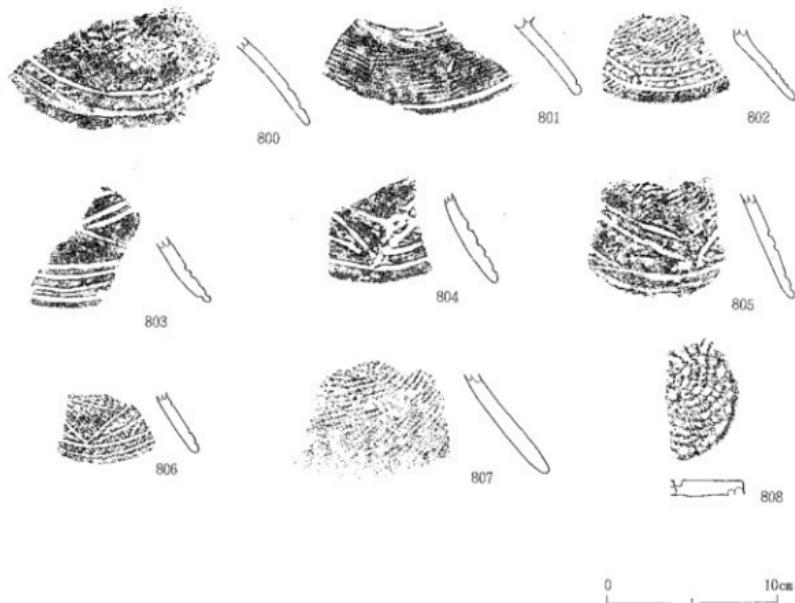


799



787





第148図 遺構出土土器

められ、全面に塗布されていたのであろう。頭部は複雑な作りで、何かを被っているようである。頬部は鼻を欠く。目は細長く、口は丸く表現され、周辺には刺突が施される。体部は乳房が付き、表面が細い沈線、背中は細い沈線と刺突が施される。腰部には刺突が施される。2は板状をなすもので、体下半部が欠損する。頭部は何かを被っているようである。頬部は鼻が高く表現されている。体部は乳房が付き、表面は細い沈線、背中は刺突が施される。3は頭顎部で、中空である。頭部には帽子を被っているようである。頬部は目が細長く、鼻は丸く高く、口は細い。頬には刺突が施され、後頭部と頸にはL・R早節幾文が認められる。4は体部で、中空である。体部は乳房が剥落し、へそが突出している。表面は細い沈線が、背中は細い沈線と刺突が施される。5～12は頭顎部である。13～21は体部及び下半身である。刺突及び沈線を施すもの、無文のものがある。18・19は中空である。22～42は足部で、22～31は中空である。足の先に刻み目を入れて指を表現しているものもある。43～45は動物形土製品である。43はほぼ完形、44は両手、両足が欠損する。いずれも抽象的な表現である。

45は鳥形土製品である。頭顎部で、頭部に刺突が施され、頬部にはくちばしが付く。

46は耳栓で、滑車形をなす。一部欠損する。

47～50は有孔土製品である。中心に孔のあるもので、50を除いては紡錘車と考えられる。48は無文、49は算盤玉状を呈する。

51・52は三角形土製品である。いずれも一部が盛り上がり、51は孔が穿たれている。

53・54は蝶形土製品である。53は細い沈線と刺突が施され、頂部に2個の孔が穿たれている。54は無文で、頂部が尖り、口縁部が折り返されている。

55～70は環状土製品である。腕輪形土製品や有孔球形土製品などとも呼ばれている。全て破損品である。形態はほぼ同じであるが、大きさに若干の差異があるようである。文様は沈線と刺突、沈線、無文のものがあり、55・56・59には繩文がみられる。

71は円盤状土製品である。板状のものであるが、若干凸レンズ状をなす。無文である。

72～84は再利用土製品である。土器片を利用したもので、ほとんどが円形である。

遺構出土石器（第161～206図184～929）

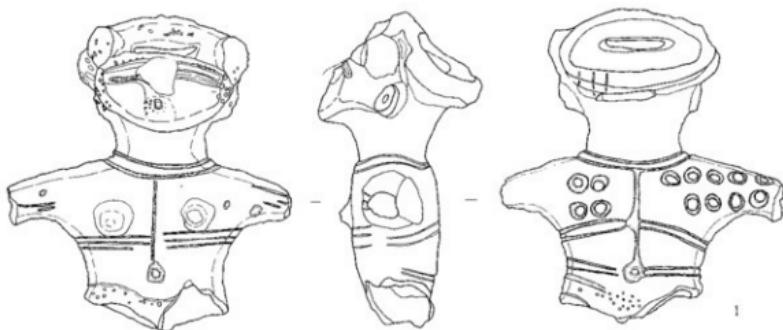
縄文時代と弥生時代の分類については、大部分が第II層の遺物包含層より出土したもので層位的分類が困難であり、また縄文時代と弥生時代の遺構の重複、畑による耕作などもあり、旧石器時代を除く縄文時代、弥生時代の分類はできなかつた。しかし、出土地点などから第179～183図613～663の磨製石斧については弥生時代のものと考えられる。

184～322は石鎚である。有茎のものが多く、無茎のもの少ない。有茎鎚の中では比較的細身のものが目立つ。アスファルトの付着するものもある。石質は硬質頁岩が多く、黒曜石などもある。323～356は石錐である。323～342は基部と錐部が明瞭に区別されるもので、錐部が途中で折れいるものもある。340～342は錐部で、折れたものである。343～356は錐状のもので、錐として扱った。石質は硬質頁岩である。357～418は石匙である。錐型のものと横型のものがある。錐型のものが多く、中でも細身、長身のものが比較的多い。つまみ部にアスファルトの付着するものがある。石質は硬質頁岩である。419は石鑿である。基部を欠き、石質は硬質頁岩である。420～424は楔形状をなすもので、比較的小形である。片面加工のものと片面加工のものがあり、アスファルトの付着するものもある。石質は硬質頁岩である。425～500はヘラ状石器である。左右対象で両面加工のものである。425～436は小形のもので本類に含めた。石質は硬質頁岩である。501～517は刃部が両面加工のものである。不定形のもので、鋸的な機能をもつものと考えられる。石質は硬質頁岩が多い。518～550は搔器・搔器状石器である。片面加工で、550にはアスファルトが付着する。石質は硬質頁岩が多い。551～566は削器・削器状石器である。縱長のもので、側縁に片面加工を施す。石質は硬質頁岩である。567～575は鉈齒縁石器である。半月形をなすもので、両面加工である。上半にアスファルトの付着するものが多い。石質は硬質頁岩である。576～663は磨製石斧である。出土地点などから576～612は縄文時代、613～663は弥生時代と考えられる。两者とも破損品が多く、刃部は丸味をもつものが多い。576・577は小形磨製石斧で、576は細身である。662は片刃である。後者には比較的大形のものが多い。石質は凝灰岩のものが多い。664～666は環状石斧である。円整状をなし、

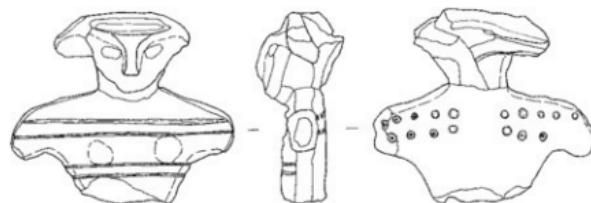
中心に孔をもつものである。孔の周辺にはアスファルトが付着する。664は665・666より一回り小さく、刃部は丸味がある。石質は凝灰岩である。667・668は独鉛石である。いずれも破損品である。667の中央くびれ部にはアスファルトが付着する。石質は凝灰岩である。669～671は石刀である。669は完形品である。内反りで、1側縁が刃状をなし、断面は楔形で、握りの部分もある。670・671は破損品である。石質は669が凝灰岩、670・671は粘板岩である。672は石劍である。中央部から折れている。断面が凸レンズ状をなし、両側縁に鋭い刃を作り出し、先端部に刻みを入れている。石質は粘板岩である。673～684は石棒である。全て破損品である。断面は円形もしくは凸レンズ状をなすものである。石質は粘板岩が多い。685・686は棒状石器である。円筒形をなすもので、断面が円形である。全面を磨っている。687は石鍤である。扁平な自然石の両端を打ち欠いている。688～828はくぼみ石である。くぼみ部が数ヶ所みられるもの、片面・両面のものがある。磨石として使用しているものも認められる。829～913は磨石・敲石である。全面を磨るもの、側面に敲打痕の認められるものがある。913は長方形に作られるもので、一応本類に含めた。914～923は石皿、924～928は石皿状石器である。914は完形品、他はほとんど破損品である。中央部がくぼんでおり、良く磨れている。922には脚が付いている。石質は安山岩である。929は台石である。中央部が良く磨れている。

石製品（第207図1～7）

1～4は玉類である。1は小玉で、石質は凝灰岩である。2は長さ1.7cmの玉で、石質は碧玉と考えられる。3は管玉で、石質は凝灰岩である。4は勾玉で、1側面の2ヶ所に刻み目を入れている。石質は玉髓と考えられる。5～7は有孔石製品である。自然石を利用したもので、孔は両面から穿っている。5は装飾品と考えられ、玉の類へ入るものであろう。石質は不明である。6の石質は凝灰岩である。7の石質は泥岩で、板状のものに2個の孔を穿っている。



1



2

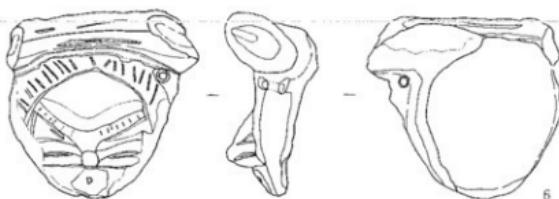
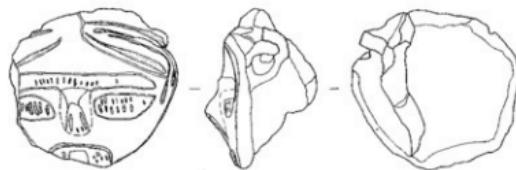
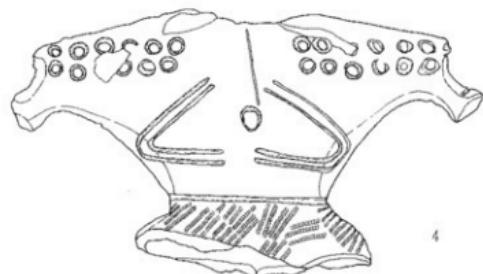
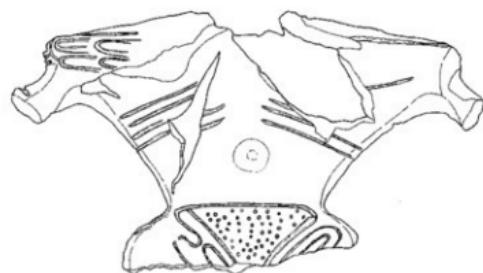


3

1・2 造縁外
3 2号住居跡（弥生）

第149図 土製品

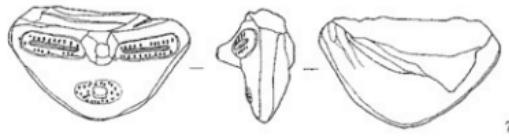




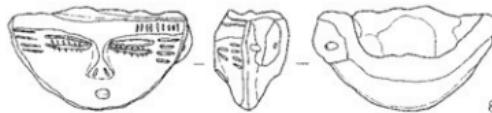
4 ~ 6 造模外

第150図 土製品

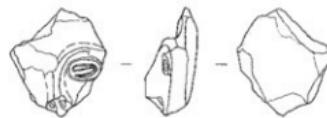
0 5 cm



7



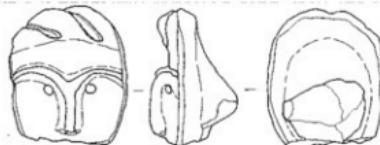
8



9



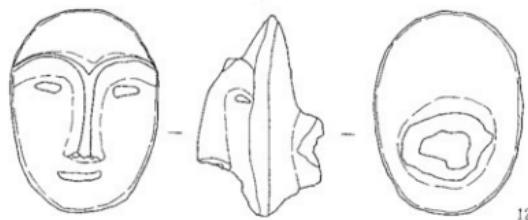
10

7・8 集石Ⅱ
9～11 造構外

11



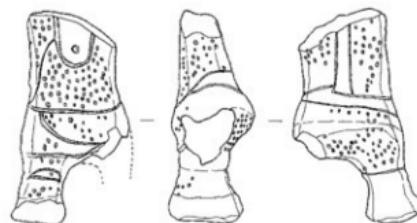
第151図 土製品



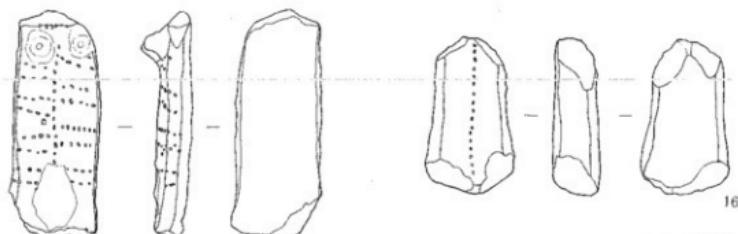
12



13



14

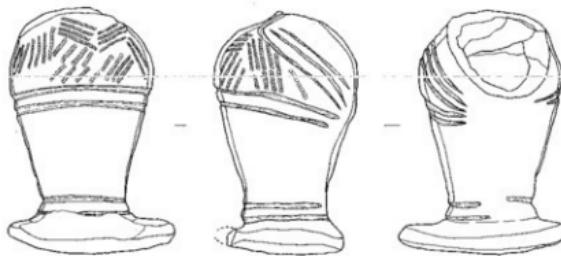
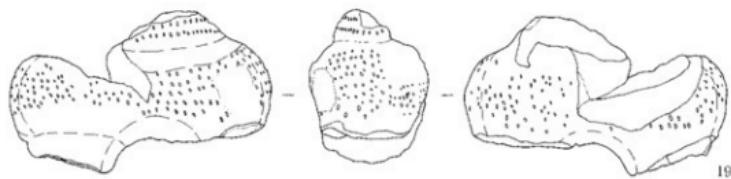
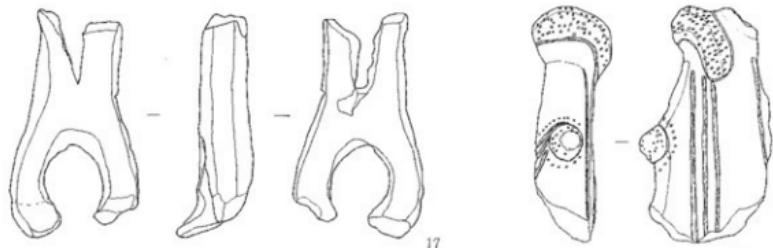


15

12~16 遺構外



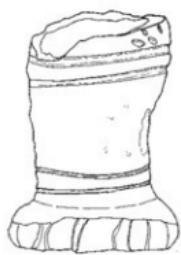
第152図 土製品



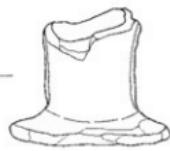
17・18・21・22
遺構外
19
集石 I
20
集石 II

第153図 土製品





23



24



25



26



27



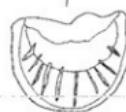
28



30



29



30

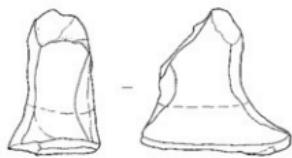


31

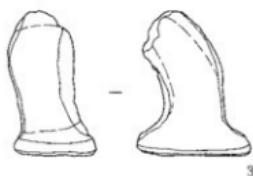
23~31 造構外

第154図 土製品

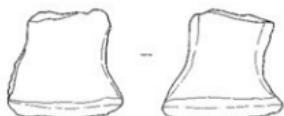




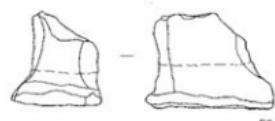
32



33



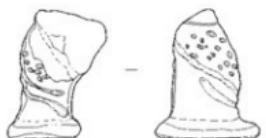
34



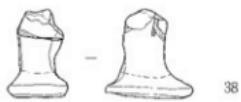
35



36



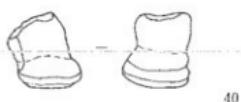
37



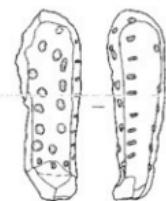
38



39



40



42

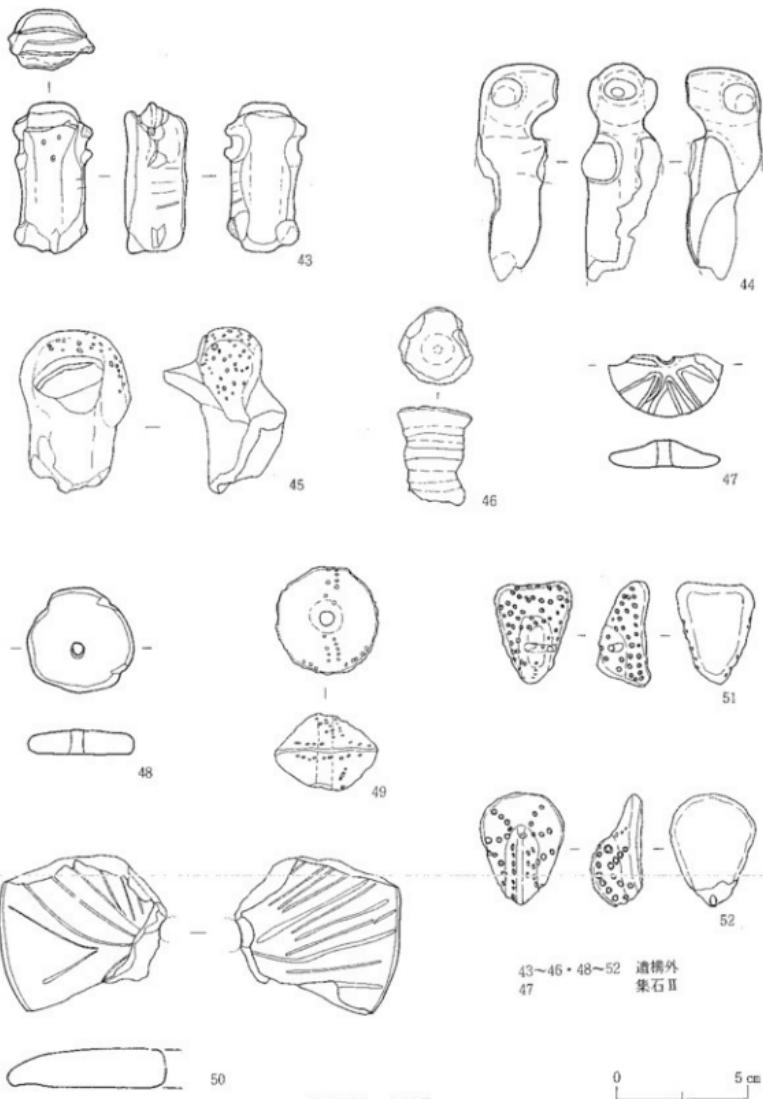


41

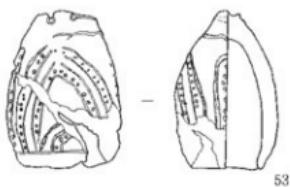
32~39・41・42 遺構外
40 集石 II

第155図 土製品

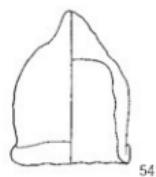




第156図 土製品



53



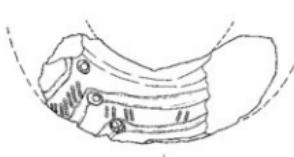
54



I



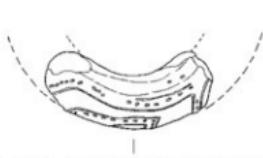
55



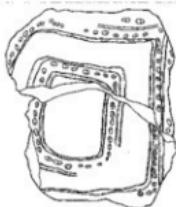
I



56



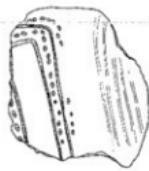
I



57



I



58

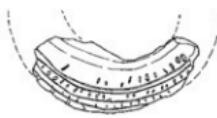
53~58 造構外

第157図 土製品

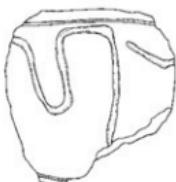
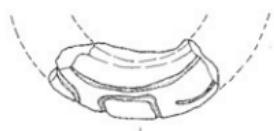
0 5 cm



59



60



61



62



63



64

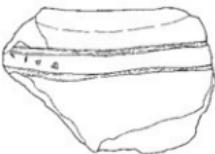
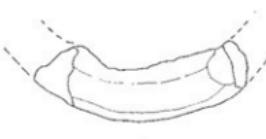
59~64 遺構外

第158図 土製品

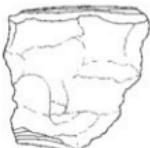
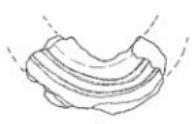




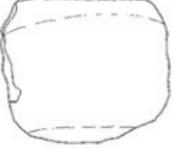
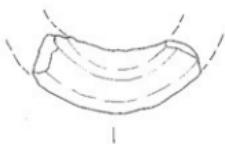
65



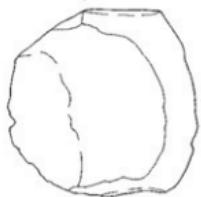
66



67

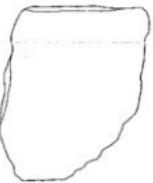


68



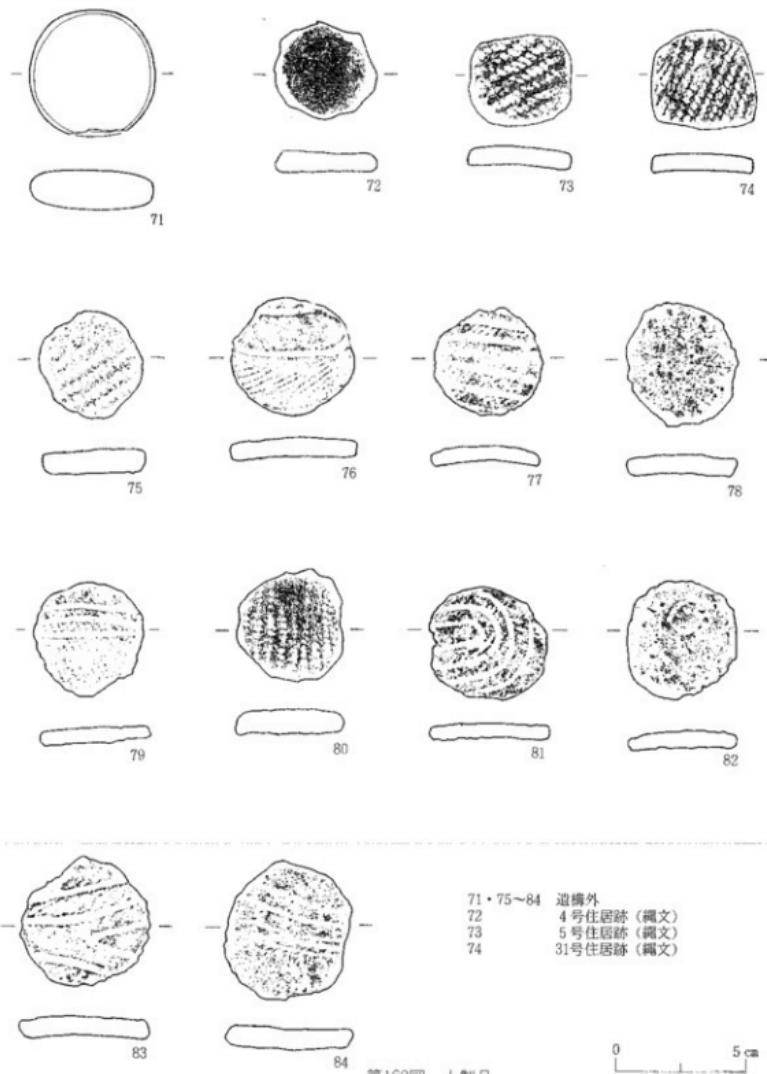
69

第159図 土製品

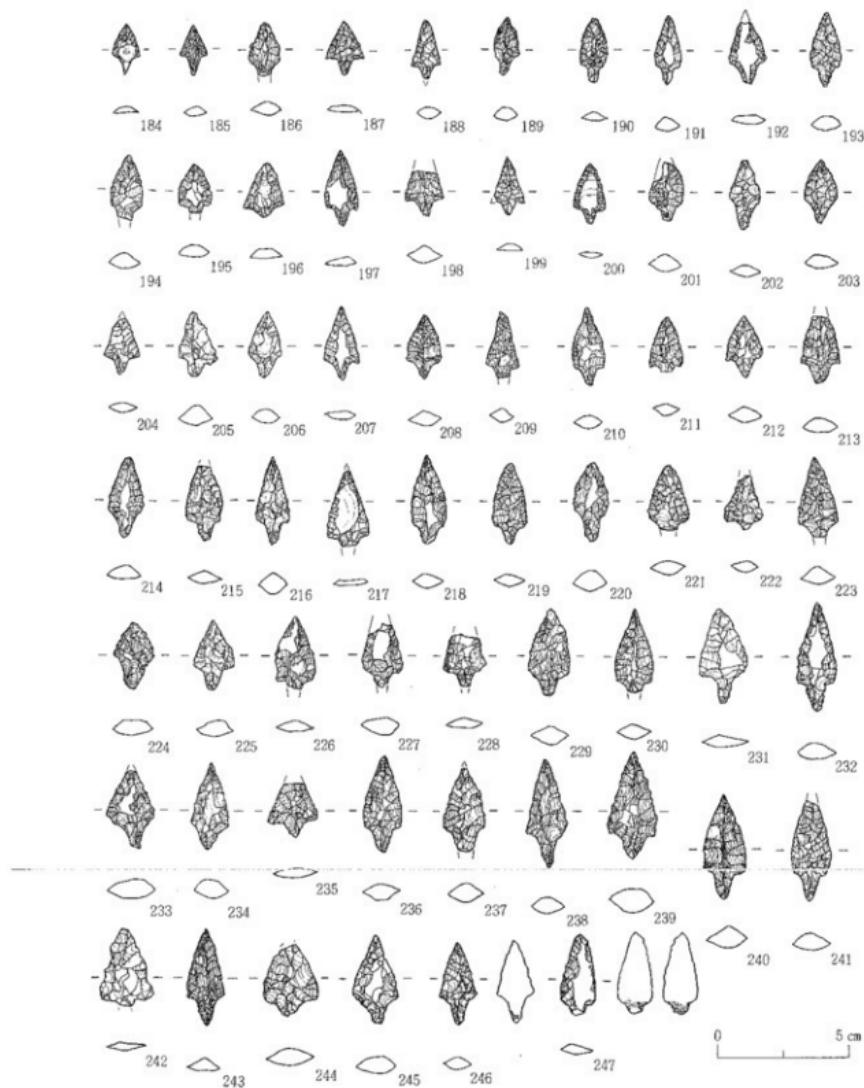


0 5 cm

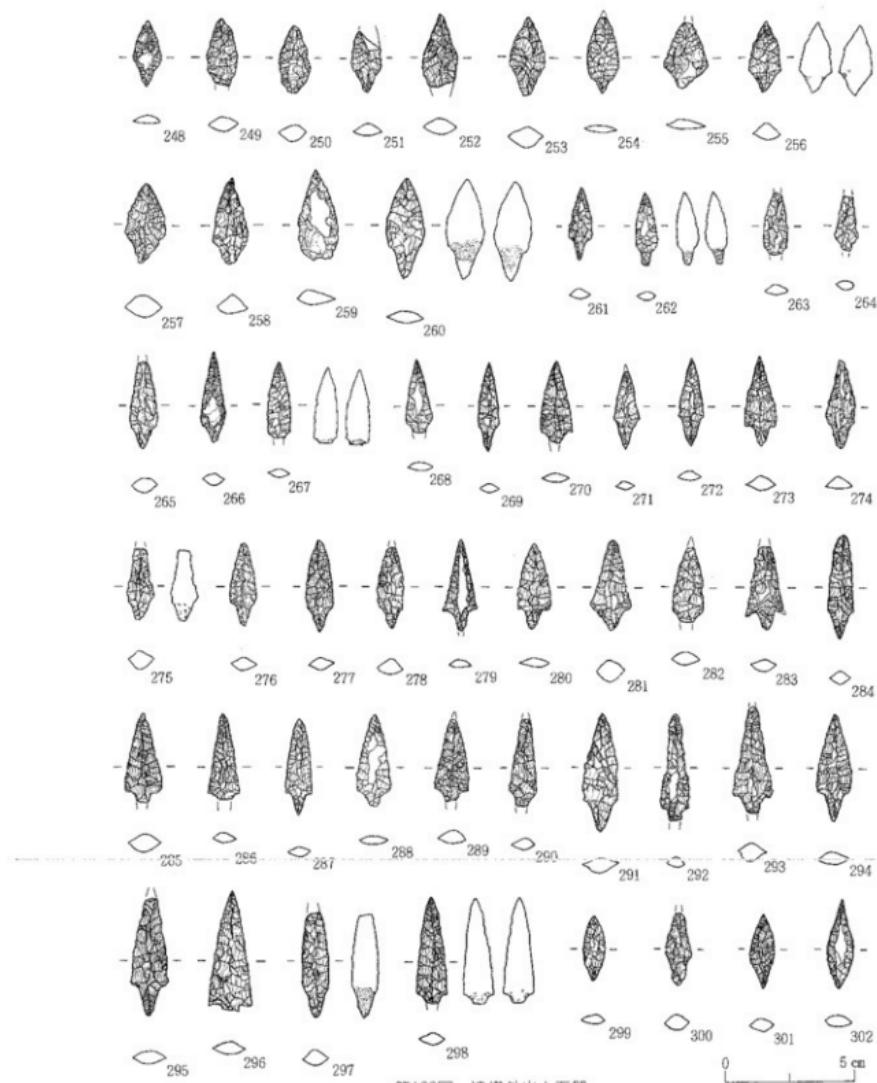
65・66・68～70 遺構外
建物跡柱穴



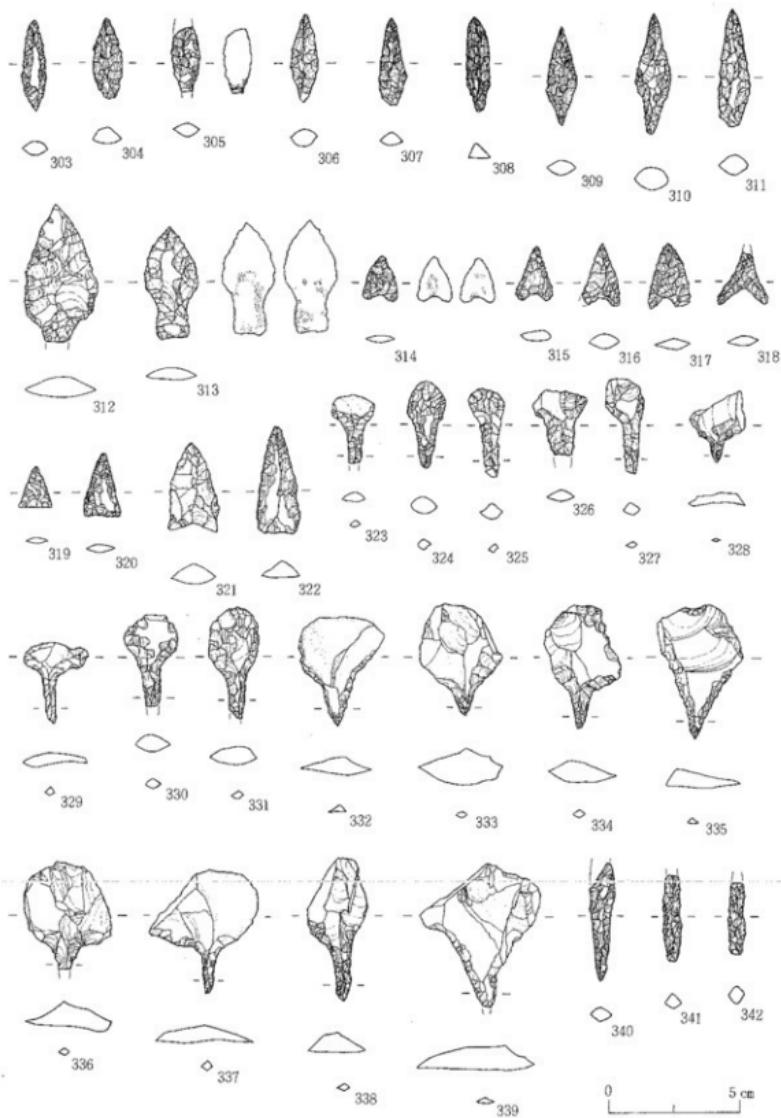
第160図 土製品



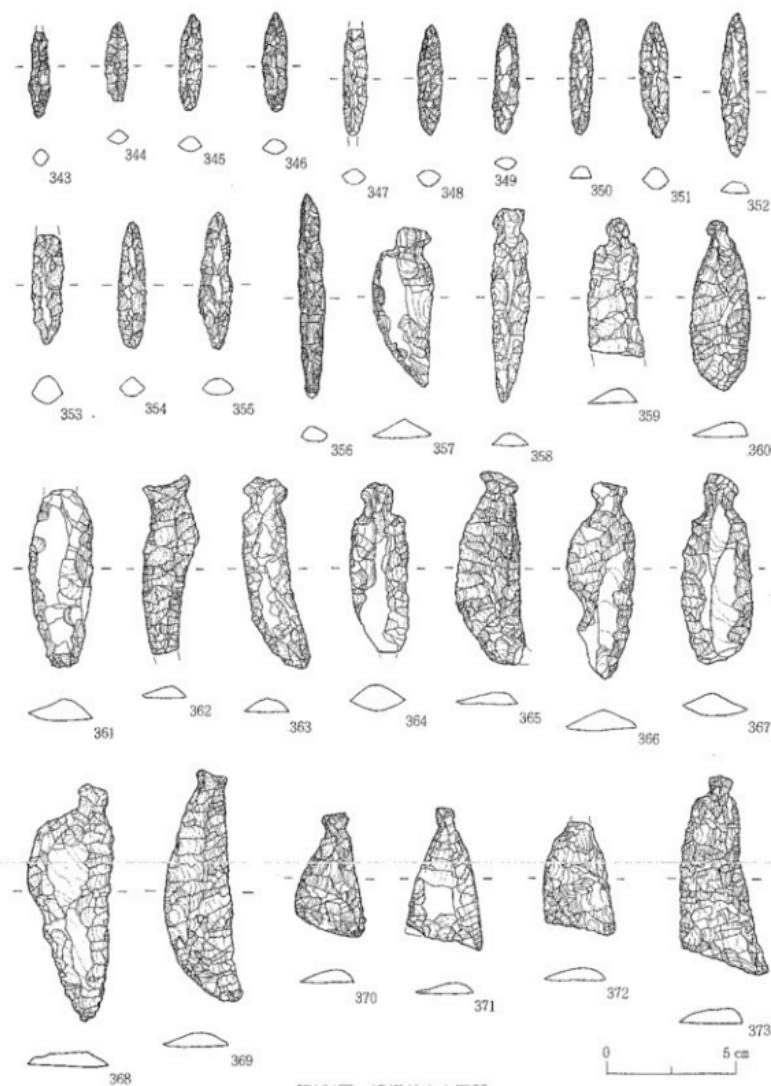
第161図 遺構外出土石器



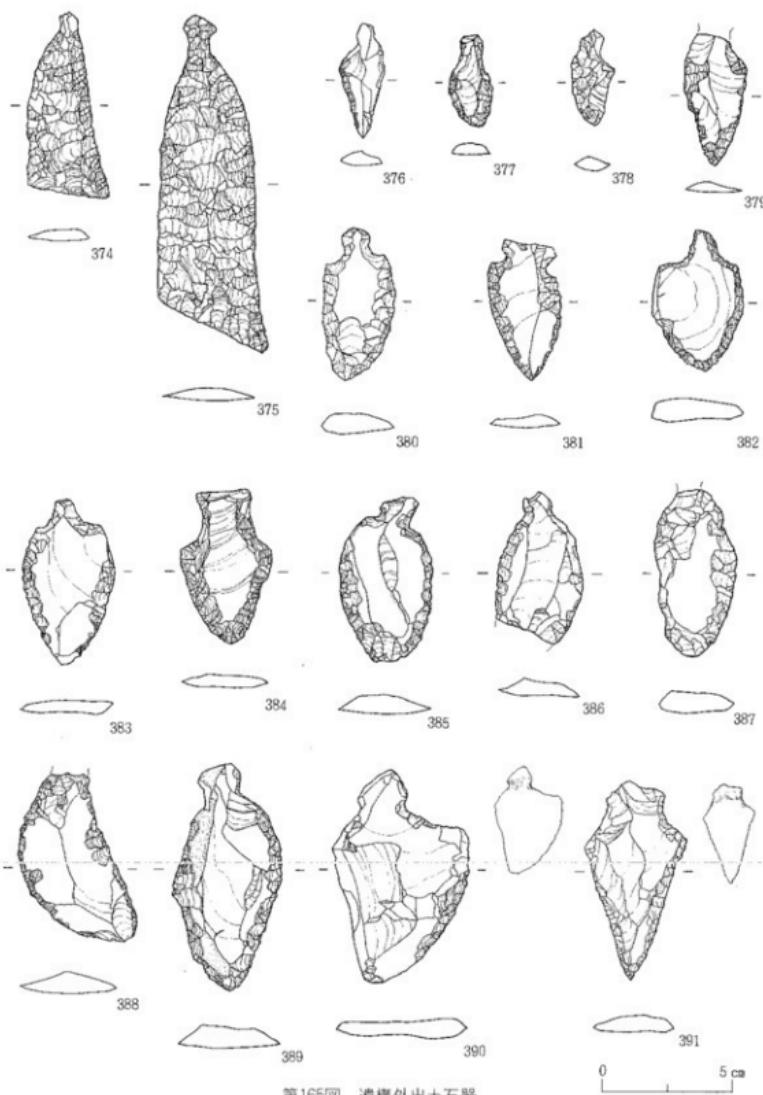
第162図 通構出土石器



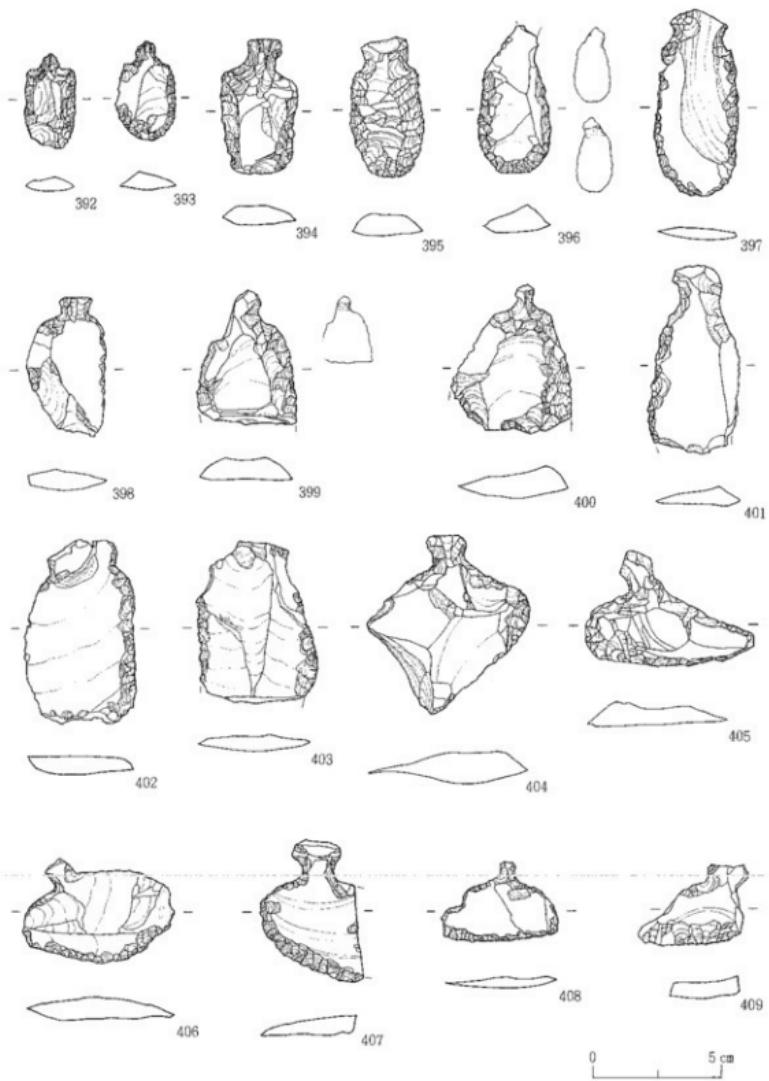
第163図 遺構外出土石器



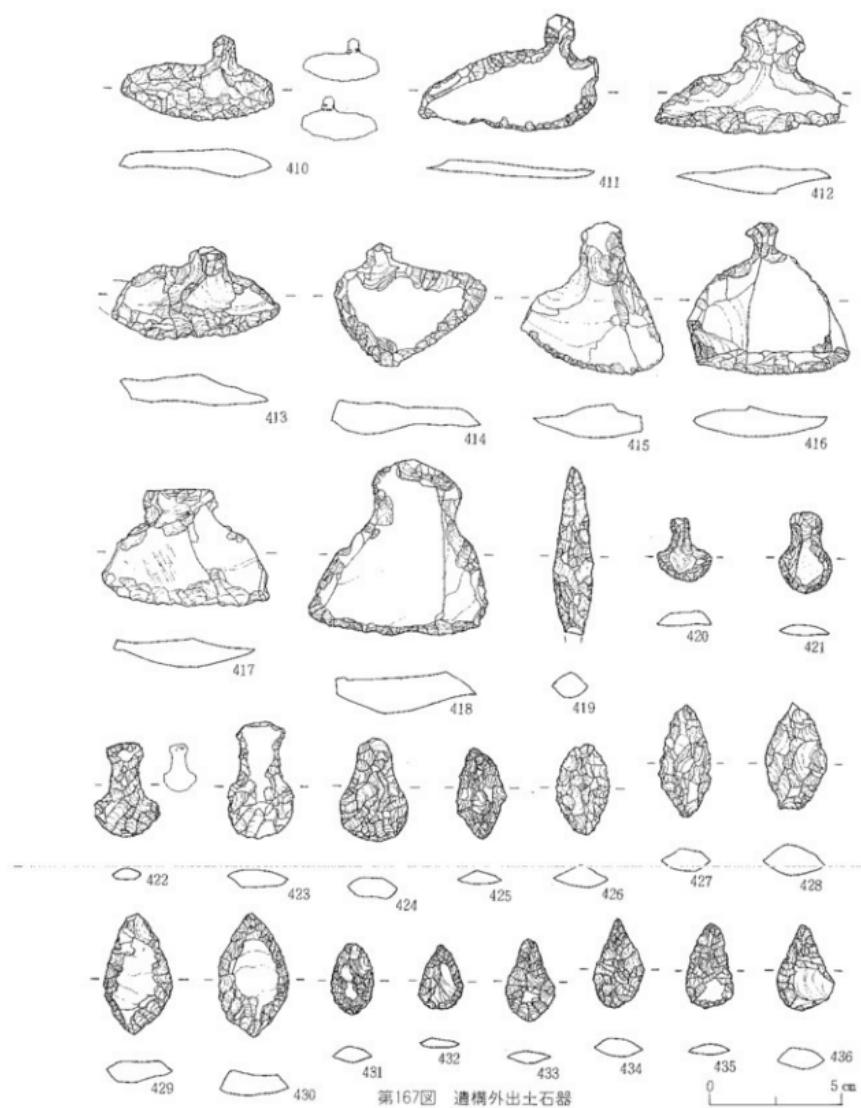
第164図 遺構外出土石器



第165図 遺構外出土石器



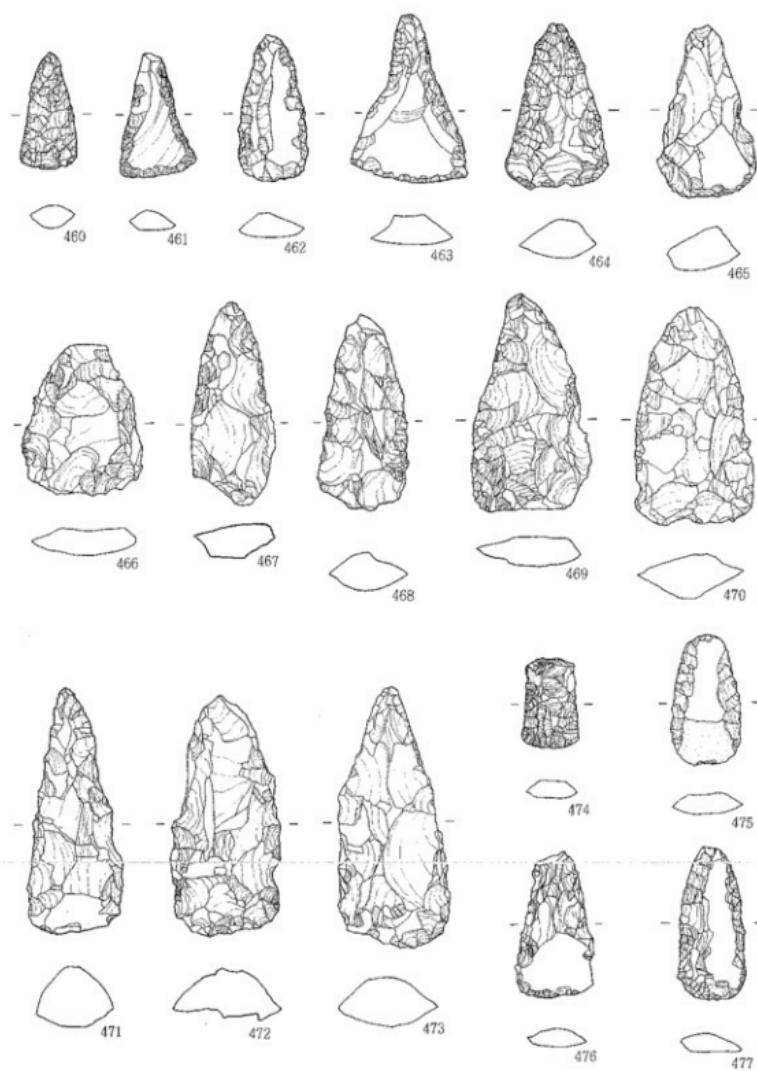
第166図 遺構出土石器



第167図 遺構外出土石器

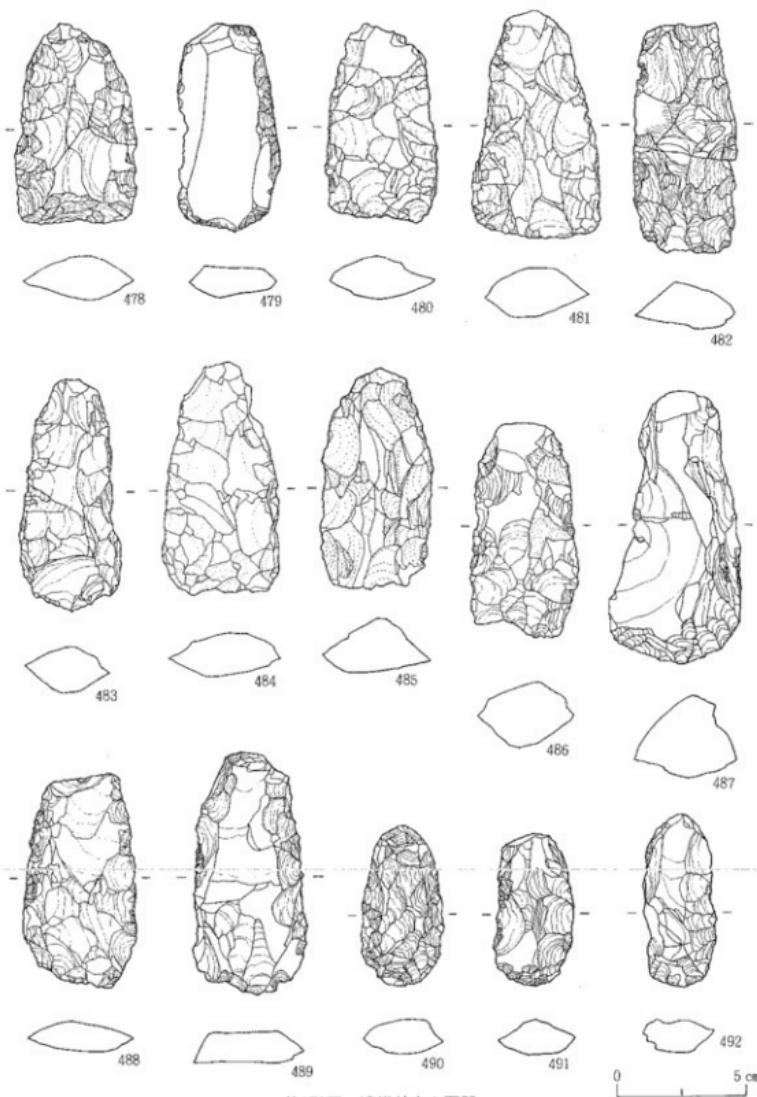


第168図 遺構外出土石器

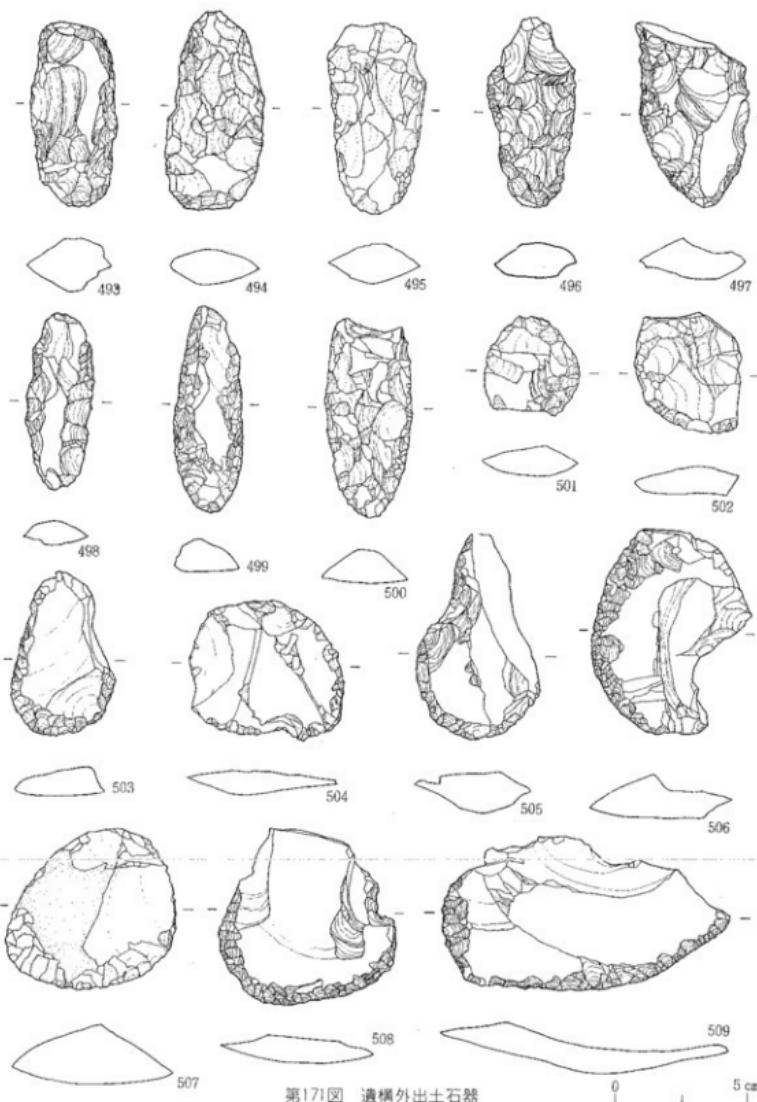


第169図 遺構外出土石器

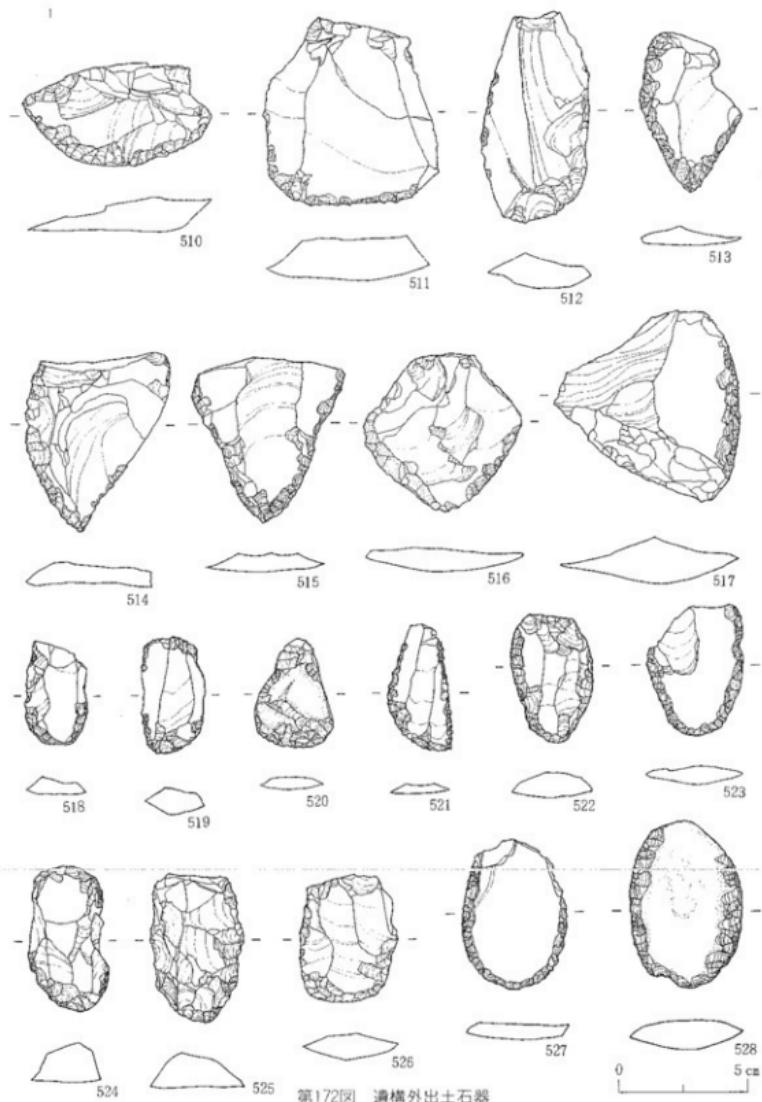
0 5 cm



第170図 遺構外出土石器

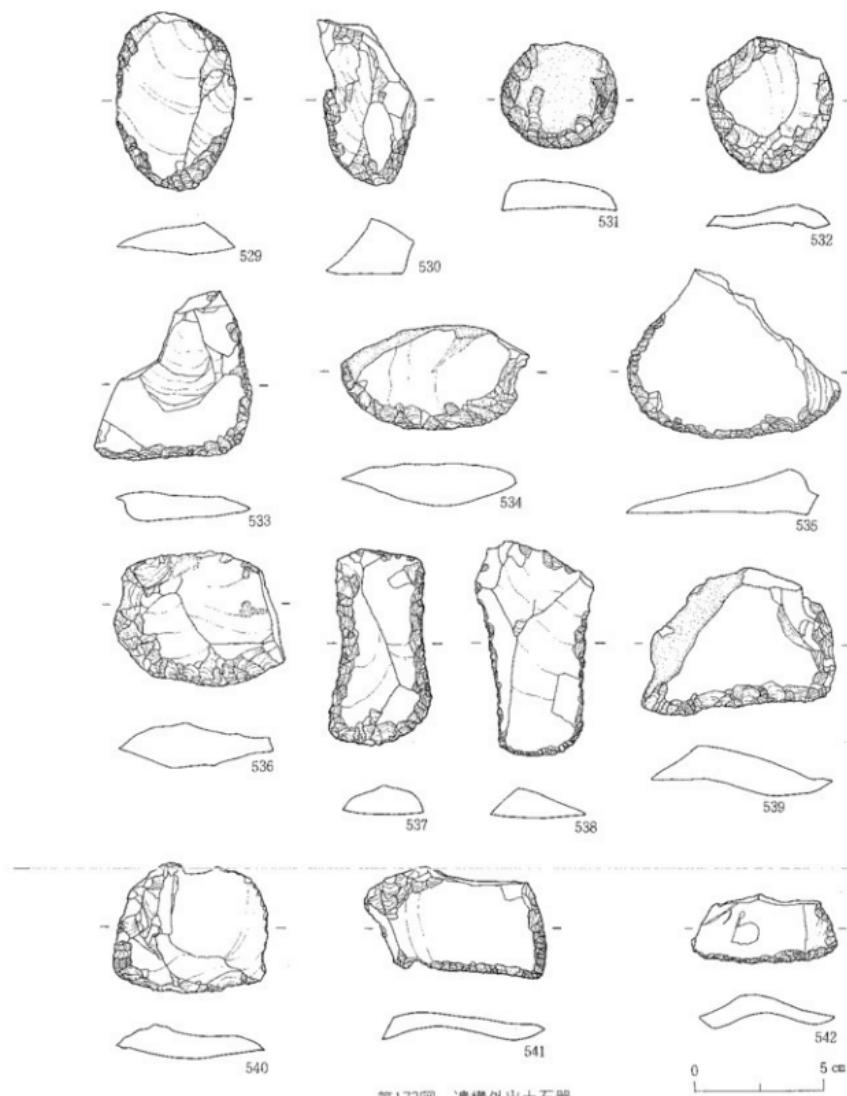


第171図 遺構外出土石器

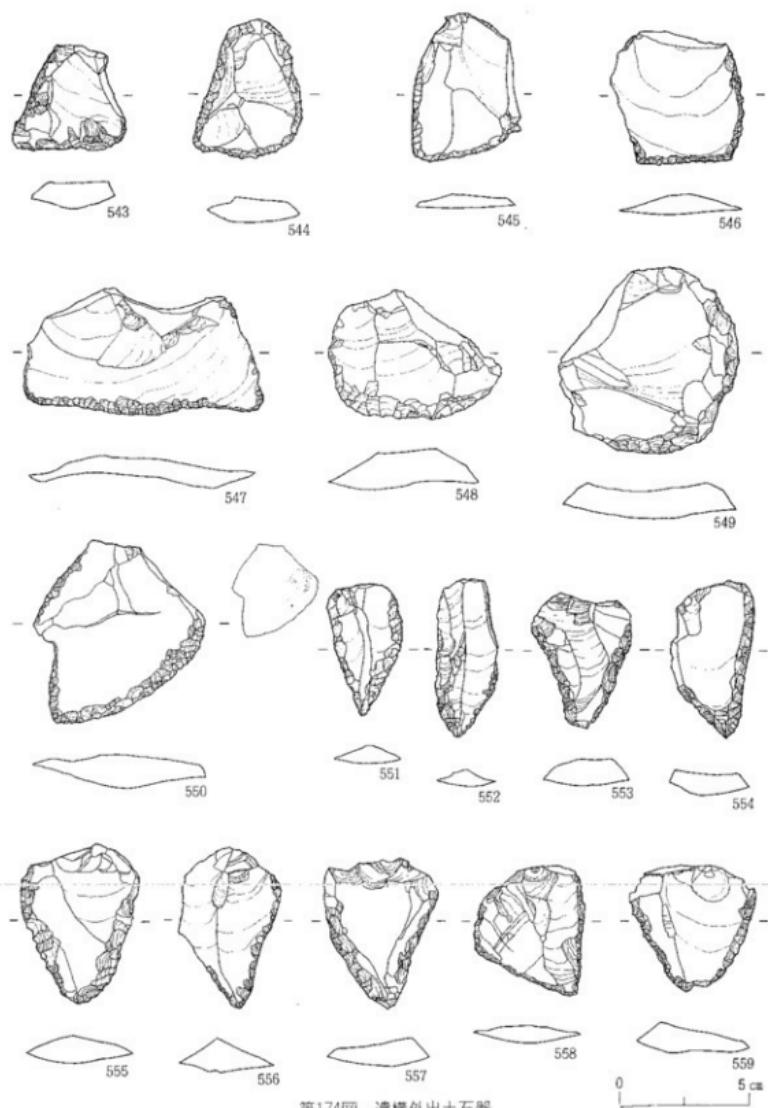


第172図 遺構外出土石器

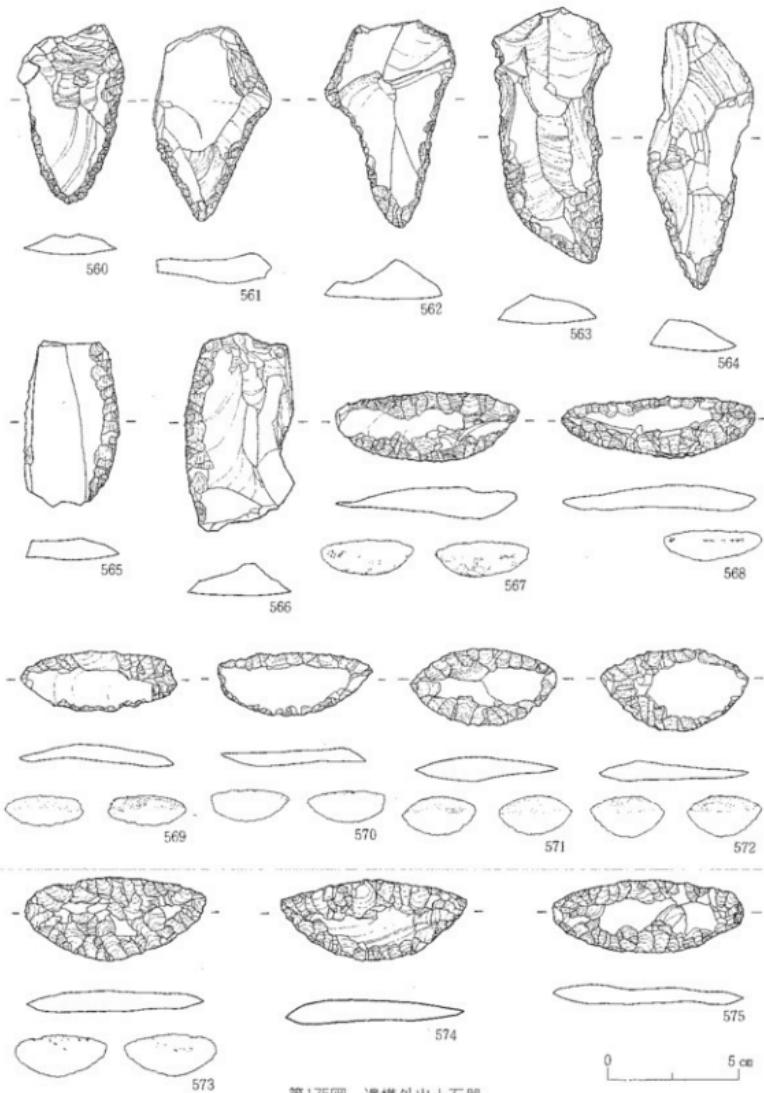
0 5 cm



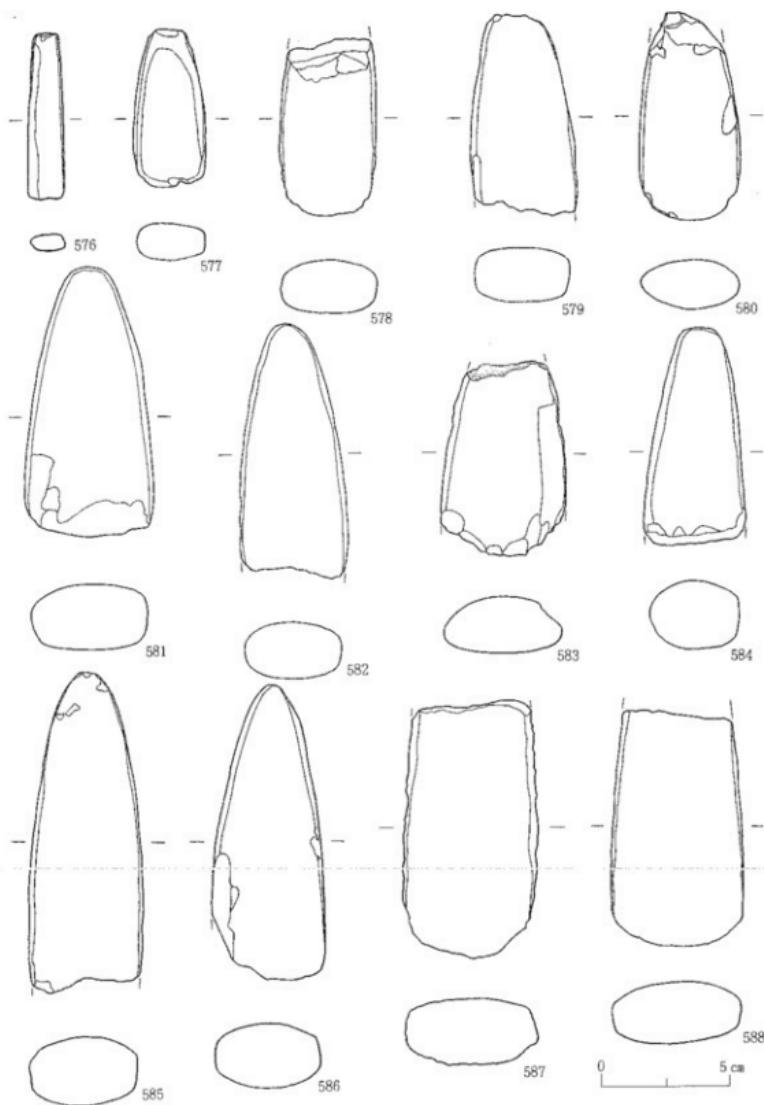
第173図 遺構外出土石器



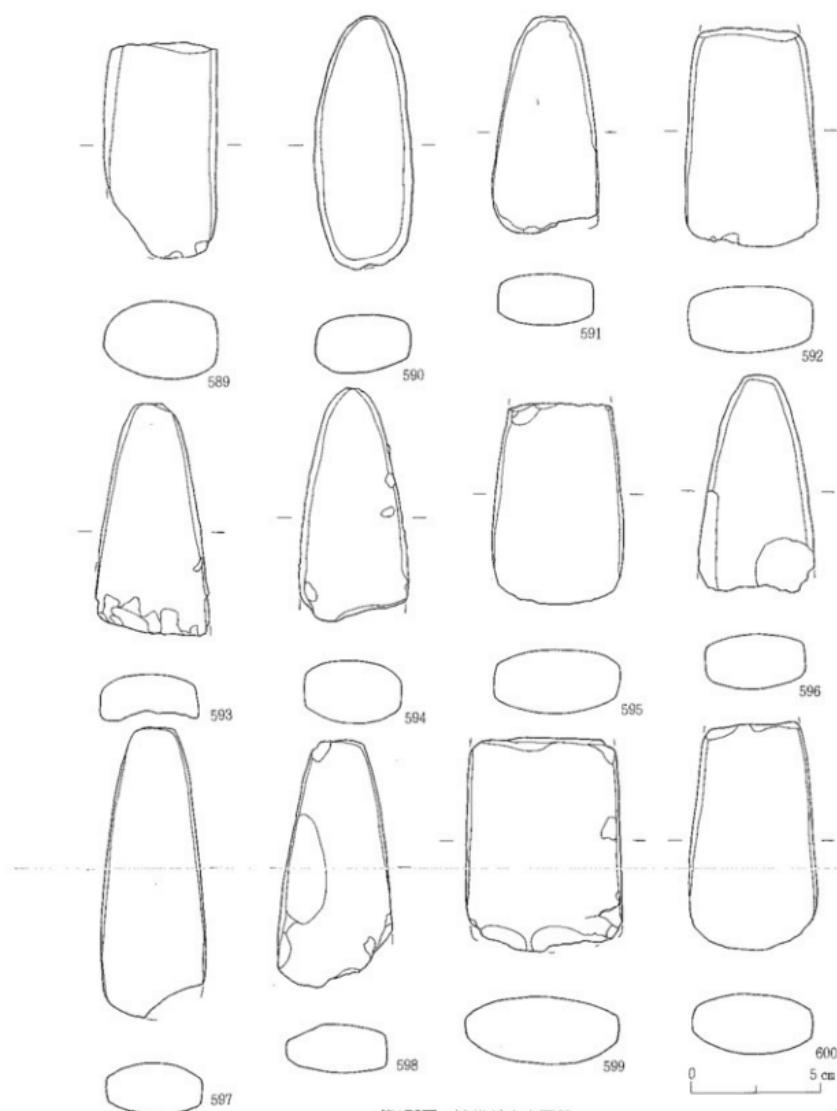
第174図 遺構外出土石器



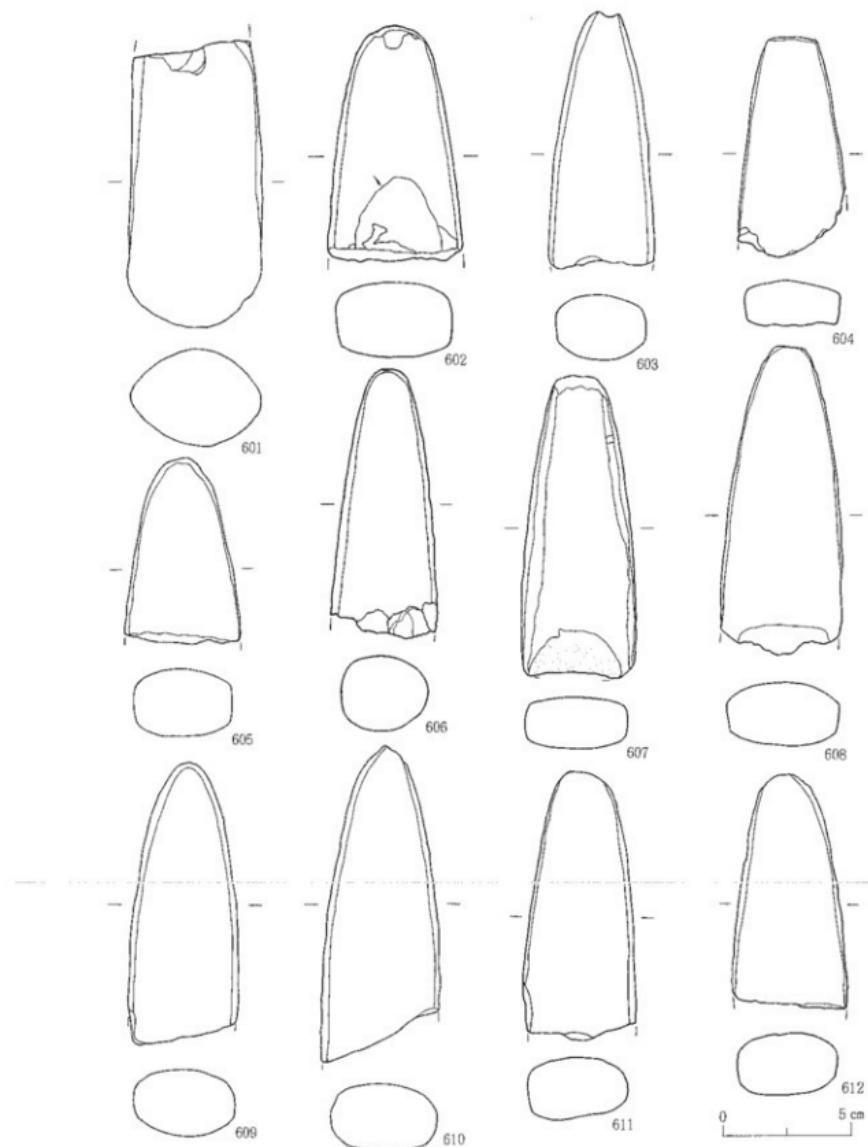
第175図 遺構外出土石器



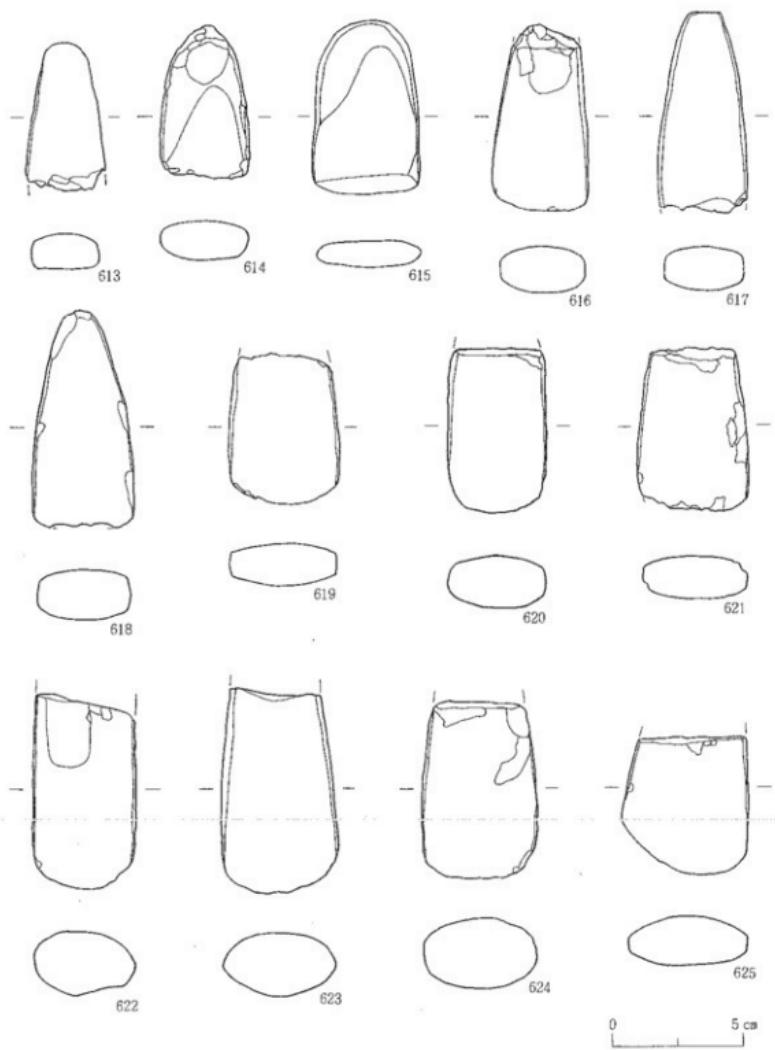
第176図 遺構外出土石器



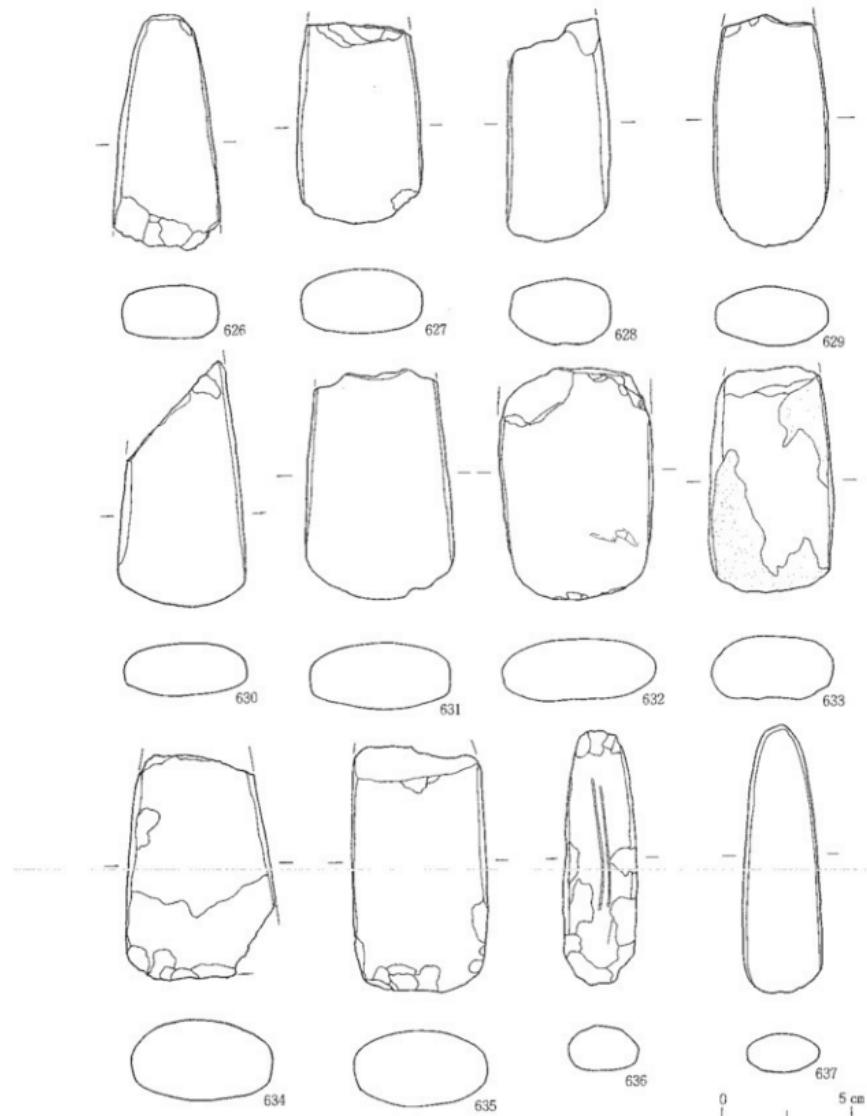
第177図 遺構外出土石器



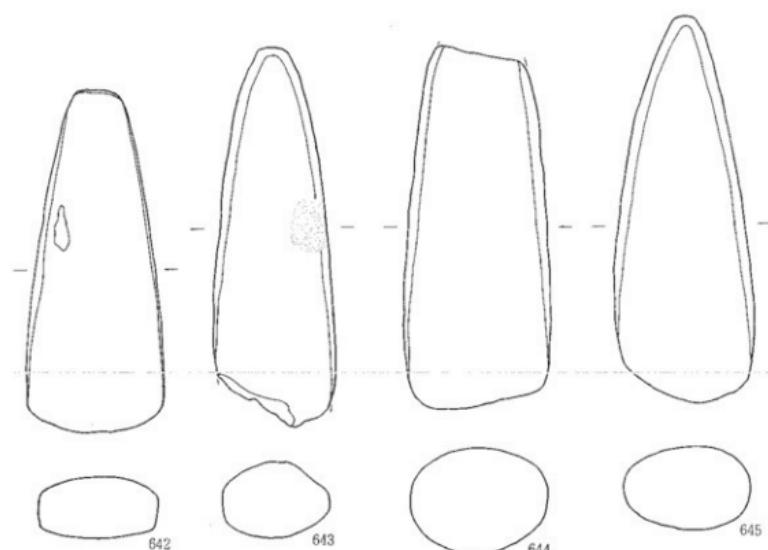
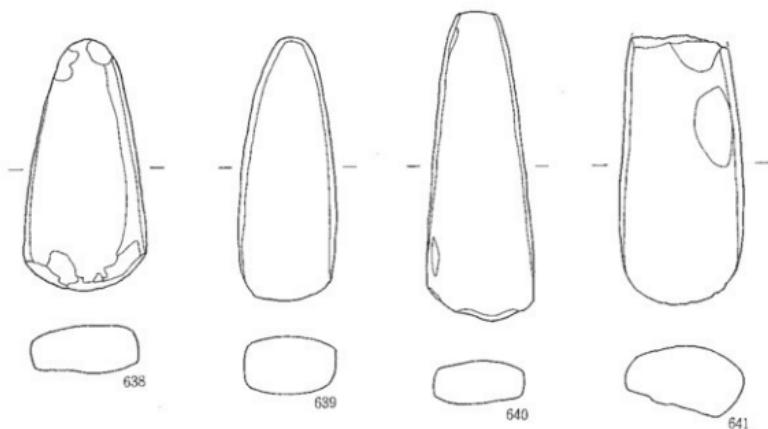
第178図 遺構外出土石器



第179図 遷構外出土石器

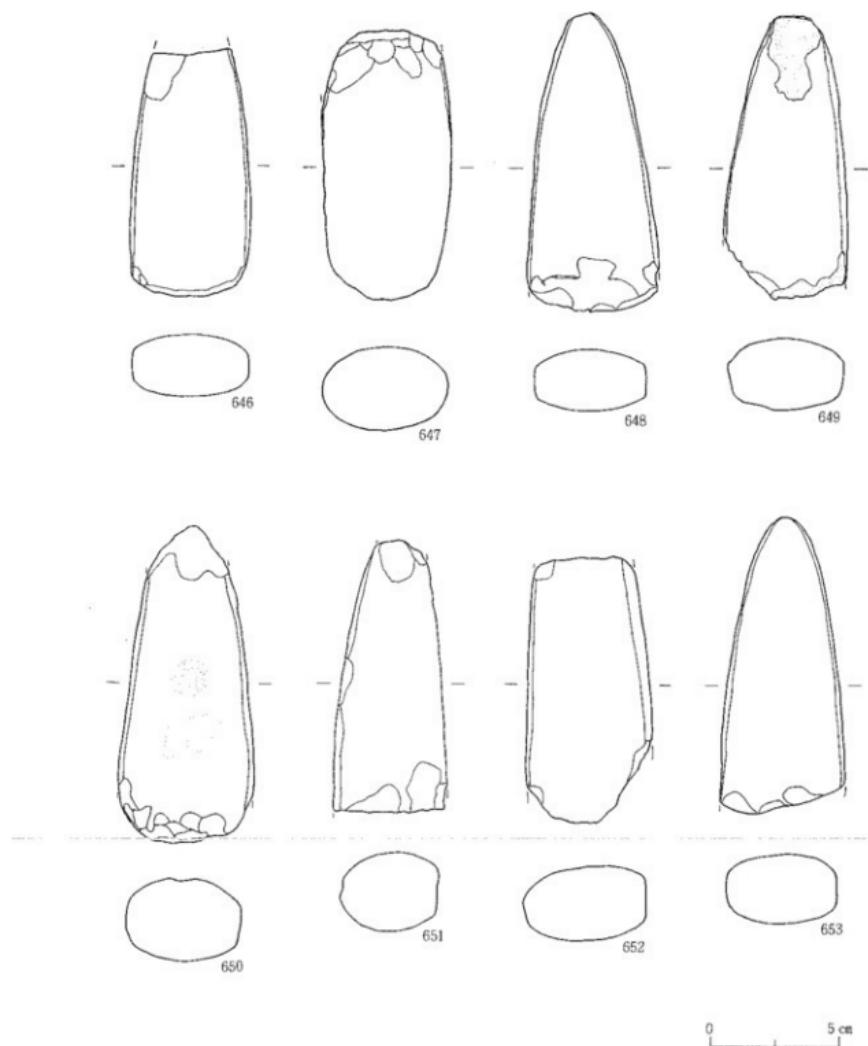


第180図 遺構外出土石器

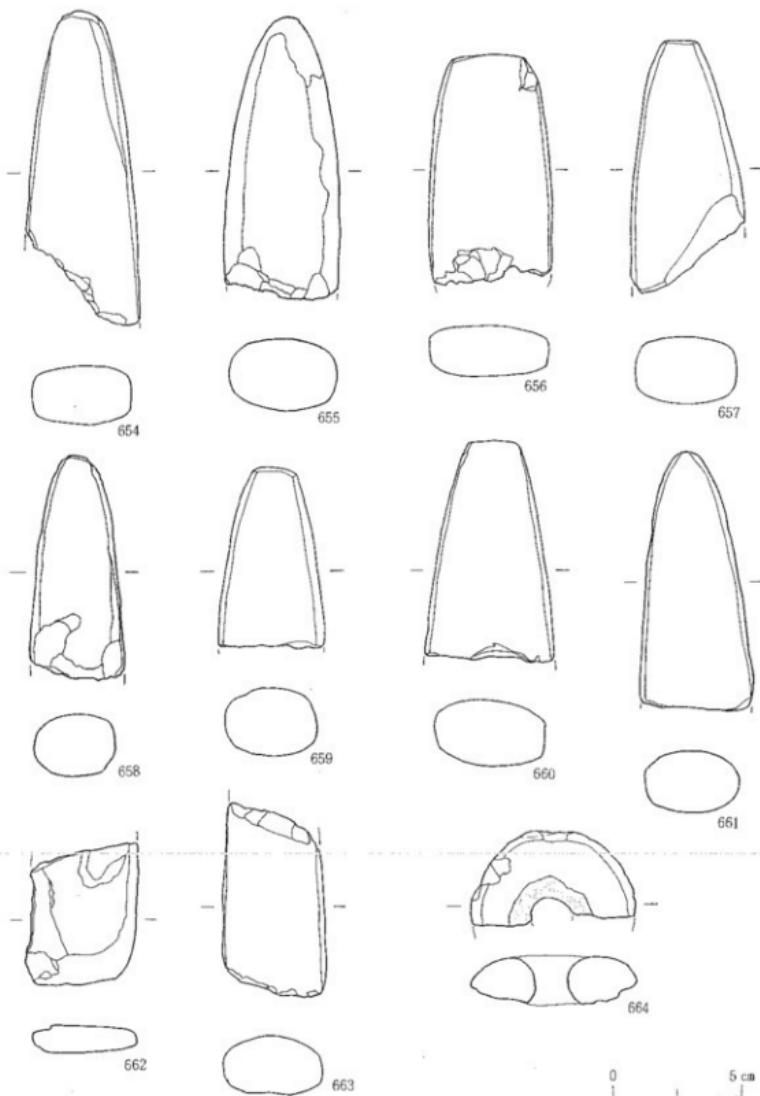


0 5 cm

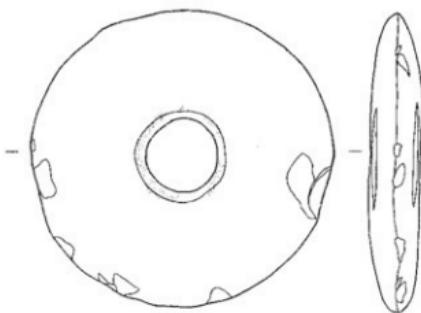
第181図 遺構外出土石器



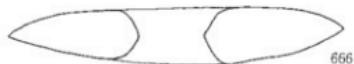
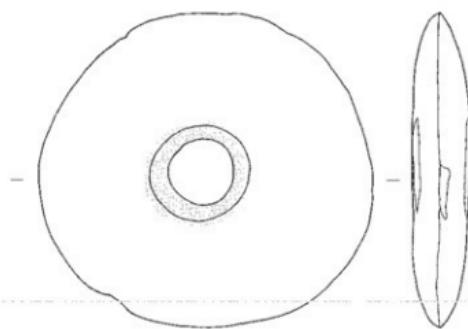
第182図 遺構外出土石器



第183図 遺構外出土石器



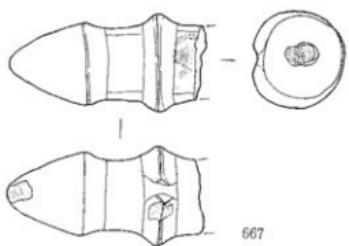
665



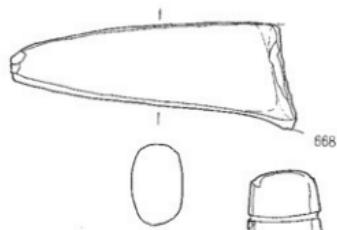
666



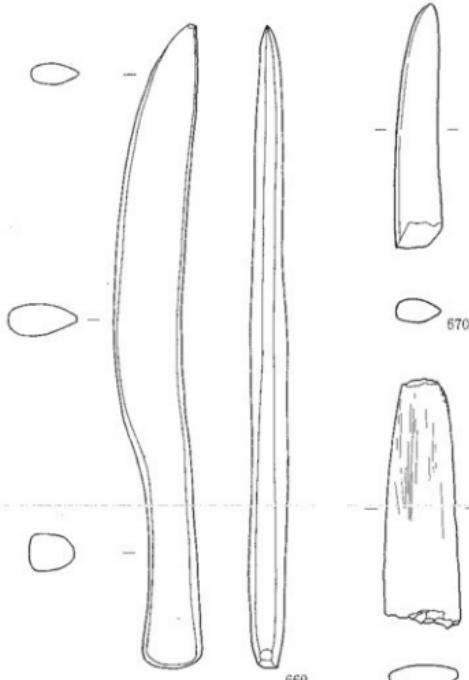
第184図 遺構外出土石器



667



668



669

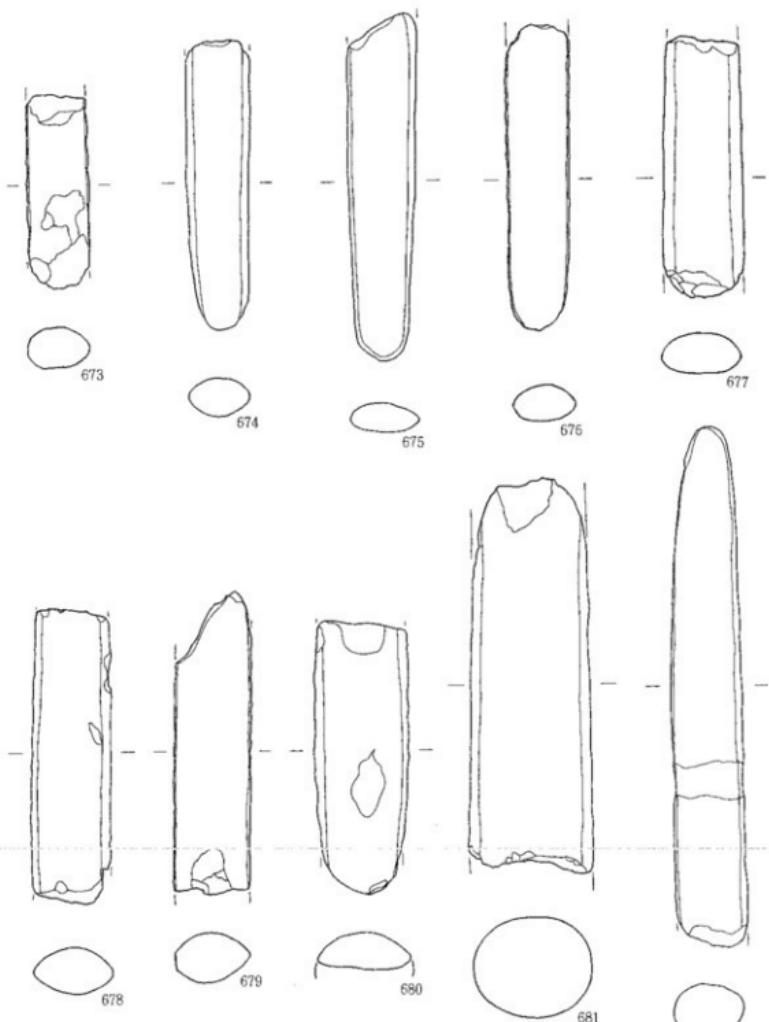
670

671

672

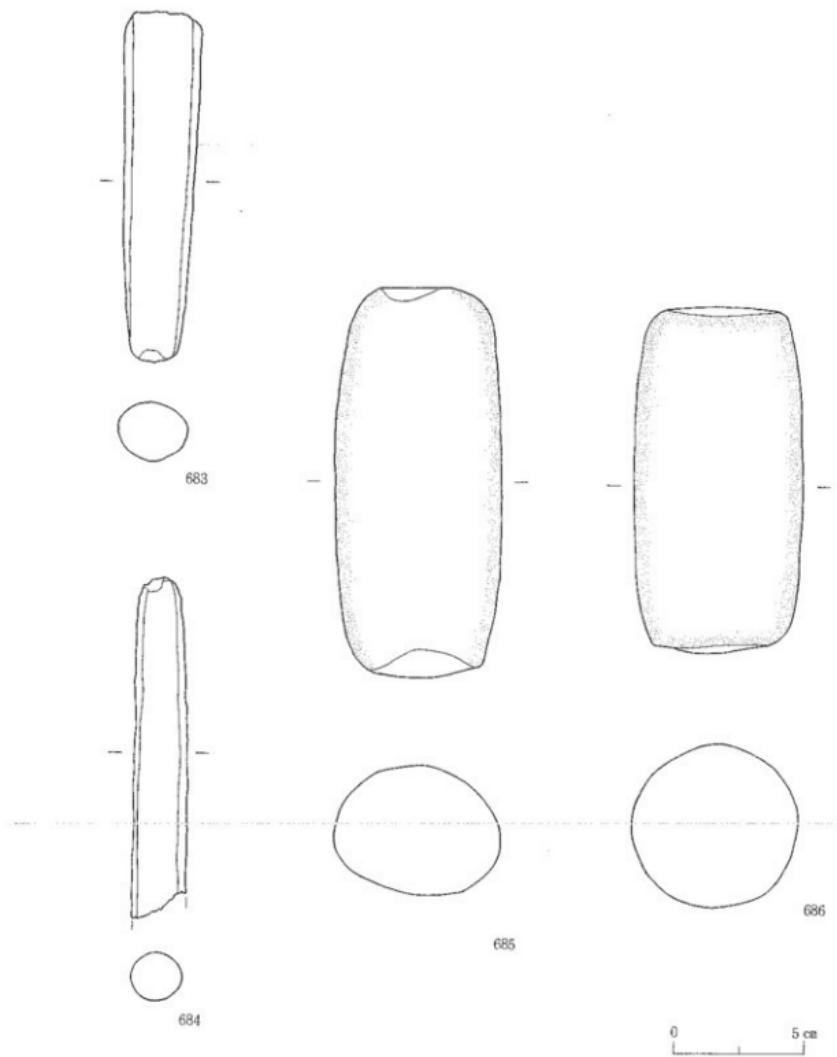


第185図 遺構外出土石器

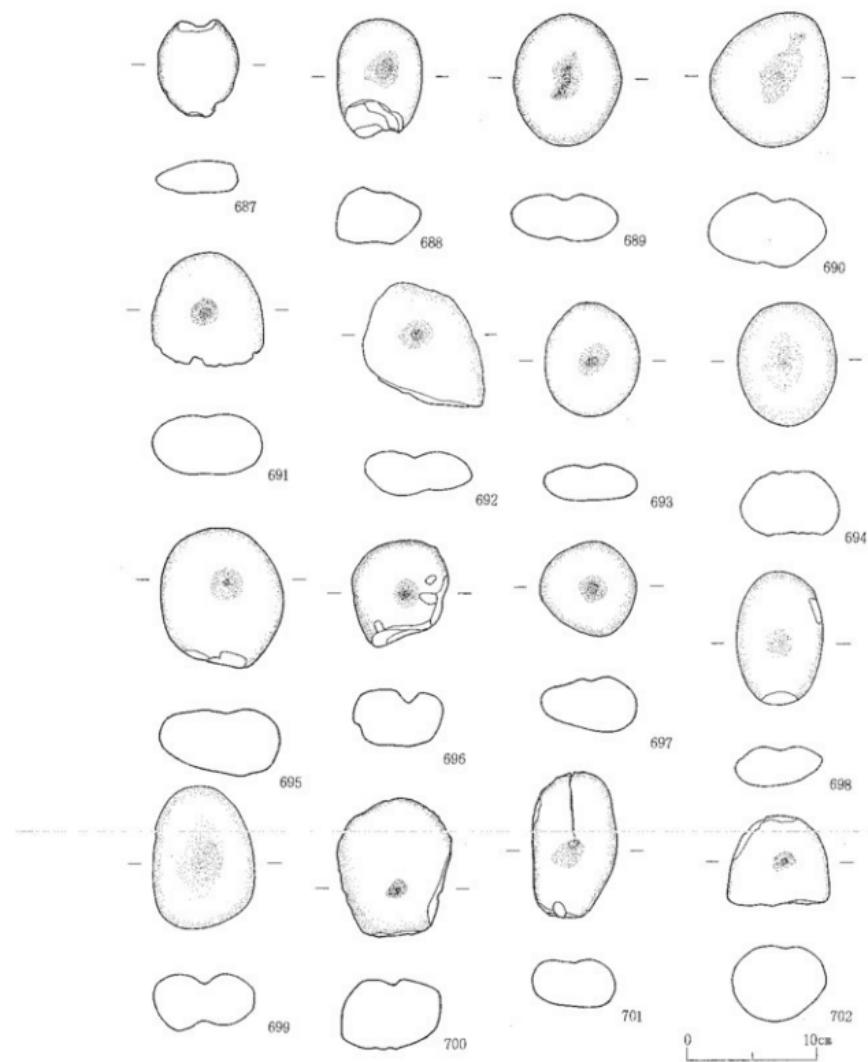


第186図 遺構外出土石器

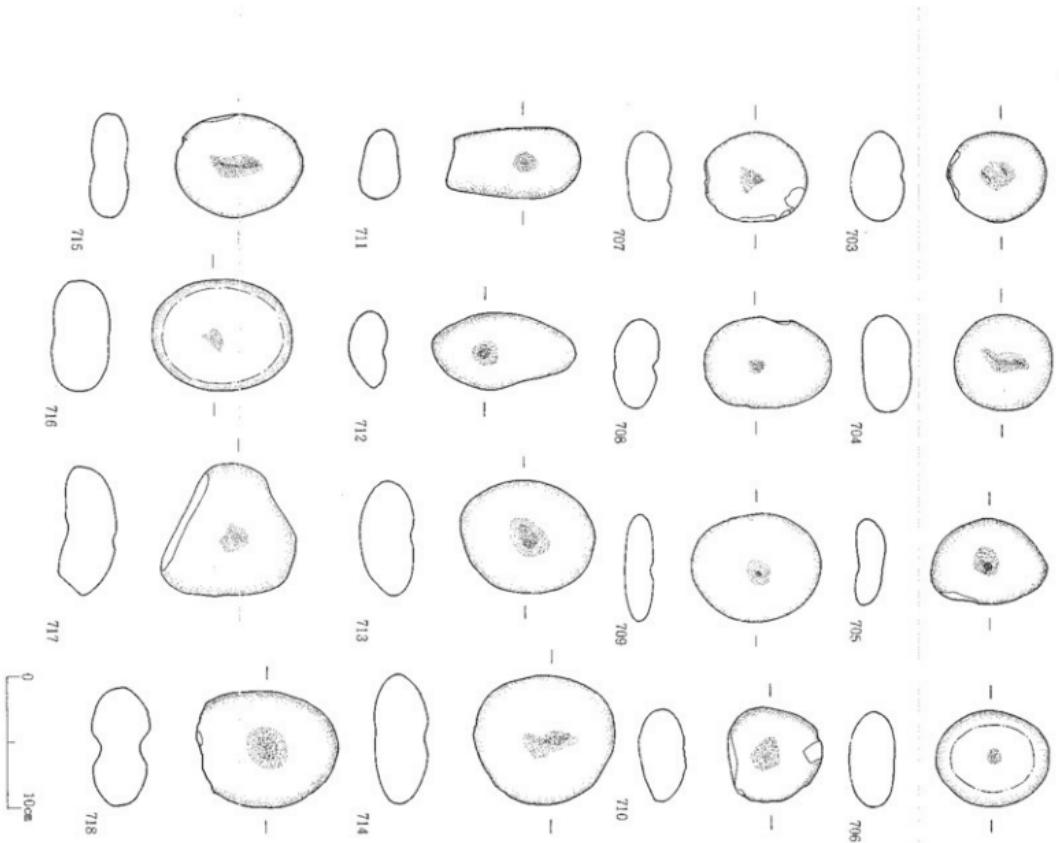
0 5 cm



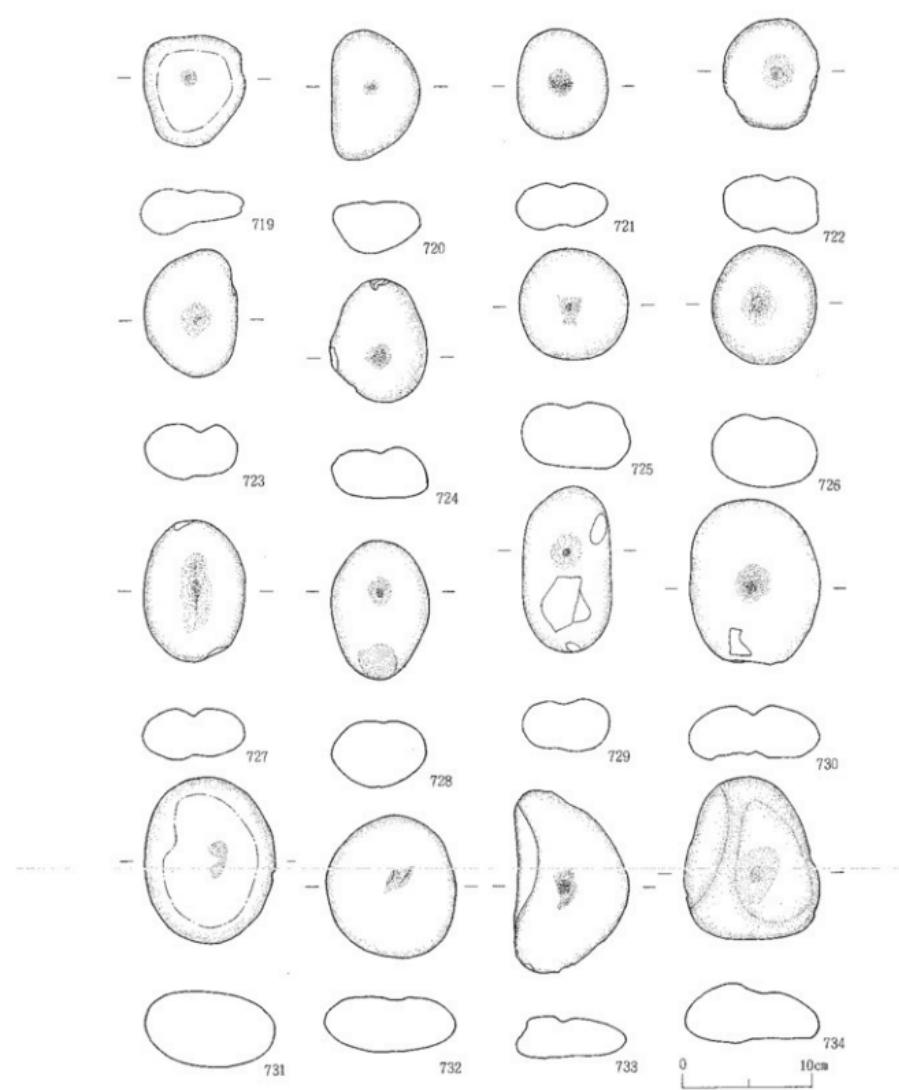
第187図 遺構外出土石器



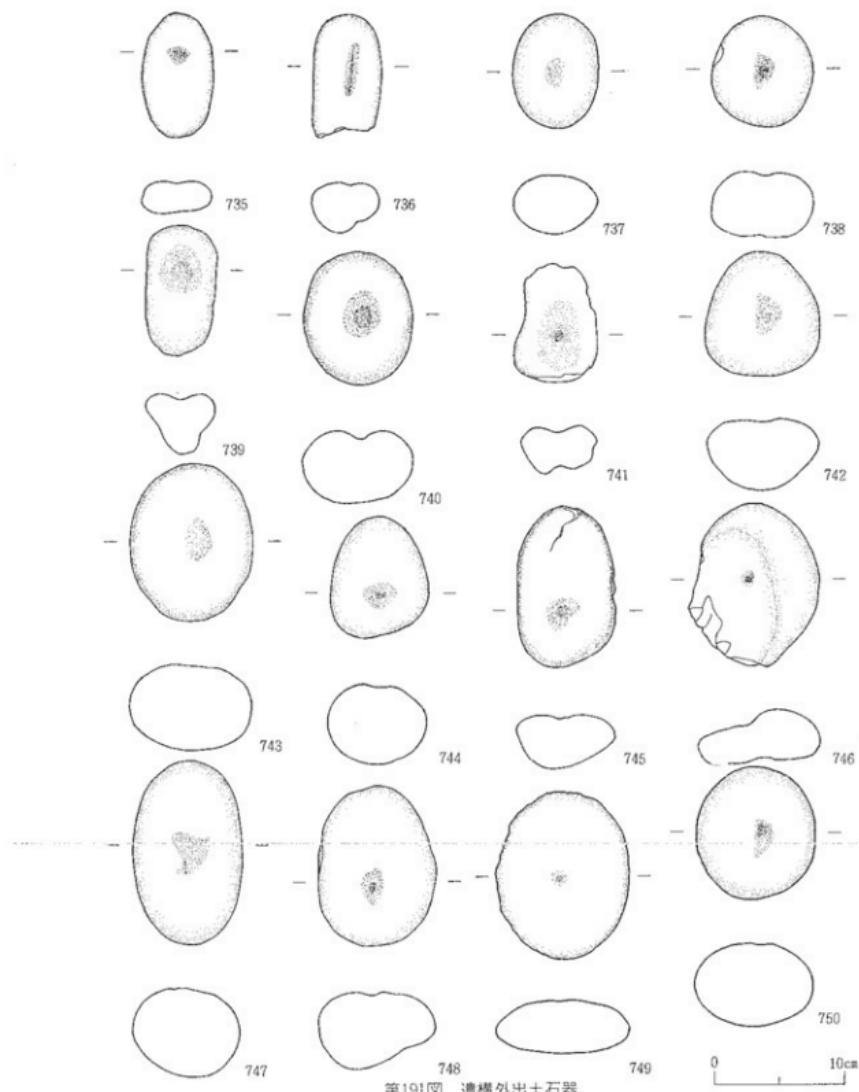
第188図 遺構外出土石器



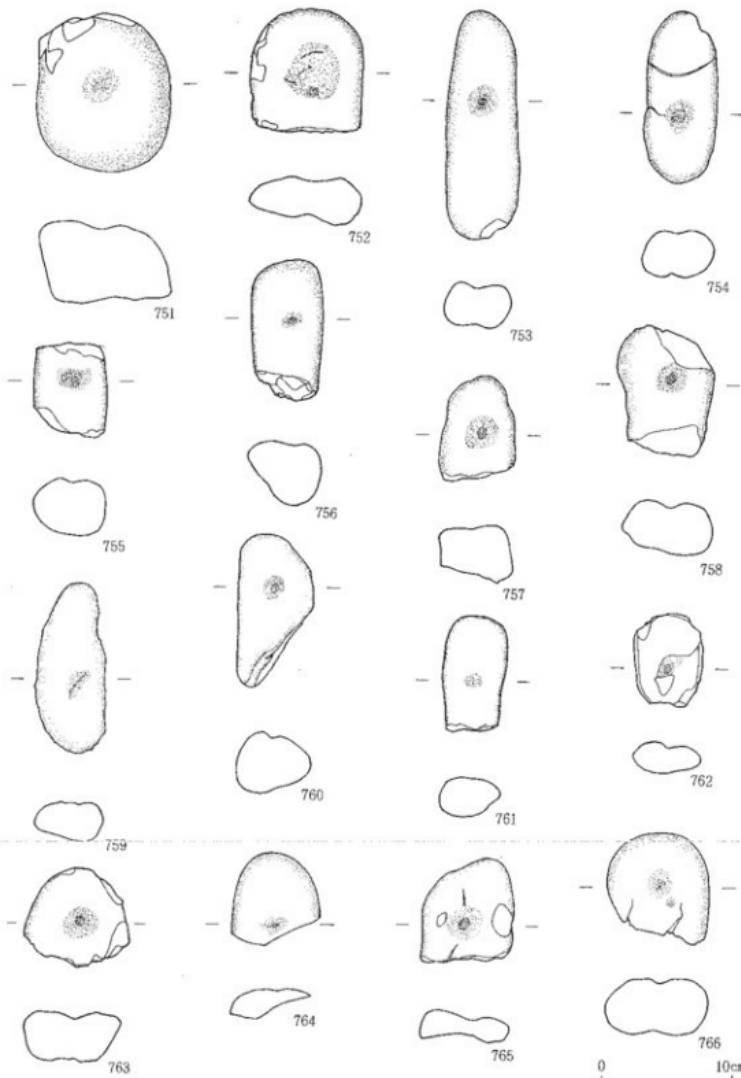
第189圖 遺屬出土石器



第190図 遺構外出土石器

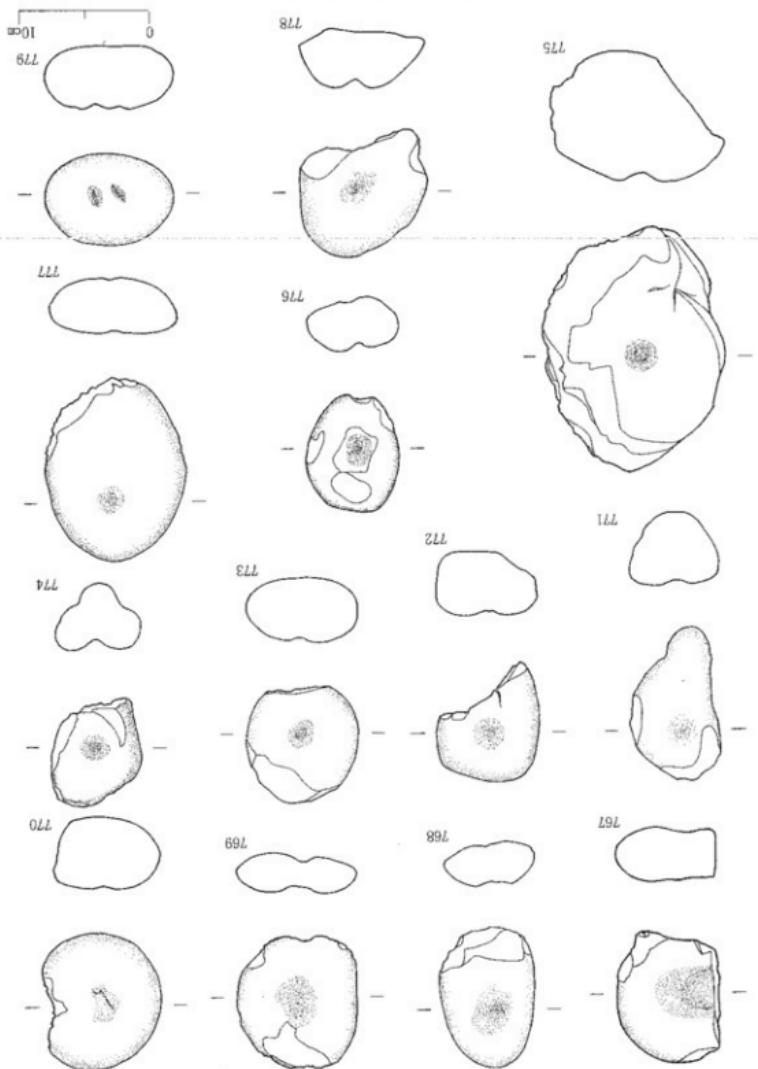


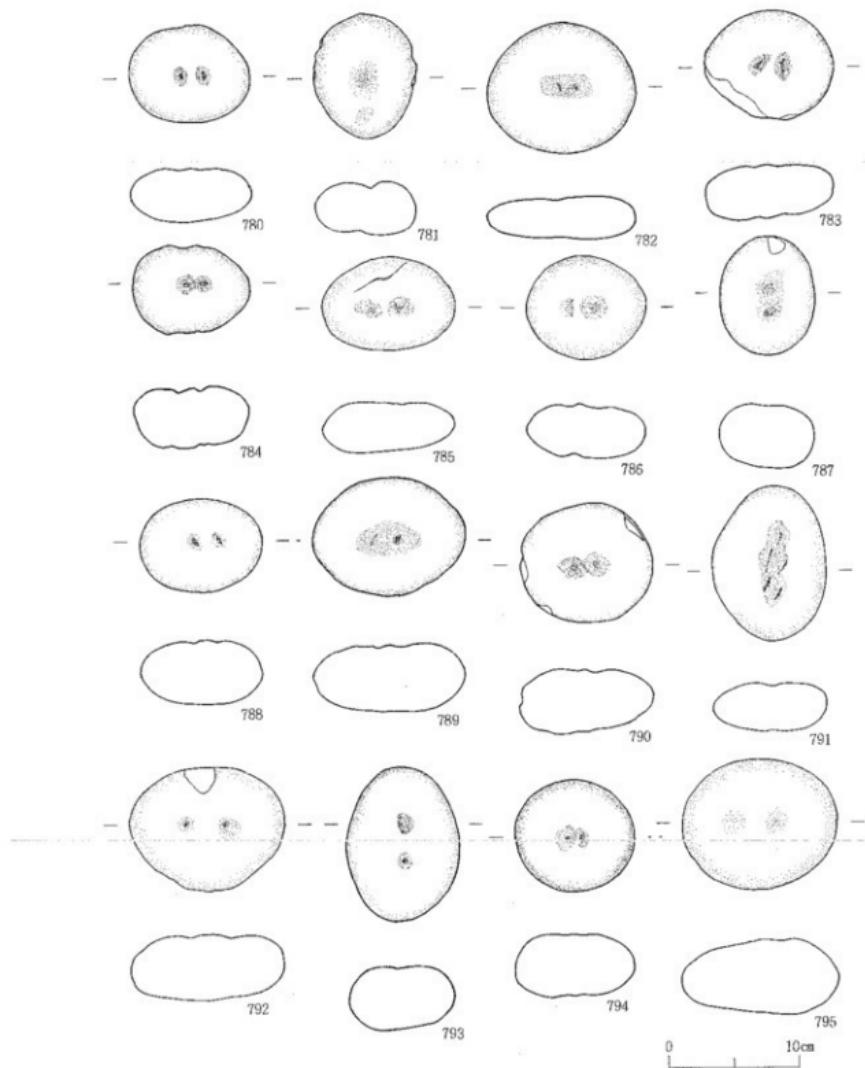
第191図 遺構外出土石器



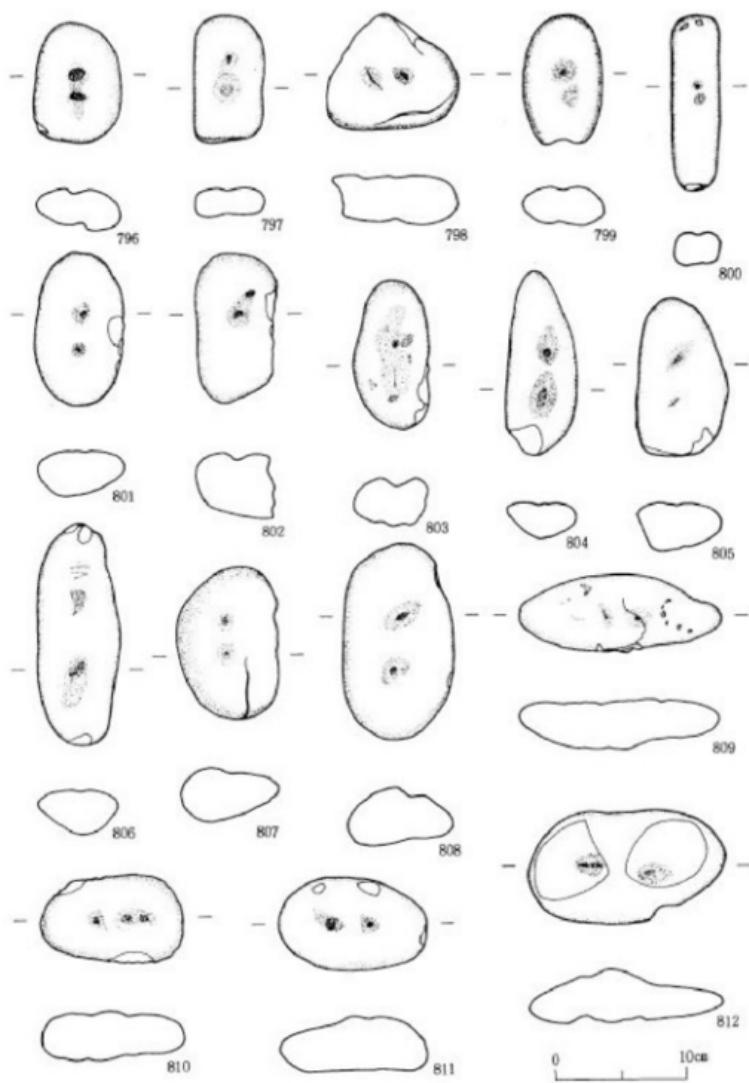
第192図 遺構外出土石器

第193圖 遷輯外出土石器

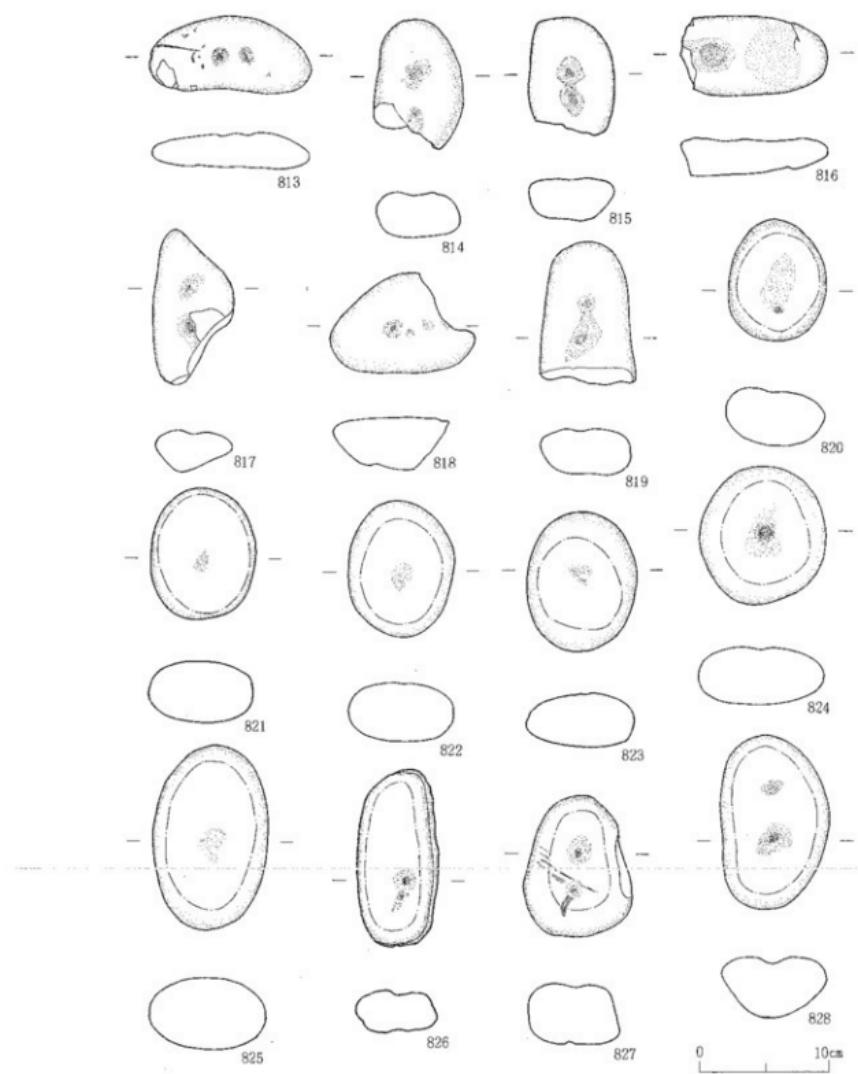




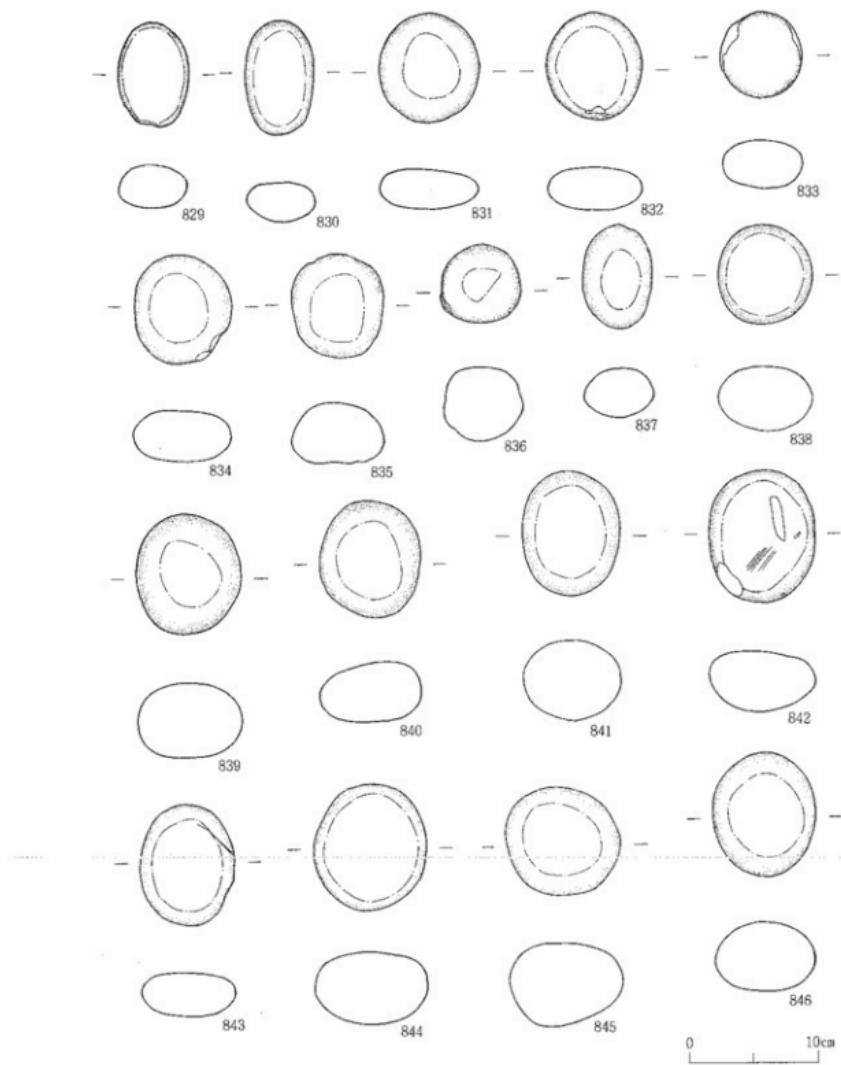
第194図 遺構外出土石器



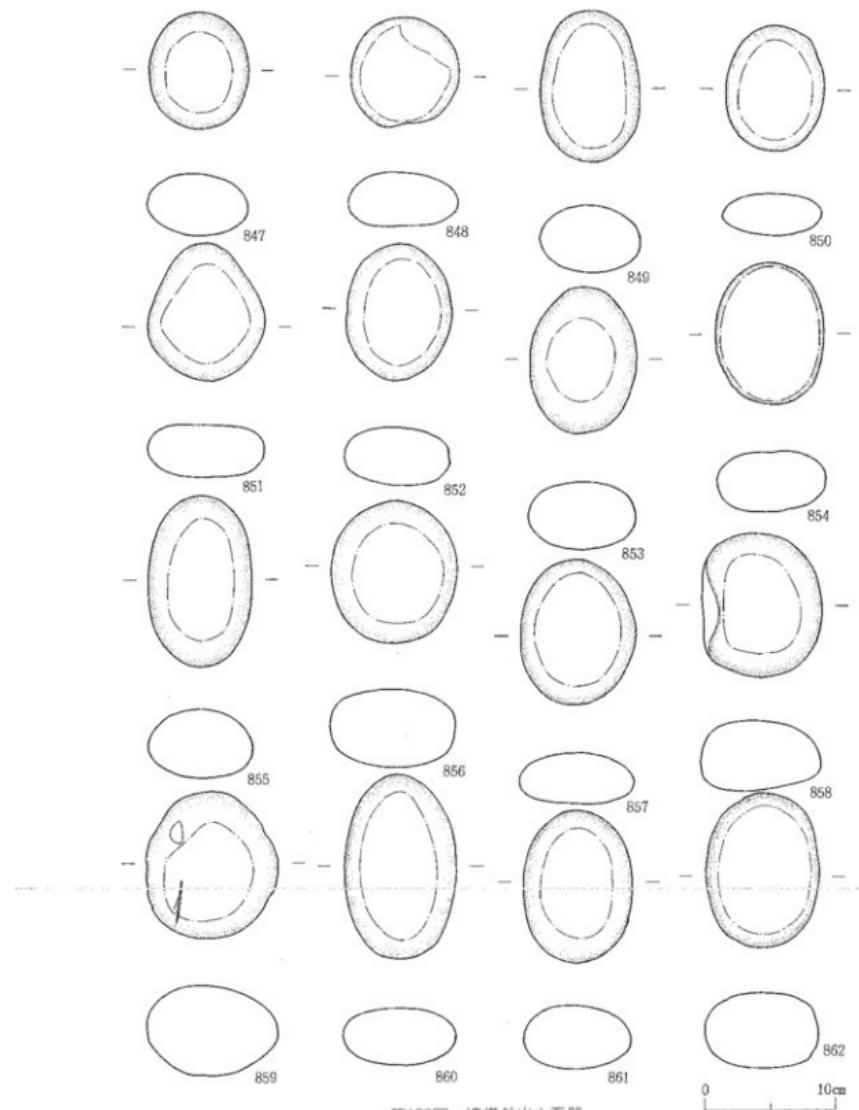
第195図 遺構外出土石器



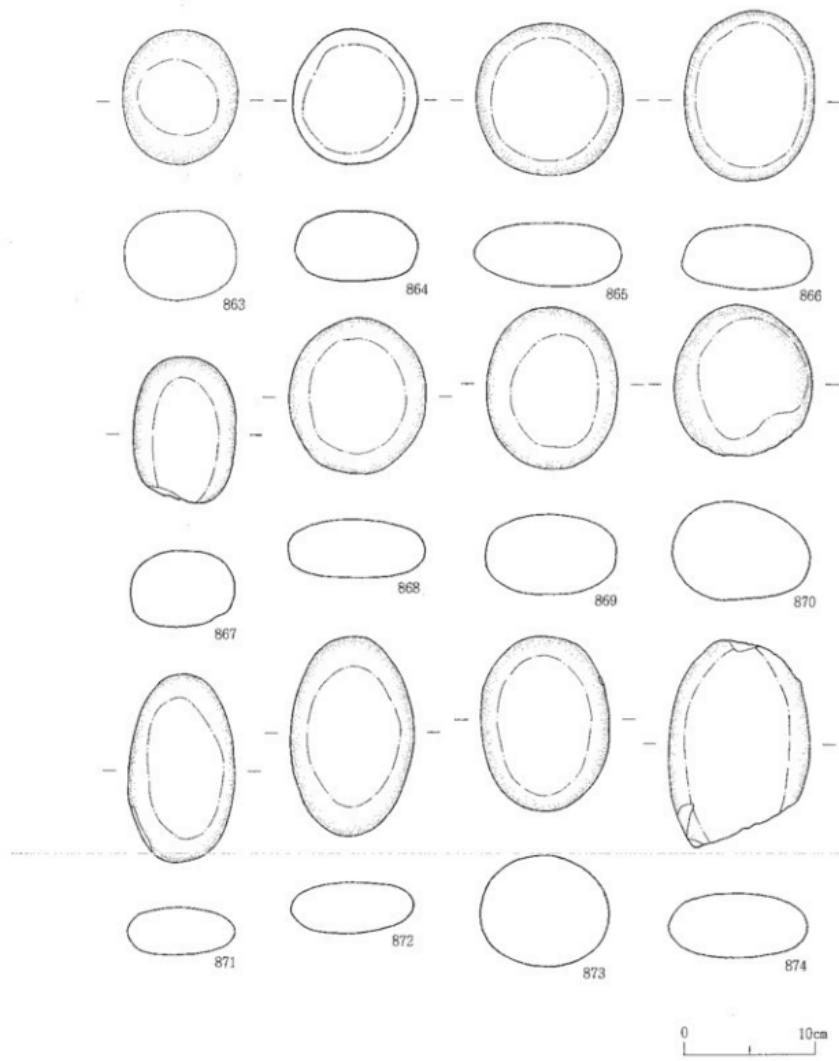
第196図 遺構外出土石器



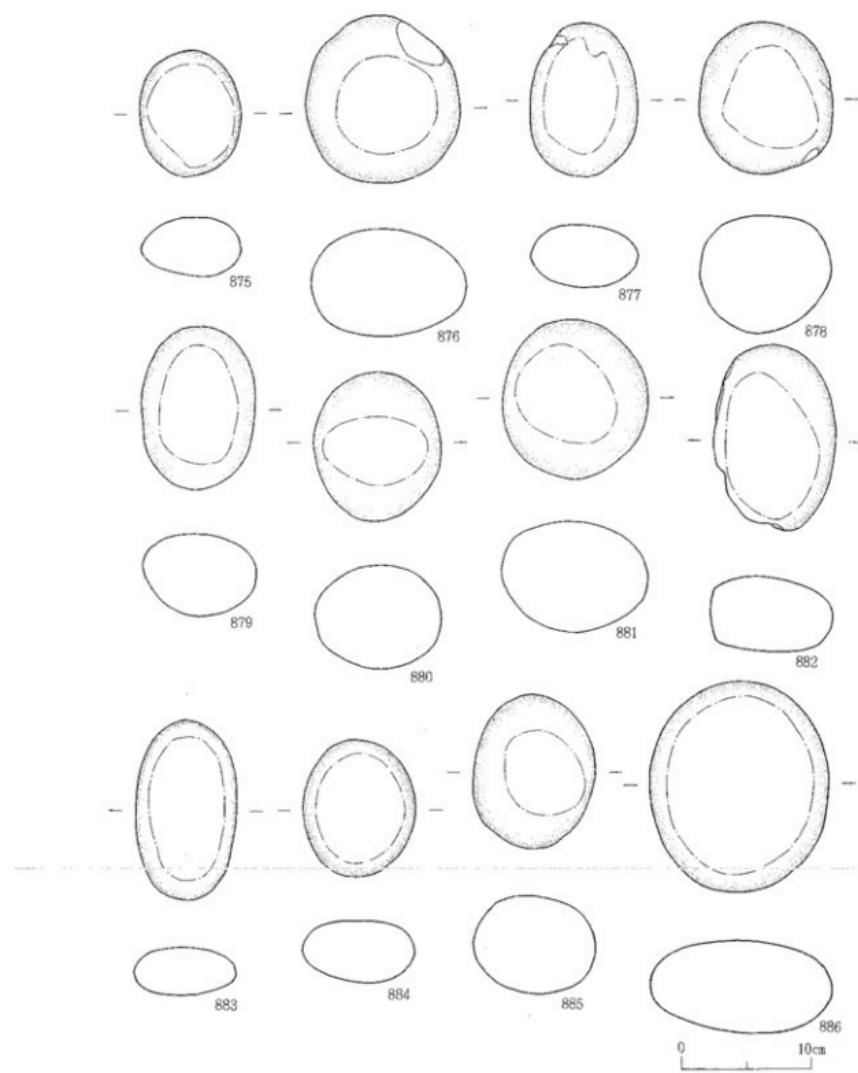
第197図 遺構外出土石器



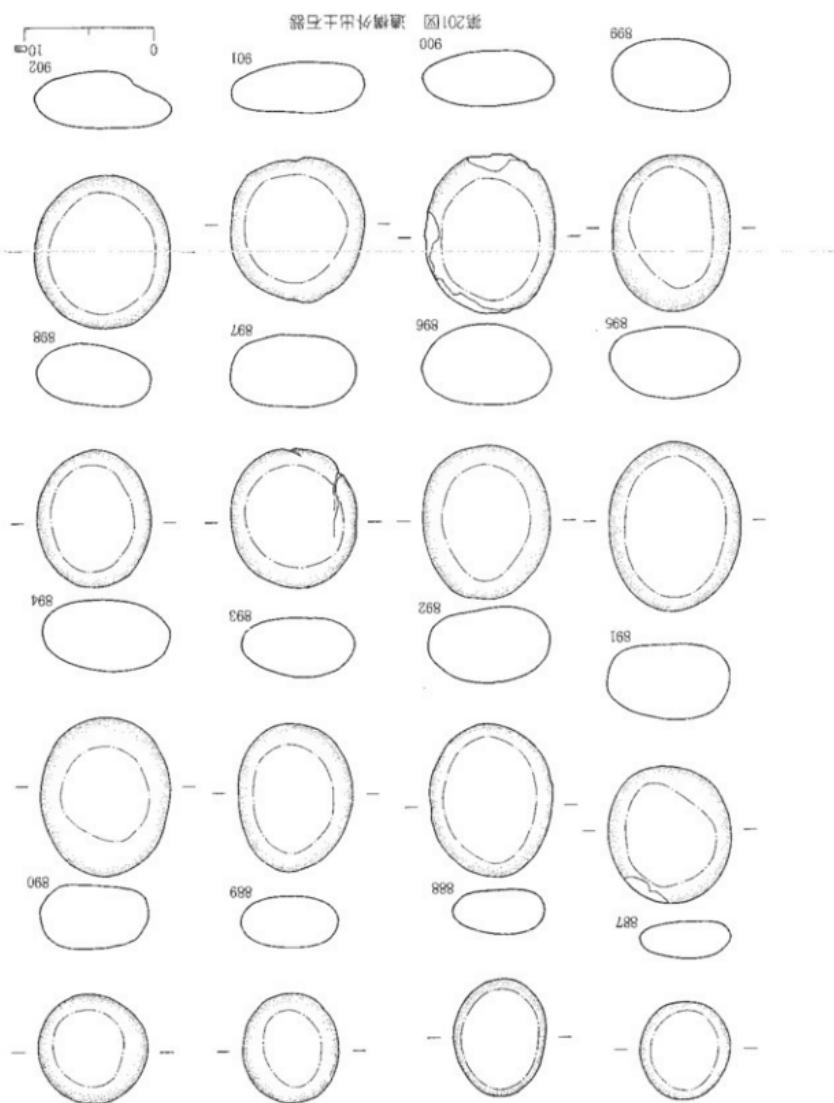
第198図 遺構出土石器

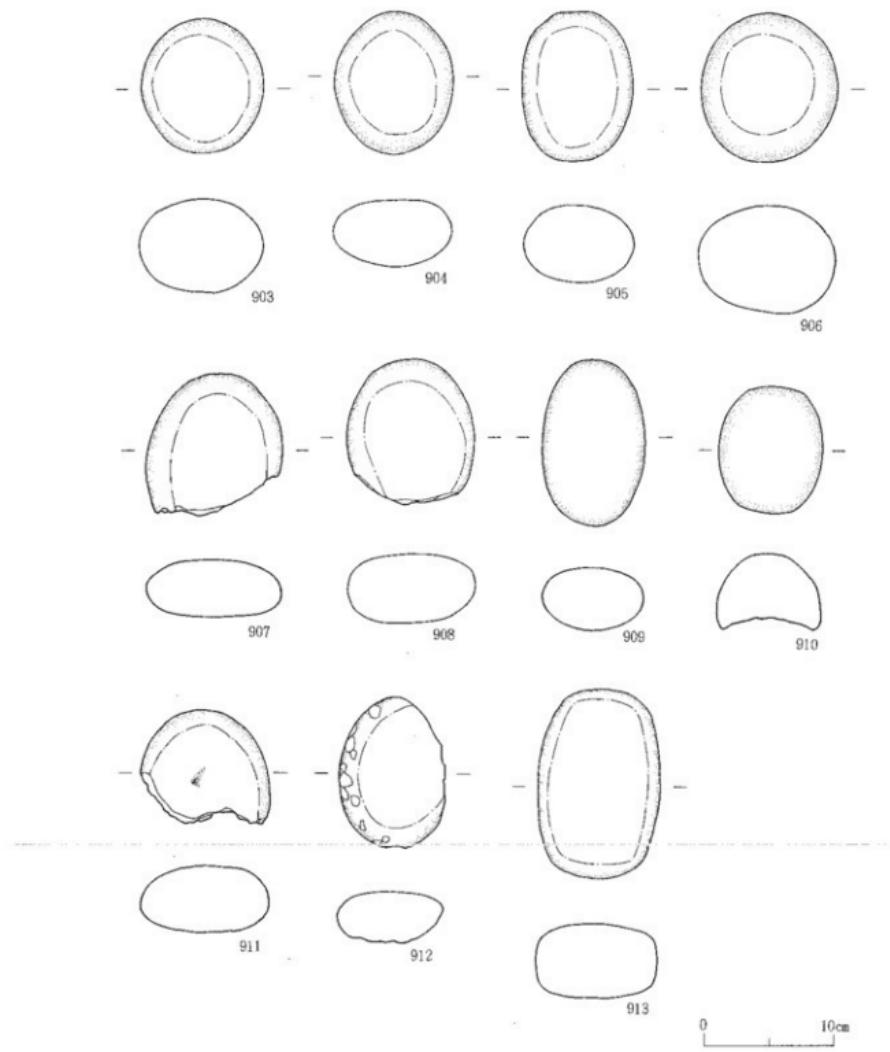


第199図 遺構外出土石器

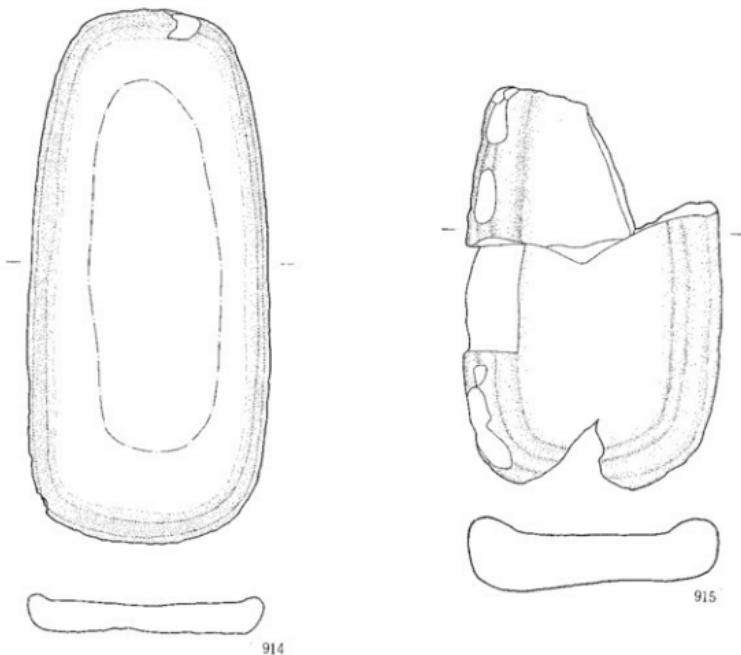


第200図 遺構出土石器



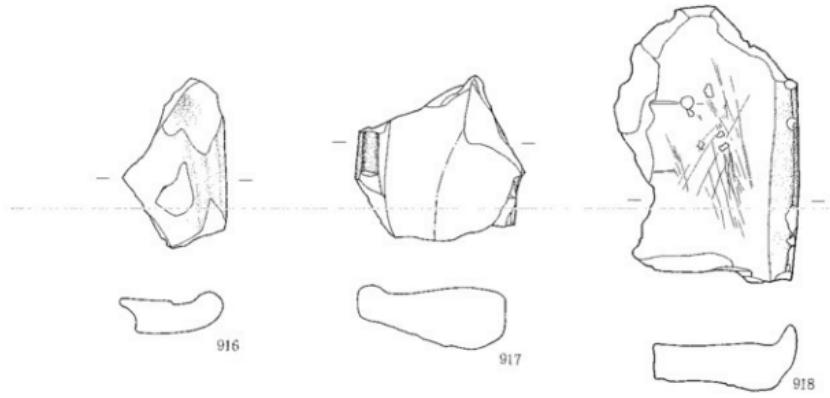


第202図 通構出土石器



914

915



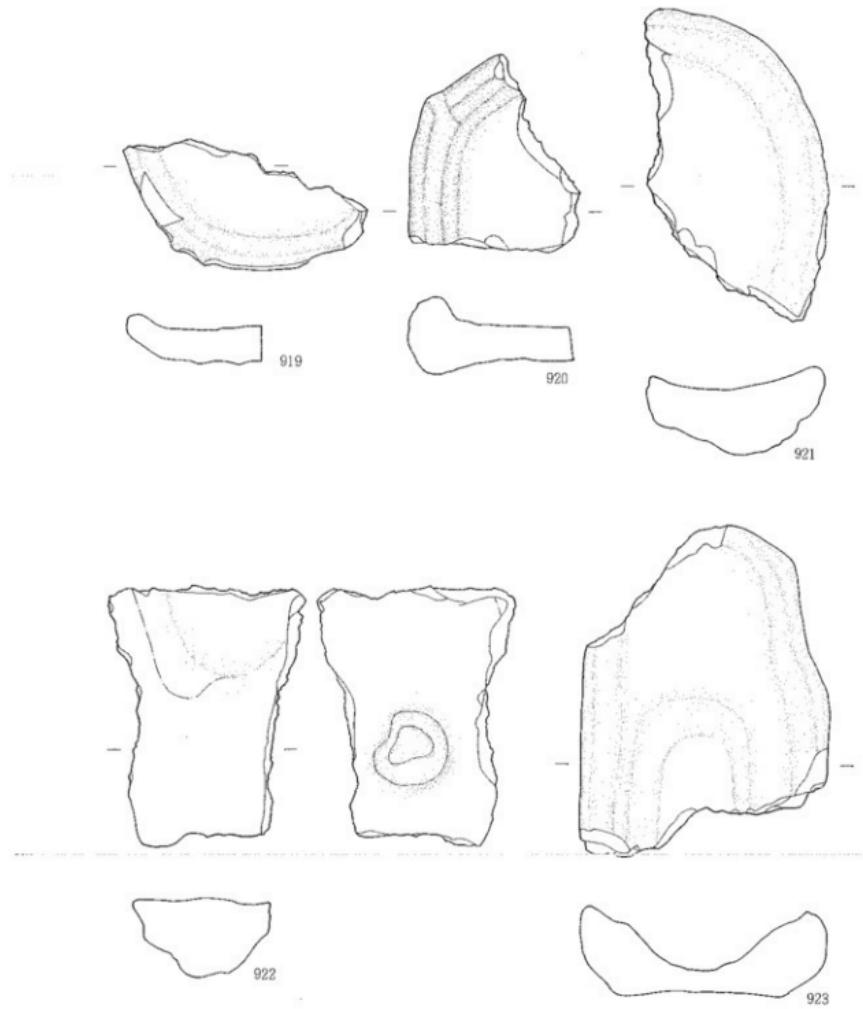
916

917

918

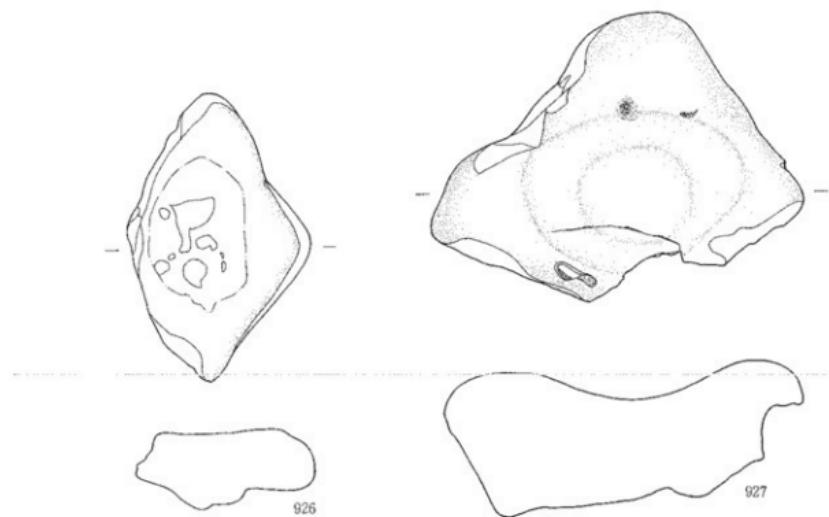
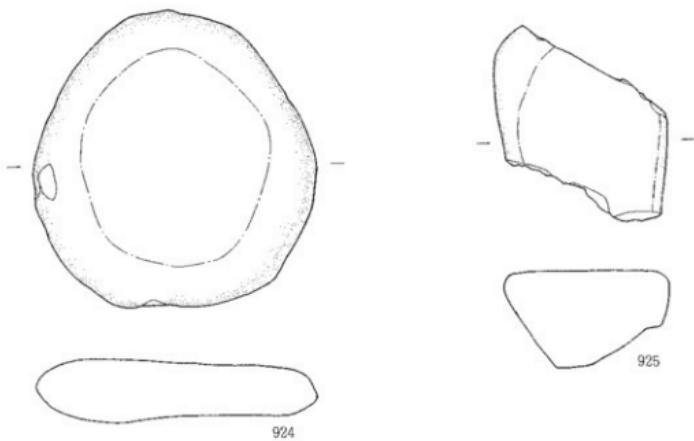
第203圖 通橫外出土石器





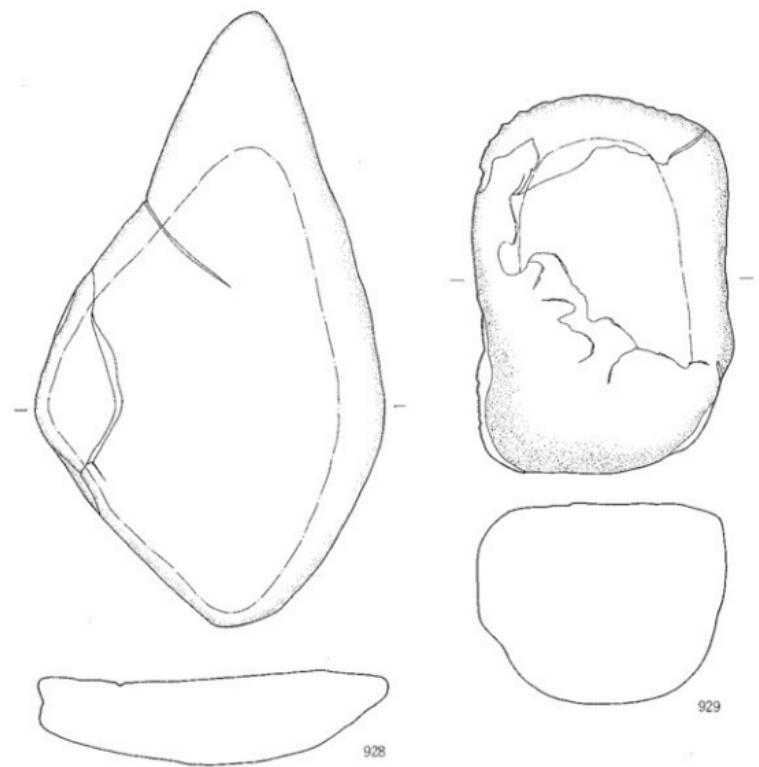
第204図 遺構外出土石器

0 10cm



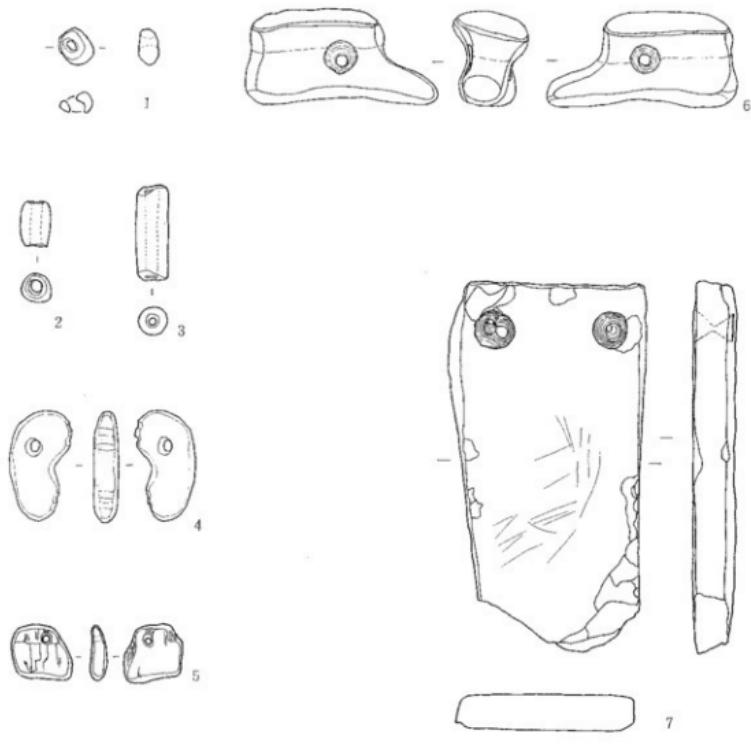
0 10cm

第205圖 遺構外出土石器



0 10cm

第206図 遺構出土石器



1 224号土塙
2~4 258号土塙
5~7 遺構外

0 5 cm

第207図 石製品

坂ノ上F遺跡

出土遺物

土器 (第208~211図 1 ~49)

5は口縁部に斜位格子目文を施すものである。深鉢形土器で口縁部がほぼ直立するものである。6~10は口縁部に縱位方向の半隆起線を主に施すものである。深鉢形土器では縁部は6がほぼ直立他はキャリバー状をなすもので、9・10には貼り付け文がみられる。1・11~19は口縁部に三角形の印刻文を施すものである。深鉢形土器で口縁部は11~15は外反、他はキャリバー状をなすものである。1は推定口径45cmで、口縁部に縦位の粘土紐を貼り付け、上方は突起状をなす。4単位で、この粘土紐の間には瘤状の突起が付く。地文は撫糸文である。2・3は鼓形の器形をなすものである。胴下半部で、半隆起線文、格子目文を施すものである。4は高环形土器の脚部である。4ヶ所に長方形の透しが作られる。透しの間と透しの両側縁には縦位の半隆起線文が施され、下部には横位の半隆起線文、三角形の刺突文、刻み目文が施される。坏部は欠損するが、脚部との付け根部に横位の半隆起線文が施される。20~23は胴部破片で、半隆起線による直線・曲線文の施されるもので、格子目文のみられるものもある。23は半截竹管状工具内面を軽くあてて引くものである。

24~32は口縁部に半隆起線による平行・波状文を横位に施すものである。深鉢形土器で口縁部が外反するものである。山形口縁をなし、頂部下方に縦位に粘土紐を貼り付け、折り返し口縁をなすものが多い。撫文地文のみられるものである。33~35は連続爪形文を施すものである。深鉢形土器で口縁部がやや外反するものである。33は平行する半隆起線間に連続爪形文を施す。36は平行する沈線間に連続刺突文を施すものである。深鉢形土器の胴部である。37・38は胴部破片で、櫛文地文施文後に半隆起線を曲線的に施すものである。

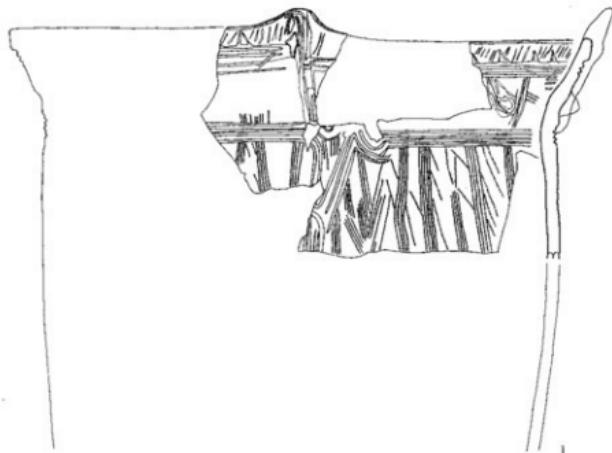
39~47は口縁部に撫糸圧痕や單軸絡条体圧痕を平行して施すもので、口唇部や頸部隣帶及び粘土紐貼り付けによる懸垂文や突起にも施される。深鉢形土器で、口縁部が外反するものである。器肉が厚く、円筒形で、二又の山形口縁をなすものが多い。48・49は底部で、圧痕文のあるものである。

石器 (第212・213図 1 ~6)

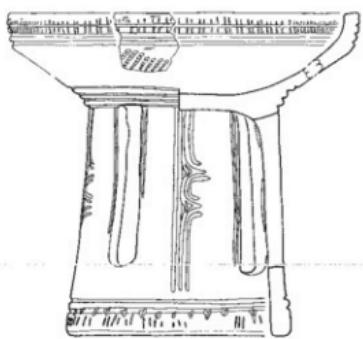
1・2は石鏃である。いずれも無茎鏃で、石質は硬質頁岩である。3~5は石匙である。横型石匙で、石質は軟質頁岩である。6・7は石槍である。両面加工で先端部の尖るものである。7は基部につまみが作られている。石質は硬質頁岩である。8・9はヘラ状石器である。両面加工を施すもので、石質は硬質頁岩で、8には自然面が残る。10~14は石鎚である。両端を打ち欠くものである。15・16はくぼみ石である。くぼみ部が複数あるもので、15は磨石としても使用されている。

石製品 (第213図17)

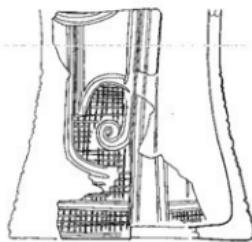
17は有溝石製品である。偏平な石の片面に断面が「V」字状の溝をもつものである。石質は泥岩である。



2



4



3

第208図 遺構外出土土器

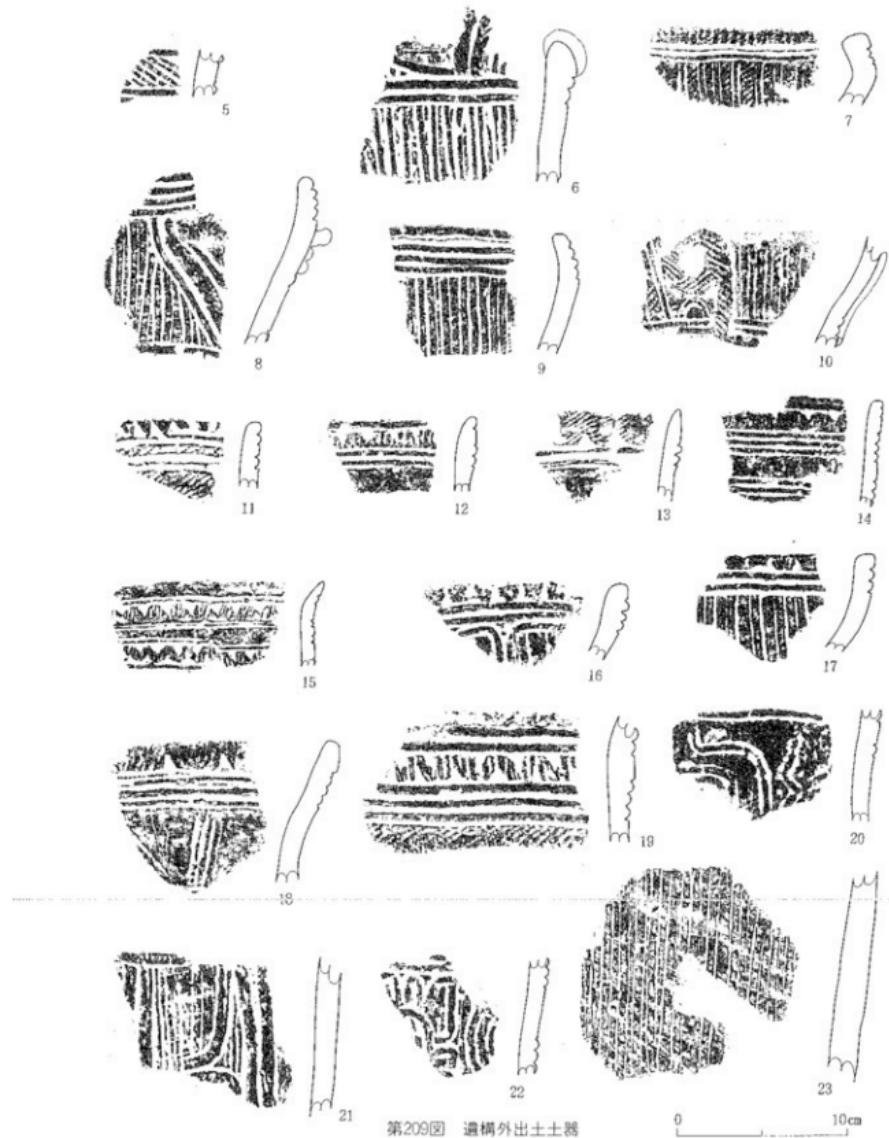
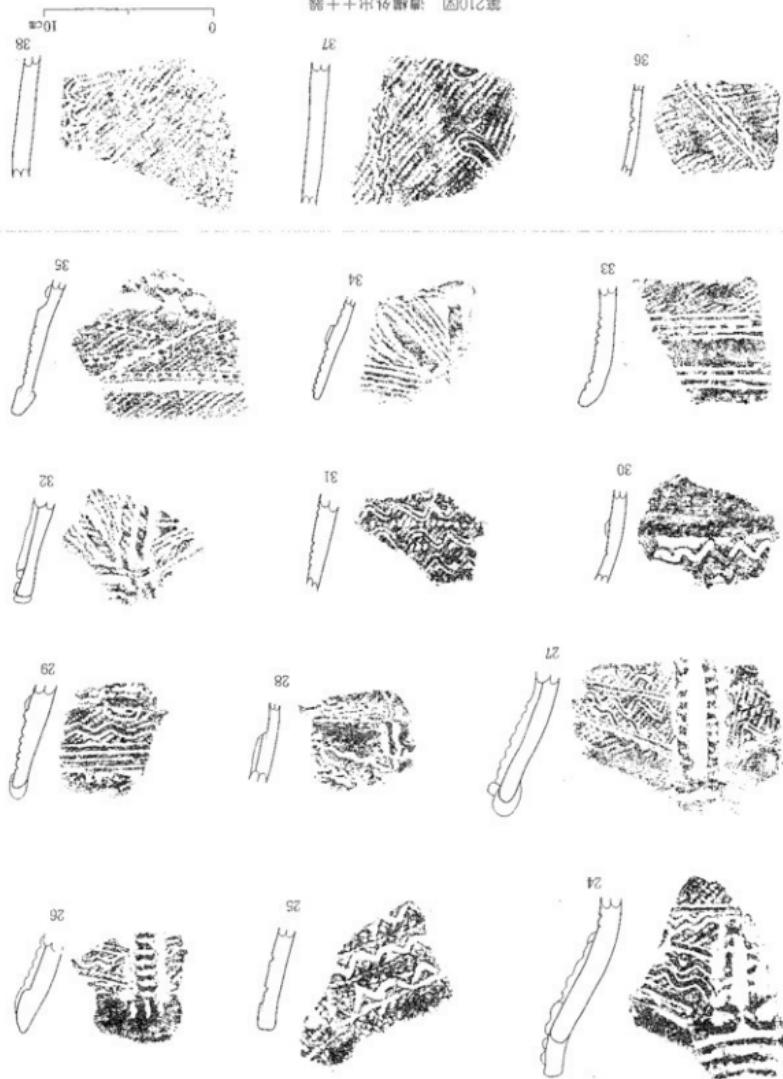


图210 滑石器





39



40



41



42



43



44



45



45



46



47



48



49



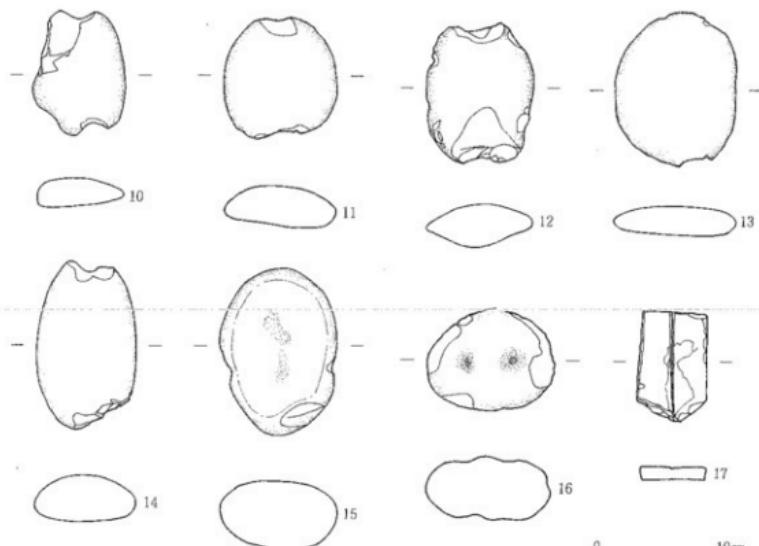
0 10cm

第211図 遺構外出土土器



第212図 遺構外出土土器

0 5 cm



第213図 遺構外出土石器、石製品

0 10 cm

まとめ

一縄文時代一

縄文時代の遺構は中期末葉の竪穴住居跡32軒、土塙等が検出されている。住居跡は調査区北東部、中央部、西部に位置する。住居跡は円形プランが主体で径約3m前後の規模のものが多く、5号、16号、18号、30号住居跡は5~6mの規模である。8号住居跡を除いて住居跡内に炉は見られる。炉は石圓土器埋設炉（11号、24号住居跡）、上器埋設炉（22号、23号、25号、27号、28号住居跡）の形態と複式炉の形態の炉がある。複式炉は①石圓土器埋設炉+石組部（12号住居跡）、②石圓土器埋設部+敷石石組部（29号住居跡）、③石圓土器埋設部+敷石石組部+掘り込み部（16号、30号（新）住居跡）、④石圓土器埋設部+掘り込み部（7号住居跡）、⑤石圓土器埋設部+掘り込み部+掘り込み部（5号、18号住居跡）、⑥土器埋設部+石組部（2号、4号、6号、10号、20号、21号住居跡）、⑦土器埋設部+石組部+掘り込み部（1号、19号、30号（旧）住居跡）、⑧土器埋設部+掘り込み部（3号、9号、13号、15号、17号、31号、32号住居跡）、⑨土器埋設部+掘り込み部+掘り込み部（14号住居跡）の9タイプに分類される。中期末葉の遺跡は計画地域内27ヶ所の遺跡の中で12遺跡が確認され、炉の形態は複式炉が主体であり、住居の規模に比例した大きさで構築される。

石圓土器埋設部+敷石石組部+掘り込み部の組み合せから複式炉の形態は構成されている。この期上器埋設部+石組部の住居跡間に切り合い関係がないのが特徴であり、集落における一時期の住居跡の数、土器（炉埋設土器）編年を困難にしている。ただ、最近台地上計画地城内の調査で同一住居内での炉の作り替えが確認される例がある。下堤E遺跡の10号住居跡は複式炉から石圓土器埋設部へ作り替えがあり、湯ノ沢D遺跡においても3号住居跡は複式炉から東に位置を移して石圓土器埋設部へ作り替えがあり、湯ノ沢E遺跡においても3号住居跡は複式炉から東に位置を移して石圓土器埋設部へ作り替えがされている。以上のように複式炉を同位置で作り替え、さらにこの複式炉を埋め、石圓土器埋設部へ作り替える複式炉の例ではあるが、新旧関係は認められる。とすれば、地蔵田B遺跡の中央部（弥生時代櫛木跡内）に位置する22号、23号、24号、25号、27号、28号住居跡の一群は北東部、西部に位置する住居群より新しいであろう。

石圓土器埋設部についてでは「S」状文「J」状文等の曲線文様で腹部に展開される磨削唇の深鉢形土器から口縁部に無文帯があり胴部は縄文、または縄文のみの深鉢形土器と変化する傾向がありそうである。61年度に調査する「台B遺跡」「地方遺跡」は中期末葉の「台A遺跡」と隣接する遺跡でこれら調査結果や他遺跡の資料を基に再検討する余地がある。量的に少ないが後期の土器が遺構内（土壇）外から出土している。十勝内I式併行期、堀之内、加曾利B様式の壺、深鉢、注口土器が出土し、同期の環状土製品が16個出土している。この土製品は有孔球形土製品、腕輪形土製品など呼ばれているが、その用途は不明である。

昭和59年度に調査した「坂ノ上F遺跡」南地区の縄文時代中期初頭の土器が多量に出土した沢部

の農道は未調査だったので今年度調査をした結果、59年の調査と同様、発掘面積に比べて遺物の出土量は多かった。出土遺物は円筒上層a式、大木7a式、北陸系（新保、新崎様式）の土器、石器であり、北陸系の高環形土器の出土が注目される。

一 弥生時代一

弥生時代の遺構の検出としては櫛穴住居跡、櫛木跡、土器焼窯、土塙墓、土塙等である。

秋田県内における弥生時代の住居跡の発見は昭和58年の若美町「横長根A遺跡」^(注4)であり、その後河辺町「風無台II遺跡」^(注5)、秋田市御所野丘陵の「湯ノ沢A遺跡」「坂ノ上F遺跡」「狸崎A遺跡」^(注6)で検出されている。これら遺跡の住居跡は各々台地上に1軒ずつの居住パターンであり、「狸崎A遺跡」を除いては住居跡のプランは円形を基本とし、周溝をもち、炉はほぼ中央部にあり、石廻い炉、地床がと数個の礫を付設する形態のものがある。柱は炉を中心とした4本が主柱で、住居跡の規模（径6.7m～13m）に違いがあるものの、県内の弥生時代の住居跡は共通している。

本遺跡における住居跡についても前述のプランと同様であり、規模は径8m～13mであるが、集落として検出されたのは県内では初例である。集落は一時期3軒～4軒の構成で、各住居は数回にわたり壁替え（第57図、58図、60図、61図）が行なわれている。第215図、216図の遺構配置が示すように1号I住居跡、3号I住居跡、4号I住居跡は比較的小小さく、周溝が櫛内中央部に向って途切れ、住居の出入口と考えられるもので、この3軒が最も古い集落単位であろう。また、この集落を埋む櫛木跡が検出されたことは注目されるところで、櫛木跡は径20～30cm、深さ30～60cmの柱列で構築され、北西～南東方向に長軸をもつ梢円形を呈し、内側（櫛木1）のものは長軸61m、短軸47m、中間（櫛木2）のものは長軸64m、短軸50mの規模である。両櫛木はほぼ平行して巡る櫛木2は南西部では櫛木1と併用したものと考えられるが、判然としない部分（北部）もある。2号3号I住居跡の中間方向に櫛木跡が途切れる箇所があり、櫛木の外側に並列する柱穴が北西方向に見られることや住居跡の位置関係等から、この場所が櫛の正面的出入口施設と想定できる。他にも数ヶ所柱穴（溝）が途切れ、出入口施設と考えられる所があるがはっきりしない。櫛木1と櫛木2の一部は1号II～Ⅳ住居跡、2号I～V住居跡と重複し、住居跡より古い。つまり、1号II住居跡、2号I住居跡の時期にはすでに櫛木が存在しなかったと考えられるのである。

集落の南東に土器棺墓（25基）、土塙墓（51基）、群の墓域が確認された。墓域は径約40mのほぼ円形の範囲で、土器棺墓の配列に規則性はみられない。土器棺は壺形土器と甕形上器で蓋が伴うものが9基あるが、口縁部や肩上部が欠損しているものが多く、後世の畑耕作などによるものであろう。合せ口上器棺の組み合せは次の5タイプがある。①壺+蓋（2号）②壺+鉢（5号、8号、9号、30号）③壺+甕（10号、39号）④壺+石蓋（26号）⑤甕+甕（4号、21号）で棺は壺形土器が多い。底部穿孔のものは11個体（壺、2号、10号、20号、22号、26号、27号、28号、30号、31号、36号、甕、4号）みられる。甕形上器は口縁部がゆるく外反するもの、直立的に外反するものがあり、肩部が張り、最大径は肩上部にある器形で、頸部、肩部に文様帶を有し、2～4条の平行沈線

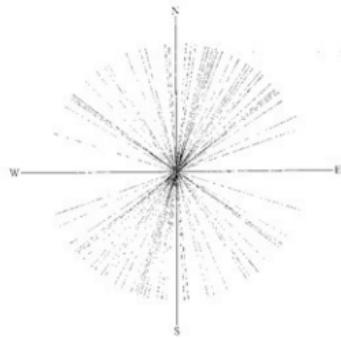
文が2～3段めぐり、肩部は縦に同平行沈線文により4、6単位に区画されるもので沈線間には列点文、刷毛目工具と同一施文具によるヘラ圧痕文（第75図、212）を有するものがみられ、器面は磨かれ茶褐色で肩部、胴下部に黒斑のあるもの（遠賀川系土器）、器面は刷毛目調整後、LR単節斜縫文施文で、小石粒を多く混入する胎土の荒い土器群に分類される。彫形土器はLR単節斜縫文施文で副部には媒状付着物がみられるものである。

土壙墓は柵木2、柵木3と区域で重複するが明確な切り合いはなく、上器棺蓋との重複も認められない。土壙墓の平面形は小判形（36基）が最も多く、梢円形（5基）、隅丸長方形（3基）、長方形（1基）、不整形（6基）の順である。土壙墓の長軸方向は第214図でわかるように定まった方向性はみられない。ただ、配列は北東群と南西群に分かれ、中央には検出されない。

弥生時代の遺物は住居跡からの出土は少量で出土状態も時期を決定できるほど良好なものではないが

遺物の多くは集落の北、北西に確認された集石Ⅰ、Ⅱとした捨て場の場所からで、上器（片）、土製品、石器、石製品、それに大小の礫（焼けているものが大部分）が出土した。上器の器種は彫形土器が多く、鉢形土器、高环形土器、壺形土器、蓋形土器で構成され、彫形土器は口縁部が外反し、肩部がふくらみ、平縁口縁が多く、波状口縁や小突起をもつものもある。文様は第141図の如く口頭部にあり、刷毛目調整痕の残るものもある。鉢形土器は口径が大きいもの、器形が甕に近いものの、台付きのものがあり、平縁口縁が多く、波状口縁、口唇部に2個1対、二又の小突起のをもつものがある。文様は平行沈線文、変形工字文などが施され、変形工字文の交点には2個1対の粘土粒が付くものが多い。体全面に文様施文があるもの、体下部に地文が残るものと磨かれるものがあり、地文はLR単節斜縫文が圧倒的である。蓋形土器は笠形、逆皿状、円盤状をなすものがあり、逆皿状、円盤状の蓋形土器には対になる孔が穿たれた例が多い。土製品では土偶の出土が多く、ほとんどが中空で頭部形状に特徴のあるものである。他に効鍊車が3点出土している。石製品では環状石斧が2点出土し、これは弥生時代住居跡の検出された「湯ノ沢A遺跡」「坂ノ上F遺跡」からも1点づつ出土している点で共通する。258号土壙墓からは玉、管玉、勾玉が出土している。

これら遺物は集石や遺構外からの出土が大部分であり、遺物包含層は層位的に把握できるほど明確ではないが、縄文時代晚期終末、大洞A式、大洞A'式期を含む初期弥生時代の遺跡と言える。特に上器棺の遠賀川系土器は重視されるもので、最近は東日本各地で出土例があり、東北北部での出土が増えている。もう一つの上器群、つまり、刷毛目調整後、LR単節斜縫文施文で胎土のよくない壺棺は、伝播過程で二次の変化を受けたと考えられる遠賀川系土器をさらに模倣した上器と考え



第214図 土壙墓長軸方向

られる一群である。今後は類似する資料の増加と土器の胎土分析等により搬入経路や系譜を探る必要がある。

台地の下に水田の存在を予測させるこの遺跡は土器棺、土塙墓の墓域を含み、柵木で住居群を囲むという、東北北部における最も古い弥生時代の集落である。

註1. 「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」下堤E遺跡、下堤F遺跡、坂ノ上F遺跡、押崎A遺跡、湯ノ沢D遺跡、深田沢遺跡、1985年3月、秋田市教育委員会

註2. 註1と同じ

註3. 「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」坂ノ上E遺跡、湯ノ沢A遺跡、湯ノ沢C遺跡、湯ノ沢E遺跡、湯ノ沢F遺跡、湯ノ沢H遺跡、野形遺跡、1984年3月、秋田市教育委員会

註4. 「横長根A遺跡」1984年3月、秋田県若美町教育委員会

註5. 「七曲台遺跡群」発掘調査報告書、秋田県文化財調査報告書第125集、1985年3月、秋田県教育委員会

註6. 註3と同じ

註7. 註1と同じ

参考文献

秋田県教育委員会：「塚の下遺跡発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書第61集 1979

秋田県教育委員会：「藤株遺跡発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書第85集 1981

成田滋彦：「青森県の土器」繩文文化の研究4 繩文土器II 雄山閣出版 1981

東北考古学会：「瀬野遺跡」 1982

(財)岩手県埋蔵文化財センター：「御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 岩岡市茎内遺跡」岩手県埋文センター文化財調査報告書第32集 1982

石川県立埋蔵文化財センター：「鹿島町鏡前C遺跡調査報告(IV)」 1983

青森県平賀町教育委員会：「平賀町井沢遺跡発掘調査報告書」 1976

根葉町教育委員会：「楓葉天神原弥生遺跡の研究I・II」 1982. 10

須藤隆：「東北地方の初期弥生土器—山王Ⅲ層式—」考古学雑誌 第68巻第3号 1983

秋田県若美町教育委員会：「横長根A遺跡」 1984

青森県教育委員会：「垂柳遺跡発掘調査報告書」 1985

秋田県教育委員会：「七曲台遺跡」秋田県文化財調査報告書第125集 1985. 3

秋田市教育委員会：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 下堤G遺跡」

1983. 3

秋田市教育委員会：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 板ノ上 E 遺跡 湯ノ沢 A 遺跡」1984. 3

秋田市教育委員会：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書 下堤 E 遺跡 下堤 F 遺跡 板ノ上 F 遺跡 理崎 A 遺跡」1985. 3



遺跡全景（南東→）



遺跡全景（北東→）

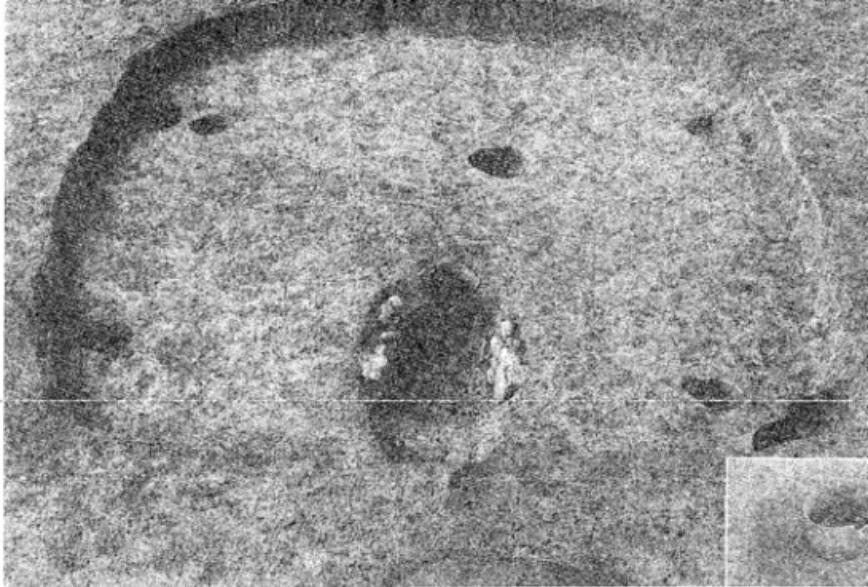
圖版1



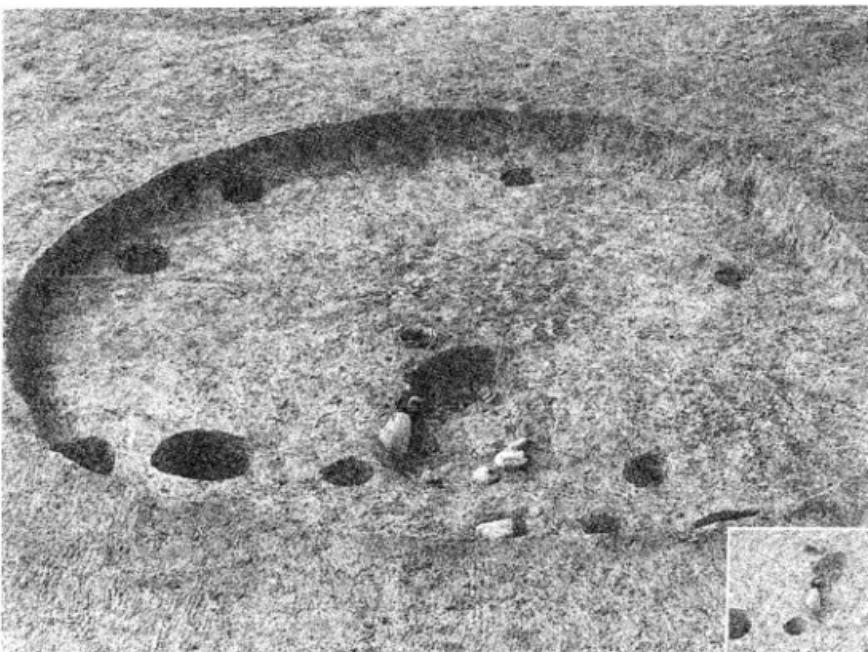
集石 I (奥)、集石 II (手前) (北東→)



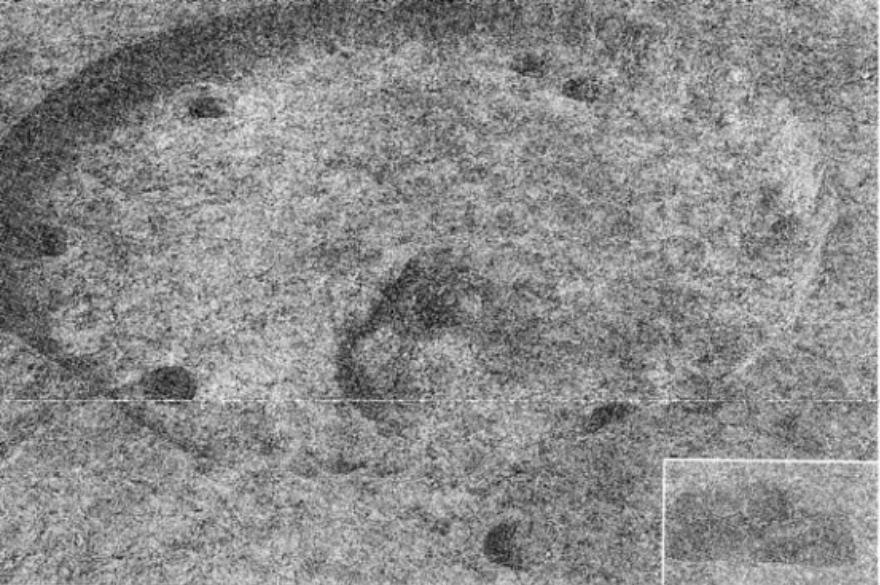
調査区北東部 (南→)



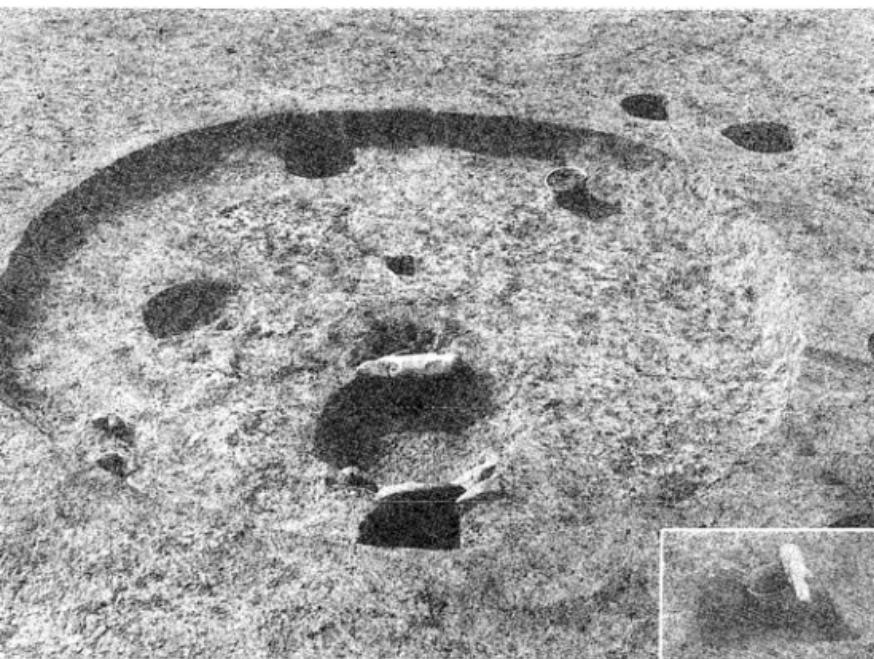
1号住居跡（東→）



2号住居跡（東→）



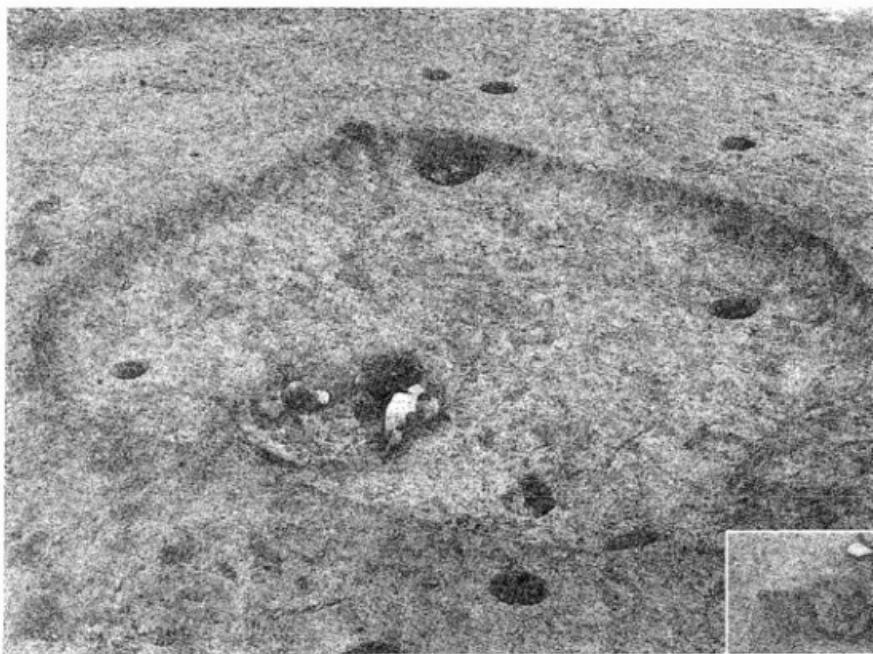
3号住居跡（東→）



4号住居跡（東→）



5号住居跡（東→）



6号住居跡（南→）